市道長井浜公園１号線関係埋蔵文化財発掘調査報告

長　井　遺　跡

行橋市文化財調査報告書　第68集

２０２２

行橋市教育委員会

市道長井浜公園１号線関係埋蔵文化財発掘調査報告

長　井　遺　跡

行橋市文化財調査報告書　第68集

２０２２

行橋市教育委員会

1．長井遺跡遠景（西から）

2．弥生時代前期壺（定村責二氏寄贈資料 岡山大学文学部考古学研究室所蔵）

長井遺跡全景（上が北）

序

本書は、市道長井浜公園１号線建設工事に伴う長井遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡が所在する長井地区、特に長井浜の海浜砂丘上には、昭和30年代に500～600基と言われる膨大な弥生時代の墳墓、箱式石棺墓や甕棺墓などが見つかっています。

今回の発掘調査の成果も、本書に記しましたように、箱式石棺墓、石蓋土坑墓、土坑墓などが密集して築かれ、弥生時代の墳墓群であることが明らかになりました。弥生土器、そして管玉や鉄製鎌、鉄製刀子など、この地域の歴史を知る上で貴重な資料が豊富に出土しています。

埋蔵文化財は、地域の歴史を知る上で欠かすことのできない文化遺産です。本書が、学術研究はもとより市民の埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成にあたってご協力いただいた地元区のみなさまをはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

令和４年３月

行橋市教育委員会

教育長　長尾明美

例　言

1. 本書は、福岡県行橋市大字長井に所在する長井遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。
調査組織は、第１章第２節に記す。

3. 遺構の実測は、笠置拓也、宇野愼敏、木村玉美、田中すま子、中島裕子が行った。

4. 遺構写真は、笠置が撮影した。空中写真撮影は行橋市消防本部に協力をいただいた。

5. 遺構図の整理は、奥野康代、河田まき子、所村裕香、中川美登里、畠田惠が行った。

6. 遺物の接合・復元は河田、所村、中川、畠田が行った。

7. 遺物の実測は、宇野が行った。

8. 遺物写真は、笠置が撮影した。

9. 写真図版の編集、レイアウトは松尾留衣が行った。

10. 遺構・遺物等図面の浄書は、奥野、河田、所村、中川、畠田が行った。

11. 本書に使用した遺構の略号は、SK（土坑）である。

12. 本書の遺構図の高さは、海抜高（OP）基準を元にしたものである。

13. 本書に使用した方位は、世界測地系による座標北である。

14. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。

15. 定村責二氏寄贈資料の実測では、岡山大学文学部考古学研究室の清家章教授、光本順准教授に大変お世話になった。記して謝意を申し上げます。

16. 管玉について独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の谷澤亜里氏に、人骨について土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの高椋浩史氏に、人骨の年代測定およびミトコンドリア DNA 分析について国立科学博物館人類研究部の神澤秀明氏、瀧上舞氏、山梨大学医学部法医学講座の角田恒雄氏、安達登氏、国立歴史民俗博物館の坂本稔氏、藤尾慎一郎氏、国立科学博物館の篠田謙一氏に執筆していただいた。記して謝意を申し上げます。

17. 本書の執筆は、第１章は笠置、第２章、第３章、第５章を宇野が行い、編集は笠置が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過……………………………………… 1

第１節　調査経緯…………………………………………………… 1
第２節　調査体制…………………………………………………… 1
第３節　調査日誌…………………………………………………… 2

第２章　遺跡の位置と環境……………………………………… 3

第１節　地理的環境………………………………………………… 3
第２節　歴史的環境………………………………………………… 3

第３章　発掘調査の記録………………………………………… 6

第１節　遺跡の概要………………………………………………… 6
第２節　箱式石棺墓………………………………………………… 9
第３節　石蓋土坑墓…………………………………………………46
第４節　土坑…………………………………………………………49
第５節　表採およびカクラン出土遺物……………………………50
第６節　定村責二氏寄贈資料………………………………………52

第４章　分析結果…………………………………………………68

第１節　長井遺跡３号箱式石棺墓出土管玉について……………68
第２節　長井遺跡出土の弥生時代人骨……………………………72
第３節　福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨のミトコンドリア DNA 分析………83

第５章　結語………………………………………………………89

図 版 目 次

巻頭図版１　１．長井遺跡遠景（西から）
　　　　　２．弥生時代前期壺（定村責二氏寄贈資料　岡山大学文学部考古学研究室所蔵）
巻頭図版２　長井遺跡全景（上が北）
図　版　１　長井遺跡の位置
図　版　２　１．１号箱式石棺と南北ベルト東壁土層観察状況（南東から）
　　　　　２．南北ベルト東壁土層観察状況（北東から）
　　　　　３．東西ベルト南壁土層観察状況（南から）
図　版　３　１．長井遺跡全景遺構検出状況１（西から）
　　　　　２．長井遺跡全景遺構検出状況２（西から）
図　版　４　１．１号箱式石棺検出状況（北から）
　　　　　２．１号箱式石棺完掘状況（北から）
　　　　　３．１号箱式石棺と溝状遺構（北から）
図　版　５　１．１号箱式石棺遺物出土状況（北から）
　　　　　２．１号箱式石棺周溝遺物出土状況１（西から）
　　　　　３．１号箱式石棺周溝遺物出土状況２（南から）
図　版　６　１．２号箱式石棺検出状況（東から）
　　　　　２．２号箱式石棺完掘状況（東から）
　　　　　３．３号(右)、４号(左)箱式石棺検出状況(東から)
図　版　７　１．３号箱式石棺完掘状況（東から）
　　　　　２．３号箱式石棺管玉出土状況（東から）
　　　　　３．４号（中央）箱式石棺完掘状況（東から）
図　版　８　１．５号箱式石棺検出状況（東から）
　　　　　２．６号（右上）、７号（右下）、８号（左上）、９号（左下）箱式石棺検出状況（東から）
　　　　　３．６号（右上）、７号（右下）、８号（左上）、９号（左下）箱式石棺完掘状況（東から）

図　版　9　1．8 号箱式石棺内仕切（南東から）
2．10 号箱式石棺検出状況（東から）
3．10 号箱式石棺完掘状況（東から）
図　版　10　1．11 号石蓋土坑墓検出状況（東から）
2．11 号石蓋土坑墓完掘状況　（東から）
3．12 号（右）、13 号（左）箱式石棺検出状況（東から）
図　版　11　1．12 号箱式石棺鉄鎌 出土状況（東から）
2．12 号（右）、13 号（左）箱式石棺完掘状況（東から）
3．12 号箱式石棺側石 観察状況（北から）
図　版　12　1．14 号箱式石棺検出状況　（東から）
2．14 号箱式石棺完掘状況（東から）
3．15 号箱式石棺検出状況（東から）
図　版　13　1．15 号箱式石棺完掘状況（東から）
2．16 号箱式石棺検出状況（東から）
3．16 号箱式石棺人骨出土状況（東から）
図　版　14　1．16 号箱式石棺床面赤色顔料検出状況（東から）
2．17 号箱式石棺検出状況（東から）
3．17 号箱式石棺人骨出土状況 1（東から）
図　版　15　1．17 号箱式石棺人骨 出土状況 2（北東から）
2．18 号箱式石棺検出状況（東から）
3．18 号箱式石棺完掘状況（東から）
図　版　16　1．19 号箱式石棺検出状況（東から）
2．19 号箱式石棺人骨出土状況 1（東から）
3．19 号箱式石棺人骨出土状況 2（南から）
図　版　17　1．20 号箱式石棺検出状況（東から）
2．20 号箱式石棺人骨 出土状況（東から）
3．21 号地点検出状況（南から）
図　版　18　1．22 号地点検出状況（南から）
2．23 号箱式石棺検出状況（東から）
3．23 号箱式石棺完掘状況（東から）
図　版　19　1．24 号箱式石棺人骨出土状況 1（東から）
2．24 号箱式石棺人骨出土状況 2（東から）
3．24 号箱式石棺床面赤色顔料検出状況（東から）
図　版　20　1．25 号石蓋土坑墓検出状況（西から）
2．25 号石蓋土坑墓完掘状況（西から）
3．28 号（左）、30 号（右）箱式石棺検出状況（東から）
図　版　21　1．28 号（左）、30 号（右）箱式石棺完掘状況（東から）
2．29 号箱式石棺検出状況（西から）
3．29 号箱式石棺人骨出土状況（西から）
図　版　22　1．31 号箱式石棺検出状況（東から）
2．31 号箱式石棺人骨出土状況（東から）
3．32 号箱式石棺完掘状況（東から）
図　版　23　1．33 号（上層）石蓋土坑墓、34 号（下層）
箱式石棺検出状況（東から）
2．34 号箱式石棺人骨出土状況（西から）
3．35 号箱式石棺検出状況（東から）
図　版　24　1．35 号箱式石棺完掘状況（東から）
2．36 号箱式石蓋土坑墓完掘（南から）
3．37 号箱式石棺検出状況（東から）
図　版　25　1．1 号箱式石棺下層出土人骨（北から）
2．SK-1 土層観察状況（西から）
3．SK-1 土坑完掘状況（南から）
図　版　26　出土遺物 1
図　版　27　出土遺物 2
図　版　28　出土遺物 3
図　版　29　出土遺物 4
図　版　30　出土遺物 5
図　版　31　出土遺物 6
図　版　32　出土遺物 7

挿 図 目 次

第 1 図　長井遺跡の位置（1/25,000）・・・・・・・・・・・3

第 2 図　長井遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）・・・4

第 3 図　長井遺跡調査区（1/2,500）・・・・・・・・・・・・5

第 4 図　長井遺跡遺構配置図（1/100）・・・・・・・・・・7

第 5 図　調査区南北・東西ベルト土層断面図（1/100）・・・8

第 6 図　南北ベルト出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・8

第 7 図　1 号箱式石棺実測図（1/80）・・・・・・・・・・・9

第 8 図　1 号箱式石棺周溝推定図（1/80）・・・・・・・・10

第 9 図　1 号箱式石棺周溝内土器出土状況図（1/20）・・・10

第 10 図　1 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図 1（1/3）・・・・11

第 11 図　1 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図 2（1/2・1/3）・・12

第 12 図　2 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・13

第 13 図　2 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・13

第 14 図　3 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・14

第 15 図　3 号箱式石棺管玉出土状況（1/20）・・・・・・15

第 16 図　3 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図
（1/2・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第 17 図　4 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・17

第 18 図　4 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・17

第 19 図　6 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・18

第 20 図　7 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・18

第 21 図　7 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・18

第 22 図　8 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・19

第 23 図　9 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・・20

第 24 図　10 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・20

第 25 図　10 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・21

第 26 図　12・13 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・22

第 27 図　12 号箱式石棺出土遺物実測図（1/2）・・・・・23

第 28 図　13 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・23

第 29 図　14 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・24

第 30 図　14 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・25

第 31 図　15 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・25

第 32 図　15 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・26

第 33 図　16 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・26

第 34 図　16 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・27

第 35 図　17 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・27

第 36 図　17 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・27

第 37 図　18 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・28

第 38 図　18 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・29

第 39 図　19 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・29

第 40 図　19 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・30

第 41 図　20 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・31

第 42 図　20 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・・31

第 43 図　21 号地点実測図（1/40）・・・・・・・・・・・32

第 44 図　21 号地点周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・・・32

第 45 図　22 号地点実測図（1/40）・・・・・・・・・・・32

第 46 図　22 号地点周辺出土遺物実測図（1/3・2/3）・・33

第 47 図　23 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・34
第 48 図　23 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・34
第 49 図　24 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・35
第 50 図　26 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・36
第 51 図　26 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・36
第 52 図　27 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・37
第 53 図　27 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・37
第 54 図　28 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・38
第 55 図　28 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・38
第 56 図　29 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・39
第 57 図　29 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・・40
第 58 図　30 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・40
第 59 図　30 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・・41
第 60 図　31 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・42
第 61 図　31 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・42
第 62 図　32 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・43
第 63 図　32 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）・・・44
第 64 図　34 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・44
第 65 図　35 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・45
第 66 図　35 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3・2/3）・・45
第 67 図　37 号箱式石棺実測図（1/40）・・・・・・・・・45
第 68 図　11 号石蓋土坑墓実測図（1/40）・・・・・・・・46
第 69 図　25 号石蓋土坑墓実測図（1/20）・・・・・・・・47
第 70 図　25 号石蓋土坑墓出土遺物実測図（1/3）・・・・47
第 71 図　33 号石蓋土坑墓実測図（1/40）・・・・・・・48
第 72 図　34 号箱式石棺・33 号石蓋土坑墓周辺出土
遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・48
第 73 図　36 号石蓋土坑墓実測図（1/40）・・・・・・・・48
第 74 図　SK-1 実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・49
第 75 図　SK-1 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・49
第 76 図　SK-2 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・49
第 77 図　電柱北側周辺出土遺物実測図（1/2・2/3）・・49
第 78 図　カクラン出土遺物実測図 1（1/3）・・・・・・50
第 79 図　カクラン出土遺物実測図 2（1/3）・・・・・・51
第 80 図　表採遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・52
第 81 図　定村責二氏寄贈資料実測図 1（1/3）・・・・・53
第 82 図　定村責二氏寄贈資料実測図 2（1/3）・・・・・54
第 83 図　定村責二氏寄贈資料実測図 3（1/3）・・・・・55
第 84 図　定村責二氏寄贈資料実測図 4（1/3）・・・・・56
第 85 図　定村責二氏寄贈資料実測図 5（1/3）・・・・・57
第 86 図　定村責二氏寄贈資料実測図 6（1/3）・・・・・58
第 87 図　定村責二氏寄贈資料実測図 7（1/3）・・・・・59
第 88 図　遺物出土位置図（1/100）・・・・・・・・・・・67
第 89 図　長井 3 号石棺墓出土管玉（1/1）・・・・・・・・68
第 90 図　長井 3 号石棺墓出土管玉の法量分布・・・・・69
第 91 図　北部九州出土女代南 B 群製管玉の法量分布・・・・69
第 92 図　1 号人骨の残存部位・・・・・・・・・・・・・・73
第 93 図　29 号人骨の残存部位・・・・・・・・・・・・・76
第 94 図　北部九州・山口地域の弥生時代集団の大腿骨
中央断面示数のヒストグラム（男性）・・・・・・・79
第 95 図　北部九州・山口地域の弥生時代集団の 脛骨
中央断面示数のヒストグラム（女性）・・・・・・・・80

第 96 図　1 号人骨の上肢骨・・・・・・・・・・・・・・・82

第 97 図　1 号人骨の下肢骨・・・・・・・・・・・・・・・82

第 98 図　29 号人骨の頭蓋・・・・・・・・・・・・・・・82

第 99 図　29 号人骨の上肢骨・・・・・・・・・・・・・・・82

第 100 図　29 号人骨の胸椎の骨棘・・・・・・・・・・82

第 101 図　人骨が出土した 29 号石棺・・・・・・・・・83

第 102 図　長井遺跡出土人骨の同位体比と、食物資源の同位体比の比較・・・・・・・・・・・・・・・85

第 103 図　長井遺跡出土人骨の年代較正・・・・・・・85

第 104 図　APLP 分析の結果・・・・・・・・・・・・・・・86

第 105 図　29 号の DNA 断片長の分布・・・・・・・・・86

第 106 図　29 号の DNA 断片の末端のダメージ・・・・87

第 107 図　長井遺跡床面標高別色分け分類図・・・・・・89

第 108 図　長井遺跡箱式石棺分類図・・・・・・・・・・・94

表 目 次

表　1　出土遺物観察表 1・・・・・・・・・・・・・・・60

表　2　出土遺物観察表 2・・・・・・・・・・・・・・・61

表　3　出土遺物観察表 3・・・・・・・・・・・・・・・62

表　4　出土遺物観察表 4・・・・・・・・・・・・・・・63

表　5　出土遺物観察表 5・・・・・・・・・・・・・・・64

表　6　出土遺物観察表 6・・・・・・・・・・・・・・・65

表　7　出土遺物観察表 7・・・・・・・・・・・・・・・66

表　8　3 号石棺墓出土管玉一覧・・・・・・・・・・・68

表　9　長井遺跡と比較集団の上肢骨の計測値（男性）・・77

表　10　長井遺跡と比較集団の上肢骨の計測値（女性）・・78

表　11　長井遺跡と比較集団の下肢骨の計測値（男性）・・79

表　12　長井遺跡と比較集団の下肢骨の計測値（女性）・・80

表　13　長井遺跡出土人骨のコラーゲン抽出と年代測定及び炭素・窒素分析の結果・・・・・・・・83

表　14　ミトコンドリア DNA 分析の結果・・・・・・84

表　15　長井遺跡墳墓頭位方向（番号は各墳墓番号）・・91

表　16　長井遺跡墳墓床面標高表・・・・・・・・・・92

表　17　長井遺跡箱式石棺分類表・・・・・・・・・・93

表　18　長井遺跡箱式石棺別床面標高比較表（番号は石棺番号）・・・・・・・・・・・・・・95

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査経緯

長井遺跡の存在が初めて確認されたのは昭和 34 年のことである。郷土史家の定村責二氏が長井浜で砂利採取工事をしていることを聞きつけ急遽現場の状況を確認したところ、約 900㎡から 500 基以上の箱式石棺が出土したとされる。この時の状況や出土品は小田富士雄氏が『九州考古学』25・26 号（1965）誌上に報告しており、夜臼式土器と板付Ⅰ式土器が共伴することから、長井遺跡は弥生文化がいち早く豊前地域に伝播したことを示すものとして注目された。しかし、当時は発掘調査を実施できなかったため、遺跡の詳細な記録は残すことができなかった。

本書で報告する長井遺跡は昭和 34 年に砂利採取工事を実施した箇所の南側隣接地にあたる。市は砂利採取工事が実施された場所に長井浜公園を建設しており、その進入路は公園西側に建設する計画であったが、急遽南側に変更されたため令和元年 8 月 26 日、同 30 日の 2 日間で確認調査を実施した。調査の結果、箱式石棺２基を確認したため市都市政策課と協議の上、記録保存のため発掘調査を実施することになった。市道建設予定地のうち大部分は攪乱を受けて遺跡が消滅していたため、発掘調査対象は南端の 185㎡に限定された。同年 10 月 15 日に発掘調査地の草刈および樹木伐採を実施し、重機による表土掘削を開始した。調査区南東隅には電信柱が 1 本設置されていたため、九州電力株式会社と協議の上、電信柱周囲に矢板を設置している。調査地は砂地であるため明確な遺構の掘方が確認できなかったことから、当初、出土遺物は近接する石棺に属するものとして取り上げた。しかし、石棺が非常に密接していることが判明した後はトータルステーションで測量し出土位置を座標で記録した。遺構は縮尺 20 分の 1 で平面図および断面図を作成した。遺構の写真撮影は 35mm 版の白黒フィルム、カラーリバーサル、デジタル一眼レフカメラを使用し、調査の進展状況に応じて順次実施した。

遺物や図面の整理作業は令和元年度から行っているが、令和３年度より行橋市の単費事業として本格的に実施した。調査体制は次節に示すとおりである。

第２節　調査体制

現地調査（令和元年度）

総　　括	行橋市教育委員会	教育長職務代理者	末次　龍一（12 月 31 日まで）
		教育長	長尾　明美（1 月 1 日から）
		教育部長	米谷　友宏
調　　査		教育部　文化課長	小川　秀樹
		教育部　文化財保護係長	山口　裕平
		教育部　文化財保護係	天野　正太郎
		教育部　文化財保護係	笠置　拓也（調査担当）
		教育部　文化財保護係（歴史資料館長）	宇野　愼敏（　〃　）
庶　　務		教育部　文化振興係長	吉兼　三佳
		教育部　文化振興係	姫野　和彦
		教育部　文化振興係	長尾　萌佳

発掘調査作業員

赤波江静代　安藤隆弘　岩永成美　小野田トミヱ　加来啓子　菊池忠夫　木村玉美
田中和雅　田中すま子　中島裕子　松﨑幸子　山田拓三

報告書作成（令和３年度）

総　　括	行橋市教育委員会	教育長	長尾　明美
		教育部長	辛嶋　智恵子
調　　査		教育部　文化課長	丸山　剛
		教育部　文化課参事	小川　秀樹
		教育部　文化財保護係長	山口　裕平
		教育部　文化財保護係	天野　正太郎
		教育部　文化財保護係	笠置　拓也（報告書担当）
		教育部　文化財保護係（歴史資料館長）	宇野　愼敏（　〃　）
庶　　務		教育部　文化振興係長	石井　匠
		教育部　文化振興係	久篠　英司（7月31日まで）
		教育部　文化振興係	藤井　志乃（8月1日から）
		教育部　文化振興係	長尾　萌佳

整理作業員

奥野 康代　河田 まき子　所村 裕香　中川美登里　畠田　惠　松尾 留衣

第３節　調査日誌

10月15日（火）晴のち曇
調査地内樹木伐採。重機による表土掘削開始。

10月16日（水）晴
調査区東西、南北ベルト設定。電柱周囲矢板設置。

10月17日（木）曇のち晴
機材搬入。

10月21日（月）曇のち晴
遺構検出。

10月23日（水）曇
遺構検出写真撮影。1/20調査区東西ベルト土層図作成。

10月25日（金）晴
調査区東西ベルト写真撮影、掘削。

10月28日（月）晴
1/20調査区南北ベルト土層図作成。

10月29日（火）晴
調査区南北ベルト写真撮影。重機・人力による表土、ベルト掘削。

10月30日（水）晴
重機による表土掘削完了。

10月31日（木）晴
人力による表土、ベルト掘削。遺構検出。

11月1日（金）晴
以後、出土遺物は座標測量後に採取。

11月5日（火）晴
人力によるベルト掘削完了。1/100遺構配置図作成。

11月6日（水）晴
調査区全景写真撮影。遺構番号を付し随時写真撮影。1/20遺構平面・断面図作成。

11月7日（木）曇～13日（水）晴のち曇
遺構検出。遺構掘削。遺構平面図作成。

11月14日（木）晴
福岡大学名誉教授小田富士雄氏が現地指導のため来訪。

11月15日（金）晴
遺構平面図作成。遺構掘削。

11月19日（火）晴のち曇
遺構掘削。

11月20日（水）晴
遺構掘削。
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム学芸員高椋浩史氏が出土人骨採取、保存処理のため来訪。

11月21日（木）晴
遺構検出。遺構平面図作成。空中写真撮影。

11月22日（金）曇～25日（月）曇
遺構検出。遺構掘削。

11月26日（火）晴時々曇
遺構平面図作成。

11月27日（水）曇時々雨
調査区全景写真撮影。

11月28日（木）晴～12月6日（金）晴
遺構掘削。遺構断面図作成。

12月9日（月）晴
遺構断面図作成。機材撤収。

12月10日（火）晴～12日（木）曇のち晴
重機による埋め戻し。

作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

福岡県行橋市は、県北東部に位置する。この地域は明治 23 年（1890）の郡制施行で置かれた京都郡、築上郡の頭文字を取り京築地方と呼ばれる。行橋市はその中心都市で人口 72,613 人（令和４年２月末日現在）を擁す。市域は東に周防灘を望む京都平野の中央部を占める。この平野は律令制以降、上述の郡制施行まで置かれた京都郡、仲津郡、築城郡の３つの郡域にまたがるが、行橋市は市の北側が旧京都郡域、南側が旧仲津郡域にあたる。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳（216m）、御所ヶ岳（ホトギ山：246.9m）などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と市町境を画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山（202m）、幸ノ山（178m）、覗山（121.7m）など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

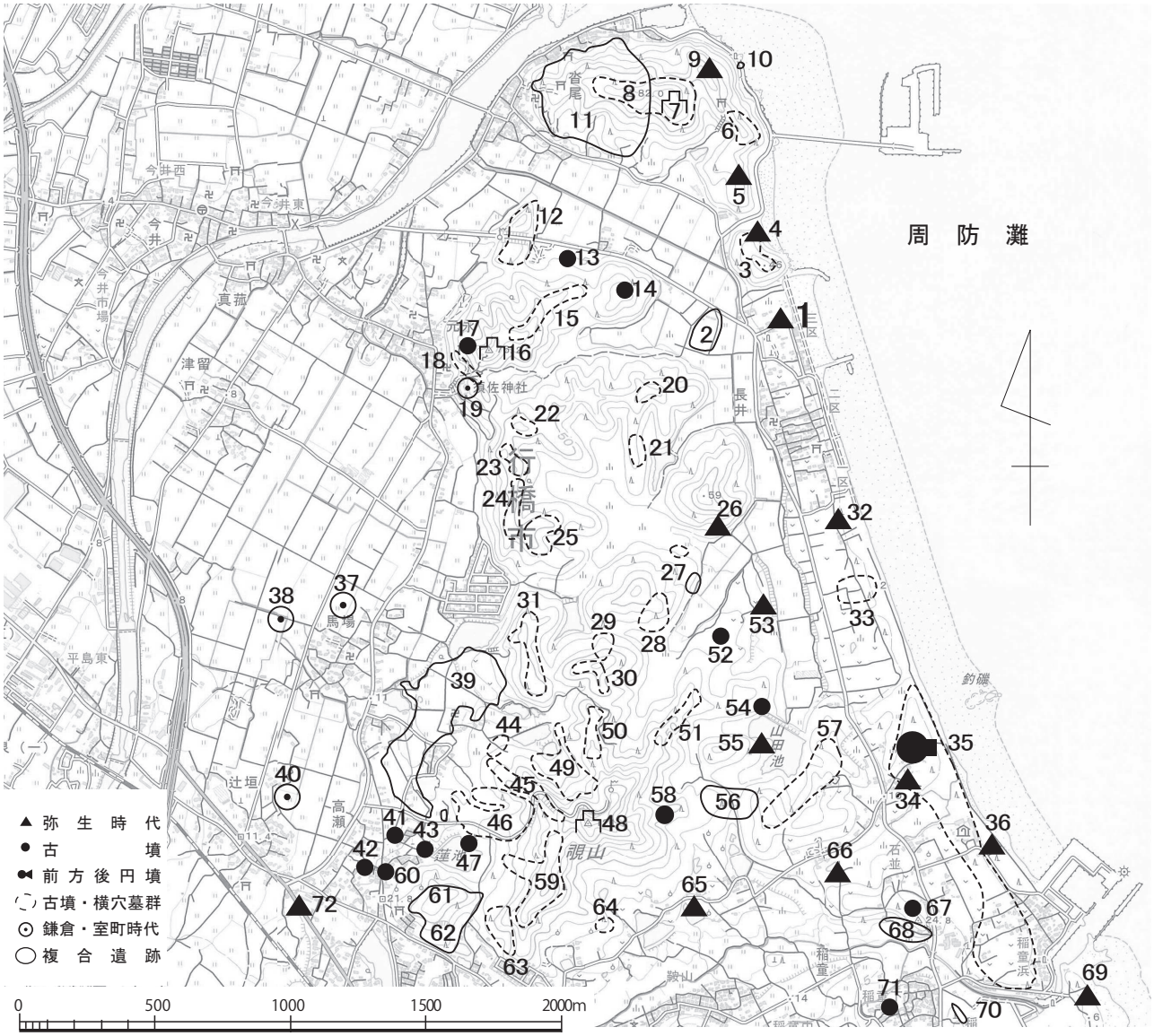
本書で報告する長井遺跡は、沓尾山南裾から南約 1.5㎞の長井浜砂丘上に所在する。昭和 34 年（1959）の砂利採取工事の際、約 900㎡の敷地に 500 基以上の箱式石棺と６基の甕棺があったという。換算すると 1㎡に２基の箱式石棺墓が所在することになる。そのままの密集度が続くかどうか分からないが、長さ約 1.5㎞ある長井浜一帯にあるとすれば相当な数の墳墓があったということになる。

第２節　歴史的環境

京都平野東部の後期旧石器時代の遺跡は、稲童浜の南の渡築紫遺跡で今から３万年前の後期旧石器時代初頭の台形様石器などが出土している。

縄文時代は稲童小原遺跡（53）のすぐ南に稲童丸尾遺跡から後期の住居跡が見つかっている。

第１図　長井遺跡の位置（1/25,000）



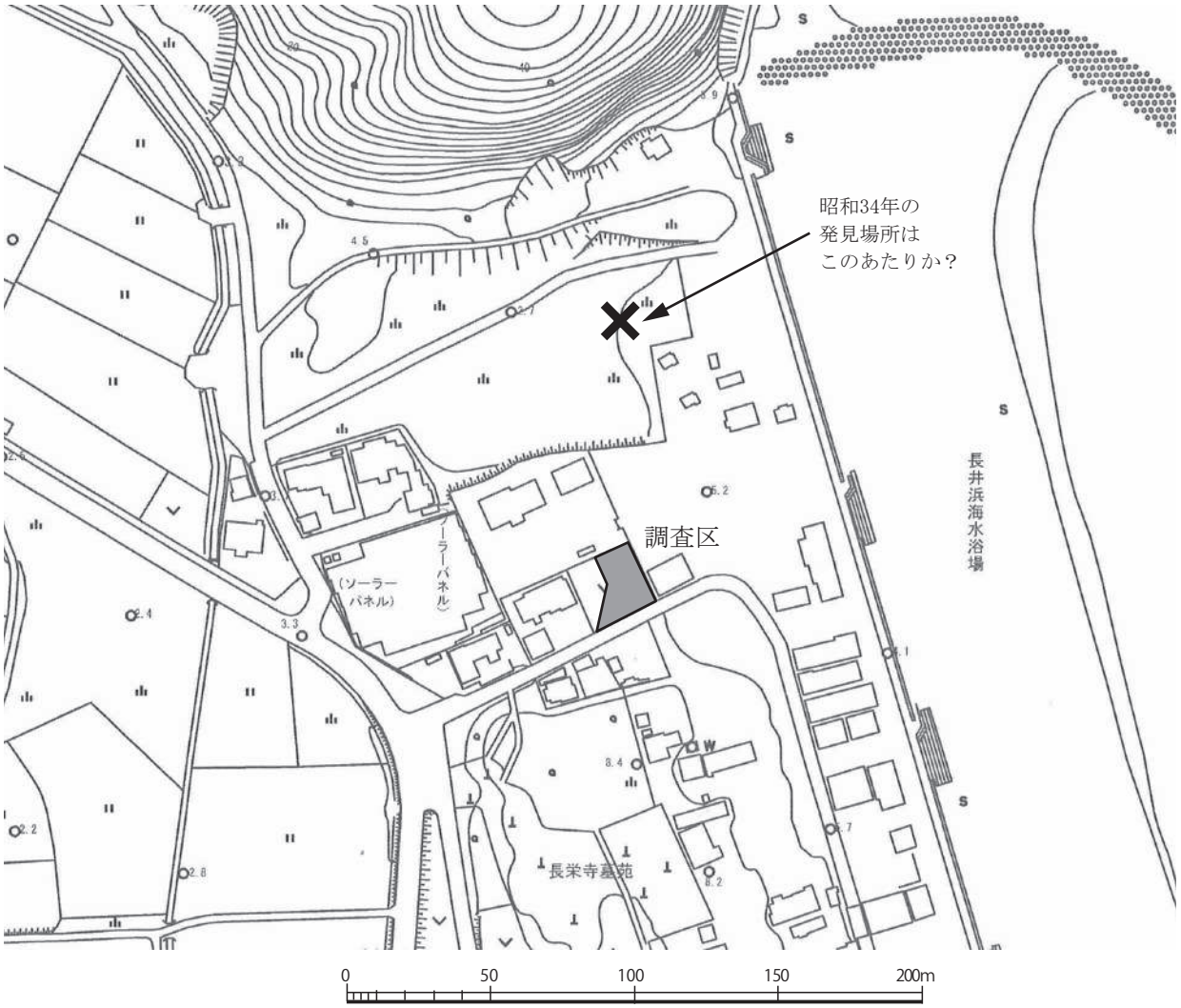
1. 長井遺跡	19. 須佐神社	37. 馬場村後遺跡	55. 稲童山田池遺跡
2. 長井作り山遺跡	20. 長井片鉾古墳群	38. 馬場古門遺跡	56. 稲童西尾遺跡
3. 沓尾上宮ノ前上古墳群	21. 長井キビリ古墳群	39. 代遺跡	57. 稲童堂古墳群
4. 沓尾上宮ノ前上遺跡(箱式石棺群)	22. 元永ゲンジ山古墳群	40. 辻垣下出口遺跡	58. 稲童覗山東古墳
5. 沓尾上宮ノ前遺跡(箱式石棺群)	23. 元永道城山古墳群	41. 高瀬古墳	59. 覗山古墳群
6. 沓尾宮ノ下古墳群	24. 元永平畑古墳群	42. 高瀬竹ノ内遺跡	60. 高瀬上人塚古墳
7. 久津尾崎城跡	25. 元永イツリ古墳群	43. 高瀬地区旧海軍兵舎炊事場跡	61. 高瀬宮山古墳群
8. 沓尾兵庫山古墳群	26. 長井大熊遺跡	44. 馬場代古墳群	62. 高瀬地区旧海軍築城基地発電機壕
9. 沓尾宮ノ下遺跡(箱式石棺群)	27. 長井宗遺跡群	45. 小迫谷古墳群	63. 高瀬欠塚古墳群
10. 姥ヶ懐	28. 長井宗古墳群	46. 穴田古墳群	64. 覗山南古墳群
11. 沓尾石切丁場	29. 元永棟方古墳群	47. 高瀬遺跡(箱式石棺群)	65. 稲童次郎池遺跡
12. 元永西梅崎古墳群	30. 馬場津留池北東古墳群	48. 覗山城跡	66. 稲童鴫山遺跡
13. 元永東梅崎古墳群	31. 馬場観音山古墳群	49. 馬場山ノ神池南古墳群	67. 稲童九郎右衛門遺跡
14. 元永丸山古墳	32. 長井陣山遺跡	50. 馬場山ノ神池東古墳群	68. 稲童地区補給倉庫壕
15. 元永城尾古墳群	33. 長井陣山古墳群	51. 稲童山田古墳群	69. 稲童浜南遺跡(箱式石棺)
16. 元永城跡	34. 稲童石並遺跡	52. 長井駄廻遺跡	70. 稲童上迫遺跡
17. 元永生目神社境内古墳	35. 稲童古墳群	53. 長井小原遺跡	71. 稲童田淵古墳
18. 元永報恩寺裏山古墳群	36. 稲童遺跡	54. 稲童山田池古墳	72. 高瀬清光寺遺跡

第2図　長井遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）

弥生時代になるとこの辺りの遺跡は爆発的に増える。長井遺跡（1）をはじめ稲童石並遺跡（34）、稲童遺跡（36）、稲童浜南遺跡（69）など箱式石棺墓群・甕棺などが海浜上に南北約 2.5㎞に点在し、前期から中期・後期にかけて営まれている。山麓にも長井大熊遺跡（26）、稲童山田池遺跡（55）から弥生土器片が採集されている。覗山山系の東側海岸沿いは多いが、西側の内陸側は祓川東岸の津留遺跡、辻垣遺跡群などが知られているにすぎない。

古墳時代に入ると、これまで弥生墳墓群を形成していた集団は古墳時代初頭頃にほとんどが姿を消す。沓尾兵庫山古墳群などで古墳時代中期と推定される古墳が数基見つかっているが、大半は古墳時代後期の古墳群である。覗山山系の西側斜面上の各尾根筋に数多くの古墳群が築造されているが、集落はほとんど見つかっていない。

奈良・平安時代は稲童浜より南側で、稲童豊後塚遺跡がある。8 世紀の有蓋双耳短頸壺が出土しており、有力者の存在が窺われる。鎌倉・室町時代になると今井・金屋地区に今井祇園の勧請や、金屋に鋳物師集団が住むようになる。この頃から今井津が発展し、元永の須佐神社が栄え、今井祇園祭や奉納連歌は今も伝えられている。このように中世には元永あたりまで海であって、江戸時代に入ってさらに埋立てによって沓尾まで徐々に耕作地が広がっていった。



第 3 図　長井遺跡調査区（1/2,500）

第３章　発掘調査の記録

第１節　遺跡の概要

本遺跡は、行橋市大字長井の周防灘沿岸に面した砂丘上に立地する。汀線は北北西から南南東方向（N-20°-W）に走る。砂丘は汀線より西約 200m まで広がり、汀線に並行に走る。今回の発掘調査地点は汀線より西に約 150m の地点である。検出面の標高は 4.9 ～ 5.7m で、東より西方向へ 0.8m 高くなる斜面上にある。

調査区は内陸側から砂丘を横断して汀線に向かう東西方向の道路（市道陣山２号線）から北に分岐する市道長井浜公園１号線の南端部道路敷きに位置する。南北約 17 m、東西約 14 mの長靴形状を呈する。

墳墓遺構は、現地表面から１～ 1.5 mで検出され、北側はすでに削平されていたためか遺構はほとんど検出していない。また南西側もすでに削平されていたのか遺構が少ない。今回面積約 185㎡で、31 基の箱式石棺墓と２ヶ所に崩された石棺材の散乱箇所、4 基の石蓋土坑墓、1 基の土坑墓が見つかっている。遺構の大半は、砂丘の等高線に直行する東西方向が最も多く 29 基である。等高線に並行する南北方向は２基を数える。頭位は標高の高い西側に持っていくものが大半を占め、長軸を南北方向に取るものは頭位を南側にする。今回の石棺の主軸は、『九州考古学』25･26 号（1965）にて報告された昭和 34 年（1959）の状況と同様の結果であるが、「例外なく南東か東か北東端」であったのに対し、今回は西か南西方向が最も多いという結果が得られている。

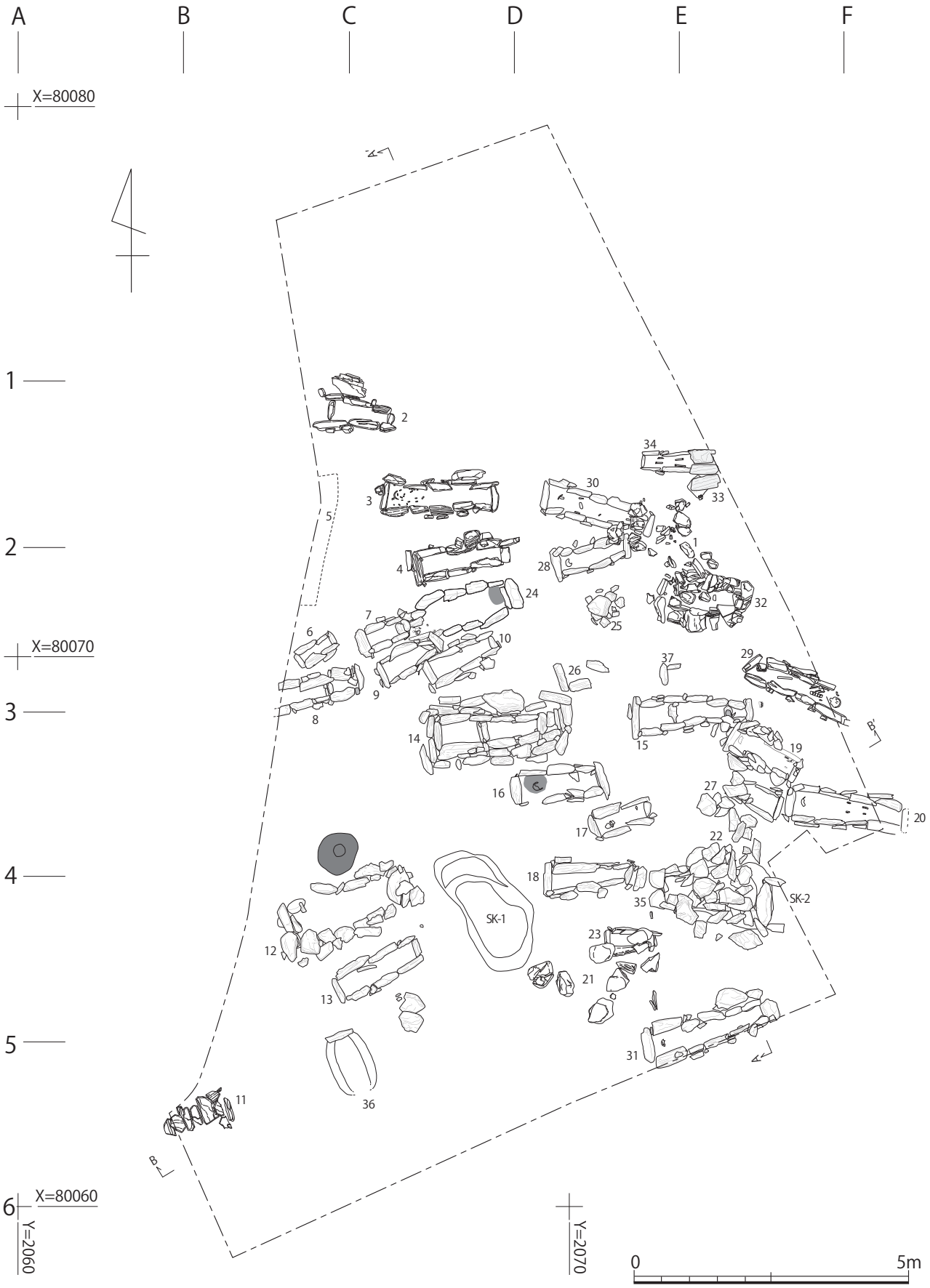
石棺の配置は、並列するものや縦列するものが多い。また長軸方向がずれるものは石棺に接して構築したり、石棺材料が重ねられたりしているものもあり、なかには以前の墳墓を破壊して造墓しているものもあった。19 号石棺は、内法 1.15m で小型であるが、南東隅部に成人骨の大腿骨が斜めに立てかかるように出土したことから、成人の遺体の足を屈曲して埋葬したものと考えられる。したがって、長井遺跡では石棺の長さのみで小児用か成人用か判断できない。15 号石棺では、棺内に頭部から約 55㎝と、足元から約 25㎝の所に仕切り石を立てていた。中央部の長さは内法約 90㎝となり、全長 2.2m の箱式石棺でも中に仕切り石があるため成人は埋葬できないことになる。頭部と足元の小区画からは何も出土していないので用途は明らかではない。

前述の報告に触れられていなかったが、蓋石の継ぎ目に白色の目貼り粘土が全く見られなかった。替わりに継ぎ目にはやや小型の板石を置いていた。側板の継ぎ目にも板石を置き、できるだけ内部に砂が入り込まないようにしていた。

８号石棺の頭部の蓋石の片岩製の板石の上にさらにこぶし大の花崗岩片が１個のみ置かれていた。箱式石棺の石材は片岩製が多く、花崗岩を使用してない。そういった意味でも頭部に花崗岩片を置くという行為には、何らかの意図があったのではないだろうか。

前述の報告では 500 基中 80 基に酸化鉄の散布があり、今回は２基の石棺の頭部周辺と想定される床面に赤色顔料が散布していた。うち２基の石棺に深紅のベンガラが底部の砂を固まらせるほど多量に使用されたとされているが、今回は２基ともうっすら程度であった。

副葬品は、１号石棺から鉄斧、鉄製刀子、３号石棺から管玉、12 号石棺から鉄鎌が出土している。その他の石棺からは副葬品は出土していない。１号石棺の周溝から二重口縁壺や壺などが出土しており、弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定できる。前回の報告では、弥生時代前～中期の墳墓群と報告されていたが、今回は弥生時代前期～中期、そして後期、終末期、古墳時代初頭までの時期の土器、鉄器などが出土している。今回の調査と前回とは時期や埋葬法なども相違していることが指摘できる。

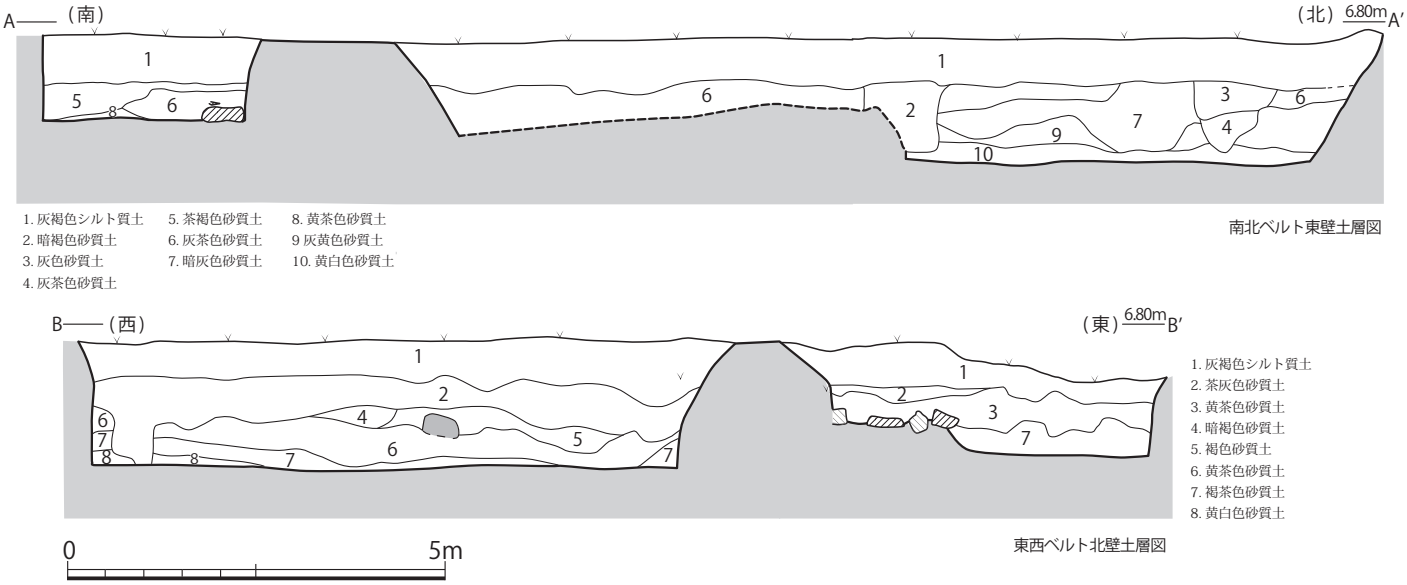


第４図　長井遺跡遺構配置図（1/100）

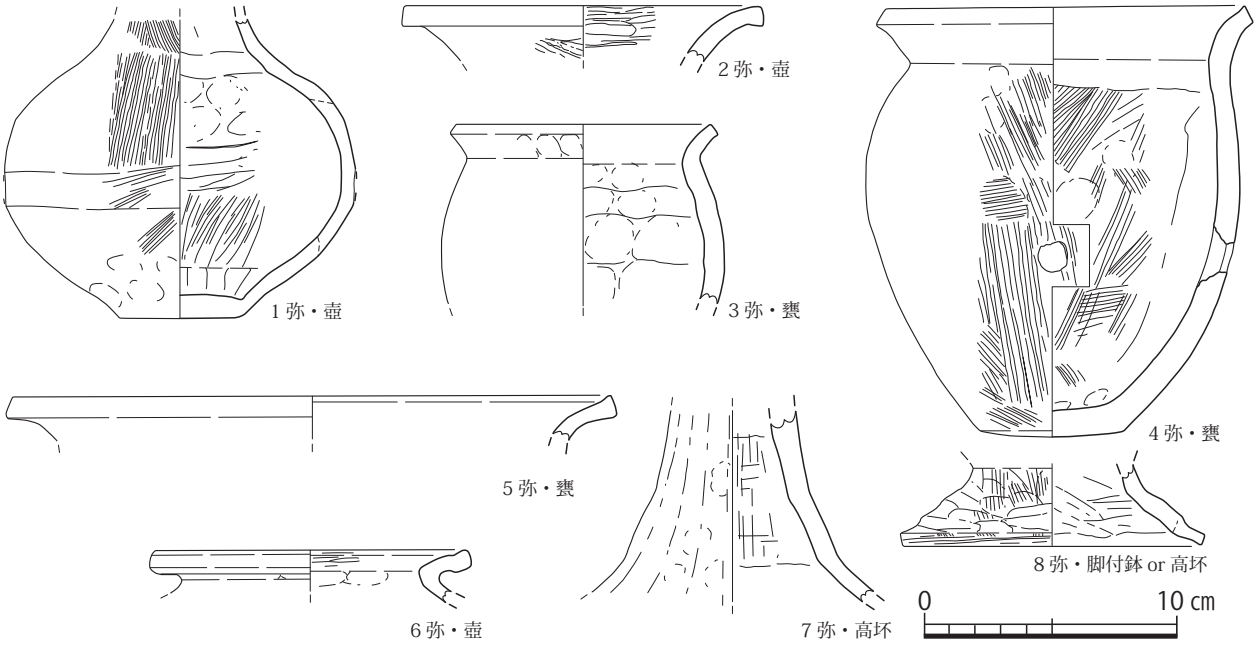
調査区南北トレンチ土層断面（第５図、図版２・26）

本調査区のほぼ中央部に南北および東西の土層断面確認のためベルトを十字に設定した。表土面より約50㎝下が表土層で、その下の灰茶褐色砂質土が上層の石棺に被る土層である。表土面より約 1.4 ～ 1.6m 下により締まった砂丘面があり、それを地山面と確認した。各層は水平に堆積しながらも後世の掘削坑が処々に見られる。

この南北ベルトをはずす時に出土した土器が、第６図の土器である。弥生時代前期の壺から中期の甕の口縁部片、後期の小型甕は、体部中ほどに焼成後穿孔が見られる。供献用の甕であろうか。各層から各時期の土器が出土することや、出土する土器は完形のものがほとんど出土していない状況から、繰り返し新たに石棺を構築するために掘削していたことが推察される。



第５図　長井遺跡　調査区南北・東西ベルト土層断面図（1/100）



第６図　長井遺跡 南北ベルト出土遺物実測図（1/3）

第２節　箱式石棺墓

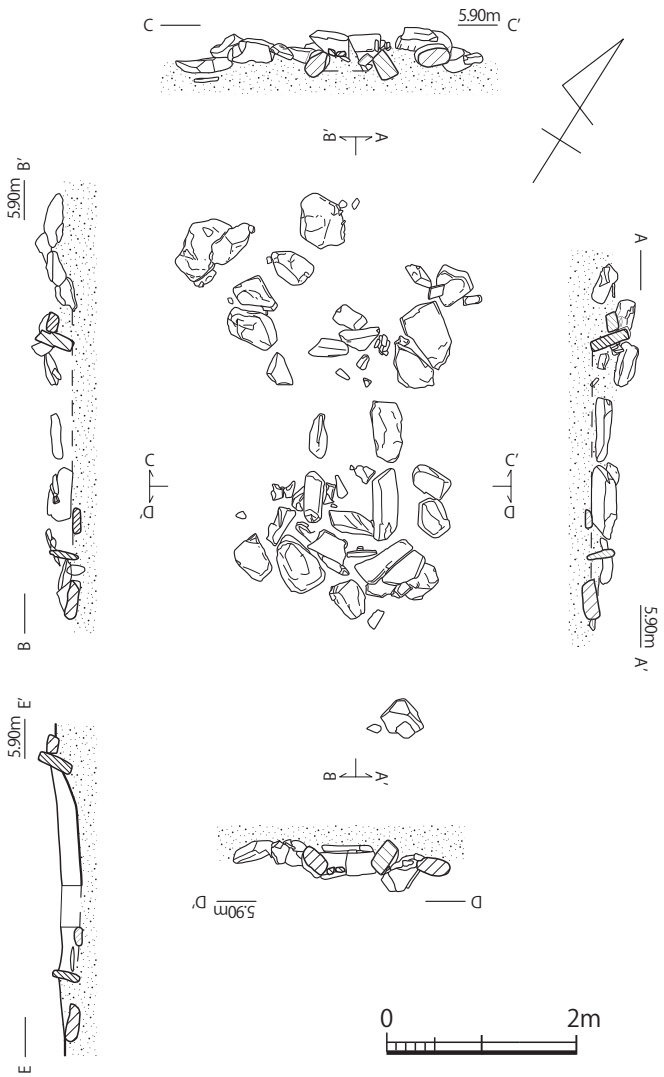
1. １号箱式石棺（方形周溝墓）（第７～９図、図版４・5）

１号箱式石棺は、本調査区の中央東端のＥ-2 グリッド上に位置する。検出時にはすでに蓋石や側板もほとんどなく、長さ 30 ～ 40㎝の石材が散布しているような状況であった。残された石材で倒れかけた小口石や側板、それに副葬されていた鉄製刀子・鉄斧などの出土状況から箱式石棺が想定できた。

箱式石棺の長軸は N-32°-W に振り、頭位は南東方向である。箱式石棺の内法は長さ 2.10m、幅 50㎝、高さ 40㎝である。石棺は長さ 30 ～ 40㎝、厚さ約 10 ～ 15㎝の板石を片側３～４個並べ、側板とする。小口は板石を各１～２個立てている。床面の標高は 5.40m である。

この１号石棺の南側小口石から南西方向約 4m の所に幅約 80㎝、深さ約 40㎝の溝を確認した。南北長さ約 5m しか残存していなかったが、箱式石棺とほぼ並行することから、この１号石棺を囲む周溝と推定される。南北の周溝内法は約 7.5m、東西約 6.4m、外法は南北約 9m、東西約 8m の方形周溝墓と考えられる。

周溝の南西部で壺や二重口縁壺が出土しており、これらの土器や副葬された鉄器などから弥生時代終末期～古墳時代初頭頃に比定できる。



第７図　長井遺跡 １号箱式石棺実測図（1/80）

出土遺物（第 10・11 図、図版 26）

１号方形周溝墓からは、板付Ⅰ式期の小型壺、壺、中期須玖式の高坏、壺、後期中頃の高坏の坏部、終末期の壺や高坏、二重口縁壺などが出土している。

2. ２号石棺（第 12 図、図版６）

２号箱式石棺は本調査区の北西側、C-1 グリッド上に位置し、３号石棺の約 70㎝北西側に立地する。長軸は N-80°-W にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.1m、頭部幅 35㎝、足元幅 16㎝、高さ 20㎝である。蓋石は頭部および胸元に大きめの板石を被せ、足先に小型の石材を２個、合計４枚の板石で被覆していた。南北側板はそれぞれ３枚ずつの板石を立てているが、蓋石と同様に頭部・胸元にはやや大きめの石を立て、足元はやや小型の板石を立てている。蓋石および側板の継ぎ目にはそれぞれ小型の石を置き、目地から砂が入るのを防ごうとする意図があったと思われる。床面の標高は 4.95m である。

副葬品はなく、南北に約 50㎝離れた所から弥生中期の壺口縁部小片などが 1 点ずつ出土している。出土した土器の検出面は箱式石棺側板上端面の高さである。

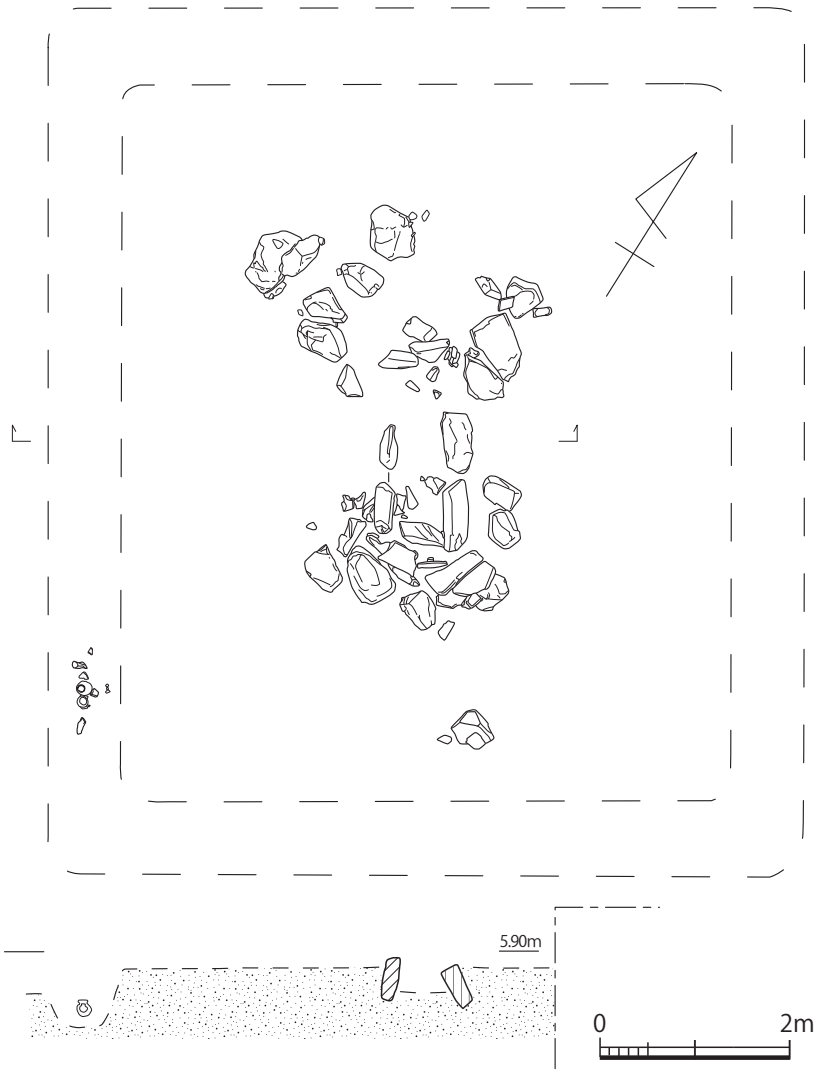
出土遺物（第 13 図）

弥生時代中期の壺と甕口縁部である。

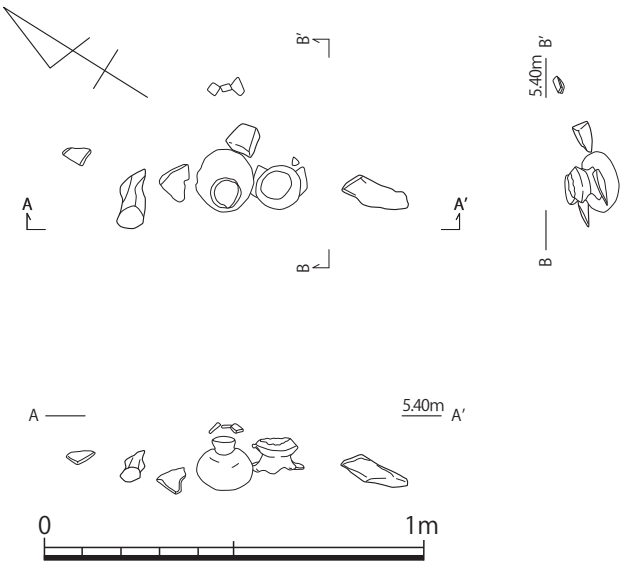
3. 3 号石棺（第 14 図、図版 6・7）

3 号箱式石棺は本調査区の北側中央部、C-1 グリッド上で 2 号石棺の南東側に位置する。3 号石棺から約 1m 南側に並行するように 4 号石棺が立地する。3 号石棺の長軸は N-89°-E で、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.85m、頭部幅 40㎝、足元幅 25㎝、高さ 40㎝である。蓋石は頭部も足元も石の大きさはほとんど変わらない。側板は南北とも 5 枚ずつ立て、頭部はやや大きめの板石を立てている。蓋石の継ぎ目や側板の継ぎ目にはやや小型の板石を立て、砂の侵入を防ぐ意図があったものと思われる。床面の標高は 4.75m である。

副葬品は石棺内の頭部周辺に碧玉製管玉 19 個が床面より 10 ～ 15㎝浮いた状態でみつかっている。頭骨の位置から推定すると頭頂部と頸周辺から出土する管玉は、低い位置にあり、顔面上あたりから検出した管玉はそれより高い位置から出土している。このことからネックレスとして使用していたものがそのまま身につけて副葬されていれば、頸の裏側の管玉はもっと低位置から出土するはずである。19 点の管玉の総長は 19.2㎝である。そうすると頸の裏までは管玉は廻らない。この長さであれば右アゴから左アゴまでの



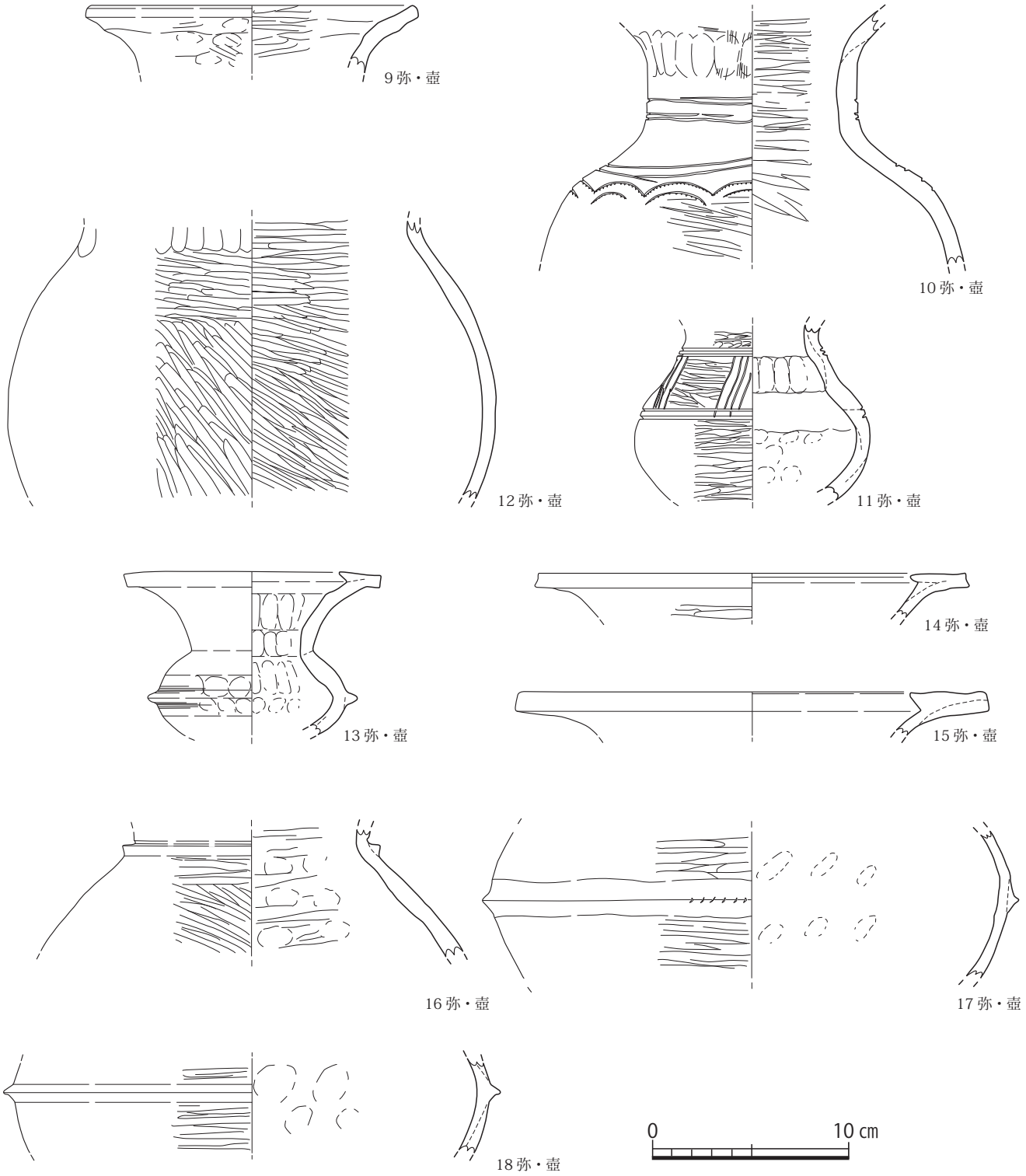
第 8 図　長井遺跡 1 号箱式石棺周溝推定図（1/80）



第 9 図　長井遺跡 1 号箱式石棺周溝内土器出土状況図（1/20）

長さしかない。砂が流れ込んだ時に管玉がはねて分散したとも考えられるが、それにしては頭頂部と頸筋だけが低い位置で、顔面上の管玉が高く揃っていることから推察すれば、砂が流れ込んで来た時にはねたのではなく、埋葬時に管玉を顔全体に覆うように意図的に置いた可能性も考えられるのではないだろうか。

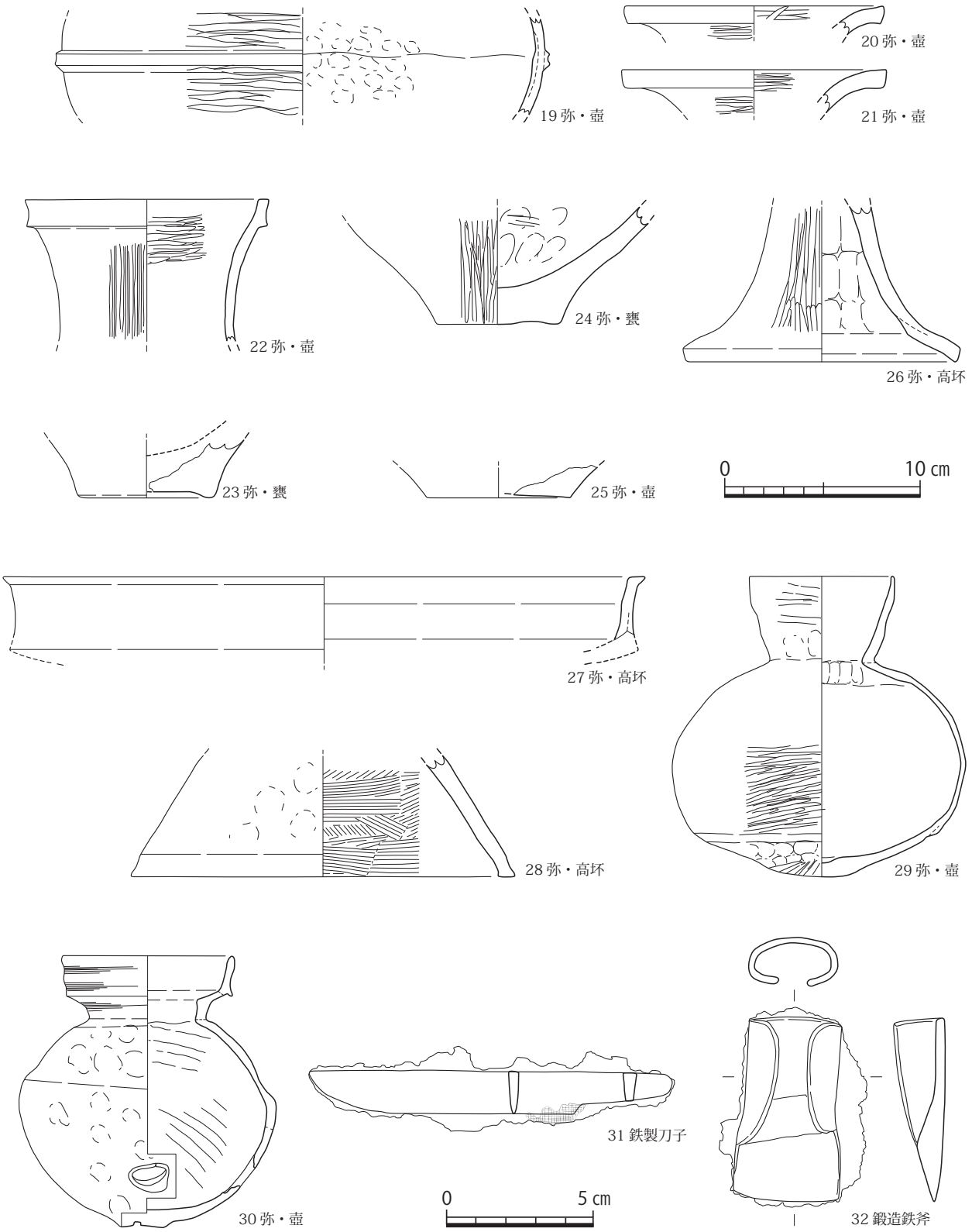
蓋石の上から弥生時代前期末から中期にかけての壺や高坏が出土している。



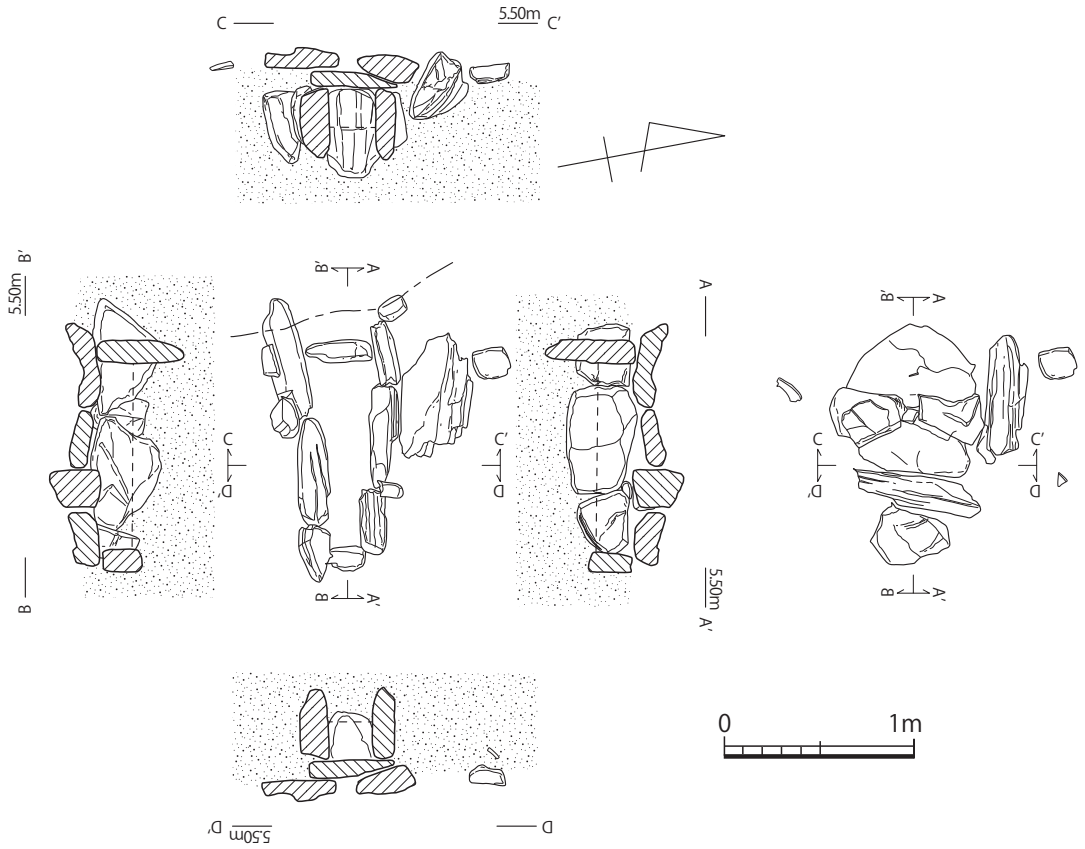
第 10 図　長井遺跡　1 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図 1（1/3）

出土遺物（第 16 図、図版 26）

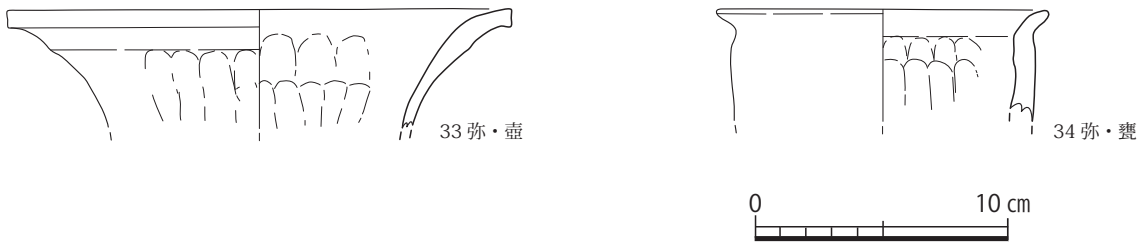
35 の壺のヘラ先による沈線は、5 ～ 6㎝毎に継ぎ目が見られ、わずかに蛇行するなど規則性に欠ける。また二枚貝による重弧文は、3 重の所と 2 重の所が見られ、規格的に描かれたものではない。



第 11 図　長井遺跡 1 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図 2（1/2・1/3）



第 12 図　長井遺跡 2 号箱式石棺実測図（1/40）



第 13 図　長井遺跡 2 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

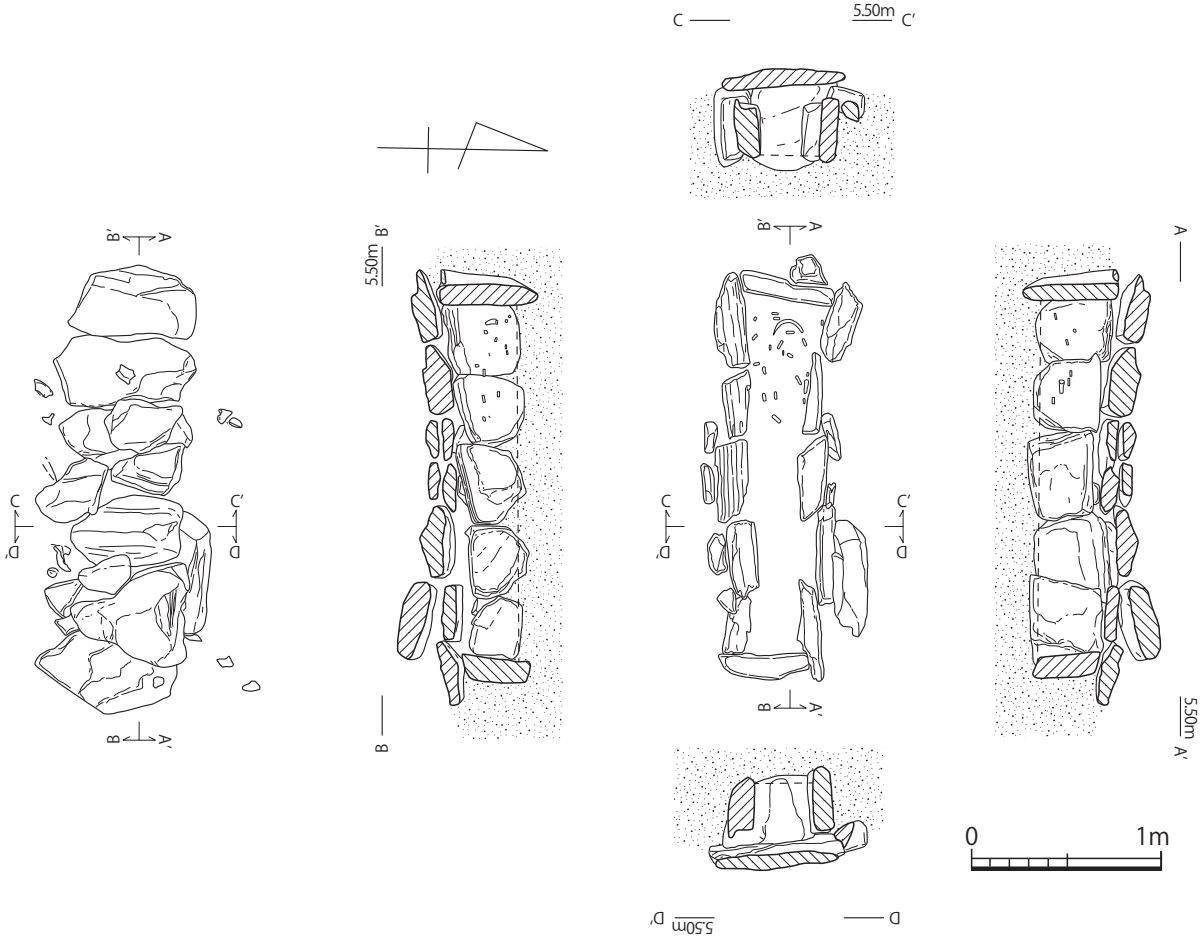
4. 4 号石棺（第 17 図、図版 6・7）

4 号箱式石棺は本調査区の中央北側、C-2 グリッド上に位置し、24 号石棺の約 30㎝北側にほぼ並行して立地する。長軸は N-77°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.45m、頭部幅 30㎝、足元幅 20㎝、高さ 20㎝である。蓋石はほぼ同一の大きさの板石を 5 枚で被覆している。北側板は 4 枚、南側は 3 枚の板石を立てているが、頭部にはやや大きめの石を立て、足元はやや小型の板石を立てている。蓋石および側板の継ぎ目にはそれぞれ小型の石を置き、目地から砂が入るのを防ごうとする意図があったと思われる。床面の標高は 5.0m である。

副葬品はなく、北側のピット内から弥生時代前期末～中期の鉢口縁部小片が 1 点出土している。

出土遺物（第 18 図、図版 27）

鉢の口縁部下に焼成前穿孔の孔が 2 個穿たれている。その上下各 2 条の沈線をヘラ先で巡らし、その後 2 孔を穿った後にヘラ先で鋸歯文を施文する。この鋸歯文は、左上から右下への斜線を左側から右側



第 14 図　長井遺跡　3 号箱式石棺実測図（1/40）

へ順次引いたのち、その斜線を囲む三角文を最後に引いている。この鋸歯文の幅がまちまちであることから割り付けをしたのちに施文するのではなく、割り付けをせずに反時計回りに施文したと考えられる。

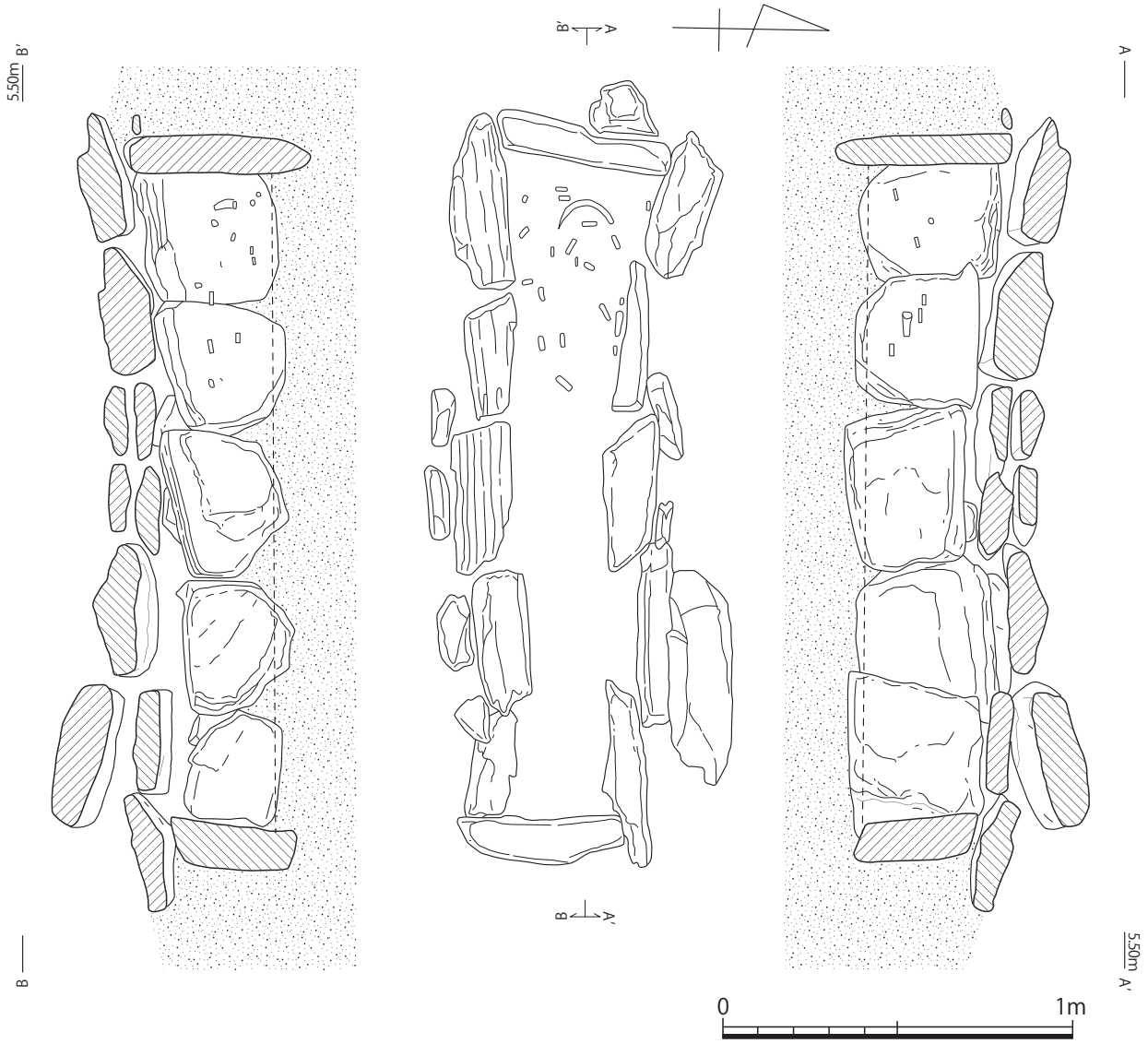
5. 6 号石棺（第 19 図、図版 8）

6 号箱式石棺は本調査区の中央西端、B-2 グリッド上ですぐ南に位置する 8 号石棺と並列する。6 号石棺の長軸は N-51°-E で、頭位は南西である。石棺内法は長さ 0.62m、頭部幅 13㎝、足元幅 15㎝、高さ 23㎝である。蓋石は頭部の方が足元の石より大きい。側板は南北とも 2 枚ずつ立て、頭部はやや大きめの板石を立てている。蓋石の継ぎ目には、砂の侵入を防ぐための石が置かれていない。足元の東南側の側板の継ぎ目には側板とほぼ同様な大きさの板石を立てている。床面の標高は 5.40m である。

副葬品はなく、周辺に土器片の分布もみられない。

6. 7 号石棺（第 20 図、図版 8）

7 号箱式石棺は本調査区の中央西側、C-2 グリッド上に位置する。6 号石棺のすぐ東側で、南側 20㎝に 9 号石棺が並列する。7 号石棺の長軸は N-68°-E で、頭位は西である。石棺内法は長さ 0.7m、頭部幅 26㎝、足元幅 20.2㎝、高さ 32㎝である。蓋石は頭部に大きめの板石を被せ、腹部、脚部と順に蓋石は小型化する。小口石も頭部の方は厚さ 20㎝の大きい石を用い、足元にはその半分の厚さ 10㎝の石を立てている。また床面は頭部から腹部にかけて砂丘面の砂地であるが、足元の床面には幅 17㎝、長さ 23㎝、厚さ 5㎝の薄い板石を敷いている。その設置方法は頭部床面の高さに合わせるように板石の上面の高さが頭



第 15 図　長井遺跡　3 号箱式石棺管玉出土状況（1/20）

部砂丘面の高さに合わせて板石の部分を掘り下げて埋め込むようにしている。床面の標高は 5.20m である。蓋石および側板の継ぎ目には小型の石を置き、砂が入らないように目貼りしている。

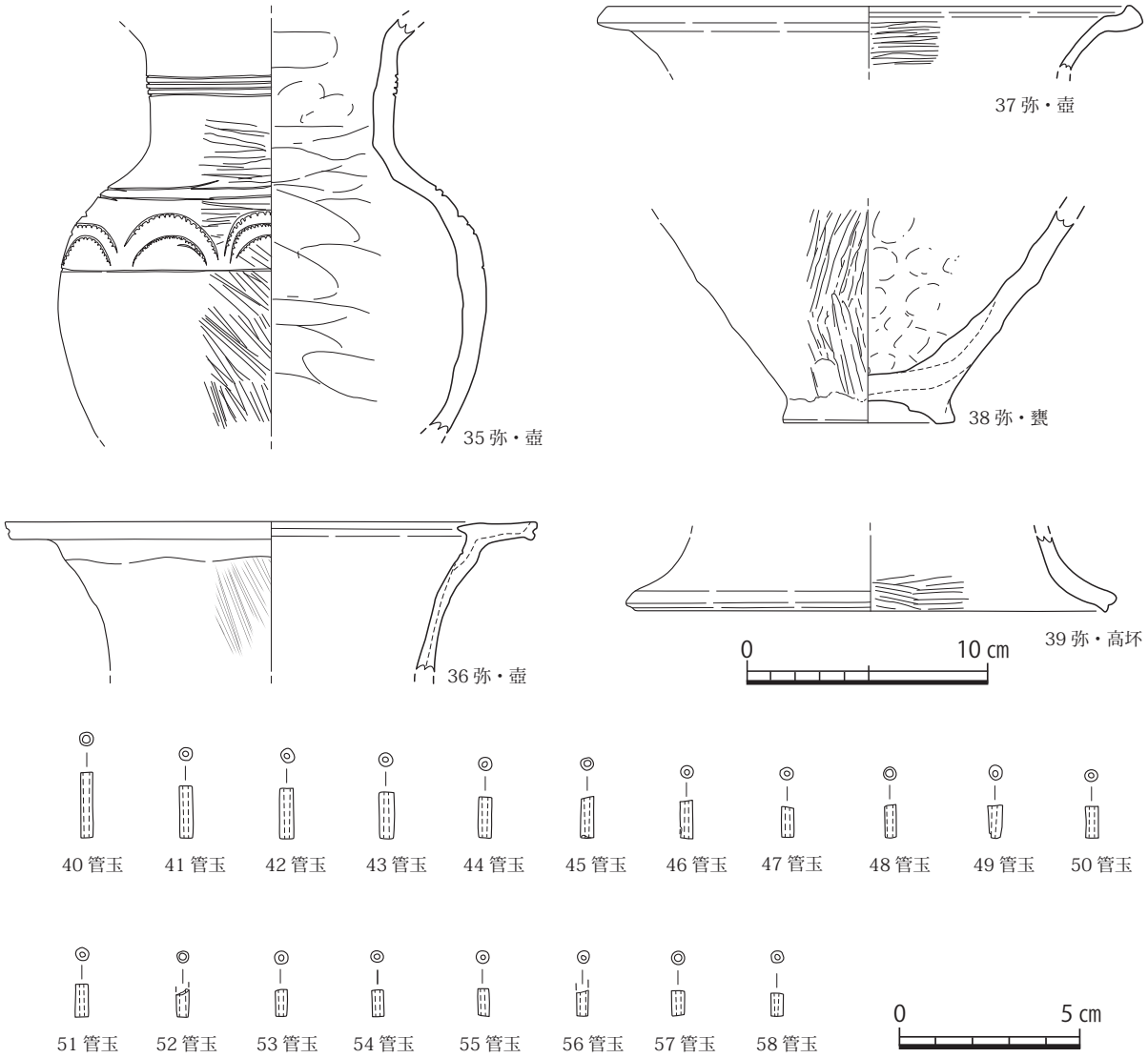
副葬品はなく、北側ピット内から短頸壺の口縁部片が出土している。

出土遺物（第 21 図）

口縁部を大きく外湾させるように上方につまみ上げ、端部を外方に折り曲げ肥厚させ、口唇部を平坦にナデる。弥生時代中期か。

7. 8 号石棺（第 22 図、図版 8・9）

8 号箱式石棺は本調査区の中央西端、6 号石棺のすぐ南側、B-2 グリット上に位置し、6・7・9 号石棺と並列する。西側小口部は調査区域外になる。長軸は N-79°-E である。検出長さ 1.47 m、西側幅 30㎝、足元幅 20㎝、高さ 20㎝である。頭位は西側へ幅が広くなっているのでおそらく西であろう。東側の足元小口から西へ 47㎝の所に仕切り石を立てている。仕切り石は幅 22㎝、高さ 26㎝、厚さ 8㎝で、南端部を南側側板の足元から 1 石目と 2 石目の間の継ぎ目にはめ込んでいる。側板より先にこの仕切り石をは

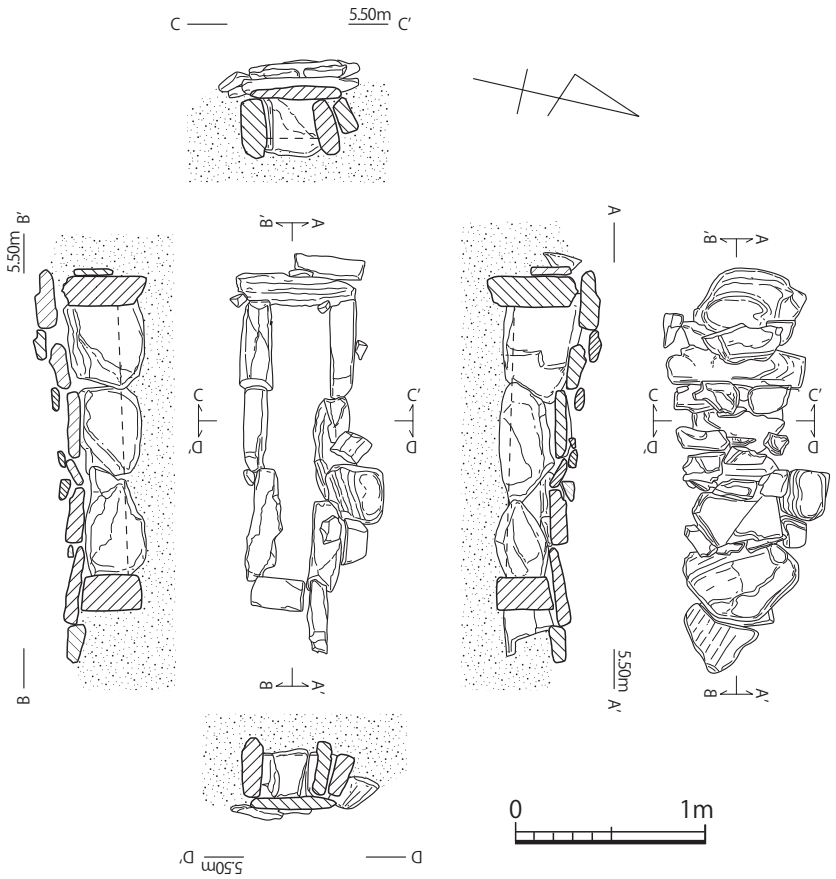


第 16 図　長井遺跡　3 号箱式石棺および周辺出土遺物実測図（1/2・1/3）

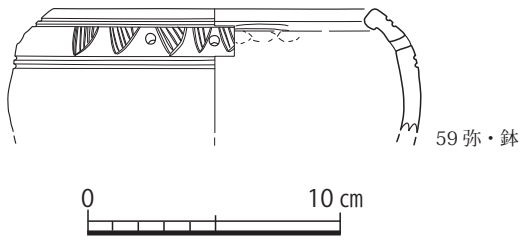
ずそうとしたが南北側板に強く挟まれていてはずれなかった。おそらく構築時に仕切り石を挟むように両側から側板を押さえつけるように構築したのであろう。また、この仕切り石の西側の基部に長さ 10 ～ 13㎝、厚さ 4 ～ 6㎝、高さ 12㎝の小型の石を 2 石立てて、仕切り石が倒れないように支えている。このように考えると東端部の小口石と仕切り石の間の長さ 47㎝、幅 20㎝の小室はすでに構築・埋葬時に存在し、何らかの用途のために造られた小室ということになる。しかし、この小室からは何も出土しておらず、副葬品を埋納する目的で造られたわけでないことは明らかである。再葬用に作られたことも考えられる。

側板は現在北側が 3 枚、南側が 4 枚みられ、他の箱式石棺墓は長いもので側板 5 枚が多く見られることから、本箱式石棺の推定長さは 2 m前後となることが想定される。蓋石は 5 ～ 6 枚で小型の板石が多い。頭部側の板の大型化も見られない。床面標高は 5.30m である。

また本箱式石棺に使われている石材は、近隣から採取できる片岩系であるが、足元から 4 枚目の蓋石の上に長さ 45㎝、幅 33㎝、厚さ 8㎝の花崗岩 1 枚が載せられていた。片岩の蓋石が並べられている中で花崗岩は目立つもので、このように考えるとこの花崗岩の板石は目印なのか、あるいは成人骨の中位あた



第 17 図　長井遺跡　4 号箱式石棺実測図（1/40）



第 18 図　長井遺跡　4 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

りに置かれていることから腹部あたりに押さえつけるように置かれた儀礼行為の一つとも考えられる。

副葬品はなく、近辺から弥生時代後期中頃～終末期の高坏が出土している。

出土遺物（第 25 図）

豊前型の高坏で、口縁端部を内法に丸める。

8. 9 号石棺（第 23 図、図版 8）

9 号箱式石棺は本調査区の中央西側、C-2 グリッド上に位置する。長軸は N-72°-E で、6 ～ 8 号石棺に並列する。頭位は西である。石棺内法長さ 0.85m、頭部幅 33㎝、足元幅 10㎝、高さ 30㎝である。床面の標高は 5.20m である。蓋石は頭部が最も大きく、足元へ徐々に小型化しながら高さも低くなっている。また側板は南北ともに 3 枚ずつである。北側側板の真ん中の板石が最も大きく、頭部左右の板石は石棺長さを調節しようとして小型の板石を当てている。北側の側板は、真ん中の側板をまず最初に設置したのち、足元や頭部の側板を左右の長さを合わせながら小型の板石を置き、さらに長さを揃えるために足元の側板を斜め内法に狭めて置いている。足元の床面には長さ 15㎝、幅 20㎝、厚さ 7㎝の板石を敷いている。この石棺では蓋石や側板の継ぎ目の目貼り用の板石はほとんど置いていなかった。

副葬品もなく、周辺出土土器もほとんどなく、時期は明らかではないが、6 ～ 9 号石棺は南北 2 列、東西に並んでいることから若干の長軸方向にズレが認められるもののかなり近い時期に順次構築されたことが想定される。

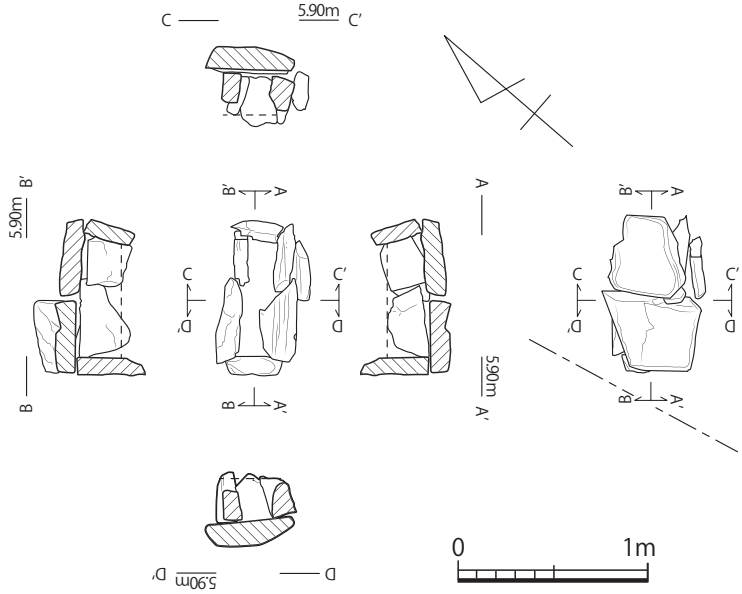
9. 10 号石棺（第 24 図、図版 9）

10 号箱式石棺は本調査区の中央やや西側、C-2 グリッド上に位置する。長軸は N-60°-E で、頭位は西である。石棺内法長さ 1.12m、頭部幅 33㎝、足元幅 23㎝、高さ 25㎝で、床面標高は 5.05m である。蓋石は 4 石で、頭部の石がやや大きく、足元へ徐々に小型化する。小口石は頭部の方が大きく厚みもある。側板は南北ともに 3 枚ずつで、頭部左右の側板が大きい。ただ北側頭部側板は立面三角形状を呈し、頭部小口石との間に逆三角形の隙間ができるため側板裏側からもう 1 枚の板石を立てて砂が入り込むのを防いでいる。この石棺では、蓋石や側板の継ぎ目に目貼り用の小型板石を置き、砂が入り込むのを防いでいる。

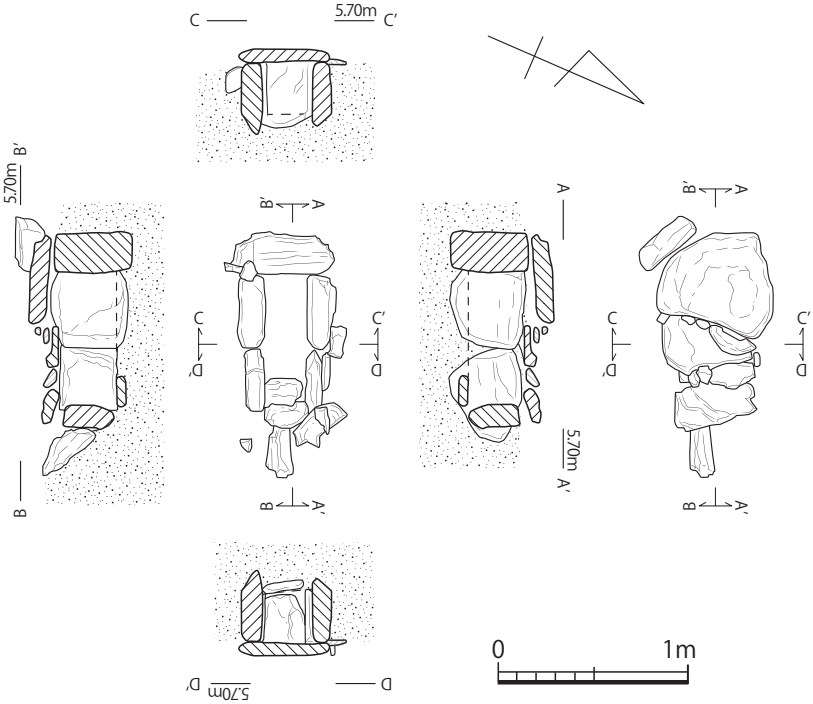
副葬品もなく、周辺から出土した土器もなく時期は明らかではないが、6 ～ 9 号石棺と接しており、構築されたレベルもほぼ同一であることから、6 ～ 9 号石棺に近い時期で、それらより後出する時期が推察される。

10. 12 号石棺（第 26 図、図版 10・11）

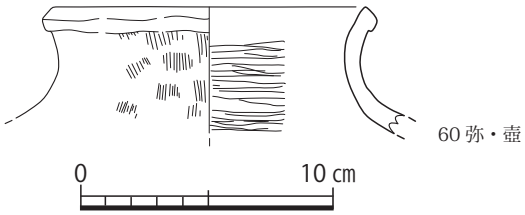
12 号箱式石棺は C-4 グリット上に位置し、13 号石棺と 40㎝の間をあけて並列する。長軸も N-63°-E でほぼ同一方向であることや、側板高さも標高も 5.30m と同一であることから当初から 2 棺並列を企画して構築されていると考えられる。12 号石棺は石棺内法長さ 1.65m、頭部幅 55㎝、足元幅 50㎝、高さ 45㎝である。頭位は 13 号石棺と同様の南西である。頭部および足元の小口石は、板石を立てるのではなく、小口積みである。長さ 30 ～ 50㎝、厚さ 10 ～ 20㎝の板石を小口積みにしている。その積み方は頭部では 2 石を横並びに



第 19 図　長井遺跡　6 号箱式石棺実測図（1/40）



第 20 図　長井遺跡　7 号箱式石棺実測図（1/40）



第 21 図　長井遺跡　7 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

並べ、その上に小口積みに積み上げている。検出時には小口は後ろ側へ崩れ気味であったが、当初は石材の根は下げ気味で内側はやや持ち送り気味になっていたものと考えられる。足元側は、やや大きめの石を平積みにし、根を下げ気味にしている。

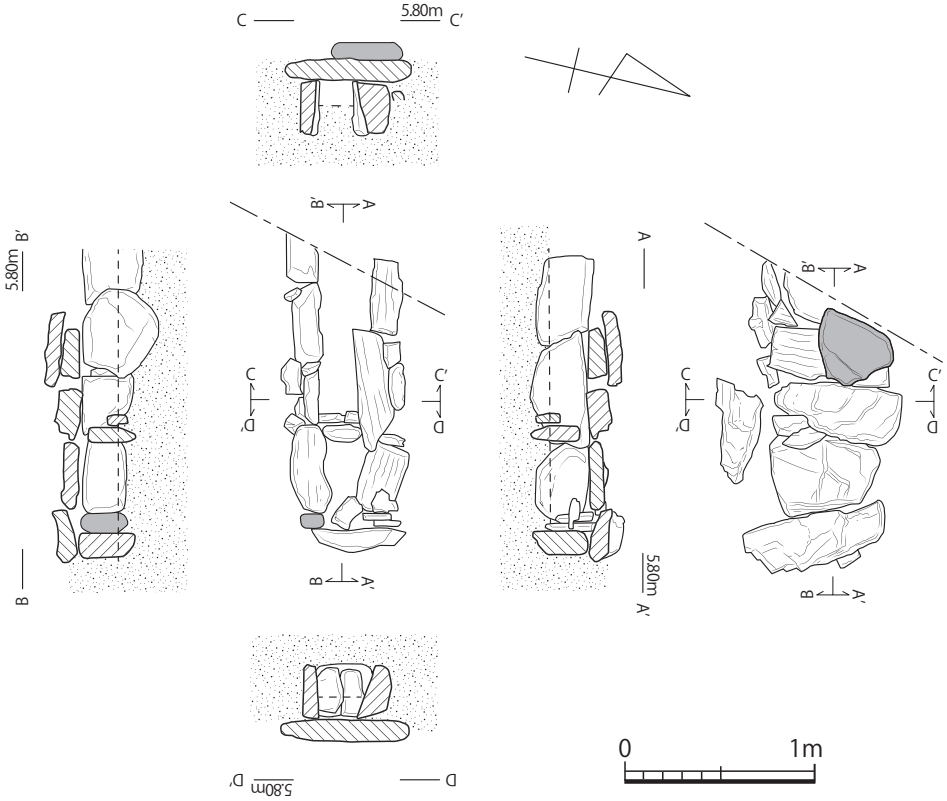
北側西側板は、板石を一部壊されていたため断定はできないが、4 ～ 5 枚の板石を立てて側板にしている。しかし、南東側の側板は小口石と同様小口積みである。厚さ 5 ～ 10㎝の薄い板石を用い、検出時は 2 ～ 3 段積みであったが、当初は 4 ～ 5 段は積み上げていたものと推察される。

この 12 号石棺の北側側板の中位の北側下段から径 60 ～ 80㎝、深さ 30㎝の楕円形のピットが見つかっている。埋土は黒色砂質土であり炭化物を多量に含む。この 12 号石棺に伴うものか明らかではない。

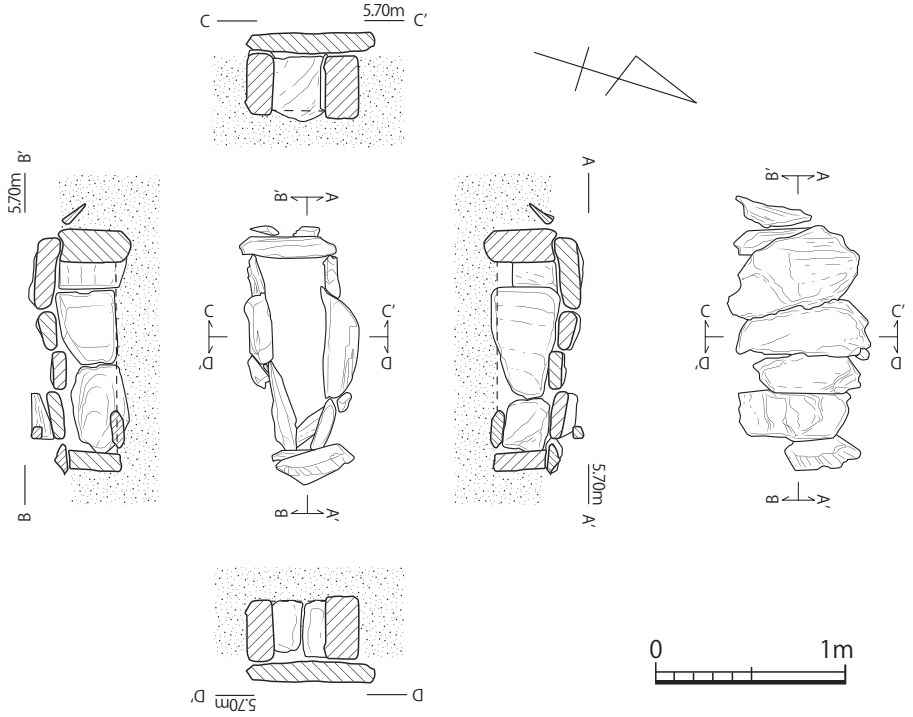
副葬品は、頭部北側床面から鉄鎌 1 点が見つかっている。鉄製品が棺内から出土していることや、小口積みの小口石と側板の状況から古墳時代の竪穴式石槨に一歩近づいていると考えられ、弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定できるのではないだろうか。

その証左に、この 12・13 号石棺の周囲には東側に SK1、南側に 36 号石蓋土坑墓、南西側に 11 号石蓋土坑墓が位置しているだけで、弥生時代終末期頃の箱式石棺墓は直線距離 3m 以内には検出されていない。さらに 11 号石蓋土坑墓の上層から庄内式期の壺が出土しており、この辺りに 12・13 号石棺に伴う周溝が巡っていたと考えるならば、一辺 10 ～ 12 mの方形周溝墓と想定できるのではないだろうか。

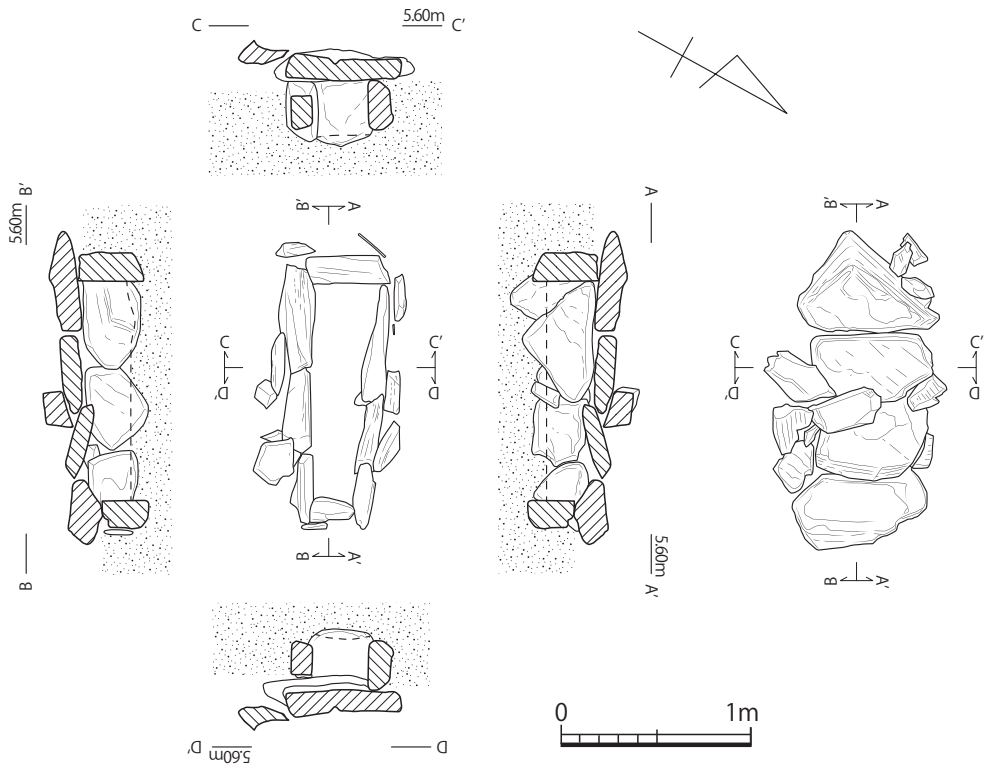
1 号方形周溝墓の箱式石棺の床面の標高は、5.40m であり、この 12・13 号石棺の床面の標高は 5.30m で今回発掘調査範囲での箱式石棺墓の床面標高はもっとも高い位置にあることや、周囲に箱式石棺墓が構築されていないことなどからその蓋然性は高いと思われる。



第 22 図　長井遺跡　8 号箱式石棺実測図（1/40）



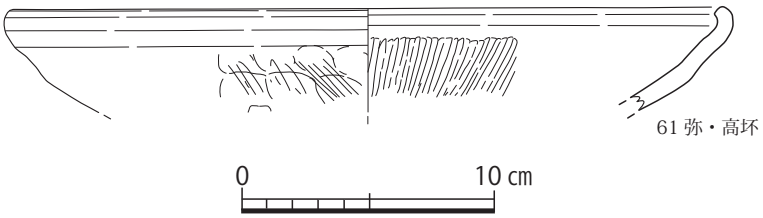
第 23 図　長井遺跡　9 号箱式石棺実測図（1/40）



第 24 図　10 号箱式石棺実測図（1/40）

出土遺物（第27・28図、図版27）

副葬された鉄鎌は、直刃鎌で、先端部は剣先状を呈し、両刃状にしている。また、表面一部に布痕および木痕が見られ、平織り布に包んだ後、木箱に入れられていたものと推定される。



第 25 図　長井遺跡　10 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

11.　13 号石棺（第 26 図、図版 10・11）

13 号箱式石棺は本調査区の南西側、C-4 グリッド上に位置する。頭位は南西で、長軸は N-62°-E で、石棺内法は長さ 1.47m、頭部幅 35㎝、足元幅 20㎝、高さ 35㎝、床面標高は 5.30m である。蓋石は調査時にはすでに欠失していた。側板は左右共に 3 枚である。北西側の側板は頭部側が最も大きく、足元へ順次小型化する。反対の南東側の側板は足元側が最も大きく、頭部側へ小型化する。また小口石は頭部側を側板の外側に出し、足元側の小口石は側板に挟まれている。このような状況から、まず頭部側の小口石を設置した後、北西側の頭部側の側板から足元の側板を設置して、次に足元側の小口石を挟み込んだ後、南西側の側板を足元から頭部へ順次設置したものと推察される。そして北西側の側板の 1・2 石の間に目貼り用の薄い板石を内側に当てている。この作業は中に遺体を安置する前であると内側へ倒れてしまうので、おそらく遺体の安置時に内側に板石を当てたものと推察される。この石以外には目貼りはしていない。

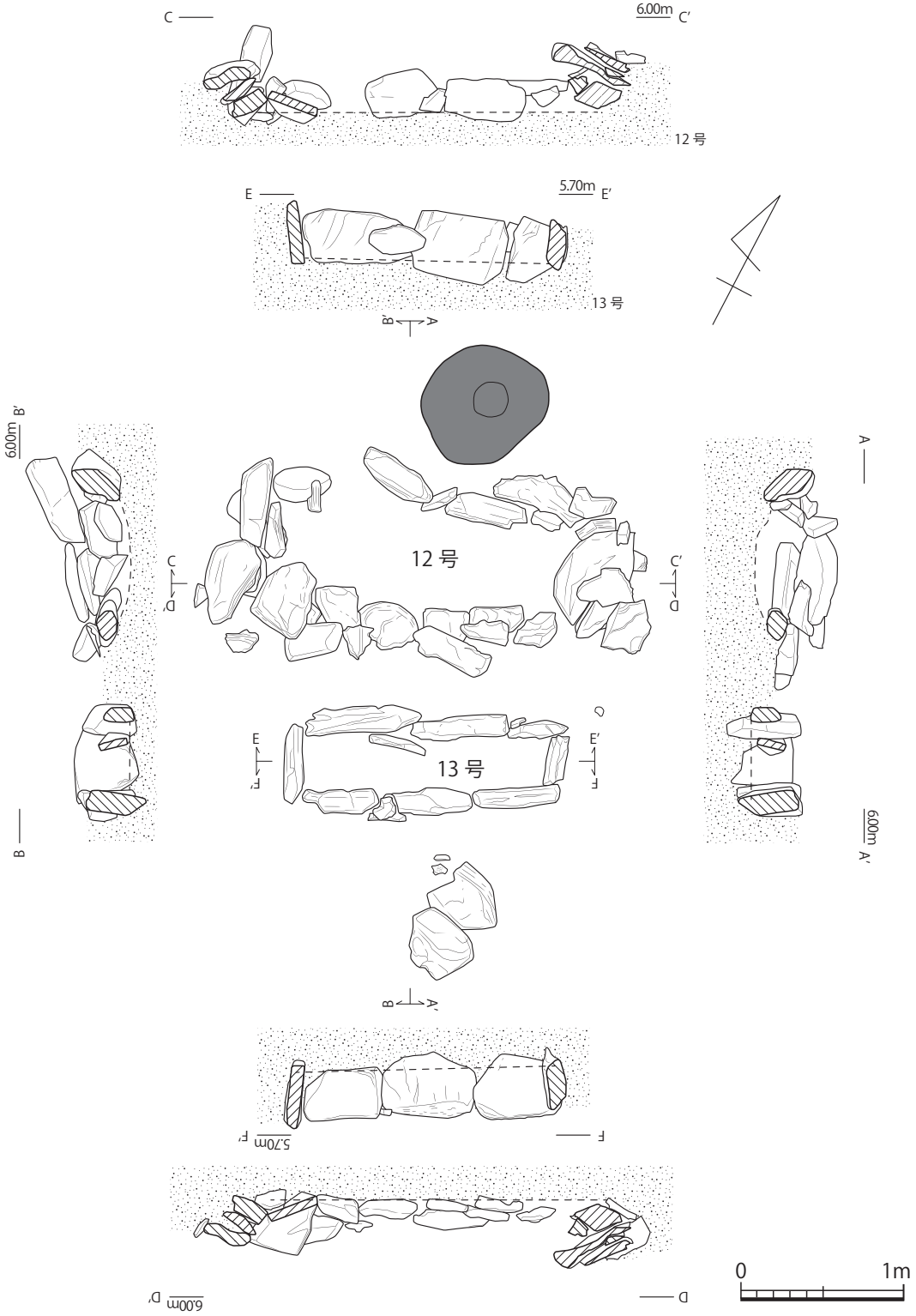
副葬品はなく、この石棺中位南側に一辺 30 ～ 45㎝、厚さ 10㎝ぐらいの板石が 2 石見つかっている。13 号石棺の側板の上面の高さとほぼ同一の高さで、13 号石棺とこの 2 石との間から数点の土器が出土している。これらの土器は弥生時代前期の壺などで、この 13 号石棺とは時期的に齟齬が見られる。弥生時代前期後半頃の箱式石棺とそのそばに置かれていた土器が、この 13 号石棺構築時に破壊されたためにこの辺りから弥生時代前期の土器片が散布したものと考えられる。

出土遺物（第 28 図、図版 27）

63 の壺は頸部下と肩部上位にそれぞれヘラ先による沈線とその間に縦方向に沈線を各 2 条ひき、その両側に下方向の斜線を施文する。体部中位に各 2 条の沈線を引き、その間にヘラ先による羽状文を下側の斜線を先に、上の斜線を後から引く。かなり丁寧な羽状文を施文するが、上段と下段の羽状文では下段の羽状文の方が斜線の数が多く、密になっており、割り付けはしていないようである。64 の壺の肩部の重弧文はヘラ先による施文で、4 重にひかれてはいるが、間隔は狭くなったり、広くなったりしてそれほど丁寧さは見られない。65 の壺の口縁部は、「く」字形に屈曲したのち端部を内湾気味に外形させたのち上外方につまみだしている。また、体部はやや扁球形を呈していることなどから庄内式新相段階もしくは布留式古段階である。

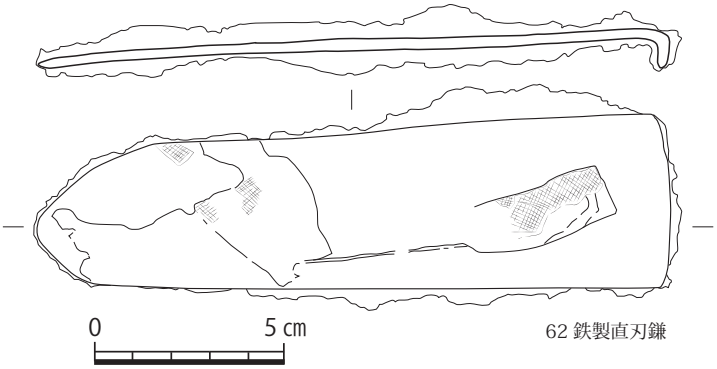
12.　14 号石棺（第 29 図、図版 12）

14 号箱式石棺は本調査区のほぼ中央、D-3 グリッド上に位置し、10 号石棺の約 50㎝南側に立地する。長軸は N-86°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.70m、頭部幅 34㎝、足元幅 20㎝、高さ 20 ～ 40㎝である。蓋石は頭部の板石が最も大きく、足元へ小さくなる。蓋石は全部で 6 枚被覆している。石棺内は 2 つに分かれ、それぞれその間に仕切り石を立てている。頭部側は長さ 68㎝、足元側は長さ 88㎝、



第 26 図　長井遺跡　12・13 号箱式石棺実測図（1/40）

である。頭部と中位の間の仕切り石は、北側側板は２石目の途中に、南側は１石目と２石目の継ぎ目に挟み込むように２枚の板石を立てている。この仕切り石を外そうと思っても挟み込んであるために外れなかった。側板を構築する時に同時に仕切り石を挟み込んでいると考えられる。したがって、石棺内の２つの空間は、石棺を構築する時に当初から計画されたものであったと考えられる。

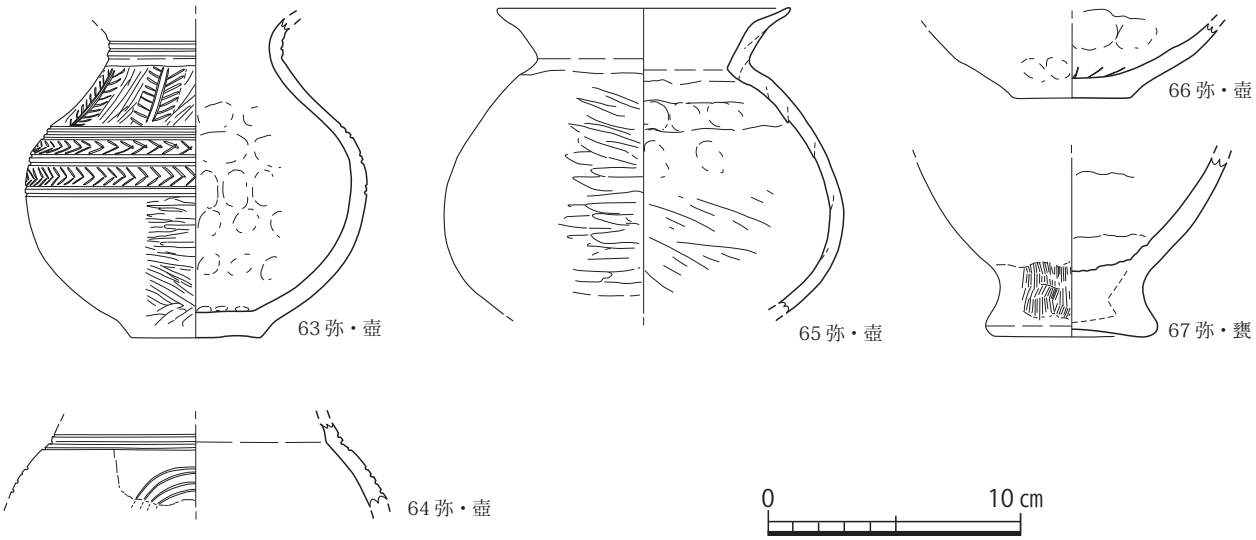


第 27 図　長井遺跡　12 号箱式石棺出土遺物実測図（1/2）

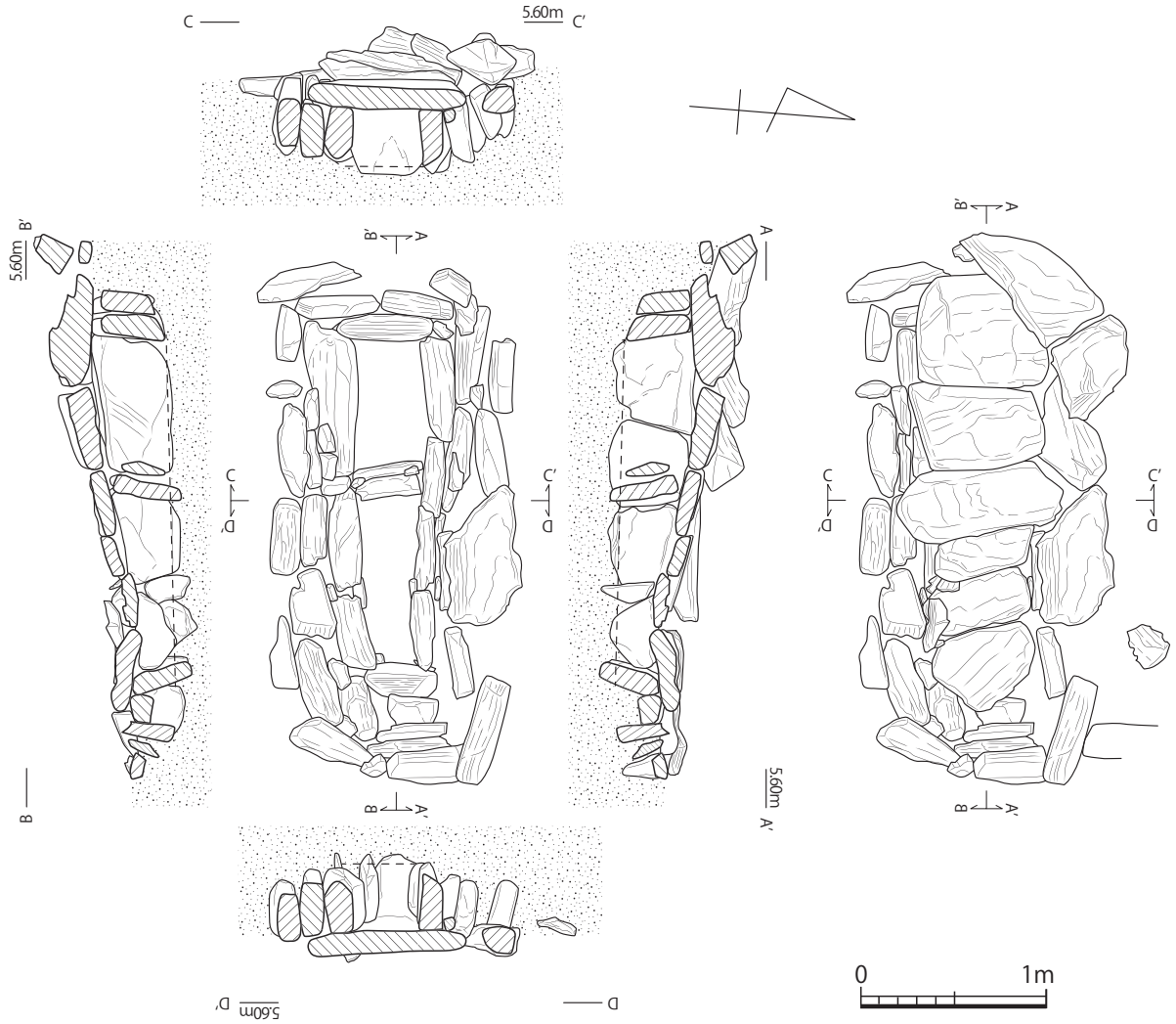
北側板は６枚で、足元２枚は北東角に隣接する 37 号石棺構築時にずれた可能性がある。頭部が最も大きい石材を用い、足元へ順次小型化している。南側側板は４枚の板石を立て、頭部が最も大きい石を立て、足元へ順次小型化している。14 号石棺の側板は、片側１枚だけでなく、北側側板の１石・２石目はそれぞれ３列に重複させ、さらに板石の継ぎ目の目貼り用を兼ねて少しずつずらして立てている。また北側側板の中位の外側には、長さ約 80㎝、幅約 40㎝の板石を立てずに側板の上の高さで寝かしていた。おそらく側板がたおれないようにするために板石を蓋状に寝かしていたのであろうか。頭部小口石も内側が１枚、次に２枚を立てて、３重目は「ハ」字状に左右両サイドに立てている。

蓋石の目貼り石はほとんどなく、側板の継ぎ目にはそれぞれ小型の石を置き、目地から砂が入るのを防ごうとしている。床面の標高は 4.80m である。

副葬品はなく、14 号石棺そばと、東側の 15 号石棺との間、そして北東側約 6m 離れた 30 号石棺そばから検出された土器片が接合できた小型壺が出土している。１点の壺の破片が 6m 近く離れているということは、14 号石棺近くに置かれていた壺が、近くの石棺を構築する際に壊され、分散したことが推察される。



第 28 図　長井遺跡　13 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



第 29 図　長井遺跡　14 号箱式石棺実測図（1/40）

出土遺物（第 30 図、図版 27）

口縁部を欠失し、施文はないが、肩部が張り、底部は器肉厚く、やや上げ底気味の底部で板付Ⅱ式期の時期に当たる。

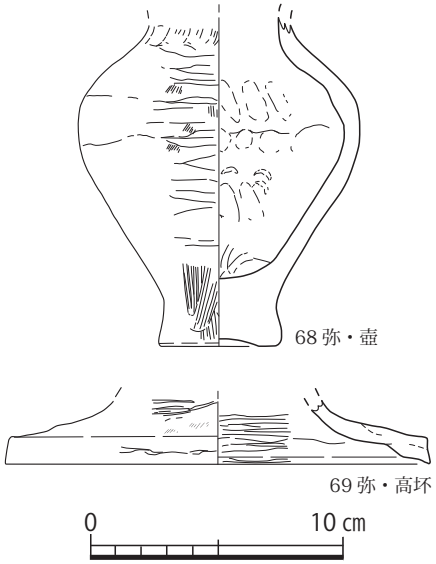
13.　15 号石棺（第 31 図、図版 12・13）

15 号箱式石棺は、本調査区の中央やや東寄り、E-3 グリッド上に位置し、14 号石棺の約 1m 東で従列する。長軸は N-83°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.95m、頭部幅 38㎝、足元幅 12㎝、床面標高は 4.95m である。蓋石は 7 枚で、頭部が最も大きい石材を用い、足元へ順次小型化する。側板は南北共に 5 枚で、頭部側が大きく、足元側へ小型化する。石棺内は仕切り石を立て 3 つに分けられている。頭部側の長さ 55㎝、中位の長さ 85㎝、足元の長さ 25㎝である。胸元部の仕切り石は南北ともに 2 石目の中ほどで立ている。足元部の仕切り石は 4 つ目と 5 つ目の仕切り石の継ぎ目である。このことから 15 号石棺も石棺構築時に計画的に仕切り石を設置していたと考えらる。目貼り石は蓋石の一部と側板の継ぎ目にみられる。

副葬品はなく、近辺から数点の弥生土器が出土している。

出土遺物（第 32 図、図版 27）

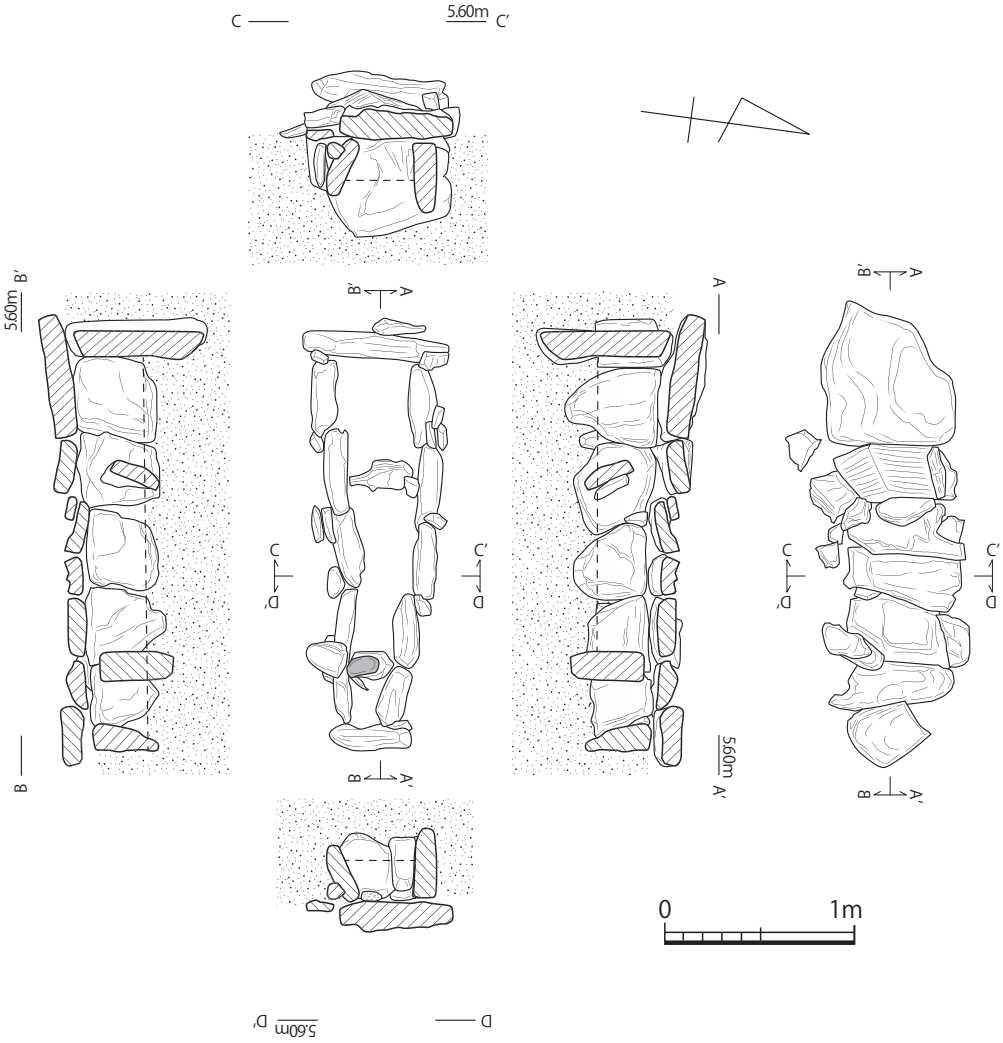
70 は壺頸部に 4 条も沈線を廻らしているが、途中蛇行しており、丁寧に作られてはない。73 は波状口縁部で、外面上下段にそれぞれ各 2 条の沈線を廻らし、その沈線の間に逆三角形に線を引き、その中に 4 ～ 5 本の線を引いている。その本数もまちまちであるため計画的な割り付けは無かったのであろう。



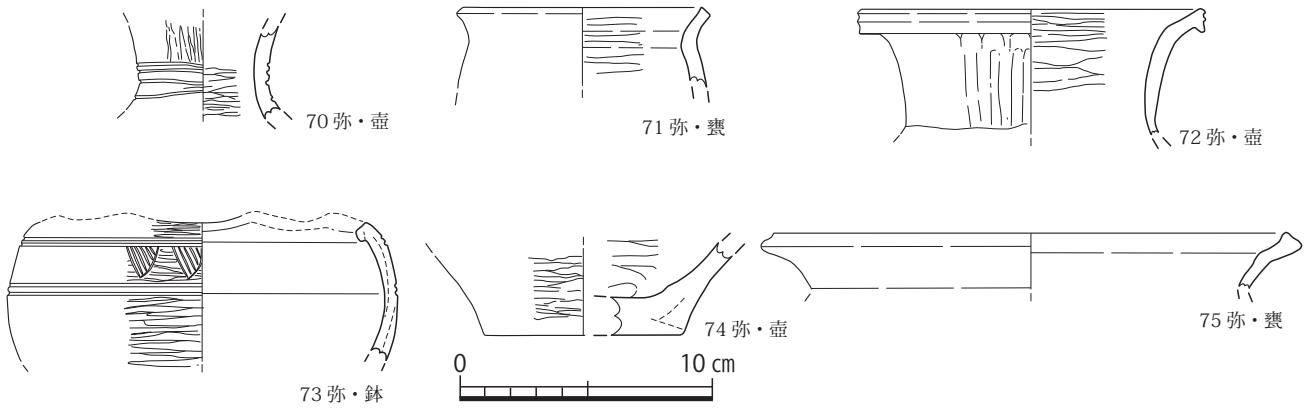
第 30 図　長井遺跡　14 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

14.　16 号石棺（第 33 図、図版 13・14）

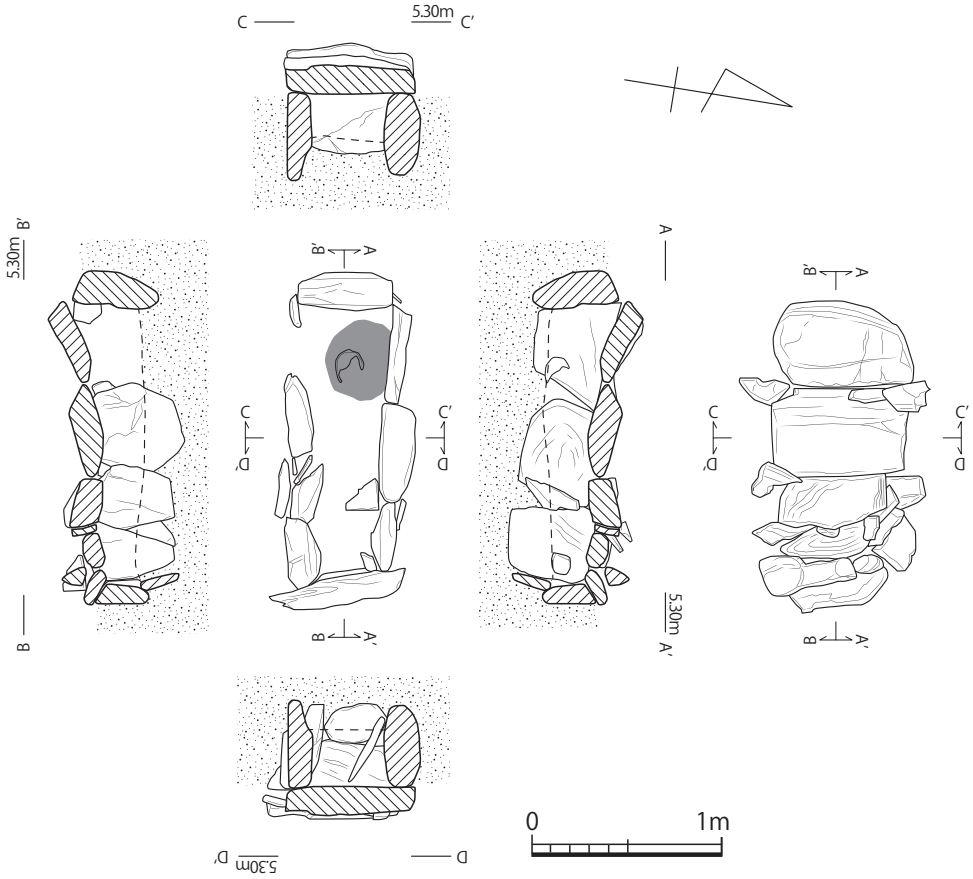
16 号箱式石棺は、本調査区の中央やや南側、D - 3 グリッド上に位置し、14 号石棺の南東側で並列している。長軸はN -81°- E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.40 m、頭部幅 50㎝、足元幅 27㎝、床面標高は 4.70 mである。蓋石は 5 枚で、頭部が最も大きく、足元へ順次小型化する。側板は北側が 3 枚、南側は頭部横の側板が欠失して



第 31 図　長井遺跡　15 号箱式石棺実測図（1/40）



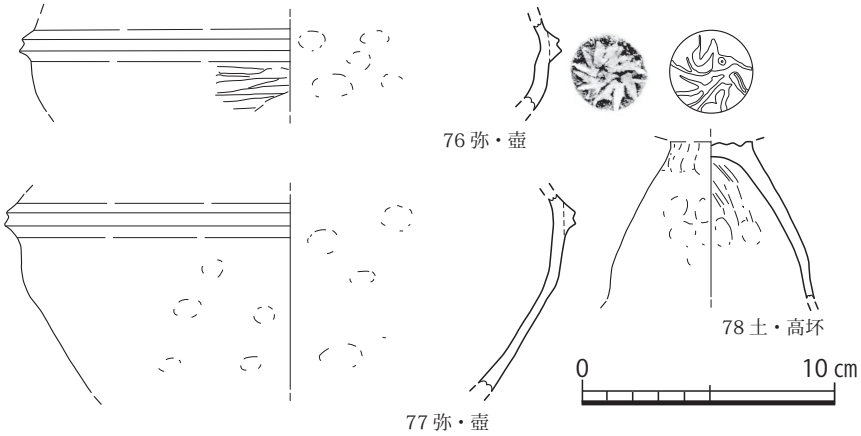
第 32 図　長井遺跡　15 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



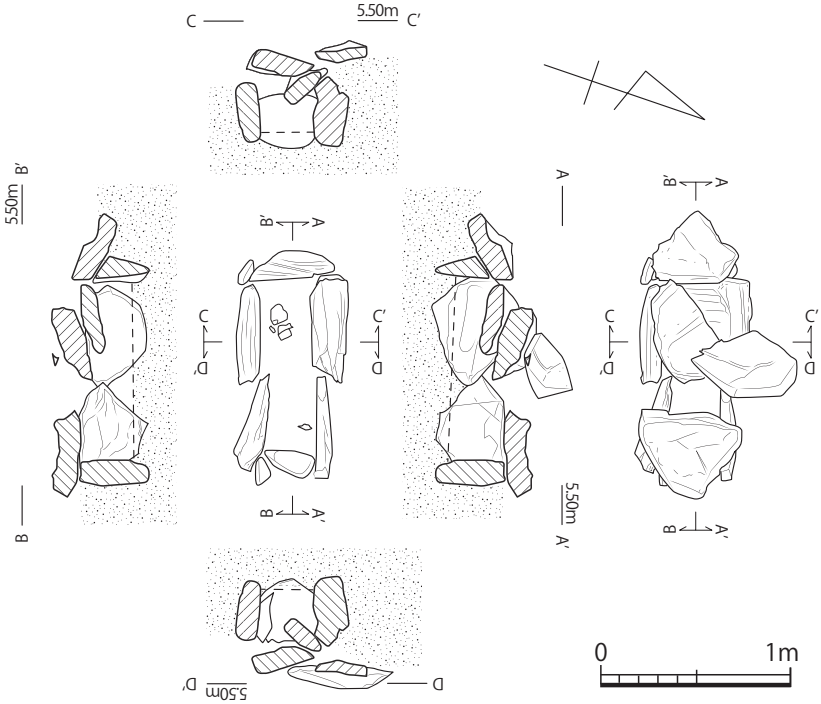
第 33 図　長井遺跡　16 号箱式石棺実測図（1/40）

いた。おそらく 4 枚あったものと思われる。南側の側板も頭部が大きく、足元へ順次小型化する。蓋石および側板継ぎ目に目貼り用の小型の石を置いている。

頭位に頭骨一部が残っており、床面に赤色顔料がうっすら検出された。副葬品はなかった。



第 34 図　長井遺跡　16 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



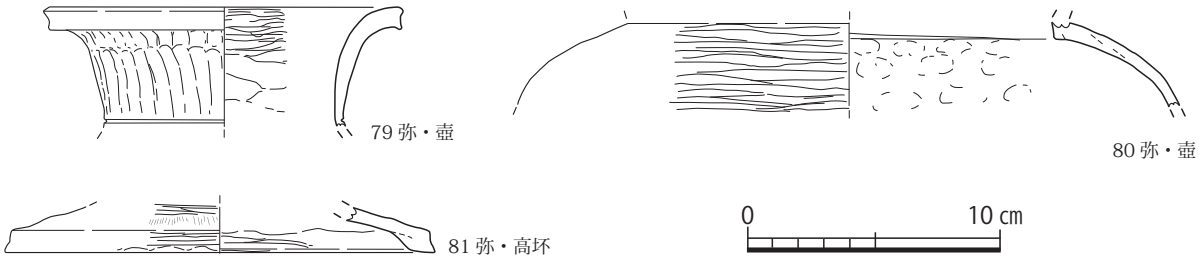
第 35 図　長井遺跡　17 号箱式石棺実測図（1/40）

出土遺物（第 34 図、図版 27）

壺の体部中位片が 2 点出土している。2 点とも弥生時代中期のもので、「M」字突帯が巡る。

15. 17 号石棺（第 35 図、図版 14・15）

17 号箱式石棺は、本調査区の中央やや南東部寄り、D-3グリッド上に位置し、16 号石棺の東南部である。長軸は 14・16・17 号ともに並列する。また 14 → 16 → 17 号の順に石棺が小型化している。こうしたことなどから 14・16・17 号石棺は順次南東部寄りに移動しているものの大・中・小と一群の墳墓群として捉える事ができるのではないだろうか。長軸は N-72°-E にとり、頭位は石棺幅がほぼ同じで明らかではないが、西方向の可能性が高い。石棺内法は長さ 90㎝、頭部幅および足元幅 27㎝、床面標高は 4.9 m である。蓋石は 4 枚と推測され、西から 3 枚目がずれていた。蓋石表面の標高は 5.6 m前後で、その上に巡っていたと考えられる 1 号方形周溝墓の周溝標高が 4.9 m前後であるので、方形周溝墓の周溝を掘削するあたりで動いた可能性が考えられる。また、2 枚目と 3 枚目の蓋石の上に長さ 55㎝、幅 35㎝、厚さ 20㎝の石材が載っていた。おそらく標石ではないかと考えられる。側板は南北何



第 36 図　長井遺跡　17 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

れも 2 石で、目貼り用の石材は見られなかった。石棺内西側から頭骨、大腿骨、脛骨の一部が集中して出土しており、再葬されたものと考えられる。

副葬品はなく、周辺から弥生時代中期の土器片が 2 点出土している。

出土遺物（第 36 図、図版 27）

2 点とも壺で、口縁部片と肩部片で、ともに丁寧なヘラミガキを施している。

16. 18 号石棺（第 37 図、図版 15）

18 号箱式石棺は、本調査区の中央やや南寄り、D -4 グリッド上に位置し、17 号石棺の約 50㎝南側に立地する。長軸は N-83°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.30 m、頭部幅 27㎝、足元幅 15㎝、床面標高は 4.90 mである。蓋石は 4 枚で、頭部が大きめの石材を用い、足元へ小型化する。側板は北側が 2 枚、南側が 3 枚で、頭部側の石材の方が大きい。目貼り用の石材はほとんど置いていない。

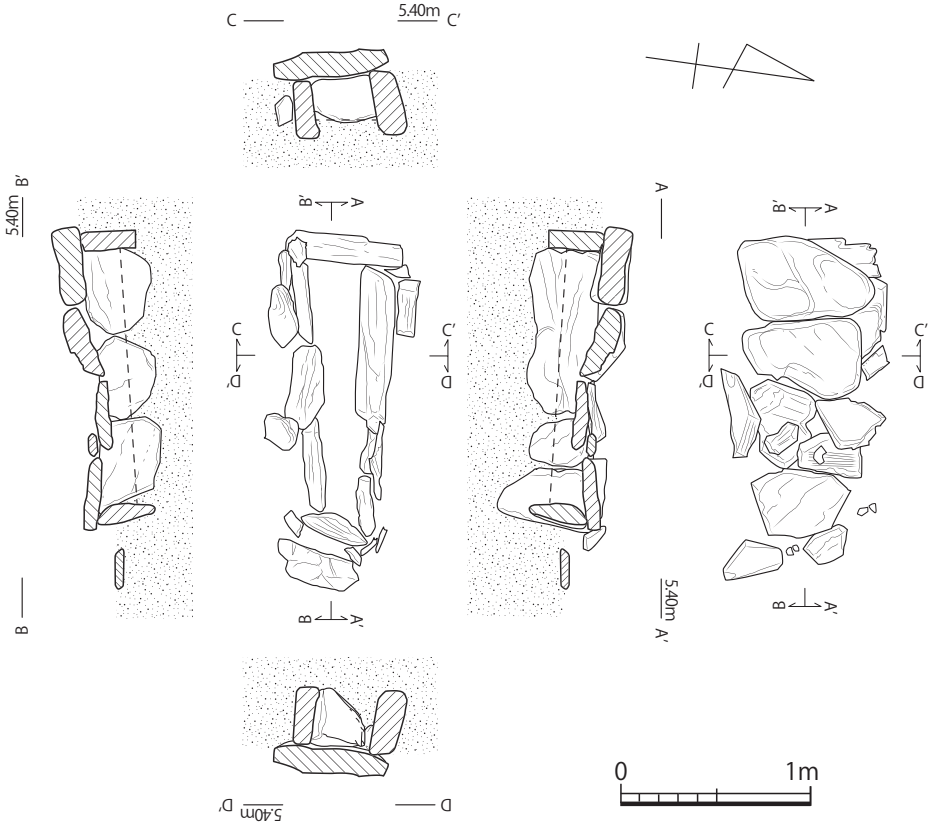
副葬品はなく、蓋石の上や周辺に弥生時代前期～中期の土器小片が見つかっている。

出土遺物（第 38 図、図版 27）

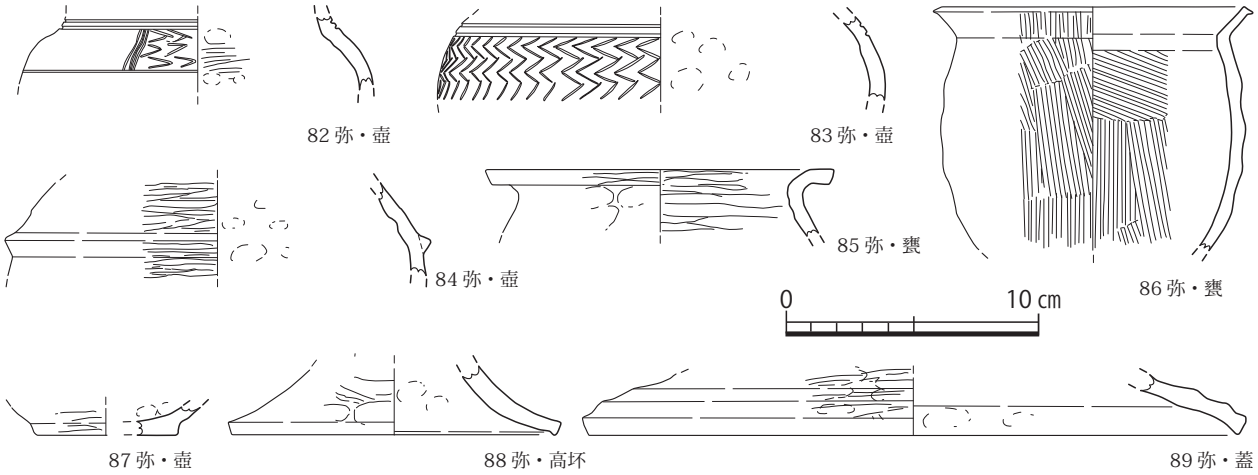
82 の壺肩部の羽状文はヘラ先による施文で、肩部 3 段に施文するが、上・中・下揃っておらず、割り付けをしていないようである。83 の羽状文は施文するが、規則正しく施文されており、丁寧に割り付け、施文をしている。

17. 19 号石棺（第 39 図、図版 16）

19 号箱式石棺は、本調査区東南隅、E-3 グリッド上に位置し、15 号石棺の南東部側に接している。15



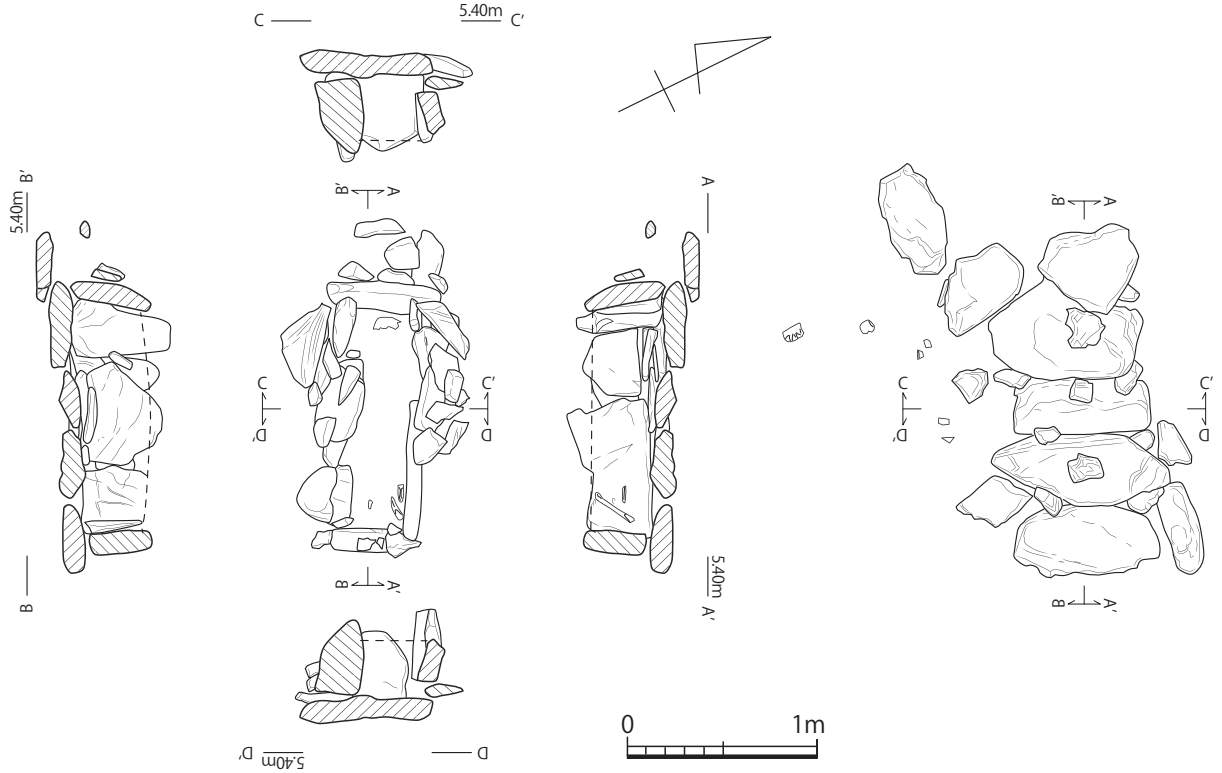
第 37 図　長井遺跡　18 号箱式石棺実測図（1/40）



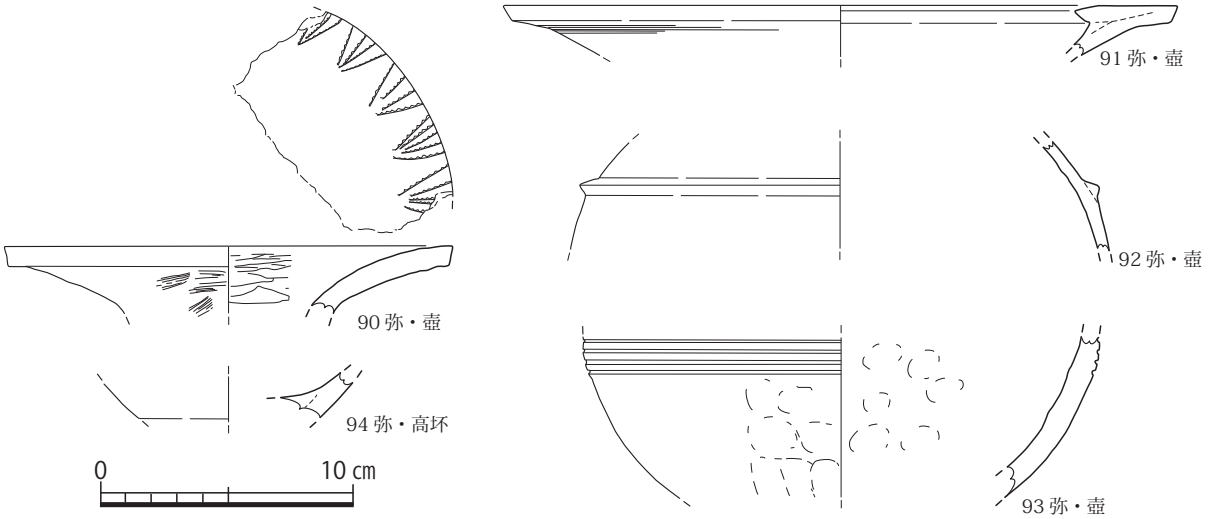
第 38 図　長井遺跡　18 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

号石棺に 19 号石棺の石材が一部被さっていることから、15 号石棺は 19 号石棺より古いことが明らかである。長軸は N-63°-W にとり、頭位は西である。ただ蓋石は頭部がやや大きめの石を用いているが、北側側板は足元の方が大きい。石棺内法は長さ 1.15m、頭部幅 30㎝、足元幅 27㎝、床面標高は 4.80m である。蓋石は 4 枚で、頭部蓋石の上に長さ約 55㎝、幅約 45㎝、厚さ約 8㎝の石材がもう一枚の蓋石に接するように置かれている。頭部を意識しているのか、標石なのか明らかではない。側板は北側 2 枚、南側 3 枚で、南北共に側板の上に板石を数段小口積みをしている。この石棺の特徴は、蓋石の上に長さ 15㎝角ぐらいの石を 7 ～ 8 個置いていることである。目貼り用に蓋石の継ぎ目に置かれていたものが動いたものか。

副葬品はないが、北西端に頭骨、南東隅部に成人大腿骨が斜めに立てかけたように出土した。本石棺墓は内法長さ 1.15 mしかなく、とても成人骨は伸展葬では入らない。19 号石棺の南東部に 20 号石棺が近接していることから 15 号石棺と 20 号石棺の間に無理やり入れ込もうとしたのではないだろうか。その



第 39 図　長井遺跡　19 号箱式石棺実測図（1/40）



第 40 図　長井遺跡　19 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

ため石棺の長さを確保できず膝を曲げて埋葬した結果、脛骨が北側側板に斜めに立てかけたように出土したのではないだろうか。

18.　20 号石棺（第 41 図、図版 17）

20 号箱式石棺は、本調査区の南東隅、F-3 グリッド上に位置し、27 号石棺の東側に従列している。先述したように 19 号石棺よりも古い。長軸は N-82°-W に振り、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.95m、頭部幅 45㎝、足元幅 23㎝、床面標高は 4.70m である。蓋石は 7 枚で、頭部がやや大きめの石材を用い、胸から足元まではほぼ同じ大きさの蓋石である。側板南北ともに 4 枚で、やや頭部の側板が大きめか。目貼り用の石はほとんど見られない。ただ中央部の頭から 3 石目の蓋石の両側に板石をつけている。3 石目は他の蓋石よりも短いため側板蓋石の間に隙間があったために左右に板石をつけたのであろうか。

副葬品はなく、西側に頭骨、中央やや足元側に大腿骨を検出している。周辺から弥生時代中期の高坏片が出土している。

出土遺物（第 42 図）

鋤先口縁の壺と高坏である。

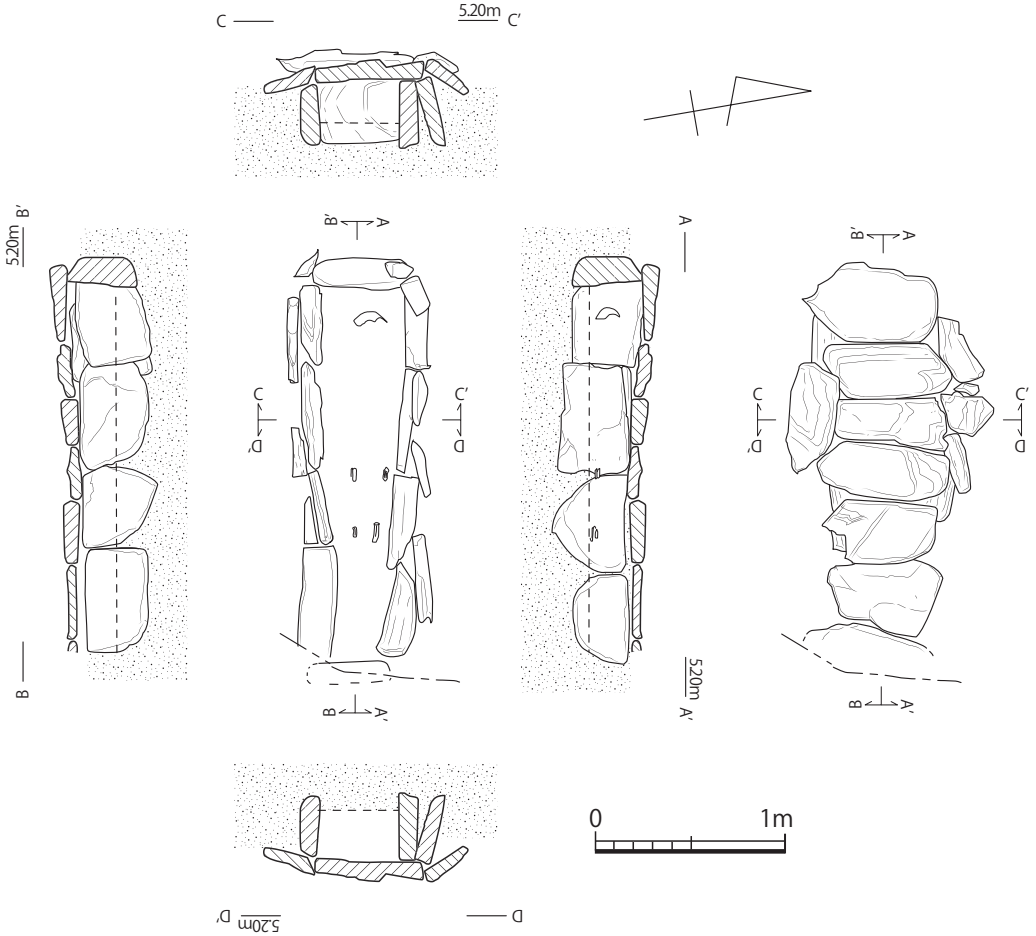
19.　21 号地点（第 43 図、図版 17）

21 号地点は、本調査区の中央南端、D-4 グリッド上に位置し、31 号石棺の北西側に立地する。厚さ 15㎝くらいの人頭大の石が、標高 5.80m で 8 個余点在している。12･13 号石棺の検出面の標高が 5.80m であるから、方形周溝の東南部隅周辺で箱式石棺の石材が取り去られたことが考えられる。

よってこの地点を 21 号箱式石棺想定地としておきたい。

出土遺物（第 44 図、図版 27）

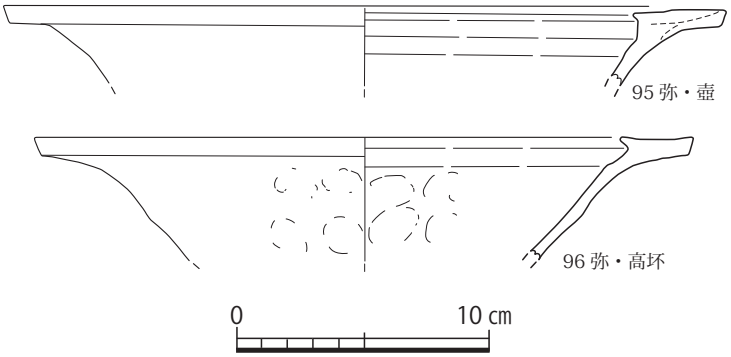
この周辺から弥生時代前期末～中期の壺や高坏が出土している。98 の壺の頸部片の外面に施文されている羽状文や重弧文の組み合わせは、珍しい施文である。上方にヘラ先による沈線を 2 条ひき、その間と下部に羽状文を施文、さらにその下に沈線を引いたのち今度は二枚貝による下向きの弧を描く重弧文を施文する。



第 41 図　長井遺跡　20 号箱式石棺実測図（1/40）

20.　22 号地点（第 45 図、図版 18）

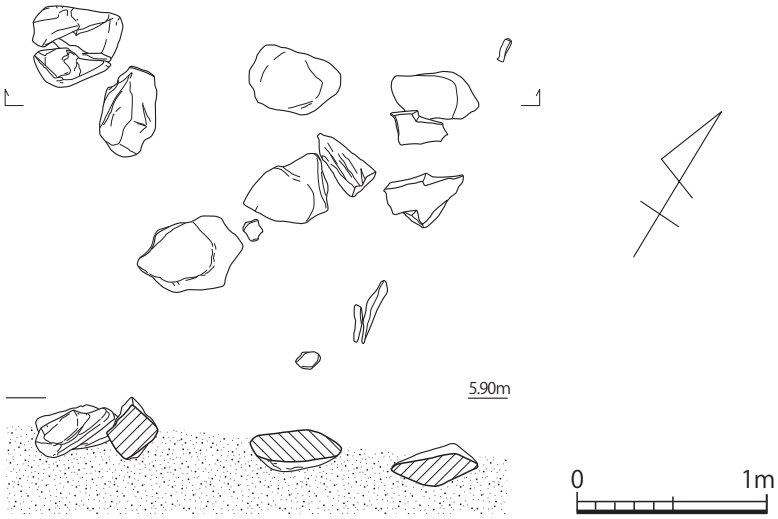
22 号地点は、本調査区の東南部、E-4 グリッド上に位置する。検出面の標高は 5.80m で 21 号地点とほぼ同じ標高である。人頭大からそれより小さいものまで石材が散乱している状況であった。一部並んでいるようにも見えたが、明らかにし得なかった。箱式石棺が壊され、ここに集積されたことも考えられるが、南側には 31 号石棺、西に 23 号石棺、北に 17 号石棺、北東側にも 20 号石棺があり、わざわざこの隙間に石材を運んできたことを想定するよりも、ここに構築されていた箱式石棺が壊されて積み上げられたと考えた方が蓋然性が高いと考えられ、22 号箱式石棺地点としておきたい。



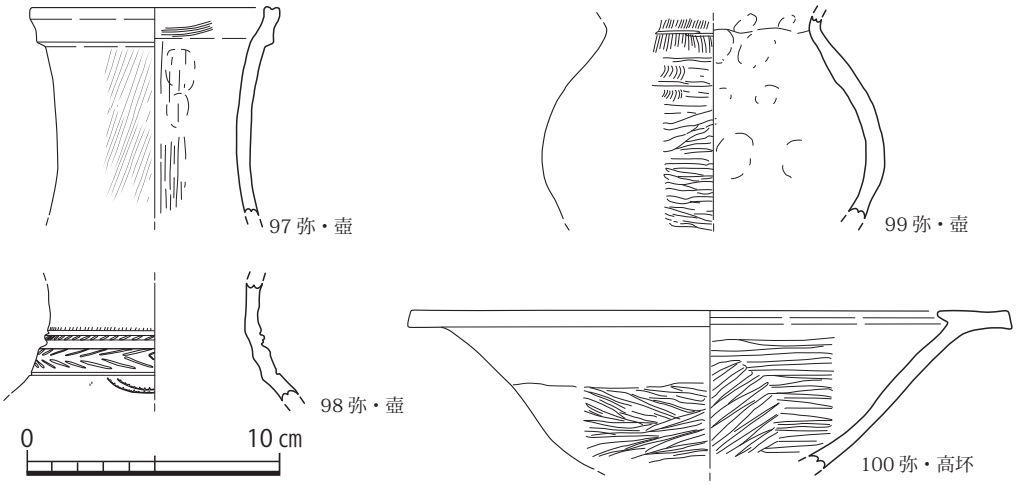
第 42 図　長井遺跡　20 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 46 図、図版 28）

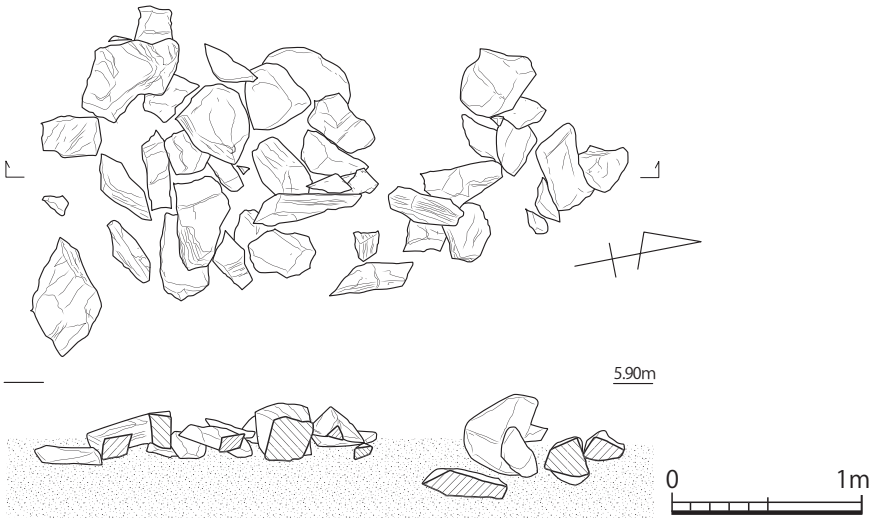
この地点周辺から弥生時代前期～中期の土器が出土している。



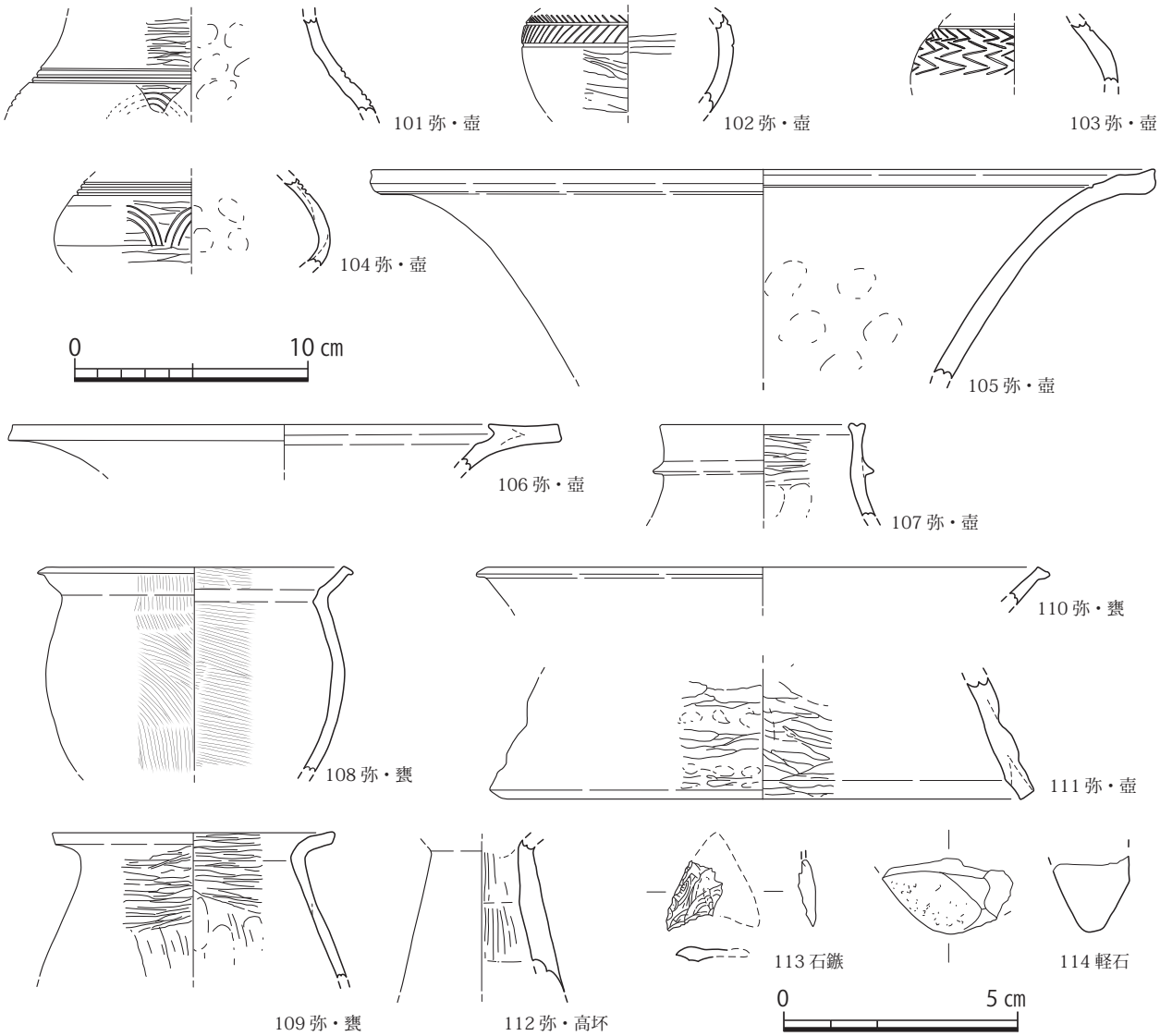
第 43 図　長井遺跡　21 号地点実測図（1/40）



第 44 図　長井遺跡　21 号地点周辺出土遺物実測図（1/3）



第 45 図　長井遺跡　22 号地点実測図（1/40）



第 46 図　長井遺跡　22 号地点周辺出土遺物実測図（1/3・2/3）

21. 23 号石棺（第 47 図、図版 18）

23 号箱式石棺は本調査区の中央南側、D-4 グリッド上に位置し、18 号石棺の約 60㎝南側に立地する。長軸は N-87°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 78㎝、頭部幅 23㎝、足元幅 10㎝、高さ 17㎝、床面標高 5.10 mである。蓋石は 3 枚で、頭部側から蓋石を被せている。足元までほぼ同じ大きさの板石を用いている。側板は南北ともに 2 枚で、頭部側は大型板石を立てている。

構築は、まず南頭部側の側板を設置し、次に頭部小口石を内側に立て、頭部の幅を決めて北側側板を立てる。そして長さを調節するために北側側板の 2 石目を設置し、2 石目の途中に足元の小口石を立て、南側の足元の隙間を埋めるために南側側板の 2 石目を足元小口石に合わせるために斜めに設置している。こうした石棺材の構築順序から勘案すると、長軸は東西を基本に、幅・長さもおおよそ決めてから板石を設置しているようである。ただ最後の調節は、隙間に合わせて石材を置いているようである。

副葬品はなく、周辺から弥生時代中期～後期にかけての土器小片が検出されている。

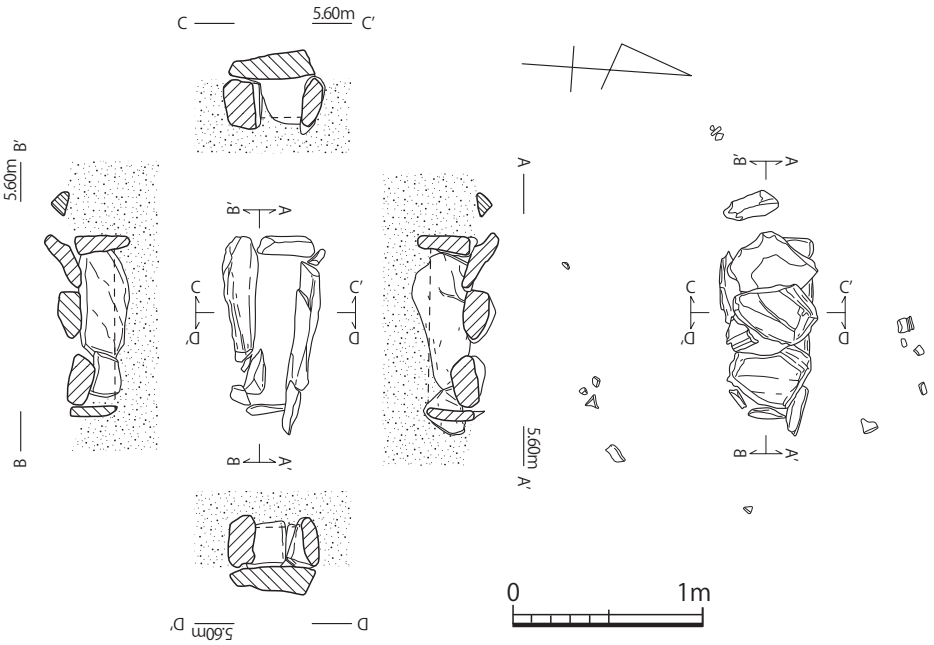
出土遺物（第 48 図、図版 28）

23 号石棺周辺の弥生土器は、前期に入るものは少なく、中期を中心とする時期の物が多くなる。117 の壺口縁部は頸部外面に断面三角形の突帯を巡らし、後期後半～終末期にかけての時期に否定できるであろう。

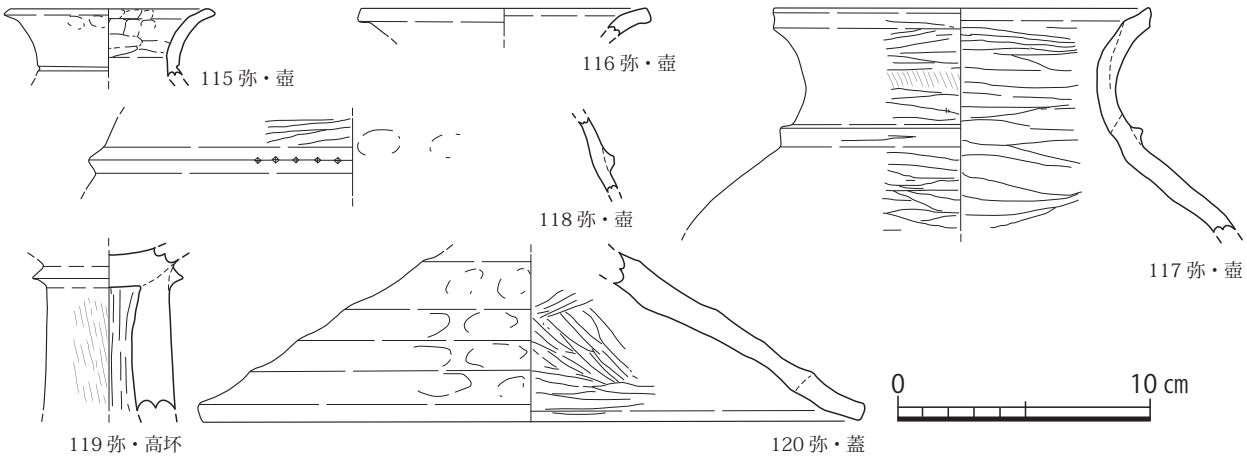
22. 24 号石棺（第 49 図、図版 19）

24 号箱式石棺は本調査区の中央やや西寄り C-2 グリッド上に位置し、6 ～ 10 号石棺に並列する。長軸は N-73°-E にとり、頭位は東である。石棺内法は長さ 1.45m、頭部幅 43㎝、足元幅 30㎝、高さ 30 ～ 40㎝である。床面標高は 4.90m である。蓋石はほとんど欠失していたが、足元の 1 石だけ被っていた状態で検出された。また頭部のみうっすらと赤色顔料を塗布している。頭部小口石は手前側に厚さ約 10㎝の板石を立て、その後ろに幅 57㎝、厚さ 23㎝の板石を手前小口石より 15㎝ほど高い位置に据えている。倒れないようにするために置いたものか。

側板は南北ともに 5 枚立てている。頭部側 4 石は側板の小口面にくっつけるように立てているが、足元の 5 石目は南北ともに内側の面に接して継いでいる。また頭部側 4 石の内法幅は 43 ～ 50㎝でやや幅を広くしているが、足元の 5 石目だけは幅 30㎝で狭くしている。このことは足元の 5 石目だけが内側の面に接して継いでいるから狭くなっている。そして南側側板の 4・5 石目の上に幅 45㎝、厚さ 13㎝の石材を小口積みしているが、足元 5 石目の蓋石はそれより低く、床面から 20㎝の所に蓋石が被さっている。他の頭部側の蓋石はすでに欠失していたが、頭部後ろ側の小口石の上の小口面の高さまでとすると、床面から 45㎝の高さになるため、足元の 20㎝という高さは頭部側より 20㎝前後低くなっている。側板が内側に立てていること、床面から蓋石の高さまで頭部側より一段低くなっていることから、この足元の一段低く、狭まっ



第 47 図　長井遺跡　23 号箱式石棺実測図（1/40）



第 48 図　長井遺跡　23 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

ている空間は、この石棺の埋葬だけでなく、仕切り石が見られないものの別の用途に使用するための空間ではないだろうか。実際にこの空間から床面から約 10㎝浮いている状態で人骨が検出されている。この人骨が床面から浮いていることは、当初からこの空間が設置されていたわけではなく、初葬から後にこの空間を付設したために側板を内側に差し込み、床面も集骨した人骨が置けるだけの高さにしたのではないだろうか。この足元部のみ人骨が検出出来たことが、これを裏付けるのではないだろうか。

副葬品はなく、また周辺からの弥生土器の検出もなく、ただ足元の人骨のみ検出された。

23. 26 号石棺（第 50 図）

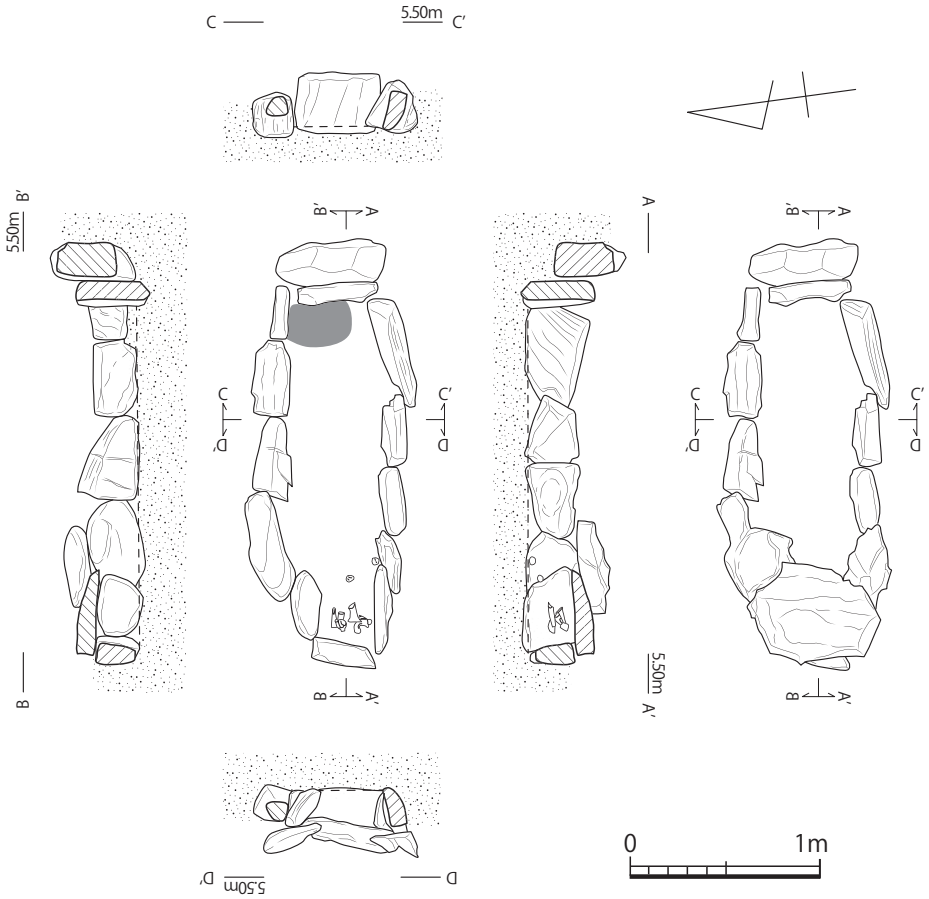
26 号箱式石棺は本調査区のほぼ中央、D-2 グリッド上に位置し、14 号石棺北東隅角部に接する。長軸は N-60°-E にとり、頭位は南か西のどちらかである。石棺内法は幅 40㎝、高さ約 30㎝である。床面標高は 5.10m である。ほとんどの石棺材は欠失していたが、小口石と側板 1 石だけ残っていた状態で検出された。

この 26 号石棺のあたりは、1 号方形周溝墓の南北方向の周溝部に位置するために周溝掘削時に壊された事が考えられる。

副葬品はなく、周辺部から弥生時代中期、須玖 I 式期の甕の口縁部片 1 点が検出されている。

出土遺物（第 51 図、図版 28）

122 の鉢の口縁部は波状を呈し、弥生時代前期末～中期初頭頃のものか。



第 49 図　長井遺跡　24 号箱式石棺実測図（1/40）

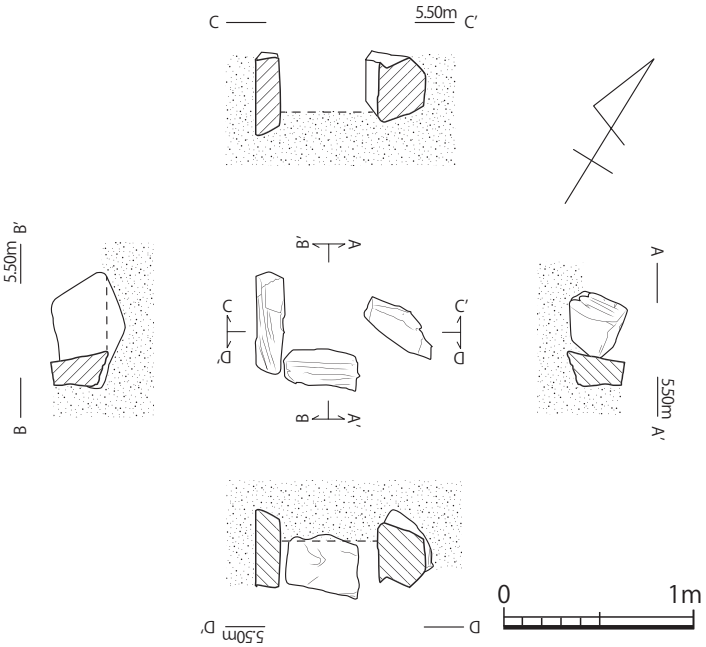
24. 27 号石棺（第 52 図）

27 号箱式石棺は本調査区の東南部、E-3 グリッド上に位置し、19 号石棺の南側約 30㎝に並列する。19 号石棺とは足元側小口石の位置をほぼ揃えており、極めて近接した時期に構築した可能性が高い。また 20 号石棺より後出する。長軸は N-67°-W にとり、石棺内法は長さ 78㎝、頭部幅 30㎝、足元幅 25㎝、高さ 23㎝である。床面標高は 4.80 m である。蓋石は 4 枚で、頭部が大きく、足元へ小型化する。側板は南北 2 枚の板石を立てる。頭部側が大きく、足元側は小さい。目貼りの石もほとんどない。

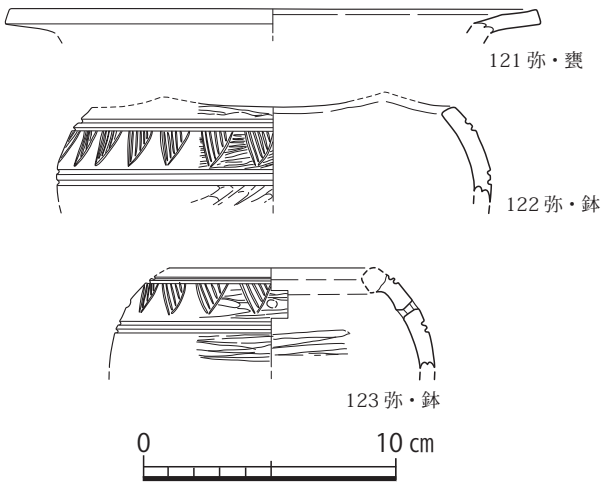
副葬品はなく、周辺から弥生時代の前期、中期の壺片などが出土している。

出土遺物（第 53 図、図版 28）

124 の小型壺の体部辺で、外面に二枚貝で三角文を施文している。小片のため詳細は明らかではないが、下方を頂点にする三角文で、残存 2 つしか見られないが、三角文の幅や間隔がまちまちであることから割り付けをせずに施文していると思われる。



第 50 図　長井遺跡　26 号箱式石棺実測図（1/40）



第 51 図　長井遺跡　26 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

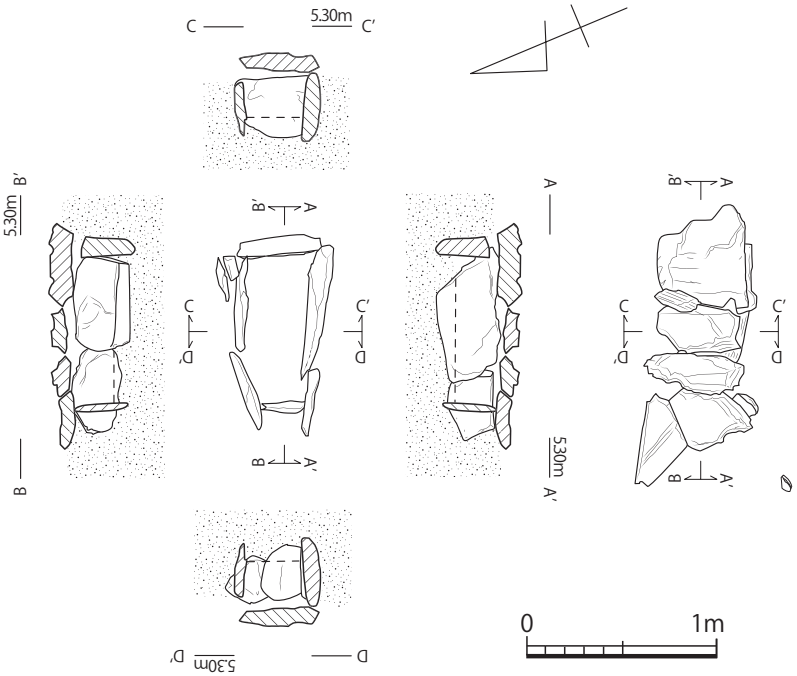
25. 28 号石棺（第 54 図、図版 20・21）

28 号箱式石棺は本調査区の中央やや北東寄り、D-2 グリッド上に位置し、4 号石棺の東 70㎝に従列する。長軸は N-74°-E にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.15m、頭部幅 24㎝、足元幅 18㎝、高さ 25㎝で、床面標高は 4.80 m である。蓋石は現存 4 枚で、足元の 1 枚が欠失していた。長さが 1.15m と成人を埋葬するのには短い。28 号石棺のすぐ北側に 30 号石棺がある。どちらが先に構築されたか明らかではないが、28 号石棺が後出のため東端に 30 号石棺がすでに構築されていて延ばすことが出来なかったと考えるならば、30 号石棺が先行し、28 号石棺が後出ということも考えられる。

28 号石棺と 30 号石棺の床面標高は 4.85m で、ほぼ同じ標高であるため時期差はほとんどないと考えられるが、28 号石棺が先行し、30 号石棺が後出と言うふうに考えるならば、28 号石棺の東北隅各部と 30 号石棺南東端が接するように構築されていることから、30 号石棺を構築する際に誤って 28 号石棺の東端の蓋石に接触してずれたのか、あるいは抜き取ったとも考えられる。

側板は北側が 4 枚、南側が 3 枚である。北側は足元側の 3 石目が最も大きく、4 石目は幅約 15㎝で長さを調節するために幅の狭い石材を選んだのではないだろうか。南側は頭部の側板が最も大きく、足元へ順次小型化する。足元側の小口石は、南側へ斜めに設置されているが、これはまず北側の側板を設置し、その後に南側を頭部から並べたが、最後足元のところで約 5㎝短かったけれどこれに変えれる板石もなかったために南側を 5㎝短くして、小口石を斜めに置いたのではないだろうか。

頭部に頭骨片が検出されているが、副葬品は見られなかった。周辺から弥生時代中期の壺の口縁部片などが検出されている。



第 52 図　長井遺跡　27 号箱式石棺実測図（1/40）

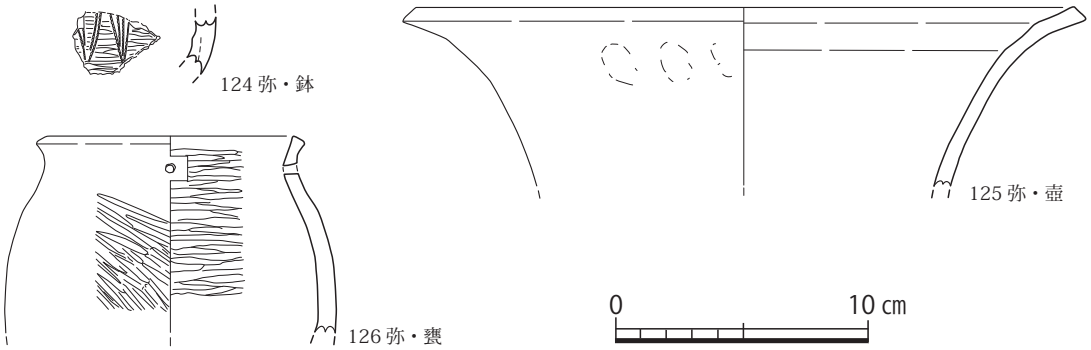
出土遺物（第 55 図、図版 28）

弥生時代中期の小型の壺の口縁部片などである。

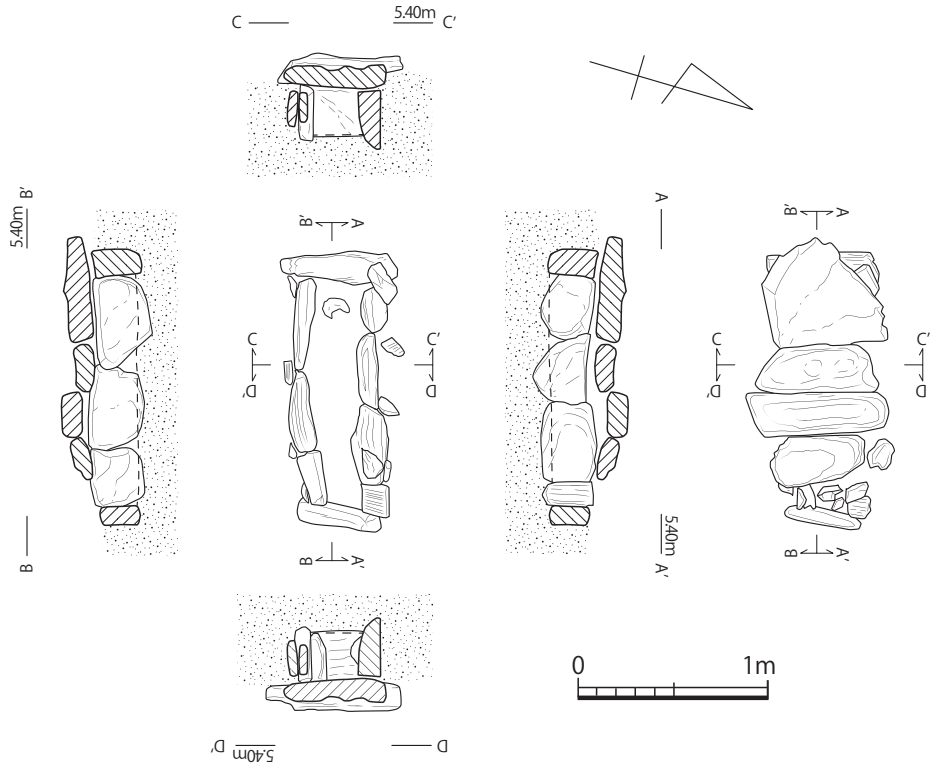
26. 29 号石棺（第 56 図、図版 21）

29 号箱式石棺は本調査区の東南端、E-3 グリッド上に位置し、15 号石棺の 30㎝北東側に立地する。石棺の東端は調査区域外のため完掘はしていない。長軸は N-67°-W にとり、頭位は東南、石棺内法は長さ 1.85m+ α、頭部幅 33㎝、足元幅 20㎝、高さ 25㎝である。床面標高 4.70 m である。蓋石は 6 枚で、頭部側が大きく、足元へ順次小型化する。側板は北側 4 枚、南側 5 枚と推定される。蓋石および側板の継ぎ目に小さな石を目貼りとして置いている。

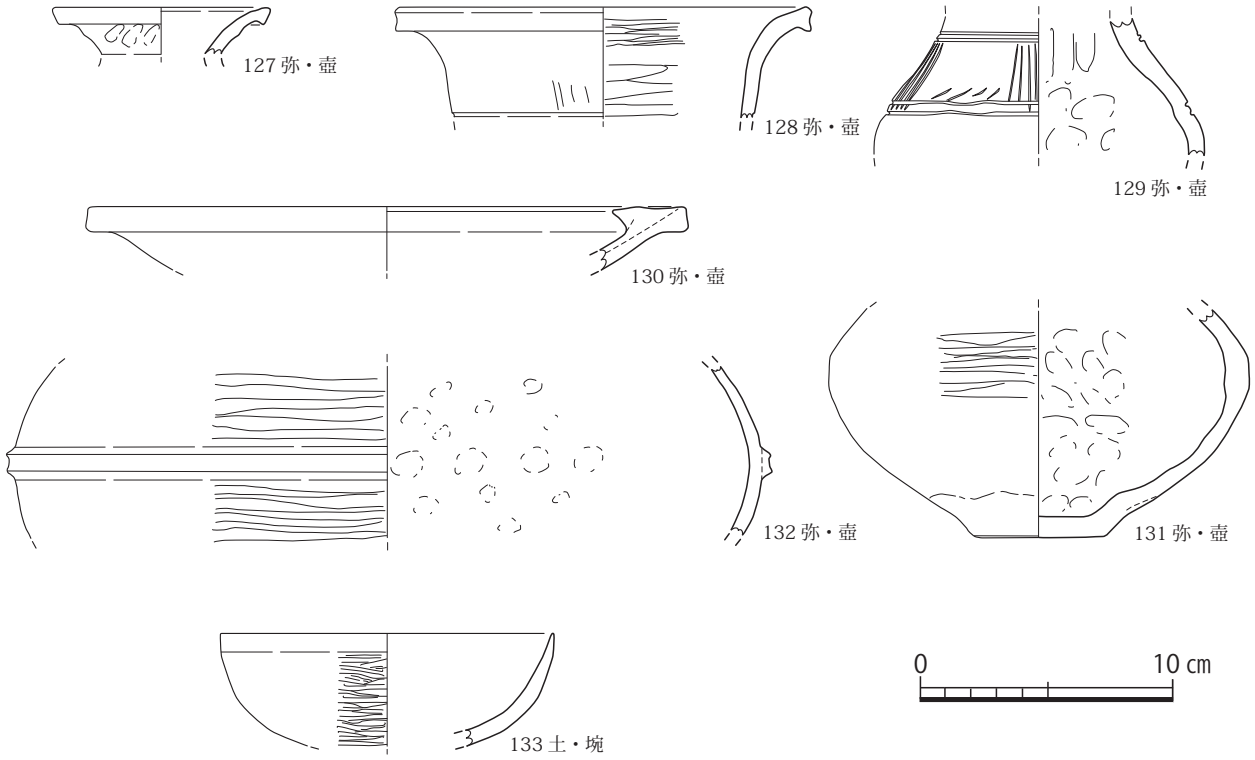
北側側板の南東端、頭部側の板石の天端が中位から足元の側板天端よりも約 12㎝ほど上方に斜めになっ



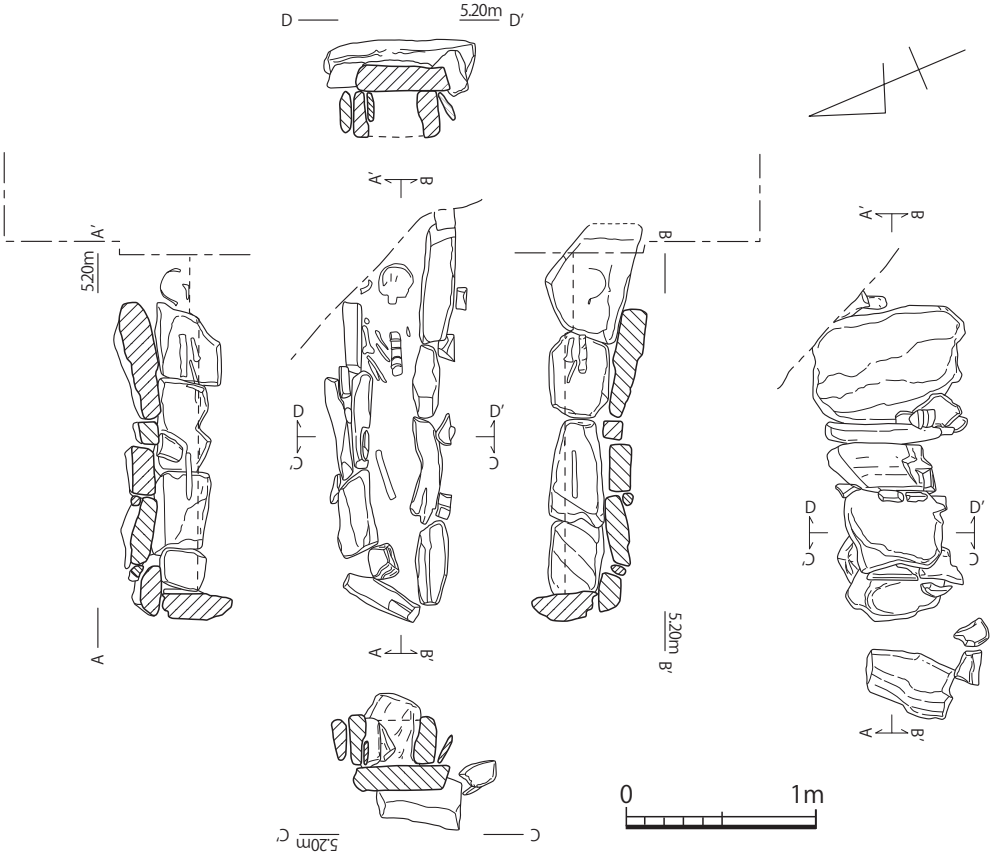
第 53 図　長井遺跡　27 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



第 54 図　長井遺跡　28 号箱式石棺実測図（1/40）



第 55 図　長井遺跡　28 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



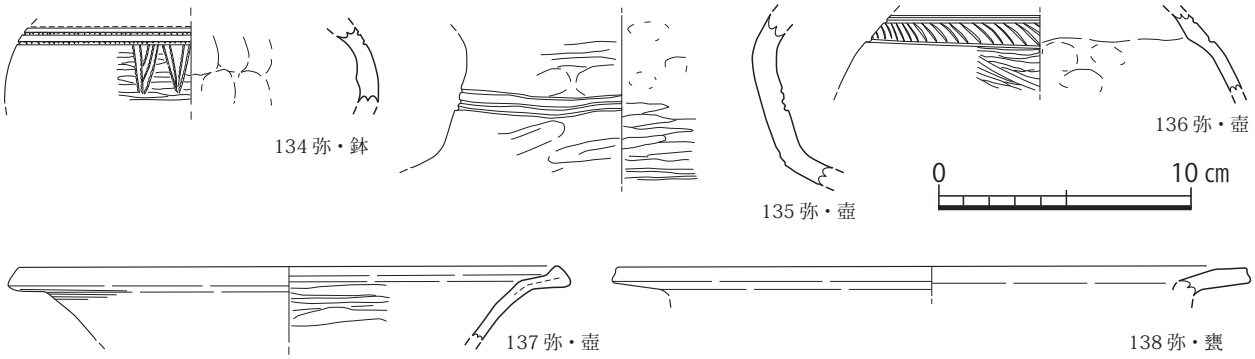
第 56 図　長井遺跡　29 号箱式石棺実測図（1/40）

ている。調査区域外のため詳細は明らかではないが、人骨出土状況も頭骨の高さが背骨より一段高く床面より 15㎝浮いた状態で検出されている。これは枕を使用したことによるものかもしれないが、それにしても頭部側が足元よりも一段高くなっていることは明らかで、意識的に頭部を一段高くしていることも考えられる。また、足元側の南側の側板が、内側に少し押し出されている。そのため足元側の小口石も斜めになっている。これは後世に足元側板が内側に押し出されたことにより、小口石の南端が無い方にずれたことが考えられる。

副葬品はないが、周辺から弥生時代前期～中期の土器片が検出されている。

出土遺物（第 57 図、図版 28）

134 の前期小型壺の施文は、肩部に二枚貝による沈線 3 条以上の下方に二枚貝による逆三角形を施文する。ただ三角形内の施文の本数が異なる。2 m南の 27 号石棺周辺からも同様の施文壺片が見つかっており、同一個体の可能性もある。135 の大型壺の頸部の外面のヘラ先による 3 条の沈線は、蛇行しており、丁寧な割り付けをしていないようである。136 の壺肩部の上方 2 条以上、下方 1 条のヘラ先による沈線の間にヘラ先による斜線文を施文する。これと類似するものは、33 号石棺周辺から検出された壺の肩部の横方向の有軸羽状文を簡略化したものとも考えられ、当初直線のものが上方片側だけに省略され、そして直線から緩く弧状を描く斜線文に変化したのではないだろうか。138 は弥生時代中期前半の逆「L」字形口縁部片である。

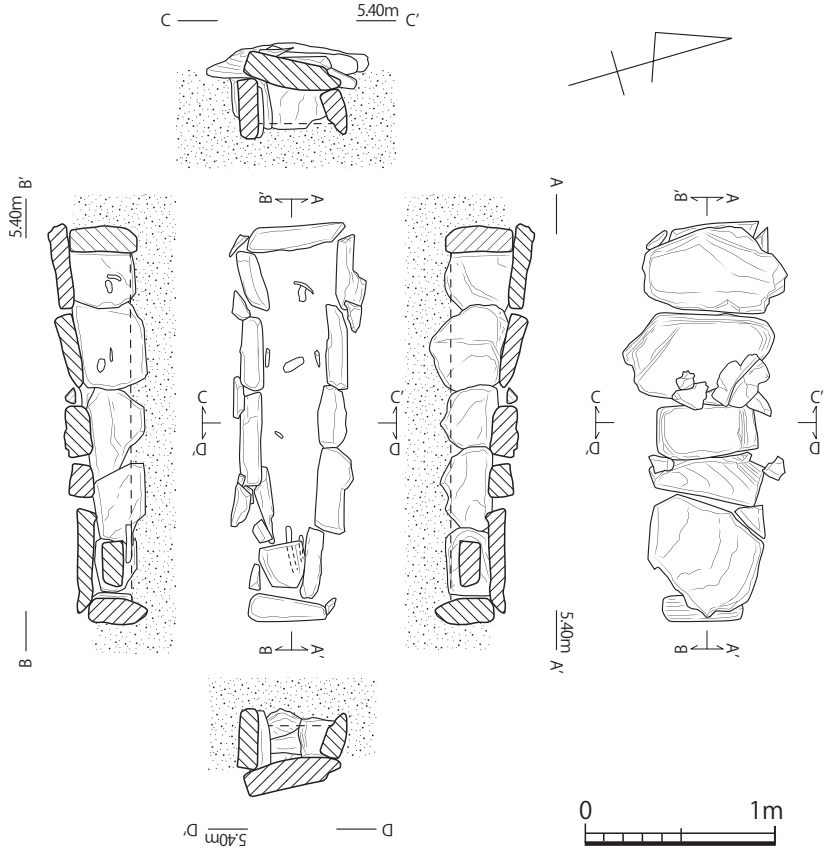


第 57 図　長井遺跡　29 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

27. 30 号石棺（第 58 図、図版 20・21）

30 号箱式石棺は本調査区の中央やや北東側、D -1 グリッド上に位置し、3 号石棺の 70㎝東に従列する。長軸は N-75°-W にとり、頭位は西、石棺内法は長さ 1.80 m、頭部幅 40㎝、足元幅 20㎝、高さ 25㎝である。床面標高は 4.85 mである。蓋石は 5 枚で、頭部側と足元側がやや大きめの板石を用い、真ん中はやや小型の板石を用いている。側板は南北ともに 5 枚ずつで、頭部側がやや大きめの板石を立て、足元側へ順次小型化している。小口石は頭部、足元ともに各 1 石の板石を立てている。目貼り用の石は一部のみ見られるが、前面ではない。

足元に床面から約 5㎝浮いたところに長さ、幅ともに 25㎝、厚さ 12㎝の板石を置いている。



第 58 図　長井遺跡　30 号箱式石棺実測図（1/40）

この板石の上には検出時に蓋石が被っていたため、埋葬当初から置かれていたものと思われる。この板石の下から人骨の脚部の一部が検出されており、この板石は遺体の上に埋葬当初から置かれていたことになる。そうであれば、遺体脚部の上に板石を置くと言う行為が何らかの儀礼的な意図があったものと思われる。厚さ 12㎝の板石であれば、かなりの重量になり、この儀礼行為は遺体がもし生き返り、歩き回って生きている人間に悪さをしないようにするために置かれたものであろうか。類似儀礼行為に足や肩の関節部に瓢箪を置いている例が見られる。瓢箪は魔物を封じ込める力があると言われている。同様に石も魔物を抑える力があると言われており、この 30 号石棺例も同様の儀礼行為である可能性は高いのではあるまいか。

頭部にも頭骨の一部が検出されている。副葬品はなく、周辺から弥生時代中期の土器片が出土している。

出土遺物（第 59 図、図版 28）

139 は中期の体部中位に「M」字突帯を 1 条廻らすもので、140 の口縁部片は、口唇部にナデによる凹みが見られ、前期末～中期初頭頃に比定できる。142 は開きが大きく、後～終末期の脚部か。

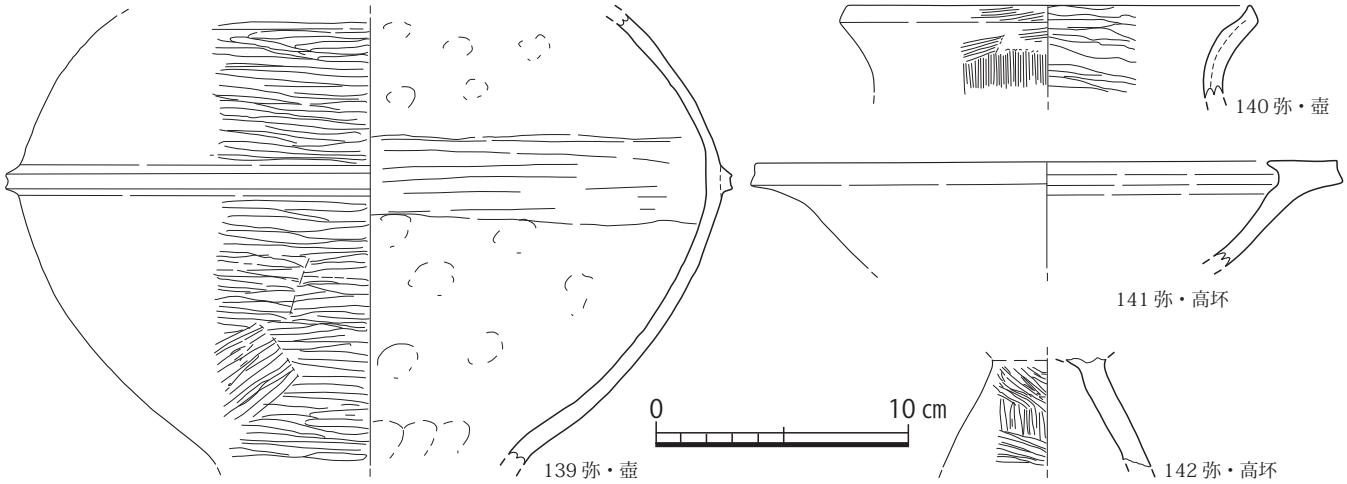
28. 31 号石棺（第 60 図、図版 22）

31 号箱式石棺は本調査区の中央南端壁際、E-5 グリッド上に位置する。頭位は西方向で、長軸は N-66°-E にとり、石棺内法は長さ 2.05 m、頭部幅 37㎝、足元幅 20㎝、高さ 30㎝である。床面標高は 4.75 mである。側板は南北ともに 5 枚で、頭部側が大きく、足元へ順次小型化する。側板の上面は頭部と足元が高く、注意が低くなるように立てている。構築当初から計画的に高くしていることが分かる。検出時には蓋石は頭部と中位から足元で胸部の蓋石は欠失していた。蓋石は頭部が最も大きく、足元へ順次小型化する。蓋石や側板の目貼りはところどころ石を置いているが、全面置いているわけではない。また側板の足元から 2 石目の北側には板石を平置きしている。

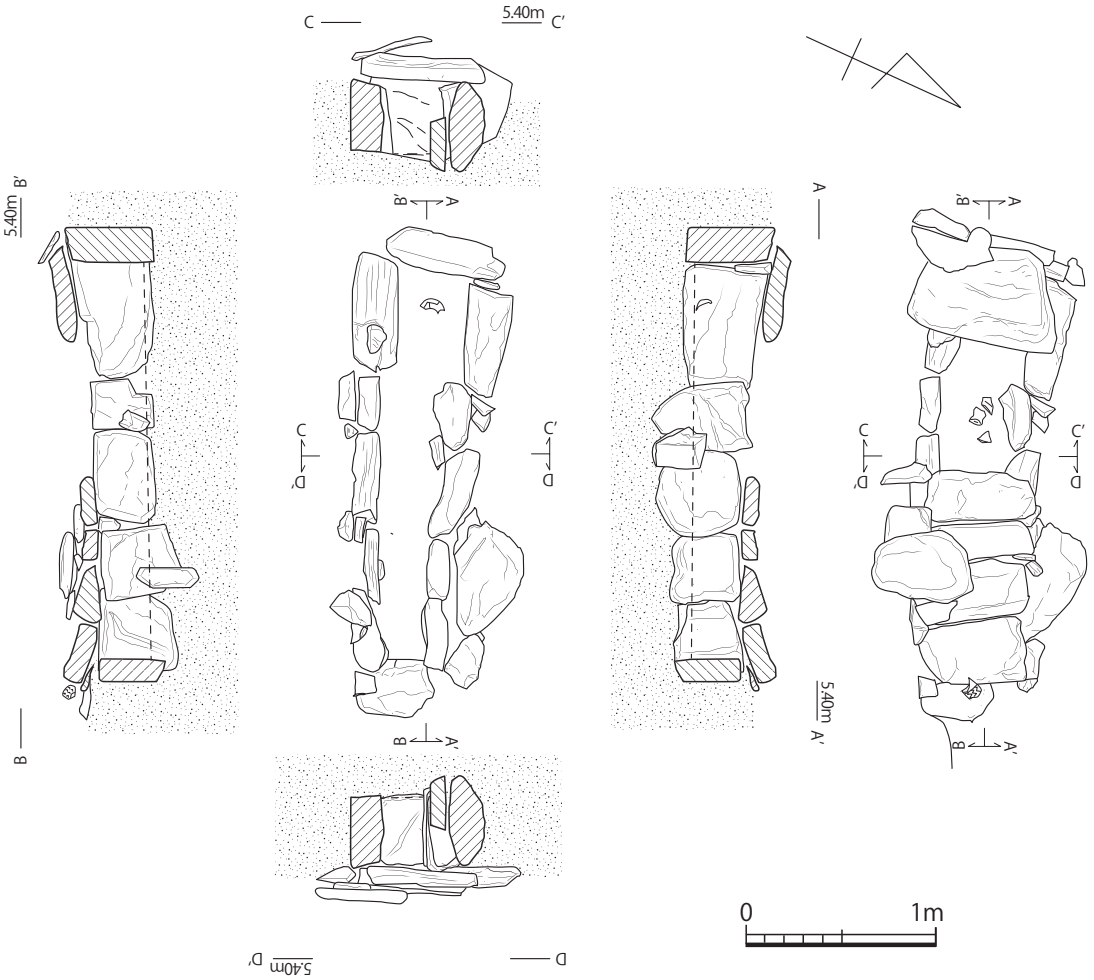
頭部から後頭部の頭骨片が検出されている。副葬品はなく、周辺から弥生時代前期～後期の土器が検出されている。

出土遺物（第 61 図、図版 28）

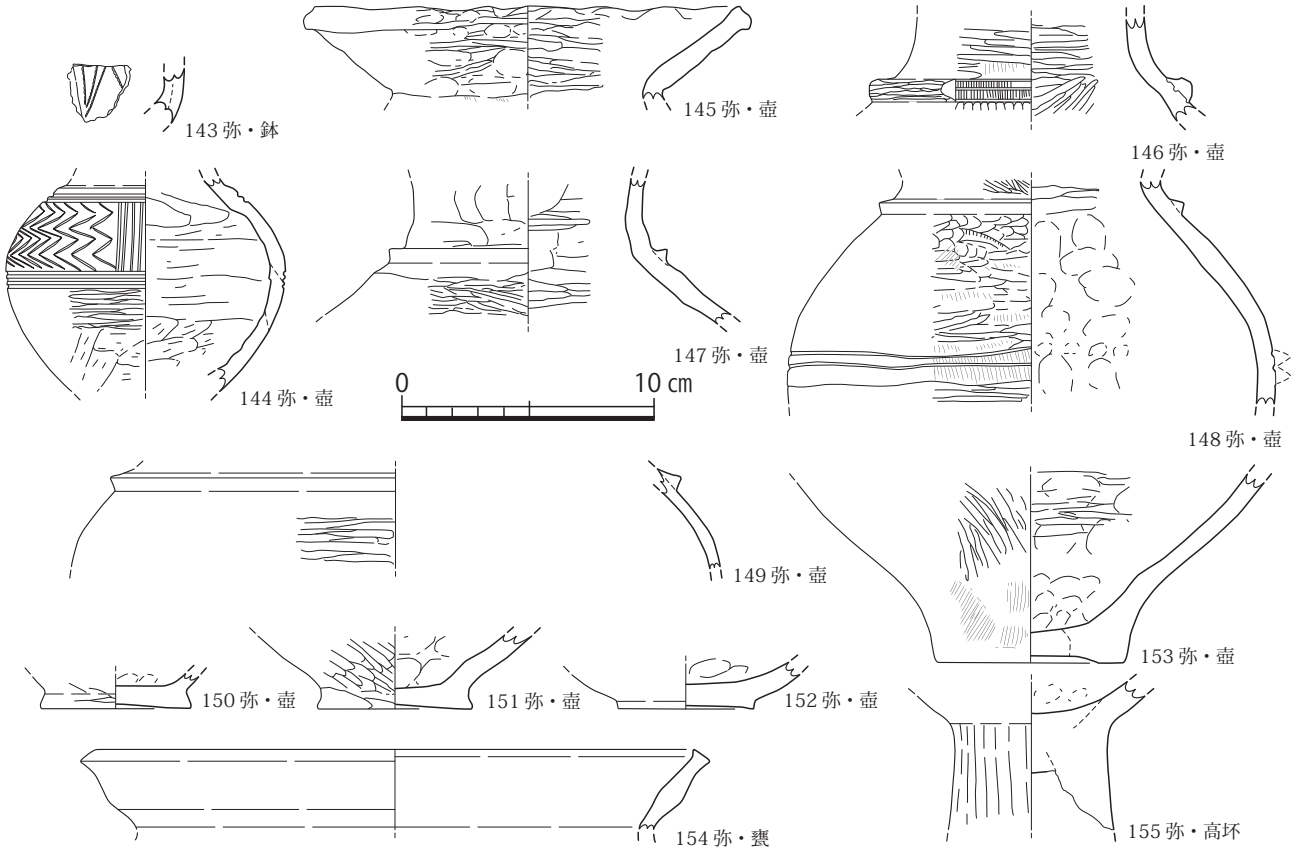
143 は 27 号･29 号から出土している小型壺に二枚貝で逆三角形の施文をするものである。145 は「く」



第 59 図　長井遺跡　30 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



第 60 図　長井遺跡　31 号箱式石棺実測図（1/40）



第 61 図　長井遺跡　31 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）

字形口縁部か。器肉厚く、雑な作りである。146・148 は壺の頸部に突帯を廻らすもので、貼り付け前にタテハケのち沈線を入れ窪みを付けてから突帯を張り付けている。

29. 32 号石棺（第 62 図、図版 22）

32 号箱式石棺は本調査区の中央西側、E -2 グリッド上に位置する。1 号方形周溝墓の真下に立地する。長軸は N-80°-W にとり、頭位は西である。石棺内法は長さ 1.25 m、頭部幅約 35㎝か、足元幅 23㎝、推定高さ 30㎝である。床面標高は 5.10 mである。蓋石は検出時にはすでに全く見られず、側板も北側頭部横の板石はすでに欠失していた。側板は北側が足元の 2 枚のみ残し、南側は 4 枚である。南側の側板を見ると頭部の方が大きく、足元へ小型化している。南北側板の外側には控え積みの板石をそれぞれ置き、側板が外側へ倒れないようにしている。頭部小口石は 2 ～ 3 石で、中央小口石の下部に石材が見られず、手前にもう 1 石あったものが欠失してしまった可能性がある。足元小口石は 1 石で、上面に小口積みをした板石が数点見られる。

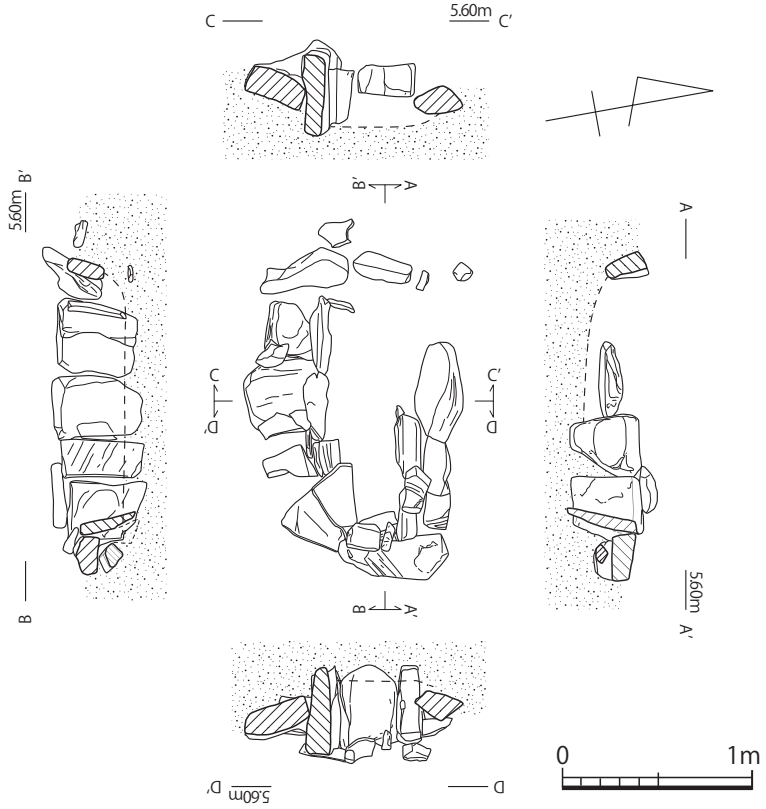
副葬品もなく、周辺から弥生時代中期の土器片が出土している。

出土遺物（第 63 図、図版 28）

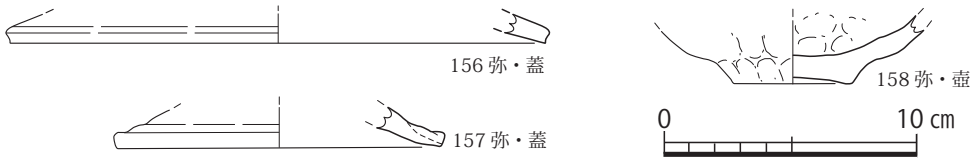
156 は内外面赤色顔料を塗布している。

30. 34 号石棺（第 64 図、図版 23）

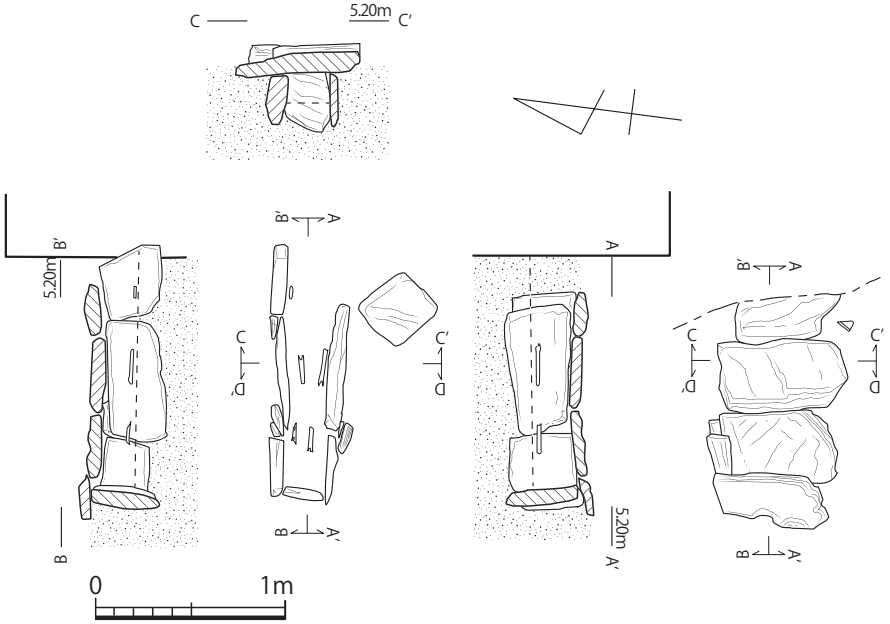
34 号箱式石棺は本調査区の北西端、E-1 グリッド上に位置する。34 号石棺の真上に 33 号石蓋土坑墓と思われる板石が 3 枚南北に並んでいる。（33 号石蓋土坑墓については第 3 節で詳述する。）長軸は N-84°-E にとり、頭位は東である。石棺内法は長さ 1.30 m + α、頭部幅は不明、足元幅 22㎝、高さ 20㎝である。床面標高は 4.80m である。蓋石は 4 枚以上、北側板は 3 枚以上、南側板は 2 枚以上である。蓋石、



第 62 図　長井遺跡　32 号箱式石棺実測図（1/40）



第 63 図　長井遺跡　32 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3）



第 64 図　長井遺跡　34 号箱式石棺実測図（1/40）

側板共に頭部の板石を大きくしようとしていない。足元小口石は両側板に挟まれている。床面から人骨が検出されている。

副葬品はなく、周辺から弥生時代前～中期の土器片が検出されている。

出土遺物（第 72 図、図版 29）

167 は壺で丁寧な有軸羽状文を施文する。168 は 167 に比べ雑な施文を施す。肩部の羽状文は幅、角度、本数がまちまちで割り付けをしていない。169 も雑な施文で、沈線は蛇行、羽状文は角度、幅などが異なる。

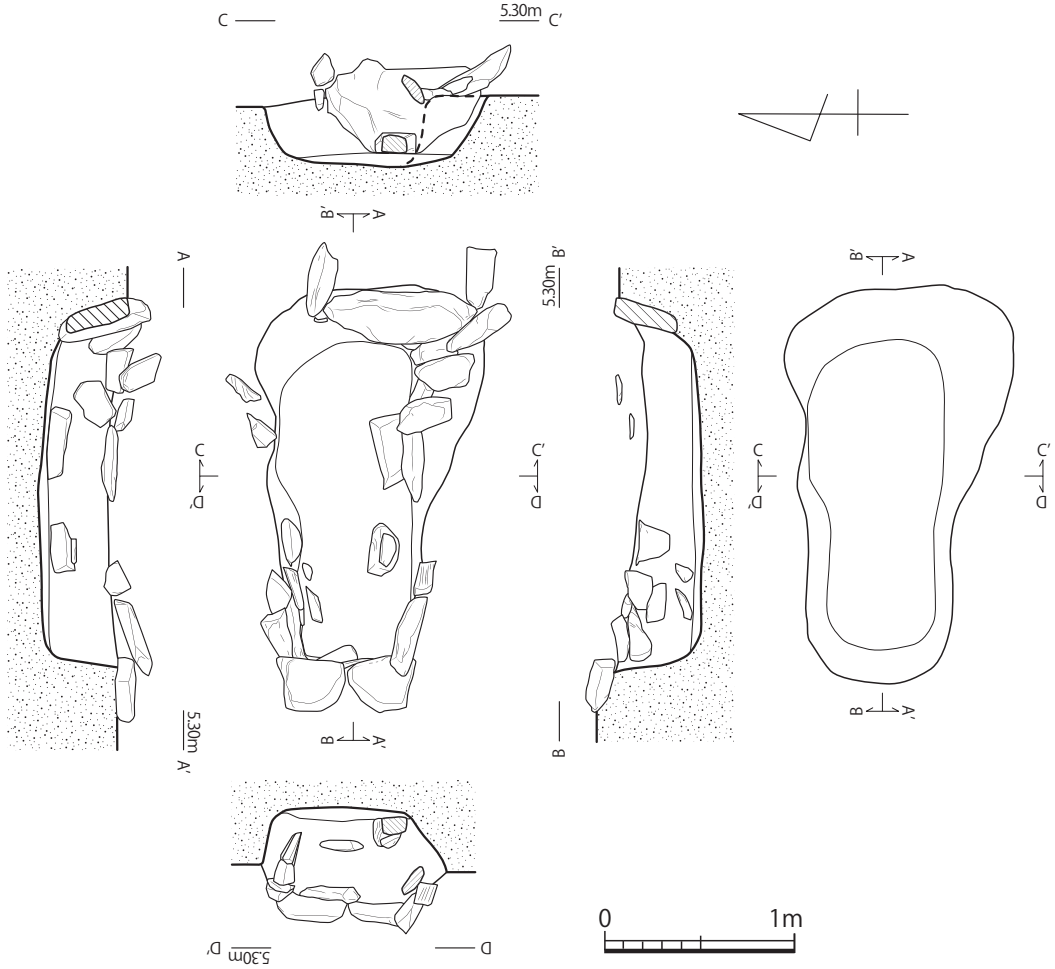
31. 35 号石棺（第 65 図、図版 23・24）

35 号箱式石棺は本調査区の南東側、E-4 グリッド上に位置し 22 号地点の下層に立地する。18 号石棺の東に近接して従列する。他の箱式石棺とは異なり、全面板石で構築されているわけではなく、側板は板石を立てず、小型の石材で立てたり、小口積みをしたりしている。また足元の小口石は、板石を立てずに墓坑を掘ってその上に小口積みで 2 石をならべている。大半の石材は抜かれており、明らかではないが通常の箱式石棺とは異なる。長軸は N-90°-E、ほぼ東西に長軸を振る。頭位は東である。長さ 2.10 m、頭部幅推定 30㎝、足元幅推定 25㎝、高さ推定 40㎝である。床面の標高 4.60 mである。

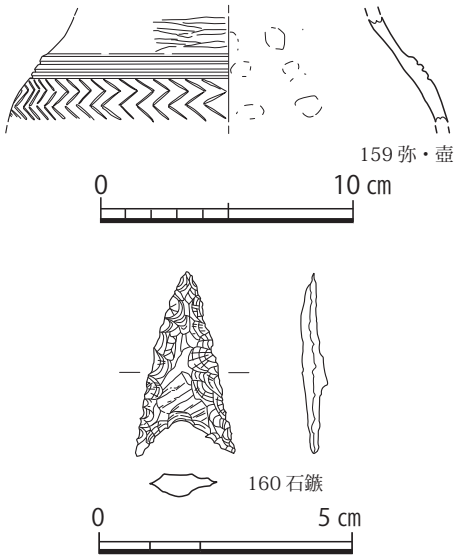
副葬品はなく、周辺から弥生時代前期の土器や石鏃などが検出されている。

出土遺物（第 66 図、図版 28）

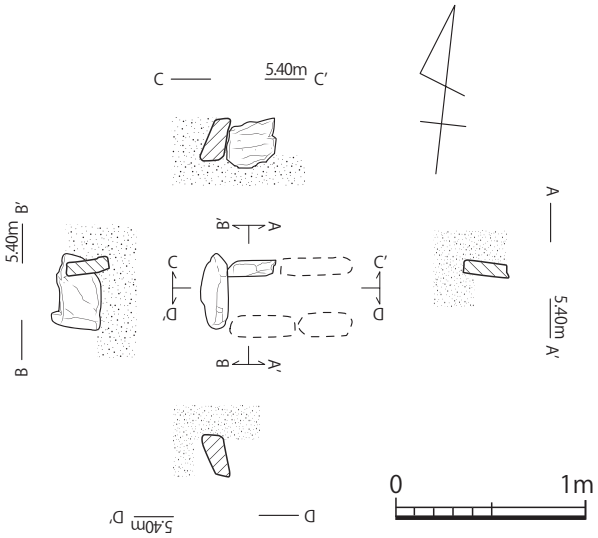
159 は肩部にヘラ先で丁寧な羽状文を施文する。



第 65 図　長井遺跡　35 号箱式石棺実測図（1/40）



第 66 図　長井遺跡　35 号箱式石棺周辺出土遺物実測図（1/3・2/3）



第 67 図　長井遺跡　37 号箱式石棺実測図（1/40）

32. 37 号石棺（第 67 図、図版 24）

37 号箱式石棺は本調査区の中央西寄り、E -2 グリッド上に位置し、15 号石棺の 20㎝北側に立地する。「L」字形に 2 石の板石が組まれている。大型の板石を小口の石とすると長軸が東西となり、N-85°- Eとなる。反対に小型の板石を小口の石と想定すると長軸が南北になり、N-2°- Wとなる。これまでのところ長軸を南北に振るのは、33 号石蓋土坑墓、1 号方形周溝墓、36 号石蓋土坑墓などが見られるが、数は少ない。高さ約 25㎝、床面の標高 5.00 mである。

副葬品もなく、周辺からの土器の検出例も少ない

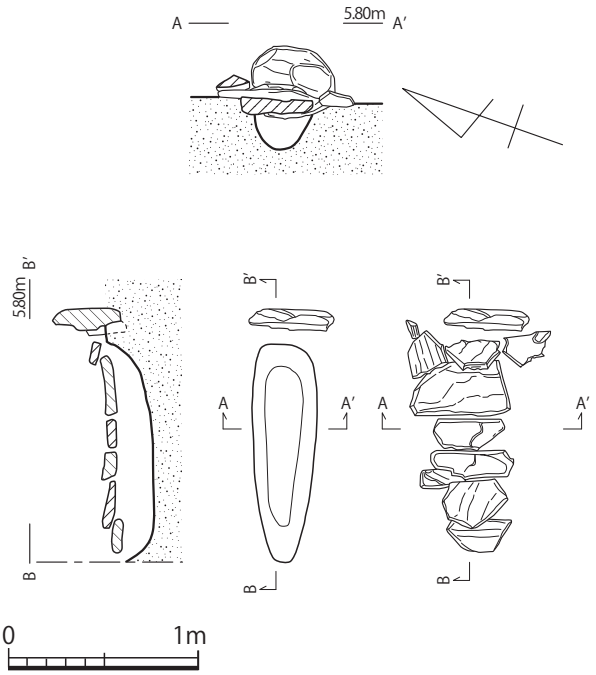
第 3 節　石蓋土坑墓

本調査区で石蓋土坑墓は 4 基検出されている。

1. 11 号石蓋土坑墓（第 68 図、図版 10）

11 号石蓋土坑墓は本調査区の南西隅、B-5 グリッド上に位置する。長軸は N-71°-E にとり、頭位は東である。土坑の推定長さ 1.15m、幅 34㎝、高さ 20㎝で、床面標高は 5.15 mである。蓋石は 6 枚 + α である。頭部のみ大きい板石を被せ、他は小型の板石である。また頭部より約 7㎝東側に幅 46㎝、高さ 37㎝、厚さ 10㎝の板石を立てて標石としている。この標石と頭部に被せている板石との間に 20㎝前後の小型の板石を 3 枚横並びに並べていた。

副葬品はなく周辺から弥生土器も検出されていない。



第 68 図　長井遺跡　11 号石蓋土坑墓実測図（1/40）

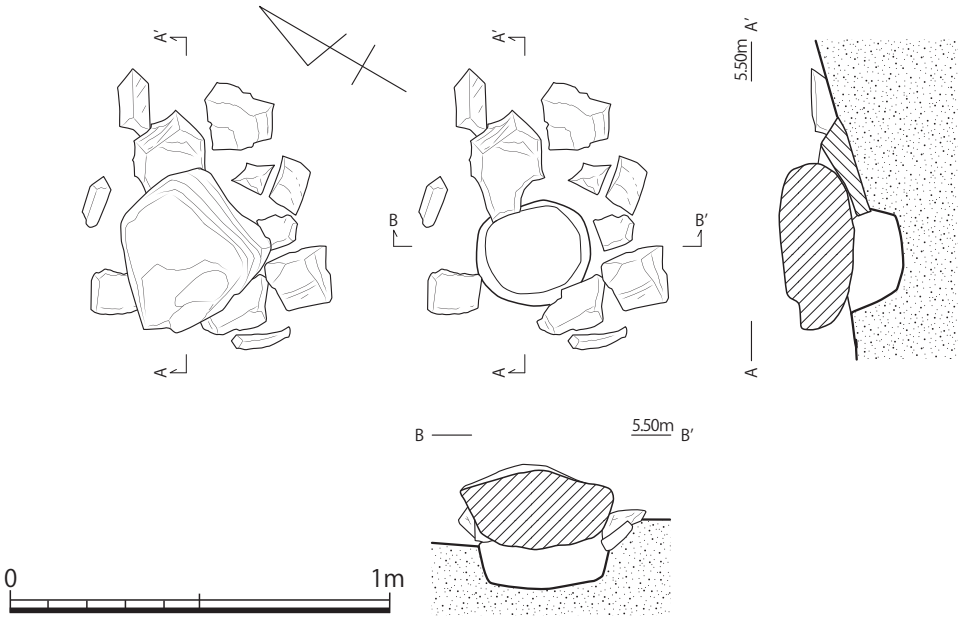
2. 25 号石蓋土坑墓（第 69 図、図版 20）

25 号石蓋土坑墓は本調査区の中央やや東寄り、D-2 グリッド上に位置し、28 号石棺の 40㎝南に立地する。砂丘面に 28 × 30㎝の不整楕円形を呈し、深さ 13㎝の底面緩やかな湾曲の土坑の縁部周辺に一辺 15㎝前後の板石片を 11 個敷き、その上に長さ 42㎝、幅 38㎝、厚さ 20㎝の石材を被せていた。床面標高は 5.10m である。

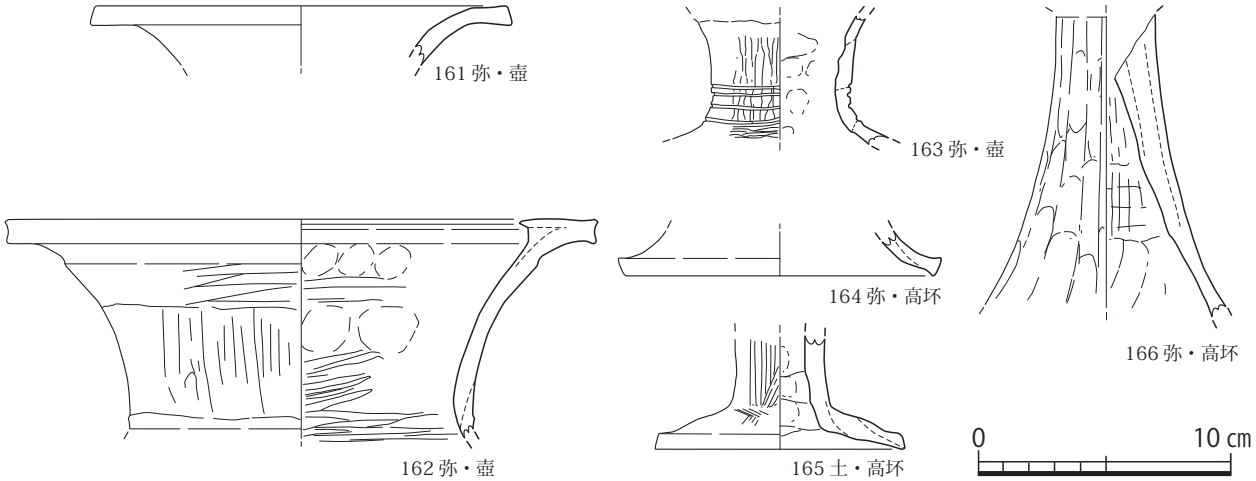
中から副葬品など何も検出されなかったが、再葬墓ではないかと推察される。

3. 33 号石蓋土坑墓（第 71 図、図版 23）

33 号石蓋土坑墓は本調査区の北東側、E-1 グリッド上に位置し、34 号石棺の直上に立地する。長軸は東西方向の 34 号石棺と直交する南北の N- 6° - W にとる。長さ約 70㎝、幅 50㎝前後、厚さ 5㎝前後の板石を南北に 3 枚並べている。この板石は北側の板石が高く南へ徐々に低くなるように並べている。板石はこの 3 枚のみで、直下にある 34 号石棺との間は、5 ～ 10㎝しかなく、この板石の下に埋葬することは不可能である。何故この板石を並べたのか明らかではないが、この下に側板が見られないことから箱



第 69 図　長井遺跡　25 号石蓋土坑墓実測図（1/20）



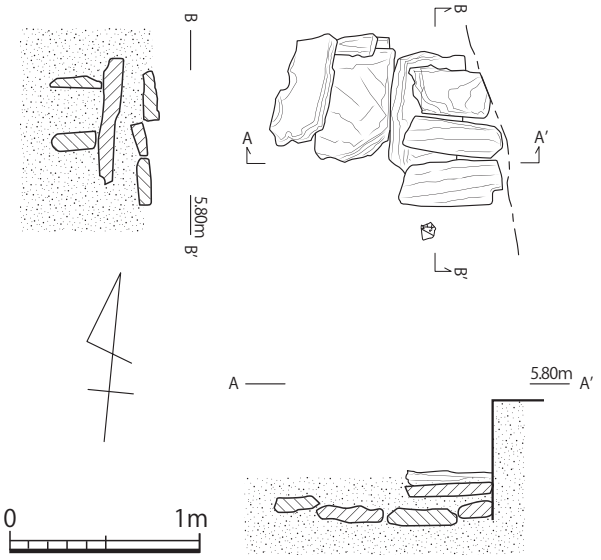
第 70 図　長井遺跡　25 号石蓋土坑墓出土遺物実測図（1/3）

式石棺ではない。しかし蓋石 4 枚の小児用石蓋土坑墓を想定すると、もう 1 枚の蓋石が南側に被せてあったとして頭部を南側と想定すると現存する 3 枚の蓋石は、胸から足元の位置が想定される。そうであれば幼児の埋葬用も考えられるのではないだろうか。蓋石のみということで、石蓋土坑墓としておきたい。床面標高は 5.30 mで、副葬品はなかった。

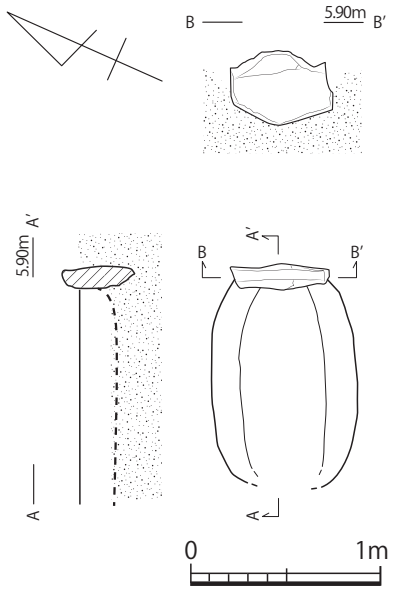
4. 36 号石蓋土坑墓（第 73 図、図版 24）

36 号石蓋土坑墓は本調査区の南西、C-5 グリッド上に位置し、12 号石棺の 50㎝南に立地する。長軸は N-23° -W にとる。頭部は北西方向で、頭部側に幅 55㎝、高さ 40㎝、厚さ 14㎝の板石が立ててあり標石と考えられる。その南側に幅 75㎝、長さ 1.05 mのやや丸みのある長方形プランを呈し、深さ 20㎝で、底面は舟底状を呈する。床面標高は5.45mである。検出時にはすでに蓋石もなかった。土坑墓の可能性もある。

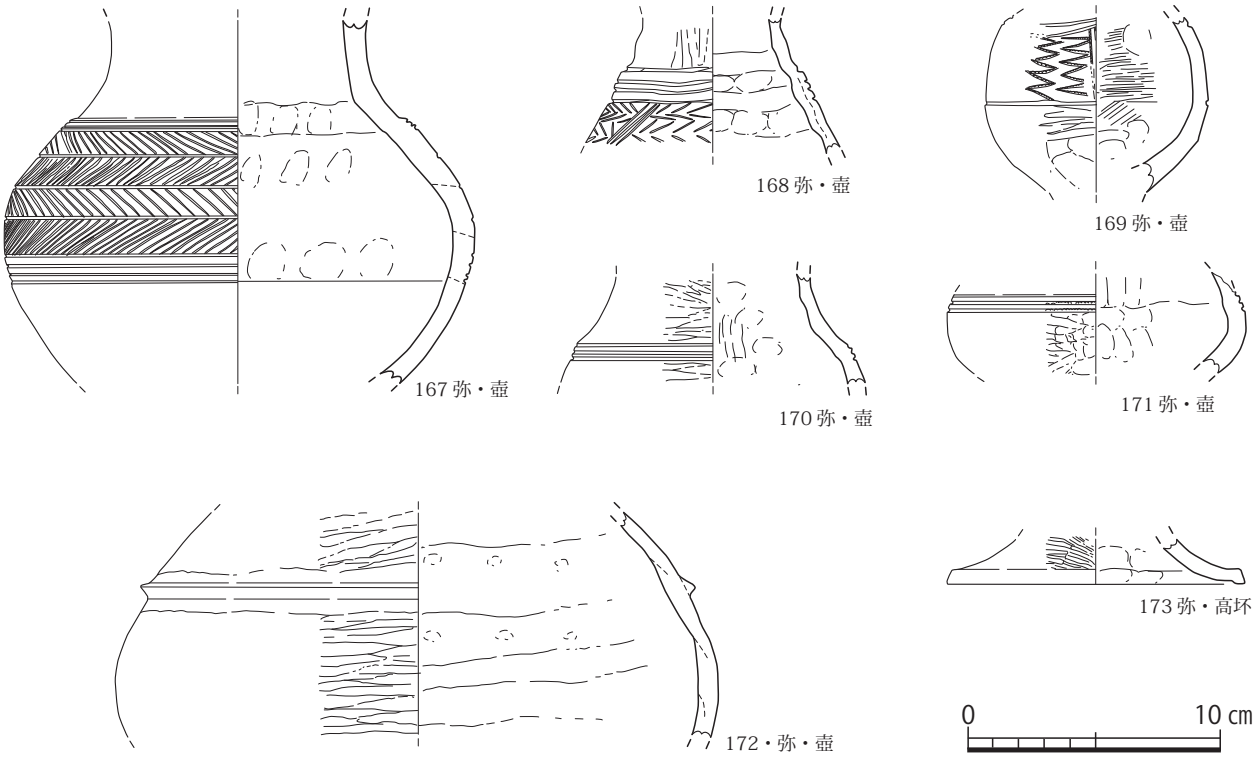
副葬品もなく、周辺からの弥生土器も検出されていない。



第 71 図　長井遺跡　33 号石蓋土坑墓実測図（1/40）



第 73 図　長井遺跡　36 号石蓋土坑墓実測図（1/40）



第 72 図　長井遺跡　34 号箱式石棺・33 号石蓋土坑墓周辺出土遺物実測図（1/3）

第 4 節　土坑

1. SK-1（第 74 図、図版 25）

SK-1 は本調査区の中央南西寄り、D-4 グリッド上に位置し、12・13 号石棺の 50㎝～ 1 m東側に立地する。長軸は N-32°-W にとる。長径 2.43 m、短径 1.05m の不整楕円形を呈し、深さ 40㎝で、底面は舟底状を呈する。底面は北側がやや浅く、南へ深くなる。壁面は砂で崩れていることもあり、斜め上方に立ちあがる。覆土は 2 層に分層され、上層は淡褐色土、下層は淡黄褐色土である。床面標高は 4.70 mである。

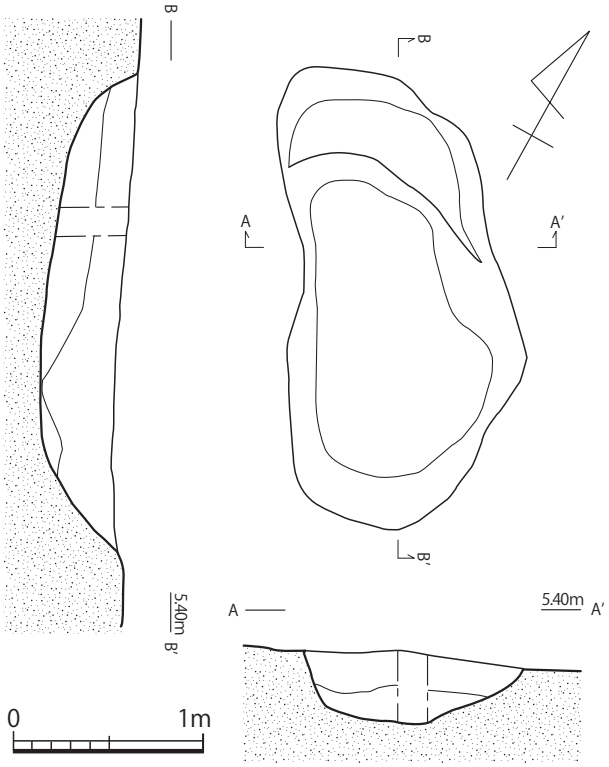
中から弥生時代中期の高坏片が出土している。

出土遺物（第 75 図）

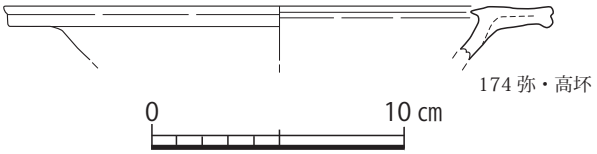
鋤先口縁の高坏である。

2. SK-2 出土遺物（第 76 図）

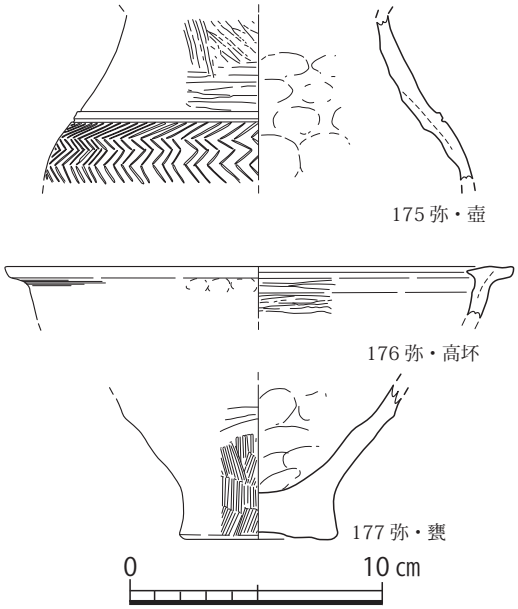
E-5 グリット上調査区南側壁面中に位置する。そこから弥生時代前期の壺・甕底部と中期の高坏が出土している。前期壺肩部片は、頸部下の沈線の下にヘラ先による羽状文を施文する。上段、中段と施文するが、まず最上段の斜線を入れ、次に 2 段目に「く」字形になるように斜線を引くが、割り付けをしていないために少しずつずれて、本数が合わない。



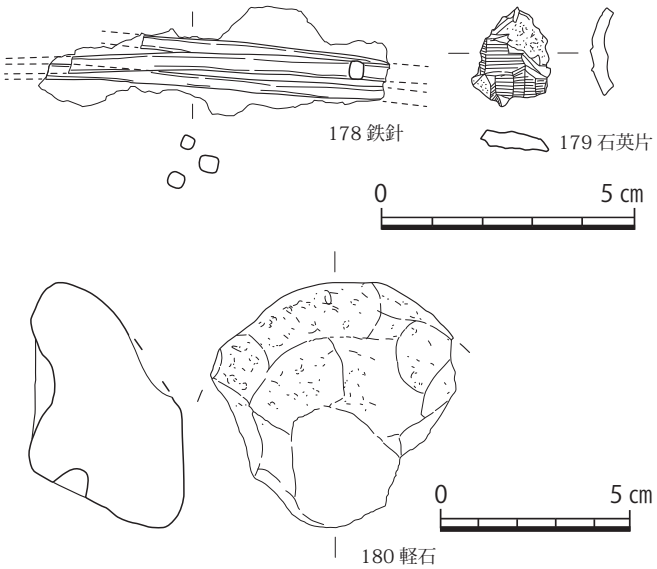
第 74 図　長井遺跡　SK-1 実測図（1/40）



第 75 図　長井遺跡　SK-1 出土遺物実測図（1/3）



第 76 図　長井遺跡　SK-2 出土遺物実測図（1/3）



第 77 図　長井遺跡　電柱北側周辺出土遺物実測図（1/2・2/3）

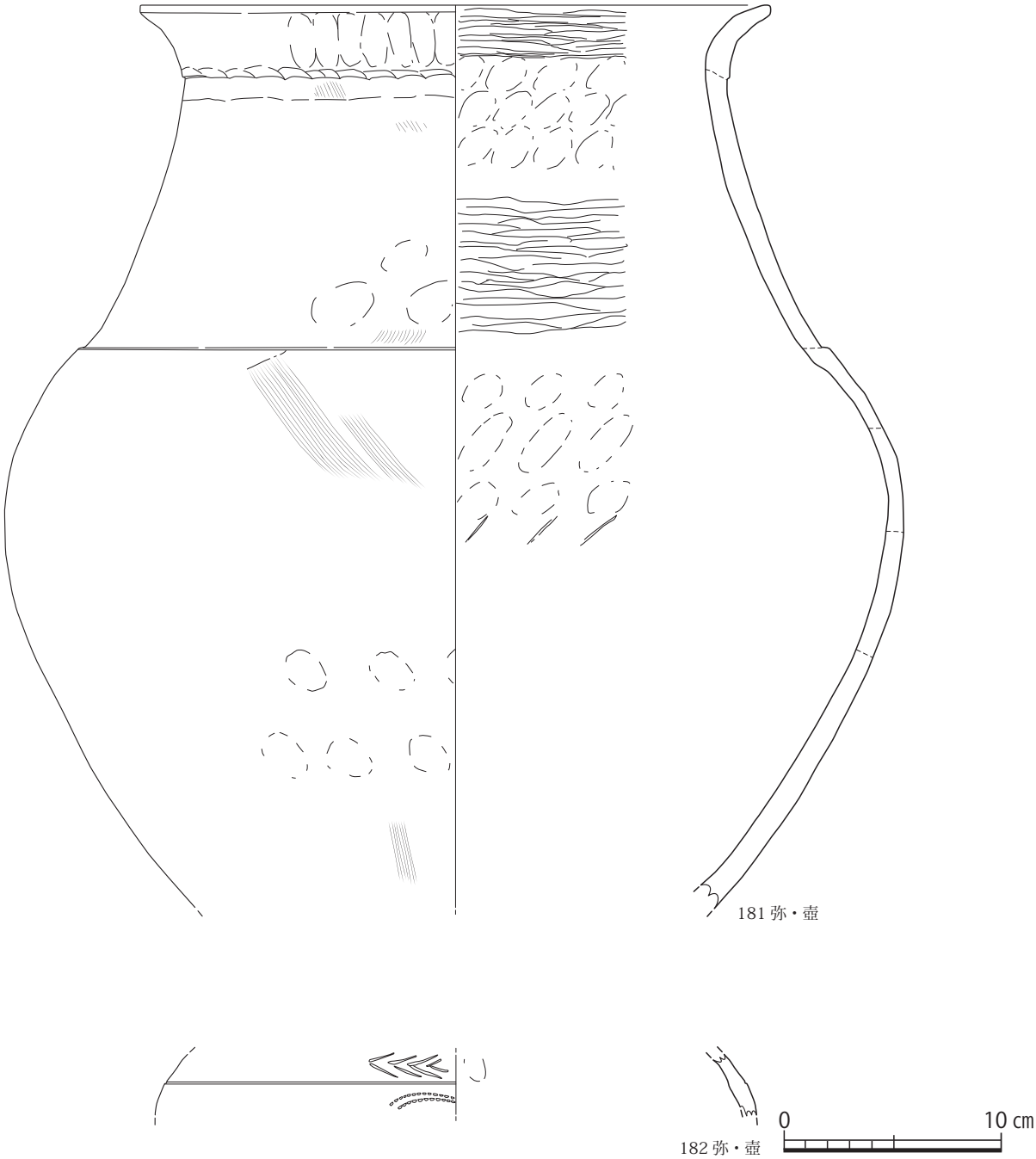
第 5 節　表採およびカクラン出土遺物

1. 電柱北側周辺出土遺物（第 76 図）

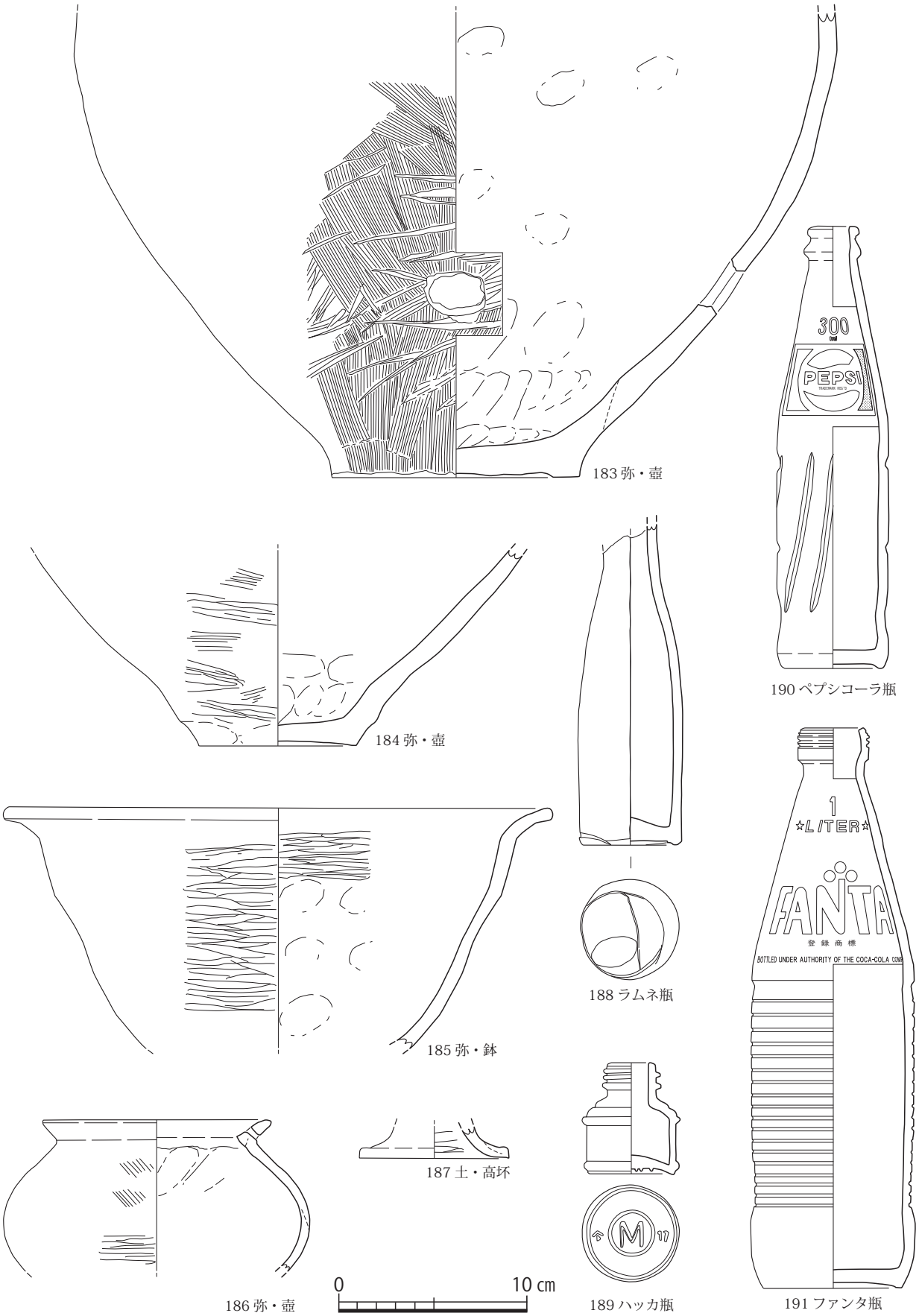
178 は鉄針か。断面 4 ～ 7mm の隅丸長方形を呈する。先端方向に徐々に細くなっていることや、断面が不定形であることなどから時期の新しい鉄釘ではないと判断される。179 は石英片で表面敲打剝離時に剝離したものか。180 は軽石で直径約 6㎝の不定円形を呈する。表面研磨による平坦面が見える。

2. カクラン出土遺物（第 78・79 図、図版 29）

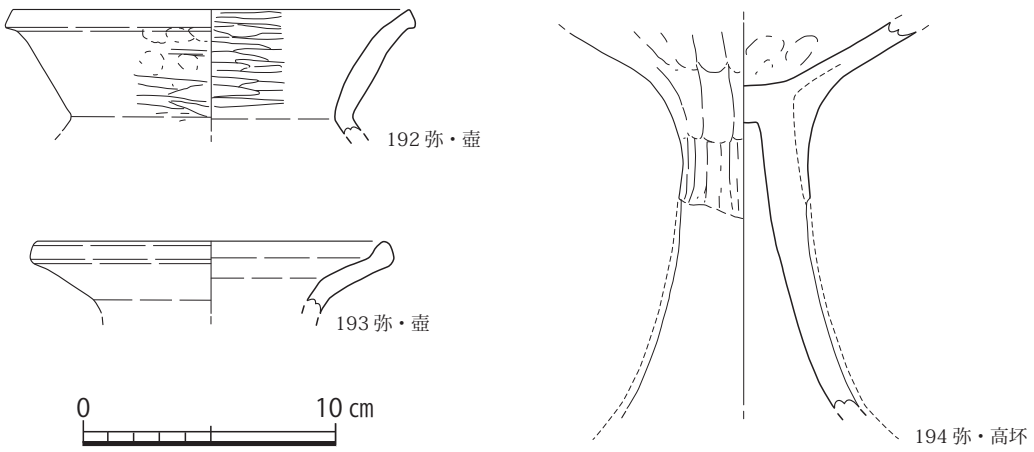
B-5 グリッド上に位置したカクランから遺物が出土した。181 は板付 I 式期の壺である。丁寧な調整を



第 78 図　長井遺跡　カクラン出土遺物実測図 1（1/3）



第 79 図　長井遺跡　カクラン出土遺物実測図 2（1/3）



第 80 図　長井遺跡 表採遺物実測図（1/3）

施す。182 は壺肩部に沈線を入れ、その上段にヘラ先による羽状文、下段には二枚貝による重弧文を施文する。割り付けをしておらず、間隔など乱れが見られる。183 は下半部に焼成後穿孔が見られ、カクラン出土ではあるが、甕棺に使用された甕の一部であろう。今回の発掘調査では箱式石棺墓、石蓋土坑墓が多く、甕棺墓がほとんど検出されなかった。昭和 34 年の砂利採取工事時には甕棺墓も見つかっていたので不思議に思っていたが、すでに取り上げられていたことが明らかとなった。底部は前期の様相を示すが、体部はかなり丸みを帯びていることから中期初頭前後に比定できる。

近現代の遺物も出土しており、戦後のはっかの瓶やラムネと思われる瓶、昭和のペプシ、ファンタの瓶などが出土している。

3. 表採遺物（第 80 図、図版 29）

弥生時代中期の壺の口縁部片や後期～終末期にかけての高坏の脚部などが採集されている。

第 6 節　定村責二氏寄贈資料（第 81 ～ 87 図、図版 29 ～ 32）

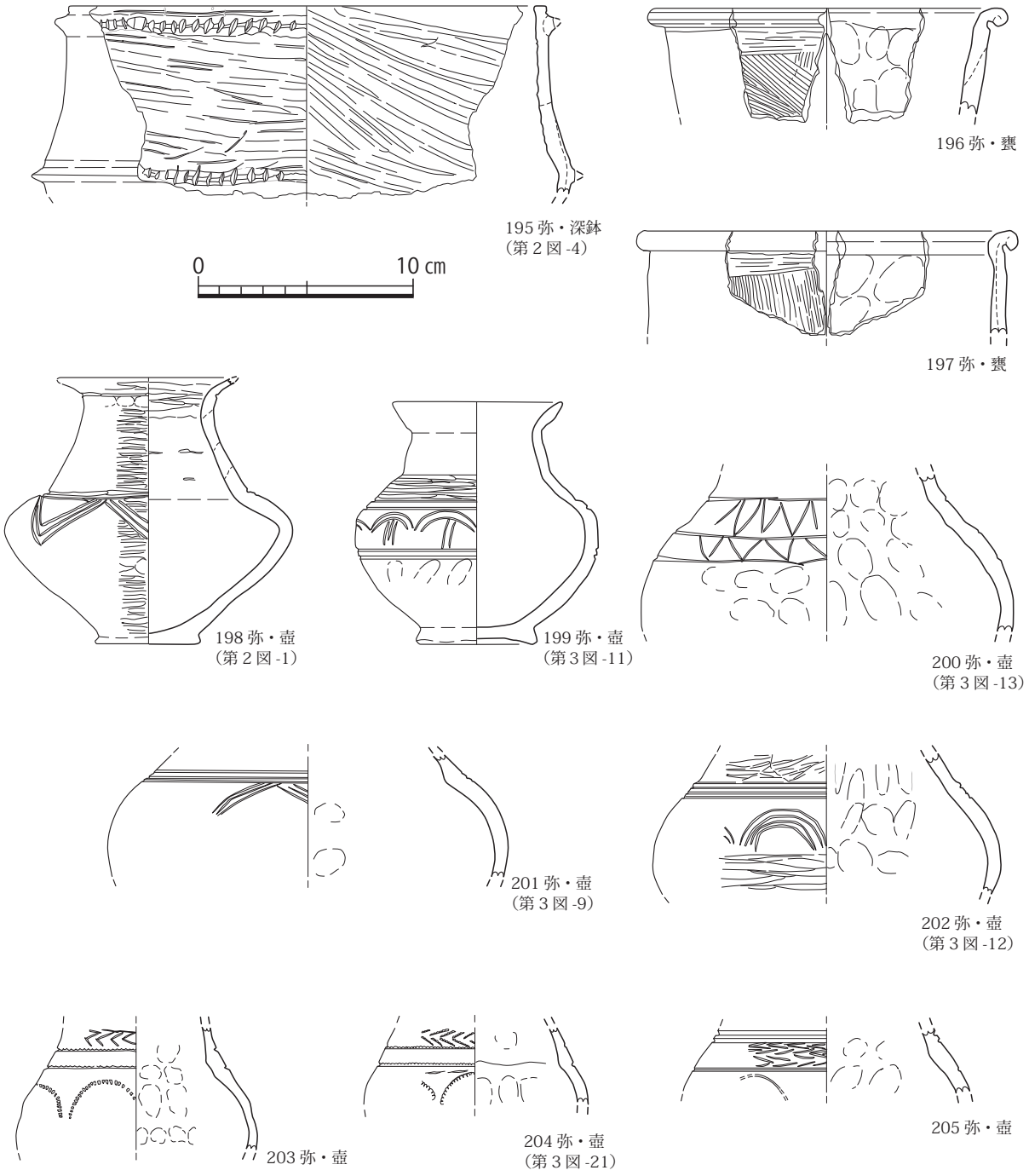
定村責二氏は明治 44 年（1911）稗田村（現行橋市下稗田）に生まれた。教員を務める傍ら遺物の採集や遺跡の調査を続け、文化財の保護や調査指導に尽力するなど行橋市の文化財行政黎明期に活躍した人物である。本節では同氏が昭和 34 年の砂利採取工事の際に採取した遺物について詳説する。図中の遺物番号の下に記した括弧書きは『九州考古学 25・26』に掲載された図番号である。198 の壺（巻頭図版 1）は岡山大学文学部考古学研究室所蔵のもので同氏が寄贈したものである。小型の扁球形を呈し肩部には三角文を施文している。表面に艶があり形が整美で丁寧に作られている。ほかに板付Ⅰ式期の壺や縄文系の深鉢の口縁部片などがある。この深鉢は突帯のキザミ間隔が広いことや他に縄文土器が採取されていないことなどから弥生期の深鉢と考えられる。

弥生前期の壺の施文で非常に丁寧に施文されたものと、そうでないものが混在している。どのような使い分けがされていたものか明らかではないが、その多くはやや雑な施文と言って良いのか、もしくはその文様の基本、意味などを理解せずに施文している壺の方が多い傾向にあると言える。

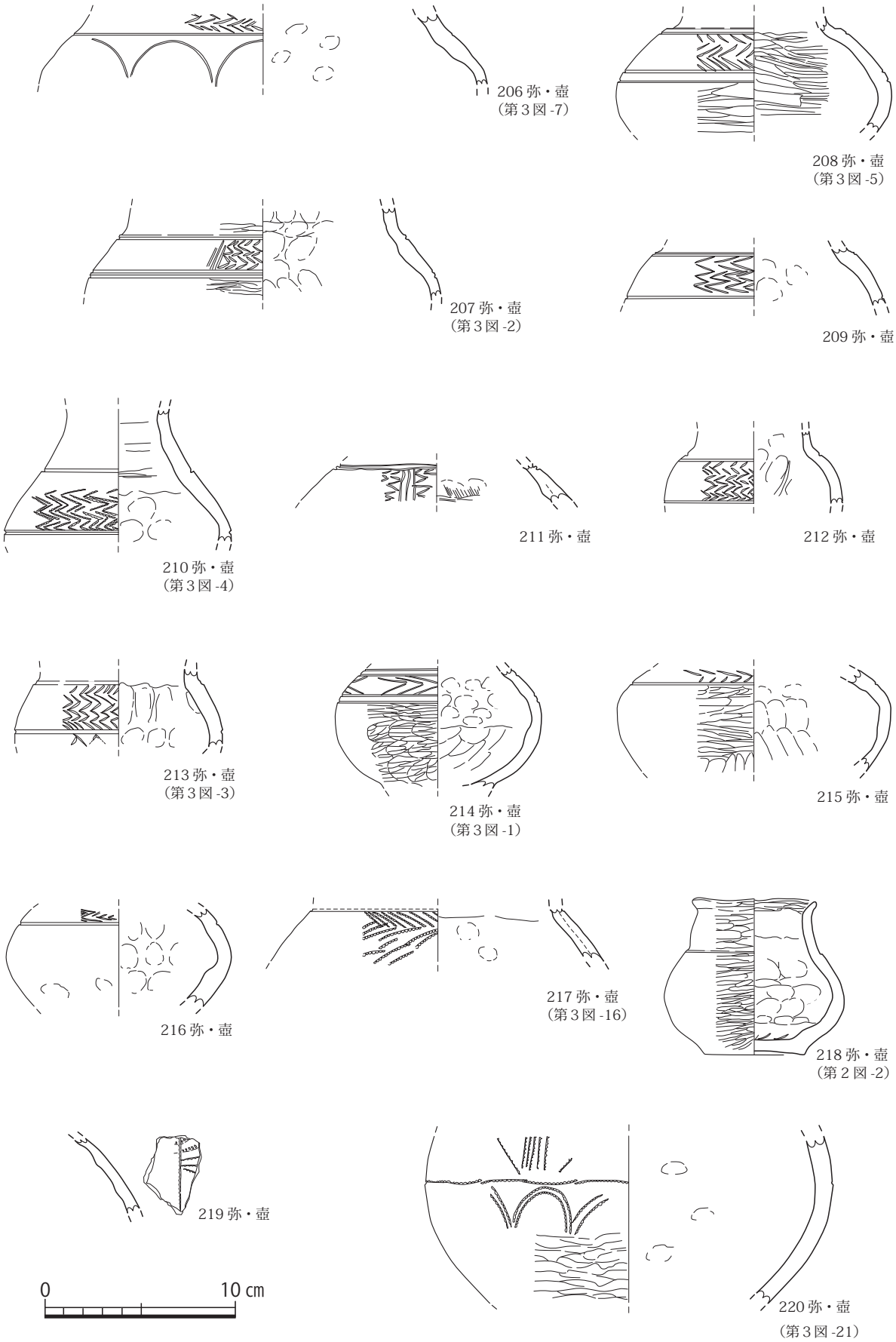
中期は須玖Ⅰ式期のものまでで、須玖Ⅱ式期以降～後期中頃まではほとんどみられない。後期中頃～終

末期、古墳時代初頭頃までの時期が見られる。この結果は今回の発掘調査においても同様な結果を得られており、このあたりはそういった時期構成が行われていると言えそうである。

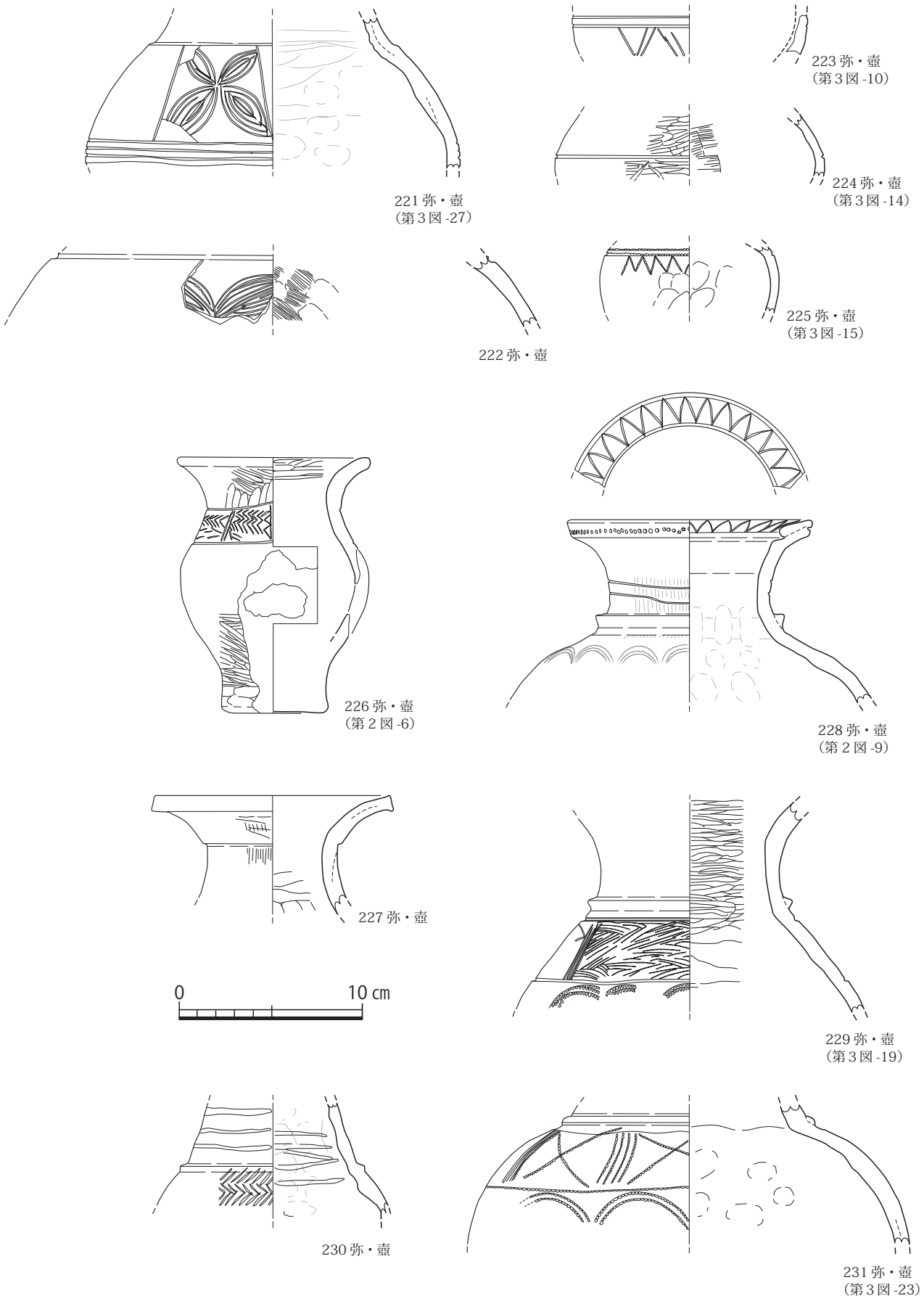
終末期には、小型の二重口縁壺が見られる。口縁部がほぼ直立するものや、少し外傾するものなどが見られる。山陰系や吉備系のものと考えられる。小型の土器が中心で、大型の壺はこれまでのところ見られない。また豊前・高島式土器もわずかに出土が見られるもののそれほど多くは出土していない。畿内系は庄内式期新相段階のものが多く、布留式古段階が一部見られるが、新相段階のものは見られないことから 4 世紀初頭以降は急激に衰退していったことが窺われる。



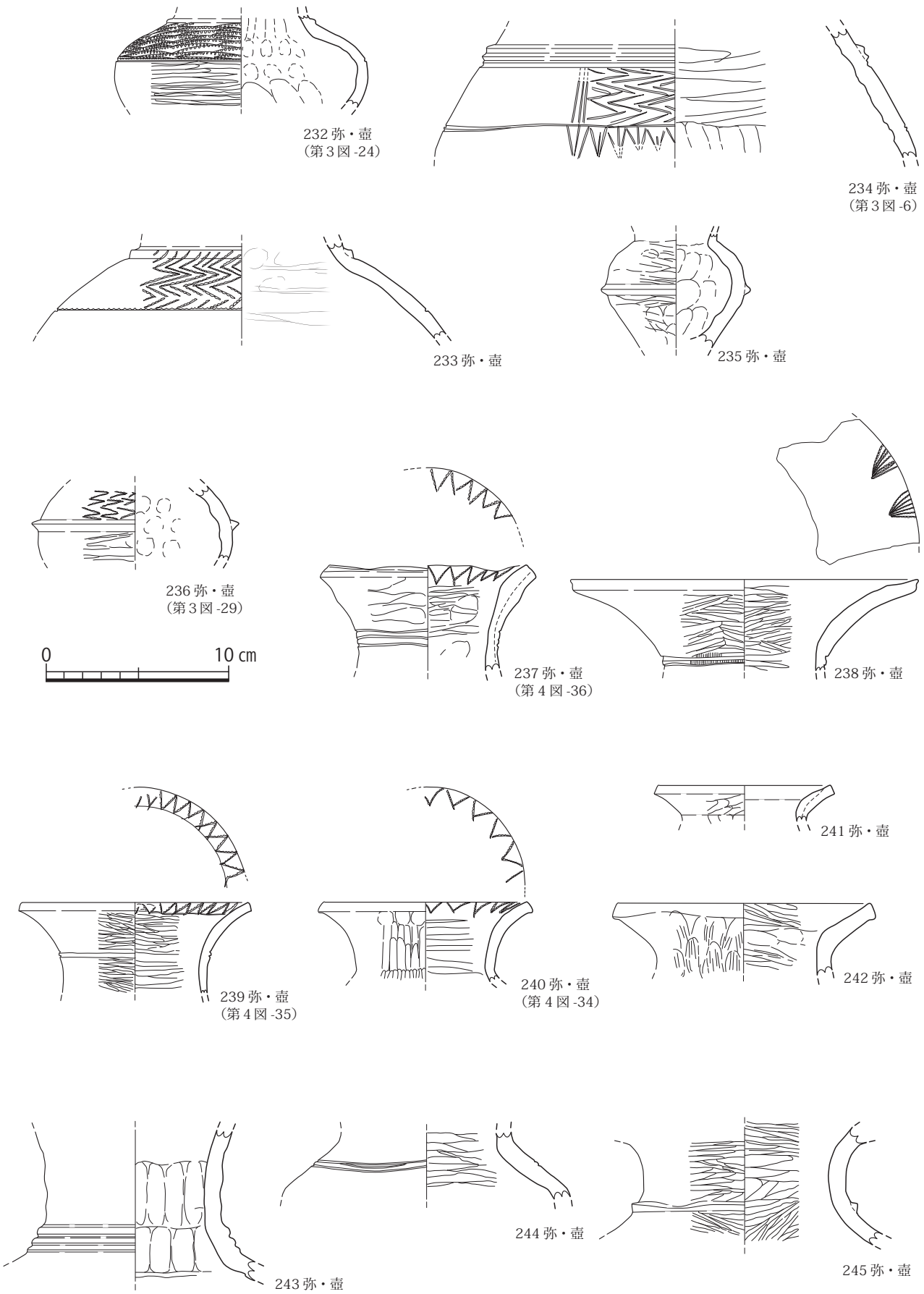
第 81 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 1（1/3）



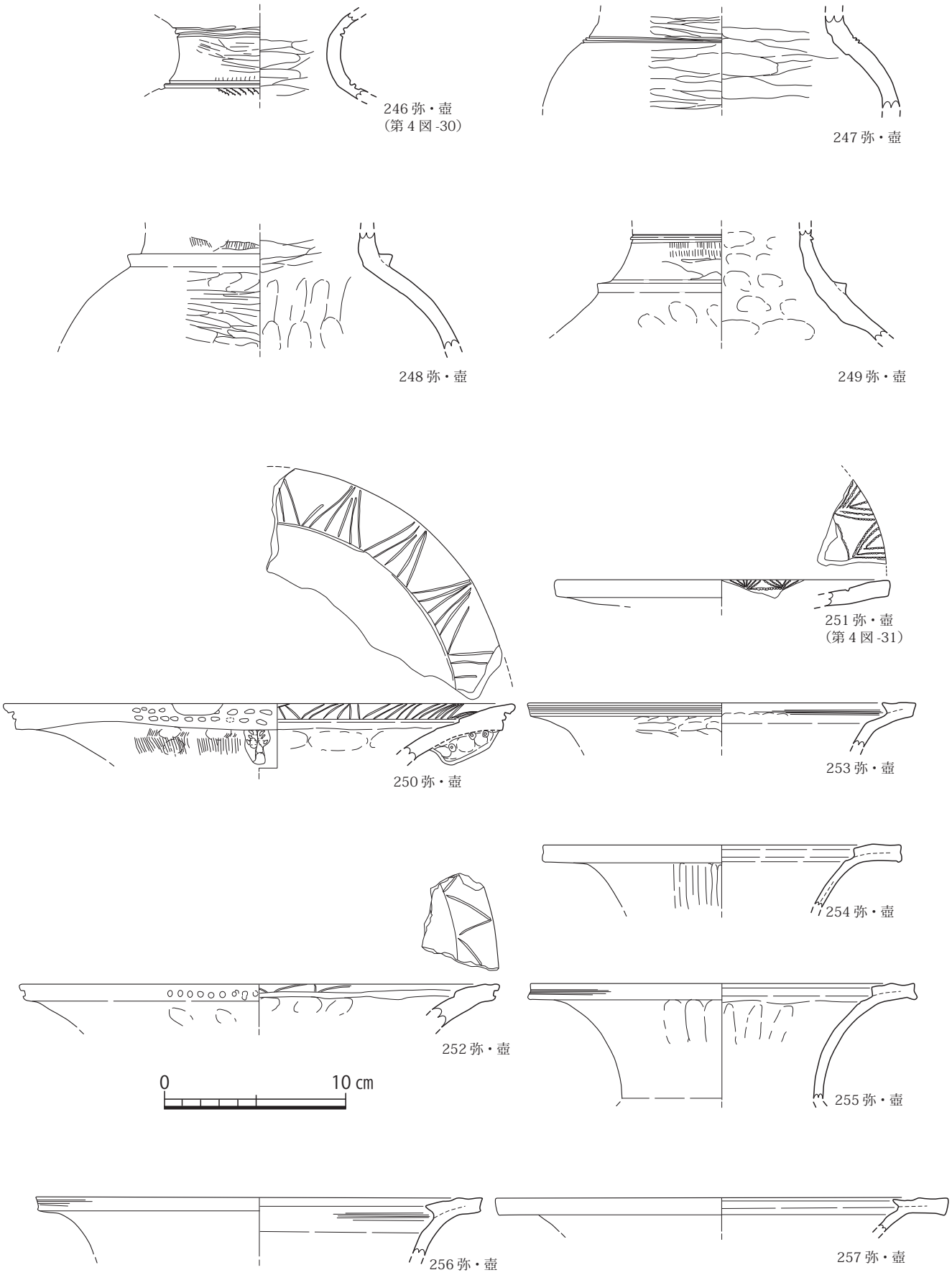
第 82 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 2（1/3）



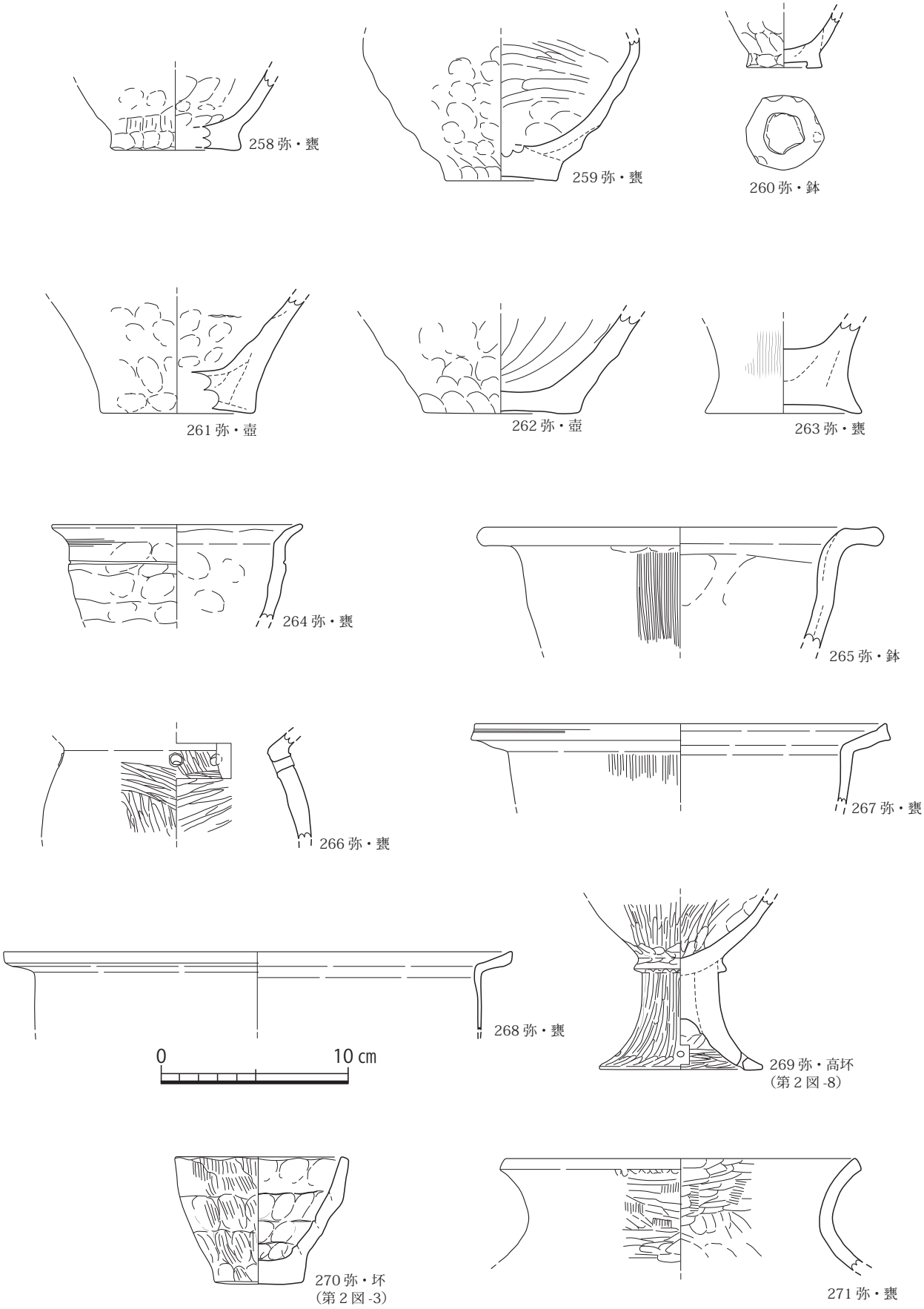
第 83 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 3（1/3）



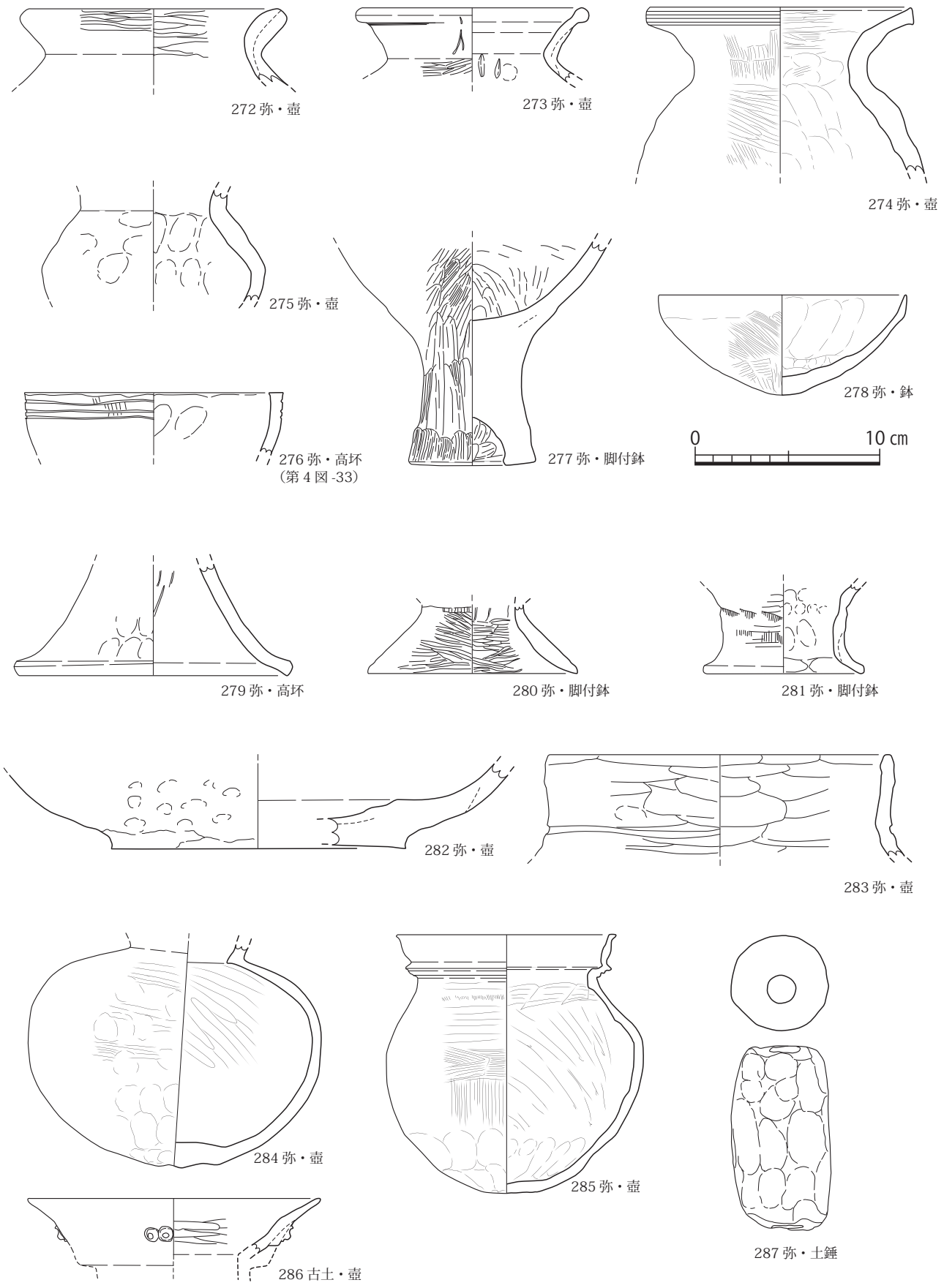
第 84 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 4（1/3）



第 85 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 5（1/3）



第 86 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 6（1/3）



第 87 図　長井遺跡　定村責二氏寄贈資料実測図 7（1/3）

	出土遺構	種 別	器 種	法 量（cm）	調 整	焼 成	胎 土	色 調	残 存	写真	備 考
1	南北ベルト	弥生土器	壺	復元底径 4.8 残高 12.0	内：オサエ・ヨコナデ→ナデ 外：オサエ・ハケメ→ナデ	良好	～5㎜の白色砂粒	内外：明褐 7.5YR5/6	頸部～底部片	○	
2	南北ベルト	弥生土器	壺	復元口径 14.3 残高 2.2	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～5㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
3	南北ベルト	弥生土器	甕	復元口径 10.2 残高 7.2	内：ヨコナデ・オサエ 外：ヨコナデ・オサエ→ナデ	不良	～5㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁～胴部片		
4	南北ベルト	弥生土器	甕	復元口径 14.4 復元底径 5.6 残高 17.2	内：ヨコナデ→オサエ→ハケメ 外：ヨコナデ→オサエ→ハケメ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：黒褐 10YR3/1 外：黄褐 10YR5/3	全体の 3/4 残存	○	焼成後穿孔
5	南北ベルト	弥生土器	甕	復元口径 25.0 残高 1.8	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
6	南北ベルト	弥生土器	壺	復元口径 12.5 残高 2.1	内：ヨコナデ・ヘラミガキ 外：ヨコナデ・オサエ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：黄橙 10YR6/4	口縁部片		
7	南北ベルト	弥生土器	高坏	残高 7.7	内：シボリ→ケズリ 外：オサエ→ナデ	やや 不良	～2㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：明黄褐 10YR6/6	脚部片	○	
8	南北ベルト	弥生土器	脚付き鉢？	脚部径 12.0 残高 3.3	内：ヨコナデ・ヘラケズリ 外：ヘラケズリ→ハケメ	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：にぶい橙 7.5YR6/4	脚部片		
9	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 16.7 残高 3.5	内：ヘラミガキ 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒 ～2㎜の透白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	口縁部片		
10	1号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 13	内：ナデ→ヘラミガキ 外：オサエ→ハケメ・ヘラミガキ	良好	～5㎜の透白色砂粒多量	内外：にぶい黄橙 10YR7/4	頸部～胴部片	○	※№114 と接合
11	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元頸部径 6.8 残高 8.8	内：シボリ→オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→ヘラ先施文	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～体部	○	
12	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元頸部径 17.4 残高 14	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～5㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～胴部片	○	
13	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 13.2 残高 8.4	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	やや 不良	～1.5㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	全体の 3/4 残存	○	
14	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 20.4 残高 2.3	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：橙 7.5YR7/6	口縁部片		
15	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 24 残高 2.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや 不良	～4㎜白色砂粒少量	内：褐灰 10YR4/1 外：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片		
16	1号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 6.5	内：オサエ→ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒 ～4.5㎜の透赤色砂粒	内：にぶい褐 7.5YR5/4 外：にぶい黄橙 10YR6/4	頸部～胴部片		
17	1号石棺周辺	弥生土器	壺	体部径 27.6 残高 7.5	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	体部片		
18	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元胴部径 23.4 残高 4.9	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：明黄褐 10YR7/6	胴部片		
19	1号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 5	内：オサエ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	胴部片	○	
20	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 13.4 残高 1.5	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部片		
21	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 13.6 残高 2.2	内：ナデ→ヘラミガキ 外：ナデ→ヘラミガキ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
22	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 12.6 残高 7.3	内：赤色顔料塗布→ヘラミガキ 外：赤色顔料塗布→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明赤褐 2.5YR5/6	口縁～胴部片	○	赤色顔料塗布
23	1号石棺周辺	弥生土器	甕	復元底径 7.0 残高 3.0	内：ハクリ 外：ヨコナデ	良好	～5㎜の白色砂粒多量 ～2㎜の透白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	底部片		
24	1号石棺周辺	弥生土器	甕	残高 6 底径 6.4	内：オサエ→ナデ・ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒 ～5㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR7/6 外：〃、暗灰 N3	底部～胴部片	○	
25	1号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径 7.5 残高 1.6	内：ハクリ 外：ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR7/6	底部片		後期？
26	1号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径 14.0 残高 8.0	内：オサエ 外：ナデ	良好	～1.5㎜の白色砂粒多量	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：橙 7.5YR6/6	脚部片	○	
27	1号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元口径 33.2 残高 3.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや 不良	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	坏部片		弥生後期中頃
28	1号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径 20 残高 6.3	内：ハケメ 外：オサエ→ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：明黄褐 10YR6/6	脚部片		高島式
29	1号石棺周辺	弥生土器	壺	口径 7.4 底径 4.6 残高 15.5	内：ケズリ→ナデ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ・ヘラケズリ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明赤褐 5YR5/6	ほぼ完形	○	
30	1号石棺周辺	弥生土器	壺	口径 8.8 底径 3.6 残高 14	内：ナデ・ナデ→ヘラケズリ 外：オサエ→ミガキ	良好	～4.5㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	完形	○	焼成後穿孔
31	1号石棺	鉄製品	鉄製刀子	長さ 12.4　幅 1.5 厚 0.3	－	－	－	－	完形	○	外面に平織布の痕あり
32	1号石棺	鉄製品	鍛造鉄斧	長さ 6.3　幅 3.6 厚 1.7	－	－	－	－	完形	○	
33	2号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 20.2 残高 4.8	内：ヨコナデ 外：ナデ→ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：明黄褐 10YR6/6	口縁部～頸部片		
34	2号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径 13.4 残高 4.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→オサエ	良好	～5㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部～胴部片		
35	3号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 17.5	内：ナデ 外：ヘラミガキ→重弧文	良好	～5㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR7/4	頸部～胴部片	○	
36	3号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 22.4 残高 6.3	内：ヨコナデ 外：ハケメ→ナデ	不良	～2.5㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部～頸部片		
37	3号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 22.0 残高 2.7	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：橙 5YR6/6 外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
38	3号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径 7.2 残高 8.9	内：オサエ→ナデ 外：ナデ・オサエ	良好	～5㎜の白色砂粒多量	内：明黄褐 10YRY7/6 外：〃、褐灰 10YR5/1	底部片		
39	3号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径 19.8 残高 3.1	内：ナデ→ハケメ 外：ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	脚部片		
40	3号石棺	－	碧玉製管玉	長さ 1.85　幅 0.37 孔径 0.2～0.23	－	－	－	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
41	3号石棺	－	碧玉製管玉	長さ 1.49　幅 0.4 孔径 0.9～1.2	－	－	－	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	

表１　出土遺物観察表１

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
42	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 1.42　幅 0.4 孔径 0.11 ～ 0.13	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
43	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 1.27　幅 0.31 孔径 0.11 ～ 0.16	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
44	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 1.14　幅 0.38 孔径 0.11 ～ 0.14	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
45	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 1.13　幅 0.36 孔径 0.14 ～ 0.16	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
46	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 1.10　幅 0.375 孔径 0.12 ～ 0.14	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
47	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.955　幅 0.36 孔径 0.11 ～ 0.13	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
48	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.915　幅 0.33 孔径 0.17 ～ 0.2	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
49	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.91　幅 0.38 孔径 0.12 ～ 0.14	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
50	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.90　幅 0.355 孔径 0.09 ～ 0.11	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
51	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.87　幅 0.345 孔径 0.12 ～ 0.16	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
52	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.81　幅 0.345 孔径 0.16 ～ 0.18	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	上端部欠損	○	
53	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.775　幅 0.35 孔径 0.12 ～ 0.14	―	―	―	暗緑灰 7.5GY3/1	完形	○	
54	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.775　幅 0.345 孔径 0.11 ～ 0.13	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
55	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.75　幅 0.35 孔径 0.11 ～ 0.17	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
56	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.745　幅 0.365 孔径 0.13 ～ 0.16	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	上端部欠損	○	
57	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.73　幅 0.35 孔径 0.12 ～ 0.14	―	―	―	暗オリーブ灰 5GY3/1	完形	○	
58	3 号石棺	―	碧玉製管玉	長さ 0.685　幅 0.30 孔径 0.13 ～ 0.16	―	―	―	暗緑灰 7.5GY4/1	完形	○	
59	4 号石棺周辺	弥生土器	鉢	復元口径 12.8 残高 5.0	内：オサエ・ヘラミガキ 外：ナデ→ヘラミガキ	良好	～ 3 ㎜の透白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	口縁部～体部 約 1/3 形		
60	7 号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 12.6 残高 5.1	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ハケメ→ナデ	良好	～ 2.5 ㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	口縁部～頸部片		
61	10 号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元口径 28.4 残高 4.1	内：ナデ 外：オサエ→ハケメ→ナデ	良好	～ 2.5 ㎜の白色砂粒	内：にぶい黄 2.5Y6/3 外：にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部～坏部片		高島式
62	12 号石棺	鉄製品	鉄製直刃鎌	長さ 16.7　幅 4.6 厚 0.4	―	―	―	―	完形	○	外面に木痕と平織布の痕あり
63	13 号石棺周辺	弥生土器	壺	底径 5.3 残高 12.7	内：オサエ・ナデ 外：オサエ・ナデ→ヘラミガキ→羽状文	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/3 外：橙 5YR6/6	頸部～底部 約 1/2 形	○	
64	13 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 3.3	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→重弧文	やや不良	～ 1 ㎜の黒色砂粒	内：明黄褐 10YR6/6 外：橙 7.5YR6/6	頸部～胴部片	○	
65	13 号石棺周辺	弥生土器	壺	口径 11.6 残高 12.2	内：オサエ→ナデ→ヘラケズリ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～ 3 ㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	全体の 3/4 残存	○	
66	13 号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径 4.8 残高 2.7	内：オサエ 外：オサエ→ナデ	やや不良	～ 2 ㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	底部片		
67	13 号石棺周辺	弥生土器	甕	底径 6.8 残高 7.0	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ハケメ	不良	～ 4 ㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：〃、褐灰 7.5YR5/1	胴部～底部片		
68	14 号石棺周辺	弥生土器	壺	底径 4.9 残高 13.0	内：ナデ 外：ハケメ→ヘラミガキ・ナデ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～底部 約 1/2 形	○	
69	14 号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径 17.0 残高 2.5	内：ヘラミガキ・ハケメ 外：ヘラミガキ・ハケメ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	脚部片		
70	15 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 3.6	内：ナデ・ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～ 1 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～胴部	○	
71	15 号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径 10.2 残高 3.2	内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ	良好	～ 3 ㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁～頸部片		
72	15 号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 13.6 残高 5	内：ヘラミガキ 外：ナデ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR7/6 外：橙 5YR6/6	口縁部片	○	
73	15 号石棺周辺	弥生土器	鉢	復元口径 13.0 残高 5.6	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→ヘラ先施文	良好	緻密	内：橙 7.5YR6/6 外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁～体部片	○	
74	15 号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径 8.0 残高 3.5	内：オサエ→ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～ 5 ㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR7/4	底部片		
75	15 号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径 20.4 残高 2.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～ 1 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
76	16 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 3.7	内：オサエ→ナデ 外：ヨコナデ・ヘラミガキ	良好	～ 2.5 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	胴部片		
77	16 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 7.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～ 3 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	胴部片		穿孔あり？
78	16 号石棺周辺	土師器	高坏	残高 6.3	内：オサエ→ハケメ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒 ～ 10 ㎜の礫	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：にぶい黄褐 10YR5/3	脚部片	○	古式
79	17 号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径 14.0 残高 4.8	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ・オサエ→ナデ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内：明赤褐 5YR5/6 外：橙 7.5YR 橙 6/6	口縁～頸部片	○	
80	17 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 3.4	内：オサエ・ヨコナデ→ナデ 外：ヘラミガキ→赤色顔料塗布？	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒・金雲母	内外：橙 7.5YR6/6	肩部片		
81	17 号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径 17.2 残高 1.8	内：ハケメ→ヘラミガキ 外：ハケメ・ヘラミガキ	良好	～ 2 ㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	脚部片		
82	18 号石棺周辺	弥生土器	壺	残高 3.0	内：オサエ→ナデ 外：羽状文	良好	～ 1 ㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	胴部片	○	

表 2　出土遺物観察表 2

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
83	18号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.4	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR6/6 外：橙7.5YR橙6/6	胴部片	○	
84	18号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.8	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	胴部片		
85	18号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径14.0 残高2.5	内：ナデ 外：オサエ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明褐7.5YR5/8	口縁部片		
86	18号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径12.2 残高9.8	内：ヨコナデ・ハケメ 外：ヨコナデ→ハケメ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：橙7.5YR7/6	口縁～胴部 約1/2形	○	
87	18号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径5.8 残高1.0	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	底部片		
88	18号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元脚部径13.4 残高2.7	内：ヨコナデ→オサエ→ナデ 外：ヨコナデ→オサエ→ヘラナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR6/6 外：〃、黒褐10YR3/1	脚部片		
89	18号石棺周辺	弥生土器	蓋	復元口径26.2 残高2.3	内：オサエ→ナデ→ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：明黄褐10YR6/6	口縁部片		
90	19号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径18.0 残高2.7	内：ヘラミガキ→鋸歯文 外：ヨコナデ・ヘラナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：黄褐10YR5/6 外：明黄褐10YR6/6	口縁～頸部片	○	
91	19号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径27.0 残高2.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	口縁部片		
92	19号石棺周辺	弥生土器	壺	残高4.3	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒・金雲母	内：橙5YRY6/6 外：橙7.5YR6/6	胴部片		
93	19号石棺周辺	弥生土器	壺	残高6.4	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：明褐7.5YR5/8	胴部片	○	
94	19号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元底径7.2 残高1.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～4㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：にぶい橙7.5YR6/4	坏部片		
95	20号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径29.0 残高3.1	内：赤色顔料塗布 外：赤色顔料塗布	良好	～1㎜の白色砂粒	内：明赤褐2.5YR5/6 外：明黄褐10YR6/6	口縁部片		赤色顔料塗布
96	20号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元口径26.4 残高4.9	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR7/6 にぶい褐7.5YR6/3 外：明黄褐10YR7/6	口縁部片		
97	21号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径10 残高8.3	内：ヨコナデ→赤色顔料塗布 外：ヨコナデ・ハケメ→赤色顔料塗布	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙10YR7/4 橙2.5YR6/6	口縁部片	○	赤色顔料塗布
98	21号石棺周辺	弥生土器	壺	残高4.7	内：オサエ→ナデ 外：ハケメ→ナデ・羽状文・重弧文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR7/6	頸部～肩部片	○	
99	21号石棺周辺	弥生土器	壺	残高7.8	内：オサエ 外：ハケメ→ヘラミガキ	良好	～4㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR7/4 外：橙7.5YR7/6	胴部片		
100	21号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元口径24.0 残高6.3	内：ナデ→ヘラミガキ 外：ナデ→ヘラミガキ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR7/6 外：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部～体部約1/2	○	細先口縁
101	22号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.8	内：オサエ 外：ヘラミガキ→重弧文	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	胴部片	○	
102	22号石棺周辺	弥生土器	壺	残高4.3	内：ナデ 外：ヘラミガキ→有軸羽状文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	胴部片	○	
103	22号石棺周辺	弥生土器	壺	残高2.7	内：ナデ 外：オサエ→ナデ→羽状文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	胴部片	○	
104	22号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.7	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→重弧文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	胴部片	○	
105	22号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径34 残高9.0	内：ヨコナデ・オサエ→ナデ 外：赤色顔料塗布	良好	～1㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR7/6 外：明赤褐2.5YR5/6	口縁部片	○	
106	22号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径23.8 残高2.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YRY7/4 灰黄褐10YR6/2 外：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部片		
107	22号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径9.0 残高4.0	内：オサエ→ナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：浅黄橙10YR8/4	口縁部片	○	
108	22号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径12.8 残高8.9	内：ナデ→ハケメ 外：ナデ→ハケメ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：明黄褐10YR6/6	口縁部～胴部片		
109	22号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径12.2 残高6.3	内：オサエ→ナデ→ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙5YR6/4	口縁部～胴部片	○	
110	22号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径23.8 残高1.7	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR7/6 外：明赤褐10YR6/6	口縁部片		
111	22号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径22.4 残高5.2	内：ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR7/4 外：灰黄褐10YR5/2	口縁部片		
112	22号石棺周辺	弥生土器	高坏	残高6.5	内：ケズリ 外：ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒 ～1㎜の黒色砂粒多量	内外：橙7.5YR6/6	脚部片		
113	22号石棺周辺	石製品	石鏃	残長1.45　残幅1.2 厚0.2 重量0.31ｇ	－	－	－	内外：黄灰2.5Y4/1	約1/3形残存	○	姫島産黒曜石
114	22号石棺周辺	石製品	軽石	残長1.6　残幅2.8 厚1.6　重量1.6ｇ	－	－	－	内外：明黄褐10YR7/6	1/10形残存		
115	23号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径7.8 残高2.7	内：ナデ 外：オサエ→ヨコナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR7/6	口縁部片		
116	23号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径11.4 残高1.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙10YR7/4	口縁部片		
117	23号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径15.0 残高9.0	内：ナデ 外：ハケメ→ヘラミガキ	良好	～5㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	口縁部～胴部片		
118	23号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3	内：オサエ→ナデ 外：ナデ	良好	～1㎜の透白色砂粒	内：橙7.5Y6/6 外：明黄褐10YR6/6	肩部片		
119	23号石棺周辺	弥生土器	高坏	残高6.5	内：シボリ 外：ハケメ	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	脚部片	○	
120	23号石棺周辺	弥生土器	蓋	復元口径26.4 残高6.8	内：ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ	良好	～5㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	口縁～胴部片		
121	26号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径21.2 残高0.9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR6/6 外：橙7.5YR6/6	口縁部片		
122	26号石棺周辺	弥生土器	鉢	復元口径14.4 残高3.8	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→ヘラ先施文	良好	～1㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙10YR6 /4	口縁部片	○	
123	26号石棺周辺	弥生土器	鉢	復元口径8.2 残高4.0	内：ナデ・ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→ヘラ先施文	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：にぶい黄橙10YR5/4	体部片	○	穿孔あり

表3　出土遺物観察表3

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
124	27号石棺周辺	弥生土器	鉢	残高2.5	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→二枚貝施文	良好	緻密	内外：橙7.5YR6/6	体部片	○	
125	27号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径26.4 残高7.1	内：オサエ→ヨコナデ 外：オサエ→ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	口縁部片		
126	27号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径10.0 残高7.9	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ・叩き目→ナデ？	良好	～4㎜の白色砂粒	内：明黄褐10YR6/6 外：橙7.5YR6/6	口縁～胴部片	○	
127	28号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径8.6 残高1.9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	口縁～頸部片		
128	28号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径16.0 残高4.3	内：ヘラミガキ 外：ハケメ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒少量	内外：橙5YR6/6	口縁部片		
129	28号石棺周辺	弥生土器	壺	残高5.5	内：ナデ・オサエ 外：ハケメ→ナデ→ヘラ先施文	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	胴部片	○	
130	28号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径23.9 残高2.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや不良	～2.5㎜の白色砂粒多量	内外：にぶい黄橙10YR7/4	口縁片		
131	28号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径5.4 残高9.2	内：オサエ→ナデ 外：ナデ・オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙N5YR6/6	底部～胴部片		
132	28号石棺周辺	弥生土器	壺	残高6.7	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙N7.5YR6/6	胴部片		
133	28号石棺周辺	土師器	埦	復元口径13.4 残高4.7	内：オサエ→ナデ 外：ナデ→ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒少量	内外：橙2.5YR6/8	口縁部～胴部片		
134	29号石棺周辺	弥生土器	鉢	復元体部径15.0 残高3.7	内：オサエ 外：ヘラミガキ→二枚貝施文？	良好	～1㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：にぶい橙7.5YR6/4	体部片	○	
135	29号石棺周辺	弥生土器	壺	残高6.4	内：オサエ→ヘラミガキ 外：ナデ	良好	～5㎜の白色砂粒	内：にぶい橙7.5YR6/4 外：橙7.5YR6/6	頸部片	○	
136	29号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.1	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→斜線文	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR5/3 外：明黄褐10YR6/6	肩部片	○	
137	29号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径21.6 残高3.0	内：ヨコナデ・ヘラミガキ 外：ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR7/6 外：明黄褐10YR6/6	口縁部片		
138	29号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径25.2 残高1.2	内：赤色顔料塗布 外：赤色顔料塗布	良好	～2㎜の白色砂粒	内：赤褐2.5YR4/8 外：明赤褐2.5YR5/6	口縁部		赤色顔料塗布
139	30号石棺周辺	弥生土器	壺	残高18	内：オサエ→ナデ・ヨコナデ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：橙5YR6/6	体部片	○	
140	30号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径16.2 残高3.7	内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ハケメ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙5YR6/6 外：橙7.5YR6/6	口縁部片		
141	30号石棺周辺	弥生土器	高坏	復元口径23.3 残高4.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙10YR6/4	口縁部～胴部片		鋤先口縁
142	30号石棺周辺	弥生土器	高坏	残高4.4	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	脚部片		
143	31号石棺周辺	弥生土器	鉢	残高1.3	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→二枚貝施文	良好	～4㎜の透白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	体部片	○	
144	31号石棺周辺	弥生土器	壺	残高8.5	内：ヨコナデ・オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ・ケズリ→羽状文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	肩部～胴部片	○	
145	31号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径17.0 残高3.8	内：ヘラミガキ 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：にぶい黄褐10YR4/3	口縁部～頸部片		
146	31号石棺周辺	弥生土器	壺	残高4.0	内：ヘラミガキ 外：ハケメ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：明褐7.5YR5/6 外：橙7.5YR6/6	頸部片	○	
147	31号石棺周辺	弥生土器	壺	残高5.4	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：明褐7.5YR5/6	頸部～肩部片		
148	31号石棺周辺	弥生土器	壺	残高9.0	内：オサエ→ナデ→ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～6㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	頸部～胴部片	○	
149	31号石棺周辺	弥生土器	壺	残高3.8	内：オサエ→ナデ 外：ヨコナデ・ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	頸部～肩部片		
150	31号石棺周辺	弥生土器	壺	復元口径6.0 残高1.4	内：オサエ 外：ナデ・オサエ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	底部片		
151	31号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径6.2 残高2.9	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR7/6	底部片		
152	31号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径5.4 残高1.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	底部片		
153	31号石棺周辺	弥生土器	壺	復元底径7.6 残高7.6	内：オサエ→ヘラミガキ 外：ハケメ→ヘラミガキ・オサエ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：橙5YR6/6	底部～胴部片		
154	31号石棺周辺	弥生土器	甕	復元口径24.1 残高3.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR5/3 外：にぶい黄橙10YR6/4	口縁～頸部片		
155	31号石棺周辺	弥生土器	高坏	残高5.9	内：オサエ→ナデ 外：ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：明黄褐10YR6/6	脚部片		
156	32号石棺周辺	弥生土器	蓋	復元口径21.4 残高1.1	内：赤色顔料塗布 外：赤色顔料塗布	良好	～1㎜の白色砂粒	内：明赤褐2.5YR5/6 外：赤褐2.5YR4/6	口縁部片		
157	32号石棺周辺	弥生土器	蓋	復元底径13.0 残高1.6	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→赤色顔料塗布	良好	～5㎜の白色砂粒	内：橙7.5YR6/6 外：明赤褐5YR5/6	脚部片		
158	32号石棺周辺	弥生土器	壺	底径4.8 残高2.7	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：明黄褐10YR7/6	底部片	○	
159	35号石棺周辺	弥生土器	壺	残高4.2	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	頸部～肩部片	○	
160	35号石棺周辺	石製品	石鏃	長3.65 幅1.95 厚0.45 重量1.7ｇ	－	－	－	－	ほぼ完形	○	サヌカイト製
161	25号石蓋土坑	弥生土器	壺	復元口径16.5 残高2.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	口縁部～頸部片		
162	25号石蓋土坑	弥生土器	壺	復元口径23.7 残高8.8	内：オサエ→ナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ナデ	良好	～6㎜の白色砂粒 ～3㎜の透白色砂粒	内：明黄褐10YR7/6 外：にぶい黄橙10YR	口縁部～頸部片		
163	25号石蓋土坑	弥生土器	壺	残高5.1	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明黄褐10YR6/6	頸部片	○	
164	25号石蓋土坑	弥生土器	高坏	復元底径14.8 残高1.8	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内外：橙7.5YR6/6	脚部片		

表4　出土遺物観察表4

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
165	25号石蓋土坑	土師器	高坏	復元底径 10 残高 4.4	内：オサエ・ヨコナデ 外：ハケメ・ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～6㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	脚部片		
166	25号石蓋土坑	弥生土器	高坏	残高 12.1	内：シボリ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR7/6	脚部片		
167	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	復元頸部径 10.2 残高 14.1	内：? 外：ナデ→ヘラ先施文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：明赤褐 5YR5/6	頸部～体部	○	
168	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	残高 5.5	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～5.5㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～肩部片	○	
169	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	残高 7.0	内：オサエ→ナデ・ハケメ 外：ヘラミガキ・ケズリ→羽状文	良好	～6㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：明赤褐 5YR5/6	肩部～胴部片	○	
170	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	残高 4.5	内：オサエ・シボリ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：橙 7.5YR6/6	肩部～胴部片		
171	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	残高 4.0	内：オサエ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	胴部片		
172	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	壺	残高 9.0	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ	良好	～7㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	胴部片		
173	34号石棺・33号石蓋土坑周辺	弥生土器	高坏	復元脚部径 12.0 残高 1.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	脚部片		
174	SK1	弥生土器	高坏	復元口径 22.0 残高 2.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部片		
175	SK2	弥生土器	壺	残高 6.7	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→ハケメ→羽状文	良好	～3.5㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：橙 7.5YR7/6	肩部片	○	
176	SK2	弥生土器	高坏	復元口径 20.4 残高 2.1	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部片		
177	SK2	弥生土器	甕	底径 6.4 器高 6.2	内：ナデ 外：ナデ・ハケメ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR6/4	底部～胴部片	○	
178	電柱北側周辺	鉄製品	鉄針	残長さ 9.1　幅 2.9 厚 0.4～0.7	－	－	－	－	両端部欠損		
179	電柱北側周辺	石製品	石英片	残長 2.0 残幅 1.3 厚 0.35 重量 1.14 g	－	－	－	内外：灰白 2.5Y8/1	完形		
180	電柱北側周辺	石製品	軽石	残長 4.9 残幅 4.9 厚 3.0 重量 9.12 g	－	－	－	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	1/3 形残存		
181	カクラン	弥生土器	壺	復元口径 29.4 残高 42.0	内：オサエ→ヘラミガキ 外：オサエ→ハケメ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：黄橙 7.5YR7/8	口縁～胴部片	○	
182	カクラン	弥生土器	壺	体部径 28.0 残高 2.7	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→重弧文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	胴部片	○	
183	カクラン	弥生土器	壺	復元底径 13.2 残高 25.0	内：オサエ→ナデ 外：ハケメ→ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：黄橙 10YR7/8 外：黒褐 10YR3/1 明黄褐 10YR6/8	胴部～底部片 全体の約 1/3	○	焼成後穿孔あり
184	カクラン	弥生土器	壺	底径 8.5 残高 10.0	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ハケメ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/8 外：明黄褐 10YR7/6	胴部～底部片 全体の約 1/3	○	
185	カクラン	弥生土器	鉢	復元口径 29.0 残高 13.0	内：ナデ→ヘラミガキ 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/8 外：橙 7.5YR6/6	口縁部～肩部片		
186	カクラン	弥生土器	壺	復元口径 12.2 残高 8.2	内：オサエ→ナデ 外：ハケメ→ナデ・ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：黄橙 10YR6/4	口縁部～胴部片	○	
187	カクラン	土師器	高坏	脚部径 8.0 残高 1.5	内：ナデ 外：ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	脚部片		
188	カクラン	ガラス瓶	ラムネ瓶	底径 5.4 残高 16.6	－	－	－	－	口縁部のみ欠損		昭和 20 年頃の物か？
189	カクラン	ガラス瓶	ハッカ瓶	口径 2.0、底径 4.0 器高 5.3	－	－	－	－	蓋無し完形		
190	カクラン	ガラス瓶	ペプシコーラ瓶	口径 2.8 底径 5.4 残高 23.8	－	－	－	－	完形		
191	カクラン	ガラス瓶	ファンタ瓶	復元口径 3.2 底径 7.5 残高 30.2	－	－	－	－	全体の約 5/8		
192	表採	弥生土器	壺	復元口径 16.0 残高 5.0	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁～頸部片		
193	表採	弥生土器	壺	復元口径 14.1 残高 2.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部片		
194	表採	弥生土器	高坏	残高 19.0	内：オサエ→ナデ 外：ナデ	やや不良	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 外：にぶい黄橙 10YR6/4	脚部片	○	
195	定村貴二氏寄贈資料	刻目突帯文土器	深鉢	復元口径 22.6 残高 9.1	内：ナデ→ヘラ条痕 外：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ→刻目	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P8　第 2 図 -4
196	定村貴二氏寄贈資料	擬朝鮮系無文土器	甕	復元口径 16.3 残高 5.4	内：オサエ・ヨコナデ 外：ハケメ・ヨコナデ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：橙 7.5YR6/6 黒 N2	口縁部片	○	
197	定村貴二氏寄贈資料	擬朝鮮系無文土器	甕	復元口径 17.3 残高 4.9	内：オサエ・ヨコナデ 外：ハケメ・ヨコナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：明黄褐 10YR7/6 外：にぶい黄橙 10YR6/4 褐灰 10YR5/1	口縁部片	○	
198	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 8.5 底径 5.0 残高 12.6	内：オサエ→ナデ 外：ケズリ→ヘラミガキ→三角文	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：灰褐 5YR4/3	口縁端部欠損		岡山大学所蔵 九州考古学 25・26 号 P8　第 2 図 -1
199	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 7.9 底径 11.4 器高 5.6	内：不明 外：オサエ→ナデ→ヨコナデ・ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒・金雲母	内外：灰白 10YR8/2	体部～底部 欠損部分石膏で復元	○	石膏でほぼ復元 九州考古学 25・26 号 P9　第 3 図 -11
200	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 7.3	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ヘラミガキ→三角文	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR6/4	頸部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -13
201	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 18.8 残高 5.6	内：オサエ 外：オサエ→ヘラミガキ→三角文	不良	～3㎜の透白色砂粒	内：浅黄橙 10YR8/4 外：にぶい黄橙 10YR7/4	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -9
202	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 6.6	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→四重弧文	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：明黄褐 5YR5/6	頸部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9　第 3 図 -12
203	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 10.6 残高 5.4	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文・二枚貝弧文	やや不良	～2㎜の透白色砂粒	内：黄灰 2.5Y5/1 外：にぶい黄橙 10YR6/4	体部片	○	
204	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 10.4 残高 3.5	内：オサエ→ナデ 外：ナデ→二枚貝施文	不良	～1.5㎜の透白色砂粒	内：にぶい黄褐 10YR5/4 灰 5Y4/1 外：にぶい黄橙 10YR6/4	肩部～胴部	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -21
205	定村貴二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 10.0 残高 2.9	内：オサエ 外：オサエ→ヘラミガキ→羽状文・弧文	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR7/6 外：橙 7.5YR6/6	肩部片	○	

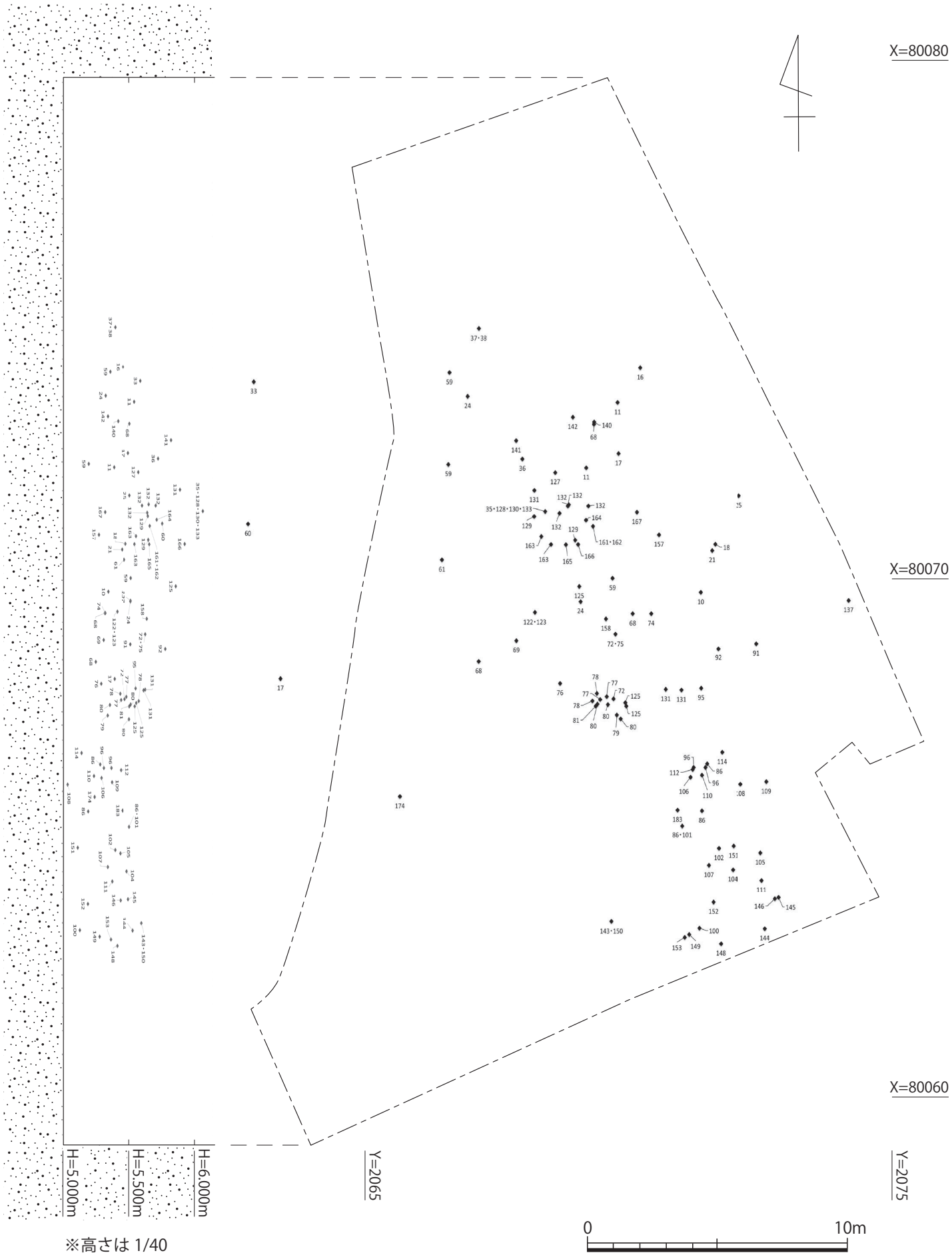
表 5　出土遺物観察表 5

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
206	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 23.8 残高 3.6	内：オサエ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～5㎜の白色砂粒	内：橙 10YR7/6 外：橙 7.5YR6/6	肩部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -7
207	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 14.0 残高 4.5	内：オサエ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～4㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR7/6 外：橙 7.5YR6/7	頸部～鋼部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -2
208	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 34.2 残高 6.2	内：ナデ 外：ナデ→羽状文	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -5
209	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 14.0 残高 3	内：オサエ 外：オサエ→ナデ→羽状文	良好	～4㎜の白色砂粒	内：明黄褐 10YR7/6 外：橙 5YR7/8	胴部片	○	
210	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 12.0 残高 6.9	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	不良	～4㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：橙 7.5YR7/6 褐灰 10YR 4/1	頸部～鋼部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -4
211	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 14.4 残高 2.2	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR7/4	体部片	○	
212	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 9.4 残高 3.9	内：オサエ 外：オサエ→ヘラミガキ→羽状文	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：橙 5YR7/6	頸部～鋼部片	○	
213	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 11.0 残高 4.1	内：オサエ 外：ヘラミガキ→羽状文	やや不良	～5㎜の透白色砂粒	内：黄橙 7.5YR7/8 外：橙 7.5YR7/6	頸部～鋼部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -3
214	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 6.6	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：黒褐 5YR2/1 外：明黄褐 10YR6/6	頸部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -1
215	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 14.6 残高 5.4	内：オサエ 外：オサエ→ヘラミガキ→羽状文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	胴部片	○	
216	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 12 残高 5.2	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：にぶい黄橙 7.5YR7/6	体部 1/4 程度	○	
217	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 13.6 残高 2.8	内：オサエ→ナデ 外：ナデ→羽状文	やや不良	～4㎜の透白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR6/4 外：にぶい橙 7.5YR5/3	肩部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -16
218	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	口径 6.5 底径 5.6 器高 8.3	内：オサエ・ヘラミガキ 外：オサエ→ナデ→ヘラミガキ	良好	緻密～1㎜の白色砂粒	内外：黄橙 7.5YR7/8	完形	○	九州考古学 25・26 号 P8 第 2 図 -2
219	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 4	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→二枚貝重弧文	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR7/4 外：にぶい橙 7.5YR6/4	体部片	○	
220	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 21.6 残高 8.9	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→二枚貝施文	やや不良	～2.5㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6、灰 5Y5/1 外：にぶい黄橙 10YR6/4	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -21
221	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 8.4	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→赤色顔料塗布→木葉文	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい褐 7.5YR5/4 外：赤褐 5YR4/6 にぶい橙 7.5YR6/4	頸部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -27
222	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 29.2 残高 3.3	内：オサエ→ハケメ 外：オサエ→ナデ→櫛文	良好	～1㎜の白色砂粒	内：黄橙 7.5YR7/8 外：橙 7.5YR7/6	胴部片	○	
223	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 13.0 残高 2.2	内：ハクリ 外：ナデ→三角文	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -10
224	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 14.8 残高 3.4	内：ハケメ 外：ヘラミガキ→三角文	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい褐 10YR6/4 外：橙 5YR6/6	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -14
225	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 9.8 残高 3.7	内：オサエ 外：オサエ→ナデ→三角文	やや不良	～2㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -15
226	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 10.4 底径 5.7 器高 14.2	内：ミガキ 外：ナデ・ヘラミガキ→ヘラ先施文	良好	～4㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6 褐灰 10YR5/1	口縁部、体部一部欠損	○	焼成後穿孔か？ 九州考古学 25・26 号 P8 第 2 図 -6
227	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 13.4 残高 6.6	内：ヨコナデ→ナデ 外：ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや不良	～5㎜の白色砂粒	内：明黄褐 10YR6/6 外：橙 7.5YR6/6	口縁部～頸部 1/4		
228	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 13.2 残高 10.2	内：オサエ→ナデ→三角文 外：ハケメ→ナデ・ヘラミガキ→三重弧文	良好	～2㎜の透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部～肩部片	○	九州考古学 25・26 号 P8 第 2 図 -9
229	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 10.5	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ→赤色顔料塗布→羽状文・重弧文	良好	～5㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：明褐 7.5YR5/6	頸部～胴部片	○	赤色顔料塗布 九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -19
230	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 6.3	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ→羽状文	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部～胴部片	○	
231	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 13.0 残高 7.7	内：オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→二枚貝施文	不良	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：明黄褐 10YR7/6	肩部～胴部 1/8	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -23
232	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 5.2	内：シボリ→オサエ→ナデ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：褐灰 10YR4/1 外：明黄褐 10YR6/6	頸部～胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -24
233	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 5.1	内：オサエ→ナデ 外：オサエ・ナデ・二枚貝施文	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR6/4 外：にぶい黄橙 10YR7/3	胴部片	○	
234	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 26.6 残高 7.1	内：ナデ 外：ヘラミガキ→ヘラ先施文	やや不良	～4㎜の白色砂粒	内：にぶい褐 7.5YR6/6 外：明黄褐 10YR6/6	肩部～胴部	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -6
235	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 4.4 残高 6.2	内：オサエ 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	1/4 頸部～胴部		
236	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 11.4 残高 4.1	内：オサエ 外：ヘラミガキ→羽状文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：黄橙 10YR8/6	胴部片	○	九州考古学 25・26 号 P9 第 3 図 -29
237	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 12.0 残高 5.2	内：オサエ→ヘラミガキ→三角文 外：ヘラケズリ→ナデ→ヘラミガキ	良好	～5㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	口縁部～頸部片	○	九州考古学 25・26 号 P10 第 4 図 -36
238	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 19.4 残高 5	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	口縁部片	○	
239	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 12.8 残高 5	内：ヘラミガキ→三角文 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙 5YR7/6 外：にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部～頸部 1/8	○	九州考古学 25・26 号 P10　第 4 図 -35
240	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 18.6 残高 1.5	内：ヨコナデ→ヘラミガキ→三角文 外：オサエ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部～頸部 1/4	○	九州考古学 25・26 号 P10 第 4 図 -34
241	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 10 残高 2.0	内：ヨコナデ 外：ミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 10YR7/4	口縁部片		
242	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 14.6 残高 4.1	内：オサエ→ヘラミガキ 外：オサエ→ハケメ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：黄橙 7.5YR7/8 褐 10YR4/1 外：褐灰 10YR4/1 黄橙 10YR 7/8	口縁部 1/3	○	
243	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 8.6 残高 8.3	内：オサエ 外：オサエ→ナデ	不良	～2㎜の白色砂粒 ～1㎜の雲母	内：黄灰 2.5Y4/1 外：にぶい黄橙 10YR7/4	頸部片	○	
244	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 9.4 残高 3.8	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	頸部 1/5 程度	○	
245	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 11.2 残高 6.6	内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	頸部 1/5 程度		
246	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 9.0 残高 4.9	内：ナデ 外：ヘラケズリ→ナデ→羽状文	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR6/6	頸部片	○	九州考古学 25・26 号 P10 第 4 図 -30

表 6　出土遺物観察表 6

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
247	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 13.6 残高 5.2	内：ナデ 外：ヘラミガキ	やや不良	～2㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR7/4	頸部～体部片		
248	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 13.2 残高 6.5	内：ナデ→ナデ 外：オサエ→ハケメ→ナデ	やや不良	～5㎜の透白色の礫	内外：明黄褐 10YR7/6	頸部下 1/5 程度		
249	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元頸部径 10.0 残高 6.2	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ハケメ→ナデ	やや不良	～3㎜の白色砂粒	内：橙 5YR6/6 外：にぶい橙 7.5YR7/4	頸部片	○	
250	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 28.6 残高 3.6	内：オサエ 外：オサエ→ハケメ	不良	～2㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR7/1 褐灰 10YR4/1 外：にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 1/6	○	
251	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 18.6 残高 1.5	内：ヨコナデ→三角文？ 外：ヨコナデ	良好	～6㎜の透白色砂粒	内外：にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部片	○	九州考古学25・26号 P10 図 4-31
252	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 26.4 残高 2.4	内：オサエ→ナデ 外：オサエ	不良	～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 1/10 程度	○	
253	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 21.6 残高 2.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→オサエ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	口縁部片		
254	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 2.0 残高 3.5	内：ヨコナデ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～1㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	口縁部片		
255	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 21.6 残高 6.5	内：ヨコナデ→ナデ 外：ヨコナデ→ナデ	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：明黄褐 10YR6/8 外：橙 7.5YR6/6	口縁部～頸部 1/4		
256	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 25.6 残高 3.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	口縁部片		
257	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 25.2 残高 1.9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	不良	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	口縁部片		
258	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元底径 7.0 残高 4.4	内：オサエ 外：オサエ→ケズリ	やや不良	～3㎜の白色砂粒	内外：灰黄褐 10YR6/2	底部 1/3 程度		
259	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	底径 6.0 残高 7.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ケズリ→ミガキ	やや不良	～2㎜の白色砂粒 ～4㎜の透白色砂粒	内：明黄褐 10YR7/6 外：にぶい黄橙 10YR7/4	底部～体部片		
260	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	鉢	復元底径 4.1 残高 2.6	内：ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	底部片		
261	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元底径 8.0 残高 6.1	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内：褐灰 10YR6/1 にぶい橙 7.5YR7/4 外：橙 5YR6/6	底部 1/3 程度		
262	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	底径 8.4 残高 5.8	内：ナデ 外：オサエ→ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：黄灰 2.5YR5/1 外：橙 5YR6/6	底部片		
263	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	底径 8.5 残高 4.8	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ヨコナデ→ハケメ	良好	～3㎜の白色砂粒 ～1㎜の金雲母	内：にぶい黄橙 10YR6/3 外：橙 5YR6/6	底部片		
264	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元口径 13.6 残高 5.1	内：ヨコナデ→オサエ 外：ヨコナデ→オサエ	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部～胴部片		
265	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	鉢	復元口径 22.0 残高 6.6	内：ヨコナデ→オサエ→ナデ 外：ヨコナデ→オサエ→ハケメ	不良	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR7/4 外：黄橙 10YR6/4	口縁部～体部片	○	
266	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元頸部径 12.0 残高	内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：褐灰 7.5YR5/1 外：〃、にぶい橙 7.5YR6/4	頸部～体部 1/10 程度	○	
267	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元口径 22.6 残高 4.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→ハケメ	不良	～2㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 10YR8/3 外：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部片	○	
268	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元口径 27.4 残高 4.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→ハケメ？	不良	～2㎜の白色砂粒 ～5㎜の透白色砂粒	内：橙 7.5YR6/6 外：〃、褐灰 7.5YR5/1	口縁部～胴部 1/8		
269	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	高坏	復元底径 8.8 残高 9.5	内：オサエ→ナデ・ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6	坏部～脚部片	○	2ヶ所穿孔あり 九州考古学25・26号 P8 第2図 -8
270	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	坏	口径 9.4 底径 4.7 器高 6.9	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ハケメ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 7.5YR7/6 褐灰 7.5YR4/1	完形	○	九州考古学25・26号 P8 第2図 -3
271	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	甕	復元口径 19.6 残高 6.1	内：ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：黄褐 10YR5/6	口縁部～頸部片		
272	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 24.6 残高 4.3	内：ナデ 外：ナデ→ヘラミガキ	やや不良	～2㎜の透白色砂粒	内外：明黄褐 10YR6/6	口縁部～頸部 1/4		
273	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 12.8 残高 4.0	内：ヨコナデ→オサエ→ナデ 外：ヨコナデ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：黄橙 10YR5/6	口縁部～頸部片	○	
274	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 14.4	内：ハケメ→オサエ・ヘラミガキ・ナデ 外：ハケメ→ナデ・ヘラミガキ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：黄橙 10YR8/6 褐灰 10YR5/1 外：黄橙 7.5YR8/8	口縁部～肩部片	○	
275	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元体部径 12.1 残高 5.7	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内：橙 5YR7/6 外：にぶい黄橙 10YR7/3	体部 1/8 程度		
276	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	高坏	復元口径 14.2 残高 3.5	内：オサエ→ナデ 外：ナデ→羽状文	やや不良	～1㎜の透白色砂粒	内：橙 2.5YR6/6、 にぶい橙 7.5YR6/4 外：明赤褐 2.5YR5/6	口縁部～体部片	○	九州考古学25・26号 P10 第4図 -33
277	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	脚付鉢	底径 7 残高 12.4	内：ナデ 外：ハケメ→ミガキ→ケズリ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR7/4	脚部～体部片	○	
278	江島氏寄贈品	弥生土器	鉢	口径 13.6 器高 5.5	内：オサエ・ナデ 外：ハケメ→ヘラケズリ	良好	～1㎜の白色砂粒 ～3㎜透白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/4 外：にぶい黄橙 10YR4/2 黒褐 10YR3/1	完形	○	副葬品
279	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	高坏	復元底径 15.2 残高 6.1	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ナデ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内外：明黄褐 10YR7/6	脚部 1/8		
280	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	脚付鉢	復元底径 11.6 残高 3.7	内：ヘラケズリ→ヘラミガキ 外：ヘラケズリ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6	脚部 1/6		
281	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	脚付鉢	復元底径 8.8 残高 4.9	内：オサエ→ナデ 外：オサエ→ハケメ・ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR6/4	脚部片		
282	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元底径 8 残高 4.4	内：オサエ 外：オサエ→ナデ	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR6/3 外：にぶい黄橙 10YR7/4	底部片		
283	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	復元口径 19.0 残高 5.5	内：ナデ 外：ナデ	不良	～2㎜の透白色砂粒	内：明褐灰 7.5YR7/2 外：にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部片		
284	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	残高 12.4	内：ナデ 外：オサエ→ハケメ・ケズリ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：明赤褐 2.5YR5/8 暗赤灰 2.5YR3/1	頸部～体部	○	
285	定村責二氏寄贈資料	弥生土器	壺	口径 12 器高 14.3	内：オサエ→ナデ・ケズリ 外：オサエ→ハケメ・ナデ	良好	～6㎜の透白色砂粒	内外：橙 7.5YR6/6 黒 10YR2/1	完形	○	山陰系
286	定村責二氏寄贈資料	古式土師器	壺	復元口径 16.0 残高 3	内：ヨコナデ→ナデ 外：ヨコナデ→ナデ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部片	○	畿内系
287	定村責二氏寄贈資料	土製品	土錘	長さ 10.1 幅 5.3 孔径 1.6	－	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 10YR7/4	完形	○	

表 7　出土遺物観察表 7



第 88 図　長井遺跡　遺物出土位置図（1/100）

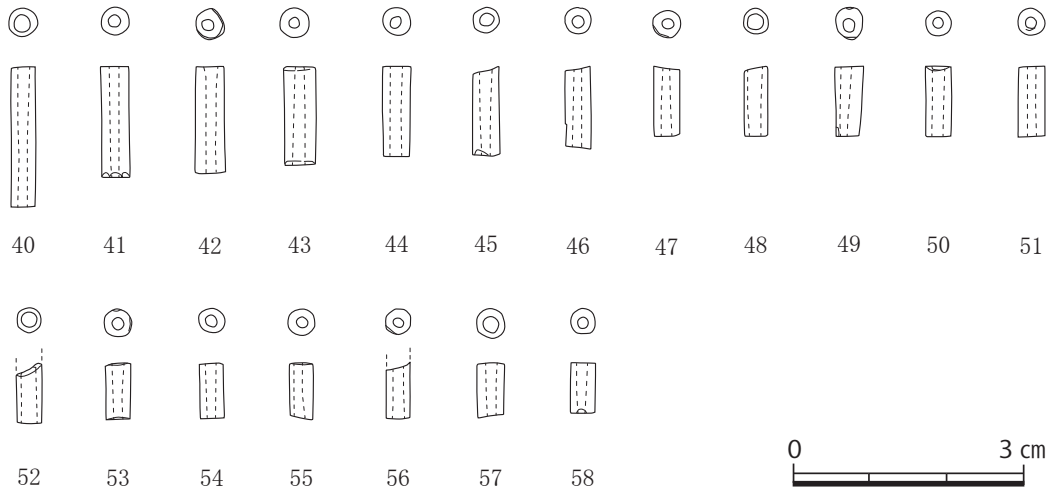
第 4 章　分析結果

第 1 節　長井遺跡 3 号箱式石棺墓出土管玉について

谷澤　亜里
独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所

1. 碧玉製管玉（第 89 図・第 8 表）

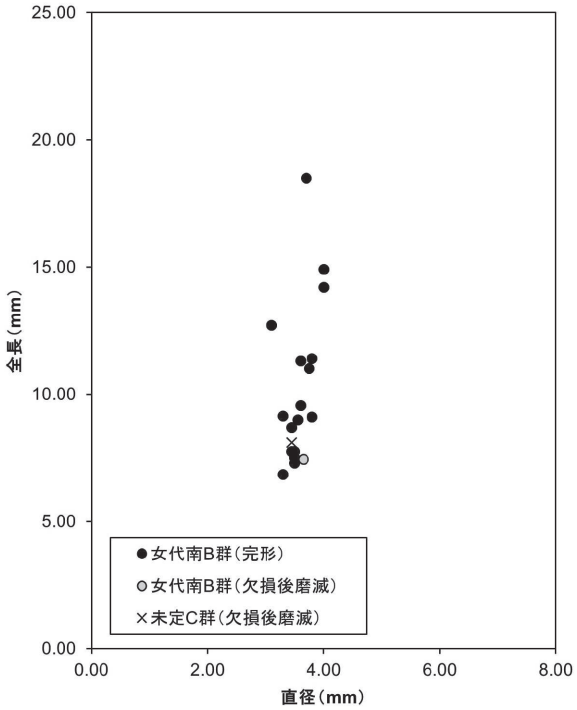
19 点が出土した。目視からであるが、やや褐色味を帯びた淡緑色～濃緑色の 18 点（40 ～ 51・53 ～ 58）が「女代南 B 群」製、やや青みを帯びた色調の 1 点（52）が「未定 C 群」製と判断される。孔内壁に回転痕を残すものが多く、全て石針穿孔とみられる。法量は直径 3 ～ 4mm、全長 6 ～ 19mm におさまる小型品である。未定 C 群製の 1 点（52）と女代南 B 群製のうちの 1 点（56）は一方の端面が欠損後磨滅している。



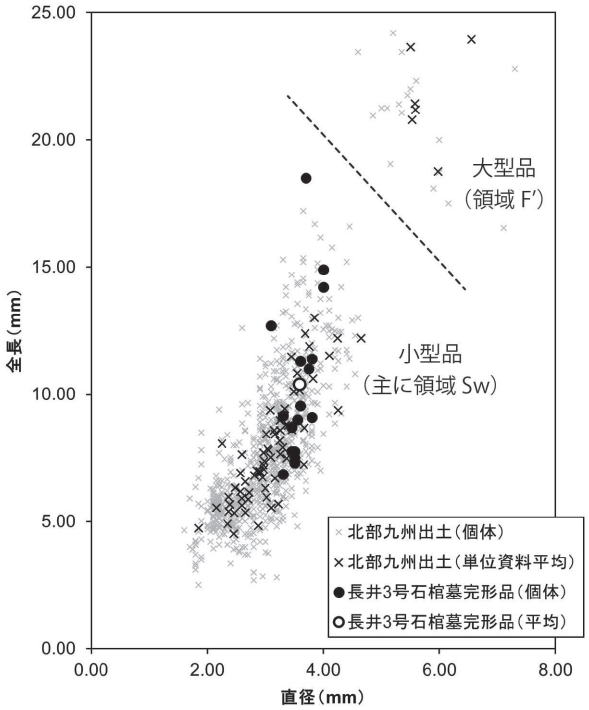
第 89 図　3 号石棺出土管玉（1/1）

表 8　3 号石棺墓出土管玉一覧

番号	直径（mm）	全長（mm）		石材（目視判断）	穿孔具	備考
40	3.70	18.50		女代南 B 群	石針	
41	4.00	14.90		女代南 B 群	石針	
42	4.00	14.20		女代南 B 群	石針	
43	3.10	12.70	（残存）	女代南 B 群	石針	一端欠損後磨滅
44	3.80	11.40		女代南 B 群	石針	
45	3.60	11.30		女代南 B 群	石針か	孔内回転痕不明瞭
46	3.75	11.00		女代南 B 群	石針	
47	3.60	9.55		女代南 B 群	石針	
48	3.30	9.15		女代南 B 群	石針	
49	3.80	9.10		女代南 B 群	石針	
50	3.55	9.00		女代南 B 群	石針	
51	3.45	8.70		女代南 B 群	石針	
52	3.45	8.10	（残存）	未定 C 群	石針	一端欠損後磨滅
53	3.50	7.75		女代南 B 群	石針	
54	3.45	7.75		女代南 B 群	石針	
55	3.50	7.50		女代南 B 群	石針	
56	3.65	7.45		女代南 B 群	石針	
57	3.50	7.30		女代南 B 群	石針か	孔内回転痕不明瞭
58	3.30	6.85		女代南 B 群	石針	



第 90 図　長井 3 号石棺墓出土管玉の法量分布



第 91 図　北部九州出土女代南 B 群製管玉の法量分布

2．長井遺跡 3 号石棺墓出土管玉の位置付け

長井遺跡 3 号石棺墓から出土した管玉 19 点はいずれも石針穿孔で、女代南 B 群製とみられる 18 点と、未定 C 群製とみられる 1 点からなる。前者は弥生時代中期の日本列島で製作された管玉、後者は舶載品のいわゆる「半島系」管玉に相当する（大賀 2011）。ここでは、このような管玉のセットの考古学的な位置づけを明確にし、長井遺跡における出土の意義を考えたい。

(1)「女代南 B 群」製管玉の分類と長井遺跡出土管玉

3 号石棺墓出土管玉のセットで主体となる石材である「女代南 B 群」[1] は、弥生時代中期に碧玉製管玉の素材として広く用いられるものである。原石産地は北陸西部に求められる可能性が高く、北陸西部から近畿北部を経て山陰に至る日本海側と、琵琶湖周辺から淀川流域を経て大阪湾北岸にかけての地域へ管玉素材として流通したことが確認されている（大賀 2010）。これらの玉作遺跡の多くでは穿孔具として石針がみられ、消費地出土製品においても孔内に石針穿孔によるとみられる痕跡を残すものが殆どであることからも、管玉素材としての利用のピークが工具の鉄器化以前にあることを確認できる。なお、北部九州では女代南 B 群を素材に用いる管玉生産遺跡は確認されていない。

女代南 B 群製の管玉の完成品は、大賀克彦により直径と全長の分布傾向の分析から法量分布の「領域」が複数設定されている。具体的には、まず直径 4 ～ 5mm 程度を境に大きく小型品と大型品に区分される。そのうえで、小型品では「西日本」出土のものはより寸詰まりで（「領域 Sw」）、「東日本」出土のものはより細長いプロポーションを呈する（「領域 Se」）と指摘されている [2]。また、大型品では、「東日本」出土のものは直径 4 ～ 16mm に及びばらつきが大きいのに対し（「領域 F」）、「西日本」では大型品でも 6mm 以内程度におさまる（「領域 F'」）（大賀 2010）。

以上の 4 つの規格について、大賀は領域 Sw のものと領域 F' のものを「西日本系」、領域 Se のものと領域 F のものを「東日本系」と呼んでいる（大賀 2011）。北陸西部から近畿にかけてみられる玉作遺跡では、出土した未成品の法量の傾向から、主に領域 Se の管玉が製作されていたと考えられているが、領

域 Sw に対応する良好な生産関連資料は確認されておらず、このタイプのものは製品の分布の顕著な地域[3]のどこかに未知の生産遺跡がある可能性が高いとされる（大賀 2010）。ただし、この「領域 Se」と「領域 Sw」は、個体レベルでは法量の分布がかなり重複しており、良好な単位資料[4]でない出土事例はどちらに帰属するか判別が難しいこともある。また単位資料レベルでみた場合でも、大賀（2010）が例示したように「西日本」から領域 Se の、「東日本」から領域 Sw のものが出土する事例がある。以上を考慮すると、この二つの法量領域やその生産・流通圏は截然と別れていたとは言い難い。管玉のプロポーションの範型がグラデーションを示しながら地理的に変化している可能性や、石材の流通に伴い完成品も広域流通した可能性などを考慮しておく必要があろう。

長井遺跡出土の女代南 B 群製管玉は全て小型品で、そのなかでもが直径 3 ～ 4mm とやや大きい（第 90 図）。プロポーションとしては細長い印象を与える個体もあるものの、大賀の「領域 Sw」に相当するセットと理解できる。類似した法量分布傾向をもつセットは、北部九州では他にも複数例が確認できる（第 91 図）[5]。

（2）長井遺跡 3 号石棺墓出土管玉の帰属時期

女代南 B 群製で石針穿孔された管玉は弥生時代中期に特徴的なものであるが、北部九州地域では、甕棺編年との対応関係をより細かく知ることができる。佐賀県中原遺跡や宇木汲田遺跡を中心とする資料から、弥生時代前期末～中期初頭に少量が出現しているが、出土のピークは汲田式～須玖式甕棺の時期にあり、立岩式期には出土が大幅に減少し、後期にはほとんどみられなくなることが指摘されている（小松編 2010）。

女代南 B 群製の管玉が大幅に減少する立岩式段階は、北部九州で鉛バリウムガラス製のガラス管玉が特徴的にみられる時期であり、後期には管玉に代わってガラス小玉が多量に流通するようになる。ただし、後期に入って女代南 B 群製の管玉が全くみられなくなるわけではない。例えば後期前半の佐賀県石動四本松遺跡 SJ032 甕棺墓では出土した管玉 5 点がいずれも石針穿孔の女代南 B 群製管玉であった。他の事例を考慮しても、後期でも前半～中頃までは中期に製作された女代南 B 群製管玉が若干量残存していたと考えられる。また、中原遺跡 SP13231 木棺墓のように素材は女代南 B 群だが鉄錐穿孔され、製作時期が後期に下るとみられる管玉も存在しており、このような事例は、管玉生産地の北陸西部の一部で、後期に入っても女代南 B 群が素材として用いられた結果として理解できる。

長井遺跡 3 号石棺墓出土の女代南 B 群製管玉は石針穿孔されていることから製作時期は弥生時代中期にあることが確実で、まとまったセットを構成することから、副葬時期も汲田式～須玖式甕棺に併行する時期におさまる可能性が高いと考えたい。

（3）長井遺跡 3 号石棺墓出土管玉の意義

北部九州は弥生時代開始期に半島から列島へと整美な円筒形の管玉が伝播する際の窓口となる地域であるが、まとまったセットでの管玉の副葬が顕著になるのは、弥生時代前期末～中期初頭からといえる。この段階の管玉は、福岡県吉武高木遺跡で典型的にみられるように、列島外で製作された未定 C 群製の「半島系」が主体であり、青銅器の副葬開始との連動も特徴的である。その後、汲田式～須玖式期に女代南 B 群製の管玉が主体に転換する背景には、半島からの管玉の流入量減少も関わっていると考えられる。大賀（2014）は、前期末～中期初頭の半島系管玉は福岡平野周辺から佐賀平野にかけての地域に集中するのに対し、中期前半～中頃の女代南 B 群製管玉は唐津平野に圧倒的に集中するほか玄界灘沿岸部での分布が目立つという分布傾向の差を指摘している。このような分布の違いは、大賀も指摘するように、半島系は製品が半島南部から、女代南 B 群製のものは素材もしくは製品が本州以東からもたらされるという獲得経路の違いに起因していると考えたい[6]。

本州以東と脊振山地周辺の諸地域の間に位置する遠賀川以東地域では、小倉城二ノ丸家老屋敷跡石棺墓

Ⅳ-1 号や、高津尾遺跡 3 区 20 号土壙墓などで女代南 B 群を主体とする管玉の副葬が認められる。長井遺跡での管玉副葬は、これらと同様に、本州以東から北部九州へと管玉の素材や製品がもたらされる経路上の事例として位置づけることができよう。弥生時代中期における管玉の広域流通動向と関連付けた理解が可能な資料といえる。

註

1） この名称は、藁科哲男が女代神社南遺跡出土資料の蛍光 X 線分析結果をクラスター分析した際に析出された A ～ C 群のうち B 群にあたることによる（藁科 1994）。なお、本稿の「女代南 B 群」は、藁科が分析で判定する「女代南（B）遺物群」そのものではなく、考古学的な情報も加味して再解釈を加えた大賀（2010）の理解に従っている。

2） ただし、「西日本」と「東日本」の境界は、日本海側では鳥取県中央部、瀬戸内側では岡山県と兵庫県の県境周辺とされている（大賀 2005）点に注意が必要である。

3） 具体的な候補として、鳥取県西部～島根県東部、淀川流域～大阪湾北岸、北部九州の唐津平野が挙げられている（大賀 2010）。

4）「製作時に付加されたと考えられるいくつかの重要な形質的属性に関して、廃棄時においてもその凝集性を維持しており、かつその凝集性が製作時からのセット性に由来するという説明に同意が得られるような、同種の個体から構成される集合」（大賀 2001）と定義される。大賀は、管玉の法量分析にあたっては、一括資料内でよく類似する個体群を一度「単位資料」にまとめたうえで、単位資料ごとに法量の平均値を算出して比較するという方法を提案した。

5）第 2 図に使用した北部九州出土資料の出土遺跡と点数は以下の通りである。大友遺跡［2 次調査 14 号配石墓 1 点］宇木汲田遺跡［25 号甕棺墓 3 点、38 号甕棺墓 2 点、43 号甕棺墓 1 点、45 号甕棺墓 71 点、46 号甕棺墓 14 点、94 号甕棺墓 1 点、95 号甕棺墓 6 点、111 号甕棺墓 1 点、112 号甕棺墓 3 点、119 号甕棺墓 23 点、124 号甕棺墓 8 点］、中原遺跡［SJ11239 甕棺墓 5 点、SJ11240 甕棺墓 12 点、SJ11241 甕棺墓 4 点、SJ11249 甕棺墓 34 点、SJ11271 甕棺墓 9 点、SJ11290 甕棺墓 6 点、SJ13007 甕棺墓 5 点、SJ13050 甕棺墓 25 点、SJ13068 甕棺墓 5 点、SJ13092 甕棺墓 72 点、SJ13106 甕棺墓 8 点、SJ13107 甕棺墓 4 点、SJ13112 甕棺墓 3 点、SJ13118 甕棺墓 5 点、SJ13119 甕棺墓 6 点、SJ13123 甕棺墓 2 点、SJ13133 甕棺墓 4 点、SJ13134 甕棺墓 10 点、SJ13146 甕棺墓 33 点、SJ13200 甕棺墓 4 点、SJ13210 甕棺墓 3 点、SJ13220 甕棺墓 5 点、SJ13232 甕棺墓 6 点、SJ13233 甕棺墓 3 点、SJ13253 甕棺墓 4 点、SJ13277 甕棺墓 2 点、SJ13283 甕棺墓 4 点、SJ13289 甕棺墓 36 点、SJ13293 甕棺墓 2 点、SJ13295 甕棺墓 6 点、SJ13302 甕棺墓 11 点、SJ13310 甕棺墓 17 点、SJ13316 甕棺墓 6 点、SJ13319 甕棺墓 7 点、SJ13325 甕棺墓 4 点、SJ13330 甕棺墓 3 点、SJ13335 甕棺墓 2 点、SJ13336 甕棺墓 5 点、SJ13343 甕棺墓 5 点、SJ13355 甕棺墓 2 点、SJ13379 甕棺墓 2 点、SJ13384 甕棺墓 3 点、SJ13391 甕棺墓 7 点、SJ13400 甕棺墓 3 点］、木舟・三本松遺跡［68 号甕棺墓 19 点］、三坂七尾遺跡［23 号甕棺墓 9 点、31 号甕棺墓 2 点、33 号甕棺墓 3 点］、森園遺跡［SJ33 甕棺墓 56 点］、田熊石畑遺跡［2 号墓 4 点、4 号墓 67 点、7 号墓 28 点］、高津尾遺跡［3 区 20 号土壙墓 12 点］、小倉城二ノ丸家老屋敷跡［Ⅳ-1 号石棺墓 80 点、Ⅳ-3 号石棺墓 10 点、Ⅳ-1 号土器棺墓 3 点］。大友遺跡は大賀（2005）、中原遺跡は小松編（2010）に掲載のデータを用い、残りの資料は筆者の実見による計測値を用いた。実見にあたっては、以下の機関にお世話になりました。記してお礼申し上げます。伊都国歴史博物館、大野城市教育委員会、九州大学考古学研究室、（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室、佐賀県立博物館、宗像市教育委員会（五十音順）。

6）大賀はこれを「流通システム」の違いと表現しているが、両者とも分布への地理的要因の影響が大きく、流通のあり方自体に根本的な違いはないと考えたい。また、半島系管玉と女代南 B 群製管玉が共伴する事例もある点や、女代南 B 群が主体となる時期においても管玉と青銅器との共伴傾向がみられる点から、使用の場面でこの二種類の管玉は特に区別して扱われたわけではなかったと考えられる。

《参考文献》

・大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第 86 巻第 4 号，321-362 頁
・大賀克彦 2005「弥生時代における山陰系玉類の流通」『玉文化』第 2 号，37-52 頁
・大賀克彦 2010「女代南 B 群碧玉製管玉に関する認識」『中原遺跡』Ⅳ　佐賀県文化財調査報告書第 182 集　佐賀県教育委員会，280-293 頁
・大賀克彦 2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『弥生時代（上）』 講座日本の考古学 5　青木書店，707-730 頁
・大賀克彦 2014「田熊石畑遺跡木棺墓群出土の玉類」『国史跡田熊石畑遺跡』 宗像市文化財調査報告書第 71 集　宗像市教育委員会，178-186 頁
・小松譲（編）2010『中原遺跡』Ⅳ　佐賀県文化財調査報告書第 182 集　佐賀県教育委員会
・藁科哲男 1994『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』 平成 5 年度科学研究費補助金（一般研究 C）研究成果報告書

第２節 長井遺跡出土の弥生時代人骨

高椋　浩史
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

1. はじめに

福岡県行橋市に所在する長井遺跡から弥生時代に該当する人骨が出土した。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムは、発掘調査を実施した行橋市教育委員会から出土した人骨の調査の依頼を受け、現地に赴き、人骨の調査および取り上げをおこなった。

人骨は取り上げ後、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムへと搬送され、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

2. 分析資料と分析方法

（1）分析資料

長井遺跡からは、弥生時代に該当する成人骨 13 体、未成人骨 1 体の計 14 体が出土している。出土した人骨の形質を検討するための比較資料として、弥生時代のデータは山口県土井ヶ浜遺跡（九州大学医学部解剖学第二講座編，1988）、福岡県金隈遺跡（九州大学医学部解剖学第二講座編，1988）、福岡県隈・西小田遺跡（中橋，1993）を用い、縄文時代のデータは岡山県津雲貝塚（清野・平井，1928）のデータを用いた。

（2）分析方法

性別の判定は頭蓋と骨盤の観察に基づいて行った。頭蓋については眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起に注目し、Buikstra and Ubelaker (1994) の基準に拠った。また、骨盤については Buikstra and Ubelaker (1994)、Bruzek（2002）の方法に従った。また、計測値に基づく性別判定を Nakahasi and Nagai (1986) の方法に従って実施した。

年齢の判定は、頭蓋の縫合の閉鎖状況と歯の咬耗の観察に基づいて行った。頭蓋の縫合については Meindl and Lovejoy (1985) の方法に、歯の咬耗については栃原（1957）の方法に従った。なお、年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成２』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1 ～ 6 歳）、小児（7 ～ 12 歳）、若年（13 ～ 19 歳）、成年（20 ～ 39 歳）、熟年（40 ～ 59 歳）、老年（60 歳～）とする。

計測は主に Martin-Saller（1957）と馬場（1991）に従った。また、脛骨については一部、Vallois（1938）の方法を用いている。

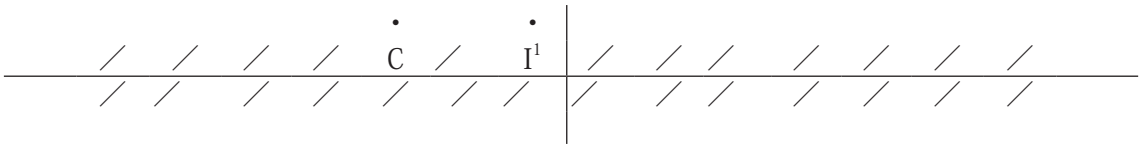
3. 分析結果

（1）人骨の残存部位・性別・年齢

【１号石棺下人骨】

〔残存部位〕（第 92、96、97 図）

頭蓋は残存していない。歯牙は一部残存しており、残存歯牙は以下の通りである。



／欠損　・遊離歯

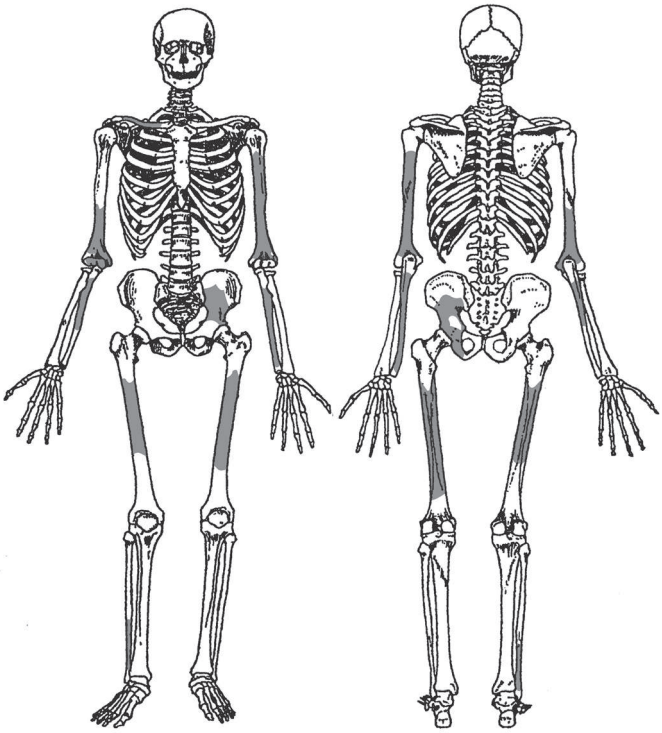
躯幹骨は残存していない。上肢は右鎖骨の一部、左右上腕骨の一部、左右尺骨の一部、手骨（右舟状骨、右有鈎骨、左右第１中手骨の一部、基節骨の一部）が残存している。下肢は、左寛骨の一部、左右大腿骨の一部、右腓骨の一部、足骨（左踵骨の一部、中足骨の一部）が残存している。

〔性別〕

性別は左寛骨の大坐骨切痕の角度が狭いため、男性と判定した。

〔年齢〕

歯牙の咬耗度は栃原（1957）の２°ｂであることから、熟年と推定した。



第 92 図　１号人骨の残存部位

【３号人骨】

〔残存部位〕

頭蓋は左右頭頂骨の一部と後頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨は残存していない。四肢骨は部位不明の長骨片が残存している。

〔性別〕

性別は不明である。

〔年齢〕

年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【16 号人骨】

〔残存部位〕

頭蓋は前頭骨の一部、右頭頂骨の一部、右側頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨、四肢骨は残存していない。

〔性別〕

性別は不明である。

〔年齢〕

年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【17 号人骨】

〔残存部位〕

頭蓋、歯牙、躯幹骨は残存していない。右大腿骨の一部と左右脛骨の一部が残存している。

〔性別〕

性別は不明である。

〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【19 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋は左右頭頂骨の一部と後頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨は残存していない。大腿骨の一部と脛骨の一部が残存している。
〔性別〕
　性別は脛骨の計測値から、女性と判定した。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【20 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋は左右頭頂骨の一部と後頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨、四肢骨は残存していない。
〔性別〕
　性別は不明である。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【22 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋、歯牙、躯幹骨、上肢骨は残存していない。脛骨と腓骨の一部が残存している。
〔性別〕
　性別は不明である。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【24 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋、歯牙、躯幹骨、上肢骨は残存していない。足骨の一部（左踵骨の一部、左右距骨の一部、右舟状骨）が残存している。
〔性別〕
　性別は不明である。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【25 号人骨】
〔残存部位〕
　部位が特定できない骨片が数点残存している。

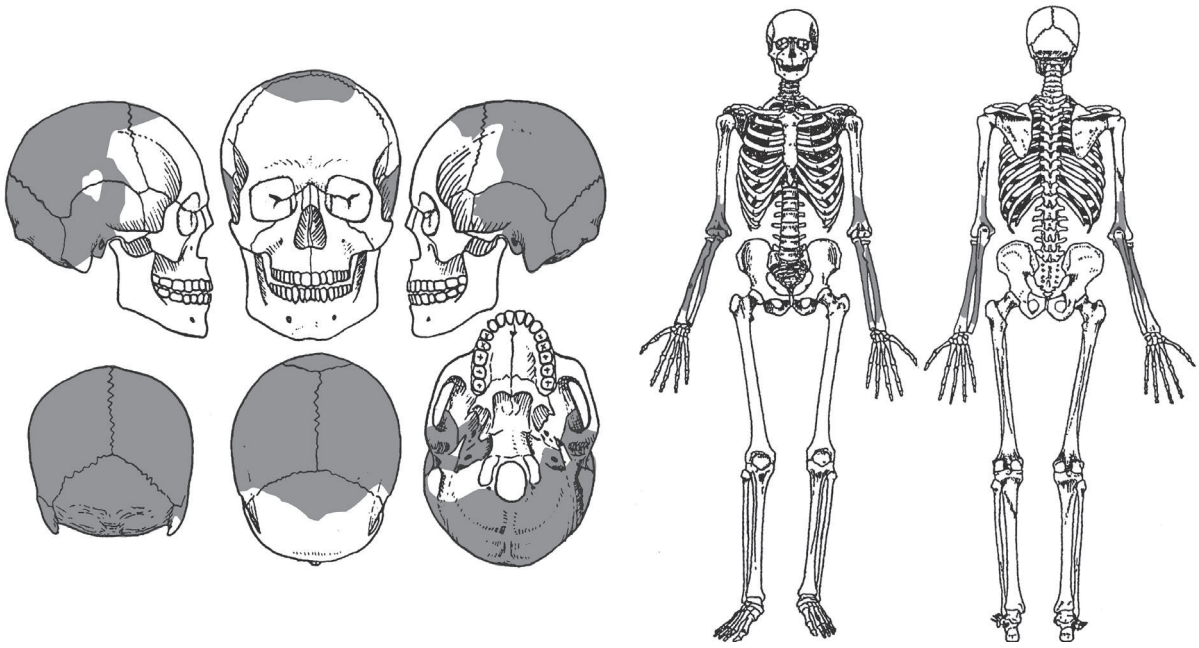
〔性別〕
　性別は判定することができなかった。
〔年齢〕
　年齢は推定することができなかった。

【28 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋は左側頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨、四肢骨は残存していない。
〔性別〕
　性別は判定することができなかった。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【29 号人骨】（第 93、98 ～ 100 図）
〔残存部位〕
　頭蓋は前頭骨の一部、左右頭頂骨の一部、左右側頭骨の一部、後頭骨の一部が残存している。歯牙は残存していない。
　躯幹骨は、胸椎の一部が 4 点、腰椎の一部 4 点が残存している。
　四肢骨は、左右上腕骨の一部、左右橈骨の一部、左右尺骨の一部、が残存している。
〔性別〕
　頭蓋の乳様突起が短く、その幅が小さい。また、外後頭隆起が弱いことから、女性と判定した。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。ただし、残存する頭蓋の縫合線がほぼ消失していることから、熟年以上の年齢である可能性が高い。
〔特記事項〕
　胸椎に骨棘が認められた（第 100 図）。

【30 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋は左頭頂骨の一部、後頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨は残存していない。四肢骨は、左上腕骨の一部、右脛骨の一部、腓骨片、足骨の一部（右踵骨の一部、右距骨の一部、右第 4・第 5 中足骨）が残存している。
〔性別〕
　性別は不明である。
〔年齢〕
　年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【31 号人骨】
〔残存部位〕
　頭蓋は後頭骨の一部が残存している。歯牙、躯幹骨、四肢骨は残存していない。



第 93 図　29 号人骨の残存部位

〔性別〕

性別は不明である。

〔年齢〕

年齢は成年以上と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【34 号人骨】

〔残存部位〕

頭蓋、歯牙、躯幹骨は残存していない。四肢骨は、左右大腿骨の一部、左右脛骨の一部が残存している。

〔性別〕

性別は不明である。

〔年齢〕

残存している四肢骨の太さから小児から若年期の未成人骨と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

(2) 人骨の形質的特徴

長井遺跡から出土した人骨は保存状態が良好ではなく、集団の形質的特徴を検討することができなかった。計測データを得られた個体の特徴について以下に報告する。なお、四肢骨については、基本的に左側の計測値を中心に報告する。

【上肢骨】(表 9 、10)

〔上腕骨〕

上腕骨の計測データは 1 号人骨から得られた。

(1 号人骨)

1 号人骨の上腕骨の中央最大径は 23mm で、弥生時代の他の比較集団の平均値と同程度で、縄文時代の津雲集団の平均値より小さい。中央最小径は 19mm で、他の比較集団の平均値より大きい。骨体断面示数は 82.6 で、他の比較集団の平均値より大きく、扁平性は弱いことがわかる。骨体最小周は 65mm で、

表９　長井遺跡と比較集団の上肢骨の計測値（男性）

	♂	長井 1号		土井ヶ浜（弥生）		金隈（弥生）		隈・西小田（弥生）		津雲（縄文）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨											
1	最大長	-	-	24	304.8	4	304.5	18	311.2	36	284.3
2	全長	-	-	20	301.1	2	304.0	13	306.2	35	280.6
5	中央最大径	-	23	50	23.1	12	23.6	61	23.7	50	24.1
6	中央最小径	-	19	50	17.7	12	17.1	61	17.9	50	17.8
7	骨体最小周	-	65	54	64.0	14	63.6	59	64.8	50	64.0
7a	中央周	-	68	46	67.8	12	68.3	58	68.7	50	69.3
6/5	骨体断面示数	-	82.6	50	76.5	12	72.7	61	75.7	50	73.9
7/1	長厚示数	-	-	24	20.9	4	21.9	16	20.4	36	22.7
橈骨											
1	最大長	-	-	19	236.0	12	238.8	16	241.8	27	230.6
2	機能長	-	-	18	223.5	9	220.0	11	227.2	28	217.4
3	最小周	-	-	39	42.7	17	42.6	38	43.0	38	44.0
4	骨体横径	-	-	39	17.4	17	17.1	39	17.2	42	17.1
5	骨体矢状径	-	-	39	12.0	17	12.3	41	12.6	42	12.0
3/2	長厚示数	-	-	18	19.4	9	19.2	10	73.4	27	20.5
5/4	骨体断面示数	-	-	39	69.4	17	71.9	39	80.0	42	70.2
尺骨											
1	最大長	-	-	19	260.5	3	253.0	10	257.6	19	249.1
2	機能長	-	-	16	228.8	4	229.5	14	228.8	25	219.7
3	最小周	-	-	28	38.1	19	36.9	26	38.3	34	37.7
11	矢状径	14	14	40	13.2	23	13.1	43	13.5	50	14.3
12	横径	16	17	40	17.2	23	16.8	44	17.5	50	16.3
3/2	長厚示数	-	-	16	17.0	4	15.9	14	16.5	25	17.4
11/12	骨体断面示数	87.5	82.4	40	76.8	23	78.6	43	75.9	50	74.9

他の比較集団の平均値より大きい。中央周は 68mm で、弥生時代の他の比較集団の平均値と同程度で、縄文時代の津雲集団の平均値より小さい。骨体最小周は比較集団より大きいものの、中央周がやや小さいため、骨体は全体的に華奢な傾向にある。

〔橈骨〕

橈骨の計測データは 29 号人骨から得られた。

（29 号人骨）

29 号人骨の骨体横径は 15mm で、弥生時代の他の比較集団の平均値と同程度で、津雲縄文時代集団の平均値よりやや大きい。骨体矢状径は 10mm で骨体横径と同様に、弥生時代の他の比較集団の平均値と同程度で、津雲縄文時代集団の平均値よりやや大きい。骨体断面示数は 66.7 で、他の比較集団の平均値より低く、扁平性がやや強い。

〔尺骨〕

尺骨の計測データは、１号人骨と 29 号人骨から得られた。

（１号人骨）

１号人骨の骨体横径は 14mm で、他の弥生時代集団の平均値よりやや大きく、津雲縄文時代集団の平

表 10　長井遺跡と比較集団の上肢骨の計測値（女性）

	♀	長井 29号		土井ヶ浜（弥生）		金隈（弥生）		隈・西小田（弥生）		津雲（縄文）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨											
1	最大長	-	-	24	283.7	1	272.0	6	287.0	21	264.4
2	全長	-	-	23	279.3	-	-	3	282.3	19	259.6
5	中央最大径	-	-	29	20.3	4	20.5	20	21.4	40	19.7
6	中央最小径	-	-	29	15.6	4	15.8	20	15.9	41	14.0
7	骨体最小周	-	-	33	56.2	11	56.9	20	57.7	42	53.9
7a	中央周	-	-	27	59.6	4	60.8	20	61.1	40	56.5
6/5	骨体断面示数	-	-	29	77.1	4	76.8	20	74.6	40	71.3
7/1	長厚示数	-	-	24	19.7	1	19.5	5	19.8	21	20.4
橈骨											
1	最大長	-	-	15	219.8	8	214.0	5	217.6	24	208.2
2	機能長	-	-	15	208.5	6	202.0	2	199.0	26	196.4
3	最小周			24	37.9	22	36.5	13	37.2	30	36.4
4	骨体横径	15	15	27	15.4	22	15.3	14	15.8	34	14.6
5	骨体矢状径	11	10	27	10.5	22	10.8	14	10.9	34	9.8
3/2	長厚示数	-	-	15	18.1	6	17.3	2	18.6	25	18.2
5/4	骨体断面示数	73.3	66.7	27	68.4	22	70.6	14	69.4	34	67.5
尺骨											
1	最大長	-	-	16	238.1	-	-	1	230.0	12	227.2
2	機能長	-	-	18	209.6	3	207.0	1	202.0	12	198.6
3	最小周	-	-	21	34.8	13	33.9	8	34.6	24	32.8
11	矢状径	13	13	28	11.5	19	11.1	15	11.5	37	11.3
12	横径	16	14	28	15.8	19	15.6	15	15.6	37	13.6
3/2	長厚示数	-	-	18	16.6	2	16.1	1	15.8	12	16.4
11/12	骨体断面示数	81.3	92.9	28	73.3	19	71.5	15	74.5	37	83.5

均値と同程度である。骨体矢状径は 17mm で、弥生時代の土井ヶ浜集団の平均値に近似し、津雲縄文時代集団の平均値より大きい。骨体断面示数は 82.4 で、他の比較集団の平均値より大きく、扁平性は弱い。

（29 号人骨）

29 号人骨の骨体横径は 13mm で、他の比較集団の平均値より大きい。骨体矢状径は 14mm で他の弥生時代の比較集団の平均値より低く、津雲縄文時代集団の平均値よりやや大きい。骨体断面示数は 92.9 で、比較集団の平均値より大きく、扁平性は弱い。

【下肢骨】（表 11、12）

〔大腿骨〕

大腿骨の計測データは 1 号人骨から得られた。

（1 号人骨）

1 号人骨の中央矢状径は 32mm で、他の比較集団の平均値より大きい。中央横径は 28mm で、弥生時代の隈・西小田集団の平均値に近似している。中央周は 94mm で、他の比較集団の平均値より大きい。中央断面示数は 114.3 で、他の比較集団の平均値より大きく、柱状性が強い。

この傾向をさらに検討するために、長井遺跡 1 号人骨の大腿骨中央断面示数を、北部九州および山口地域の弥生時代人骨の大腿骨中央断面示数のヒストグラムに当てはめてみると、やはり比較的高い値であ

表 11　長井遺跡と比較集団の下肢骨の計測値（男性）

	♂	長井 1号		土井ヶ浜（弥生）		金隈（弥生）		隈・西小田（弥生）		津雲（縄文）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨											
1	最大長	-	-	27	437.0	11	438.6	48	437.8	19	414.1
2	自然位長	-	-	23	434.7	7	438.0	6	427.5	19	411.0
6	中央矢状径	34	32	53	29.2	30	29.4	92	30.8	47	29.0
7	中央横径	29	28	53	27.0	30	27.7	92	28.1	47	26.0
8	中央周	97	94	54	88.9	30	90.0	92	92.6	47	87.4
9	骨体上横径	-	-	54	32.8	24	32.9	78	32.7	43	30.7
10	骨体上矢状径	-	-	54	26.1	24	25.8	78	26.8	43	25.5
8/2	長厚示数	-	-	23	20.4	7	21.1	6	22.5	19	21.2
6/7	中央断面示数	117.2	114.3	53	108.3	31	105.5	92	110.1	47	111.8
10/9	上骨体断面示数	-	-	54	79.8	24	78.7	78	82.2	43	83.1
脛骨											
1	全長	-	-	15	354.0	3	329.7	17	349.0	20	340.0
1a	最大長	-	-	15	360.9	11	345.3	28	355.3	22	343.6
8	中央最大径	-	-	26	30.4	17	31.6	38	32.9	46	32.3
8a	栄養孔位最大径	-	-	46	35.8	29	36.0	79	37.3	38	35.2
9	中央横径	-	-	26	22.3	17	22.9	37	23.4	46	20.4
9a	栄養孔位横径	-	-	45	25.2	29	25.5	80	25.5	38	22.2
10	中央周	-	-	26	83.2	17	85.4	35	88.2	45	84.5
10a	栄養孔位周	-	-	44	95.6	29	97.2	78	97.9	38	92.8
10b	最小周	-	-	48	75.1	26	77.5	67	78.9	41	76.7
9/8	中央断面示数	-	-	26	73.4	17	72.7	37	71.5	46	63.3
9a/8a	栄養孔断面示数	-	-	45	70.5	29	71.2	79	68.5	38	63.0
10b/1	長厚示数	-	-	15	21.2	3	23.5	16	22.7	20	22.9

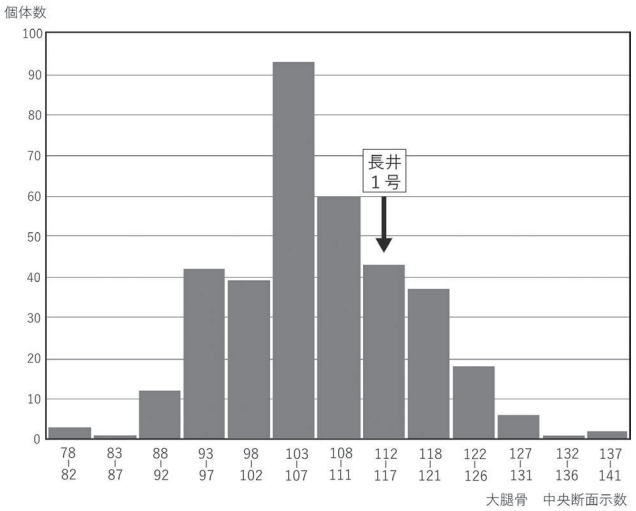
ることがわかる。（第 94 図）大腿骨の柱状性とは大腿骨後面の筋肉が付着する粗線が発達することで柱状に隆起するもので、多くの大腿の筋肉の発達、つまり脚への強い活動負荷を示すものと考えられている。そのため、長井遺跡 1 号人骨は、日常的に脚への活動負荷が強い生活を営んでいた可能性が高い。

〔脛骨〕

脛骨の計測データは、19 号人骨から得られた。

（19 号人骨）

19 号人骨の中央最大径は 30mm で、他の比較集団の平均値より大きい。栄養孔位最大径は 34mm で、他の比較集団の平均値より大きい。中央横径は 20mm で、金隈弥生時代集団と隈・西小田弥生時代集団の平均値に近く、津雲縄文時代集団の平均値より大きい。栄養孔位横径は 22mm で、金隈弥生時代集団と隈・西小田弥生時代集団の平均値に近く、津雲縄文時代集団の平均値より大きい。中央周は 80mm、栄養孔位周は 86mm で、いずれも他の比



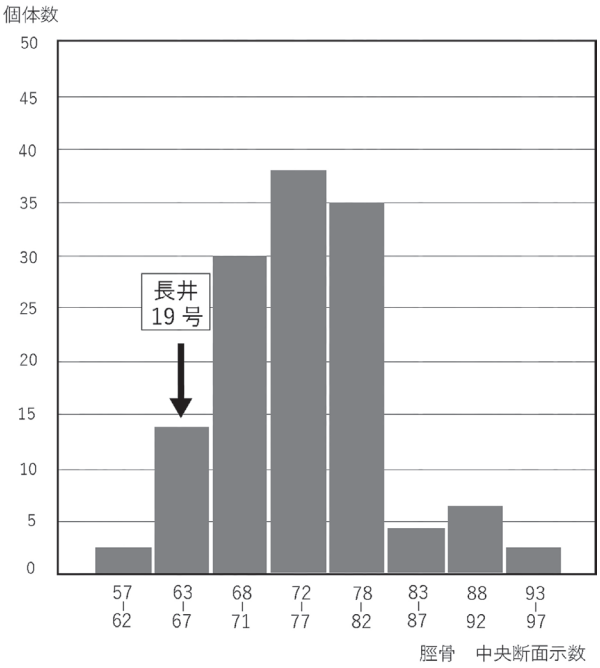
第 94 図　北部九州・山口地域の弥生時代集団の大腿骨中央断面示数のヒストグラム（男性）

表 12　長井遺跡と比較集団の下肢骨の計測値（女性）

	♀	長井 19号		土井ヶ浜（弥生）		金隈（弥生）		隈・西小田（弥生）		津雲（縄文）	
		R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨											
1	最大長	-	-	22	403.6	13	405.5	17	413.4	22	388.2
2	自然位長	-	-	22	397.9	6	402.5	5	403.6	22	381.7
6	中央矢状径	-	-	36	25.6	27	25.9	44	25.9	45	25.2
7	中央横径	-	-	36	26.1	27	26.1	44	26.6	45	24.2
8	中央周	-	-	36	80.9	27	81.6	43	82.2	45	78.0
9	骨体上横径	-	-	34	31.0	22	30.1	38	31.2	42	28.4
10	骨体上矢状径	-	-	34	23.2	22	23.6	38	23.2	42	22.2
8/2	長厚示数	-	-	22	20.2	6	21.1	5	20.7	21	20.3
6/7	中央断面示数	-	-	36	98.2	27	99.5	44	97.7	45	104.5
10/9	上骨体断面示数	-	-	34	74.7	22	77.6	10	74.9	42	78.2
脛骨											
1	全長	-	-	17	326.1	7	317.1	9	332.2	17	319.8
1a	最大長	-	-	18	331.4	9	321.9	13	333.3	17	324.4
8	中央最大径	-	30	20	26.7	13	26.2	19	27.3	42	27.3
8a	栄養孔位最大径	-	34	29	30.4	28	30.6	39	31.3	37	30.5
9	中央横径	-	20	20	19.1	13	20.5	19	20.7	42	17.9
9a	栄養孔位横径	-	22	29	21.8	28	22.4	38	22.7	36	19.4
10	中央周	-	80	19	72.0	13	73.0	19	75.4	42	73.4
10a	栄養孔位周	-	86	29	82.7	28	82.8	38	84.0	35	81.3
10b	最小周	-	-	29	67.5	24	67.7	31	69.1	35	67.6
9/8	中央断面示数	-	66.7	20	71.8	13	78.2	19	76.2	42	65.8
9a/8a	栄養孔断面示数	-	64.7	29	71.9	28	73.5	38	72.6	36	63.6
10b/1	長厚示数	-	-	17	20.3	7	21.2	9	21.1	17	21.1

較集団の平均値より大きく、全体的に頑丈な傾向にあると言える。中央断面示数は 66.7、栄養孔位断面示数は 64.7 で、いずれも弥生時代集団の平均値より小さく、津雲縄文時代集団の平均値より大きい。このことから、19 号人骨の脛骨の断面は、縄文時代集団ほどではないものの、やや扁平傾向にあると言える。

この傾向をさらに検討するために、長井遺跡 19 号人骨の脛骨中央断面示数を、北部九州および山口地域の弥生時代人骨の脛骨中央断面示数のヒストグラムに当てはめてみると、やはり比較的低い値で、断面の扁平傾向が強いことがわかる。（第 95 図）脛骨の断面の前後径が大きく、左右幅の小さいものは扁平脛骨と呼ばれており、大腿骨の柱状性と同様に、筋肉の発達、つまり脚への強い活動負荷を示すものと考えられている。そのため、長井遺跡 19 号人骨も 1 号人骨と同様に、日常的に脚への活動負荷が強い生活を営んでいた可能性が高い。



第 95 図　北部九州・山口地域の弥生時代集団の脛骨中央断面示数のヒストグラム（女性）

４．おわりに

以上、長井遺跡から出土した弥生時代に該当する人骨について分析をおこなった。分析の結果をまとめると以下の通りである。

・出土した人骨は、成人骨 13 体、未成人骨 1 体の計 14 体である。そのうち、出土した成人人骨の内訳は、男性 1 体、女性 1 体、性別不明個体 11 体だった。
・形質的特徴について、1 号人骨（男性）は大腿骨の柱状性が強く、19 号人骨（女性）は脛骨の扁平性が強かった。いずれの特徴も、脚への強い活動負荷による筋肉の発達によるもので、当該集団の生業を検討するうえで興味深い結果が得られた。

（謝辞）

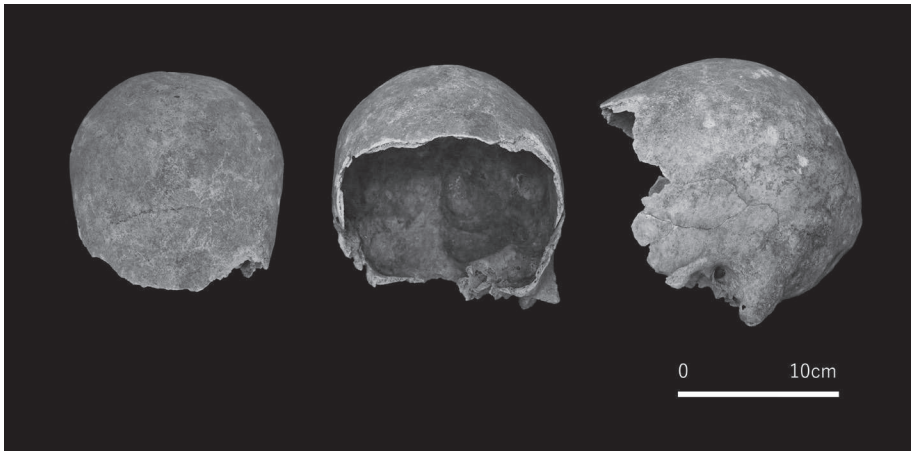
人骨資料の発掘調査および本報告をおこなうにあたり、行橋市歴史資料館の宇野愼敏館長、行橋市教育委員会の笠置拓也氏には、多くのご教示をいただきました。

《参考文献》

・馬場悠男（1991）人体計測法　Ⅱ人骨計測法，人類学講座別巻１，雄山閣出版.
・Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex using the human hip bone. American Journal of Physical Anthropology, 117: 157-168.
・Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Ar kansas Archaeological Survey Report Number 44.
・清野謙次・平井隆（1928）津雲貝塚人骨の人類学的研究、第３部、上肢骨の研究、第４部、下肢骨の研究．人類学雑誌 43：177-302，303-392
・第 3、4 付録．九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）日本民族・文化の生成２. 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成．六興出版.
・Martin-Saller(1957）Lehrbuch der Anthropologie.Bd.I.Gustav Fischer Verlag.Stuttgart.
・Meindl R.S. and Lovejoy C.O. (1985) Ectocranial suture closure: a revised method for the determination of skeletal age at death based on the lateral-anterior sutures. American Journal of Physical Anthropology, 68: 57-66.
・Nakahashi T. and Nagai M. (1986) Sex assessment of fragmentary skeletal remains. Journal of Anthropological Society Nippon, 94(3):289-305.
・中橋孝博（1993）附編 － 1 福岡県筑紫野市、隈・西小田筑遺跡群出土の弥生人骨．隈・西小田地区遺跡群，pp.1-46，筑紫野市教育委員会.
・栃原博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31：607-656.
・Vallois H.V.（1938）Les methodes de mensuration de la platycnemie:etude critique.Bulletin of Society of Anthropology

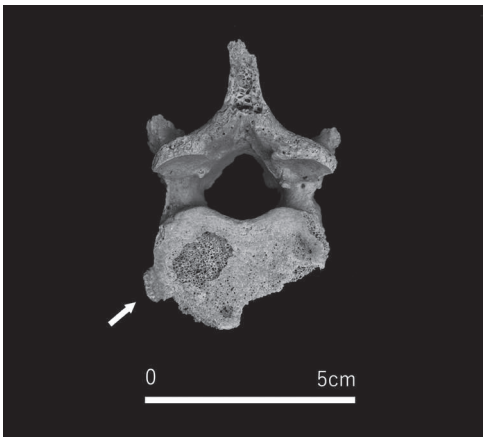
第 96 図　1 号人骨の上肢骨

第 97 図　1 号人骨の下肢骨



第 98 図　29 号人骨の頭蓋

第 99 図　29 号人骨の上肢骨



第 100 図　29 号人骨の胸椎の骨棘

第３節　福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨のミトコンドリア DNA 分析

神澤　秀明[1]，角田　恒雄[2]，瀧上　舞[1]，坂本　稔[3]，藤尾　慎一郎[3]，安達　登[2]，篠田　謙一[4]

[1] 国立科学博物館人類研究部
[2] 山梨大学医学部法医学講座
[3] 国立歴史民俗博物館
[4] 国立科学博物館

1. はじめに

日本人の成立に関しては、形態学的な研究から弥生時代に大陸から朝鮮半島経由で北部九州に渡来した大量の渡来人が在地の縄文系集団と混血して成立したという、いわゆる「二重構造説」が唱えられている［Hanihara 1991］。両系統の集団の混血は弥生時代から古墳時代にかけて急速に進行したと考えられる。弥生時代に最初に渡来人が侵入した北部九州にはその状況を反映して渡来系弥生人、西北九州には在来の縄文人の系統である西北九州弥生人、さらに南九州には独特の形質を持つ南九州弥生人が暮らしていたとされている［内藤 1981, 1984］。しかし最近の次世代シークエンサを用いた古人骨のゲノム研究により、弥生時代中期後葉～後期の北部九州弥生人および西北九州弥生人ではすでに在来系の縄文系集団と渡来系集団の混血が進んでおり [篠田他 2019, 2020; Robbeets et al. 2021]、形質で見られる違いは混血の程度の違いを見ている可能性がある。一方で、これまでに DNA 情報の得られた弥生時代人骨は限られており、両系統の混血が各地域においてどのように進行したのか、その詳細は依然として不明である。

第 101 図　人骨が出土した 29 号石棺

このような状況の中、我々は福岡県行橋市長井遺跡から出土した弥生時代とされる人骨（第 101 図）の DNA 分析および年代分析を行う貴重な機会を得た。そこで本研究では、出土した人骨 14 体のうち、比較的状態の良好な３体について、次世代シークエンサを用いたミトコンドリアゲノム分析および炭素 14 年代測定を実施した。それにより、人骨１体から結果を得られたことから、今回その成果報告を行う。

2. 分析方法

（1）炭素 14 年代の分析方法

福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨３点（試料番号：FOYNG-1, FOYNG-17, FOYNG-29）を用いて年代測定を行った（表 13）。試料を東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に送付し、骨コラーゲン抽出、炭素・窒素分析、炭素 14 年代測定（AMS-^{14}C 法）を依頼した。

表 13　長井遺跡出土人骨のコラーゲン抽出と年代測定及び炭素・窒素分析の結果

遺構番号	測定資料	試料番号	コラーゲン抽出			測定機関番号 (PLD)	炭素 14 年代 (^{14}C BP)	較正年代 (cal)		δ ^{13}C (‰, VPDB)	δ ^{15}N (‰, AIR)	炭素濃度 (%)	窒素濃度 (%)	C/N 比 (mol/mol)	海産資源寄与率 (%)
			処理量 (mg)	回収量 (mg)	回収率 (%)			1 σ (68.2‰)	2 σ (95.4‰)						
	長貫骨	FOYNG-1	440.4	0.49	0.1	測定不可	－	－	－	-22.2	14.7	21.6	3.6	7.0	－
17 号石棺	四肢骨片	FOYNG-17	258.6	0.57	0.2	測定不可	－	－	－	-23.4	14.7	28.9	3.9	8.5	－
29 号石棺	肋骨片	FOYNG-29	396.0	1.82	0.5	TKA-23996	2275 ± 21	370-210 BC	390-200 BC	-16.9	10.7	43.2	15.4	3.3	22.8 ± 12.6

（2）人骨の選定と DNA 抽出

DNA の保存状態が良いとされる歯を分析に選定した。また最近では側頭骨岩様部の錐体の DNA の保存状態が極めて良いことが報告されていることから [Gamba et al. 2014; Pinhasi et al. 2015]、錐体の選定が可能な 17 号と 29 号については錐体を分析に用いた（表 14）。側頭骨からの DNA 抽出に関しては、骨の形状をなるべく壊すことなく行う為に、錐体部の上面にドリルで小さな穴を空けて、そこから内耳にアプローチすることで試料粉末 (約 200 mg) を採取した。歯はレプリカを作成後、歯冠と歯根の間で切断し、歯冠内部を削り取ることで同量のサンプルを採取した。DNA の抽出は［Adachi et al. 2013］に従って行った。

表 14　ミトコンドリア DNA 分析の結果

人骨番号	1号	17号	29号
分析部位	上顎右犬歯	左側頭骨	右側頭骨
総ペアリード数 [n]	309,834	518,430	381,900
フィルタリング後のMtDNA断片数 [n]	38	278	5,528
ピークリード長 [bp]	83	77	40
平均深度 [x]	0.19	1.78	16.44
ミトコンドリアゲノムのカバレッジ	0.177	0.790	0.998
5'末端C/T置換率	0.000	0.000	0.248
ハプログループ推定			
APLP	ND	D4a?	D4b1?
Haplogrep2.0 [quality]	ND	ND	M7 (0.8995)
Kanzawa-Kiriyama et al. [2017]	ND	ND	M7a1a2
ハプログループ	**-**	**-**	**M7a1a2**

ND: not determined

（3）APLP 法および次世代シークエンサによるミトコンドリア DNA 分析

抽出した DNA 溶液からのミトコンドリア DNA 分析には APLP 法 (Amplified Product-Length Polymorphism method)［Umetsu et al. 2005］と次世代シークエンサを用いたミトコンドリアゲノム全配列の決定の２つの方法で実施した。

簡潔に記載すると、まずはじめに解析に充分な量の DNA が残っているかを確認するために、APLP 法によるミトコンドリア DNA ハプログループ分析を行った。方法は［Kakuda et al. 2016］の方法に従って実行した。抽出 DNA を次世代シークエンサ（NGS, next generation sequencer）で分析するために，［Rohland et al. 2015］の “partial uracil–DNA–glycosylase treatment”（以下、half-UDG）の方法に一部修正を行い, NGS 分析用ライブラリの作成を行った。作成後の DNA ライブラリは, MYbaits Expert Mito（H. sapiens Representative Global Diversity Panel）（Daicel Arbor Biosciences 社）にてミトコンドリア DNA を濃縮し、MiSeq（Illumina 社）にて 150 塩基ペアエンドでシークエンスした。別途、ヒト DNA 含有率を調べるために、未濃縮の DNA ライブラリのシークエンスも実施した。得られた DNA 配列データの解析は，［篠田他 2017］の方法に一部修正を加えて行った。取得したミトコンドリアゲノムデータの信頼性を確認するために、古代 DNA に見られる DNA 配列のシトシン塩基末端部の脱アミノ化および低断片化の有無を検証した。

古代人由来の DNA を含むと判定されたライブラリについては，ミトコンドリア DNA のハプログループを決定するために SNPs（一塩基多型、single nucleotide polymorphisms）の検出を行った。検出された SNPs から PhyloTree-Build 17［van Oven and Kayser 2009］を参照してハプログループを判定し，また，HaploGrep ソフトウェア（2.1.14）［Weissensteiner et al. 2016］によるハプログループ推定も合わせて行った。最後に，判定されたハプログループの結果を APLP 法で得られた結果と比較した。最後に、決定したハプログループの信頼性を確認するために，ソフトウェア schmutzi［Renaud et al., 2015］と［Kanzawa-Kiriyama et al. 2017］の手法を用いて現代人 DNA による汚染率を推定した。

3.　結果

（1）炭素 14 年代分析の結果（詳細は藤尾他 2022 を参照）

(i) コラーゲン保存状態の評価

3 試料のコラーゲン回収率（骨の乾燥重量から得られたコラーゲン重量の割合）は 1% 以下であった (表 13)。また炭素・窒素濃度から計算された C/N 比は、FOYNG-1, FOYNG-17 において良好なコラーゲン指標の範囲（2.9 ～ 3.6）[DeNiro 1985] を大きく逸脱していた。これらの 2 試料についてはコラーゲンの保存状態が不良だと判断し、年代測定を実施しなかった。唯一、FOYNG-29 のみ C/N 比が 3.3 で指標の範囲内に収まっていることから、コラーゲン回収率は低いものの良好なコラーゲンが得られたと判断された。

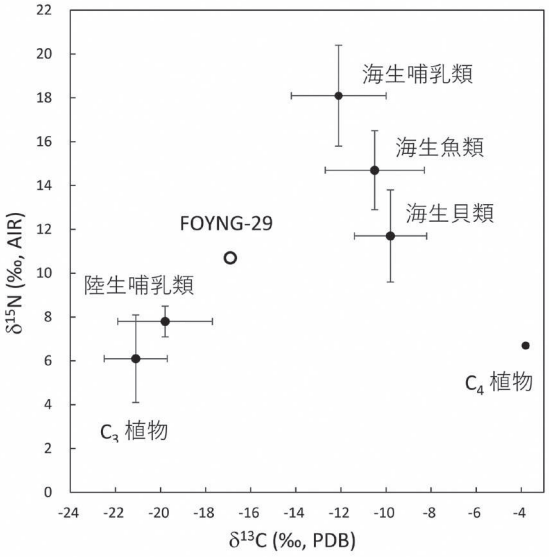
(ii) 炭素・窒素同位体比

FOYNG-29 の炭素同位体比（δ^{13}C）は -16.9‰、窒素同位体比（δ^{15}N）は 10.7‰であった（表 13）。

(iii) 食性推定と海産資源寄与率

食物は光合成回路の違いや食物連鎖による栄養段階の違いから，異なる炭素・窒素同位体比を有している。ヒトの体組織にも，摂取した食物の同位体比が反映されている。そこで，ヒトの体組織の同位体比を測定して食物の値と比較することで，大まかな食性推定を行える。さらに本研究では海産資源寄与率の計算ソフトウェアとして ISOCONC 1.01 を用いた［Phillips and Koch 2002］。

食物のたんぱく質源の炭素・窒素同位体比とヒトの同位体比を比較した結果、FOYNG-29 は C_3 資源（C_3 植物と、C_3 植物を摂取した陸生動物）と海産資源の間のやや C_3 資源寄りの位置にプロットされた（第 102 図）。FOYNG-29 はこれらの食物を混合して摂取していたと考えられる。炭素分画における海産資源寄与率は 22.8 ± 12.6% と見積もられた。



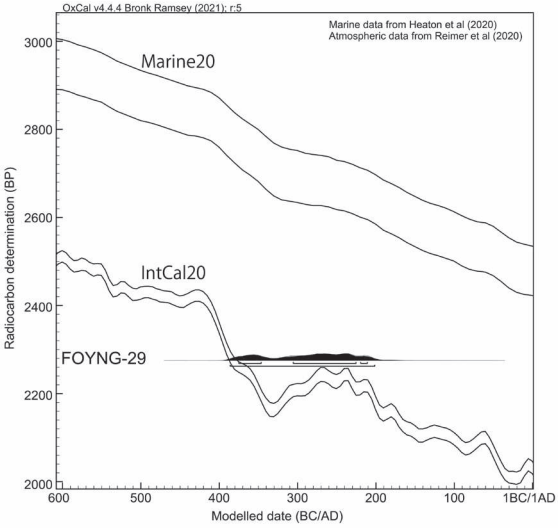
第 102 図　長井遺跡出土人骨の同位体比と、食物資源の同位体比の比較

(iv) 炭素 14 年代

炭素 14 年代測定の結果、FOYNG-29 は 2275 ± 21 ^{14}C BP を示した（表 13）。

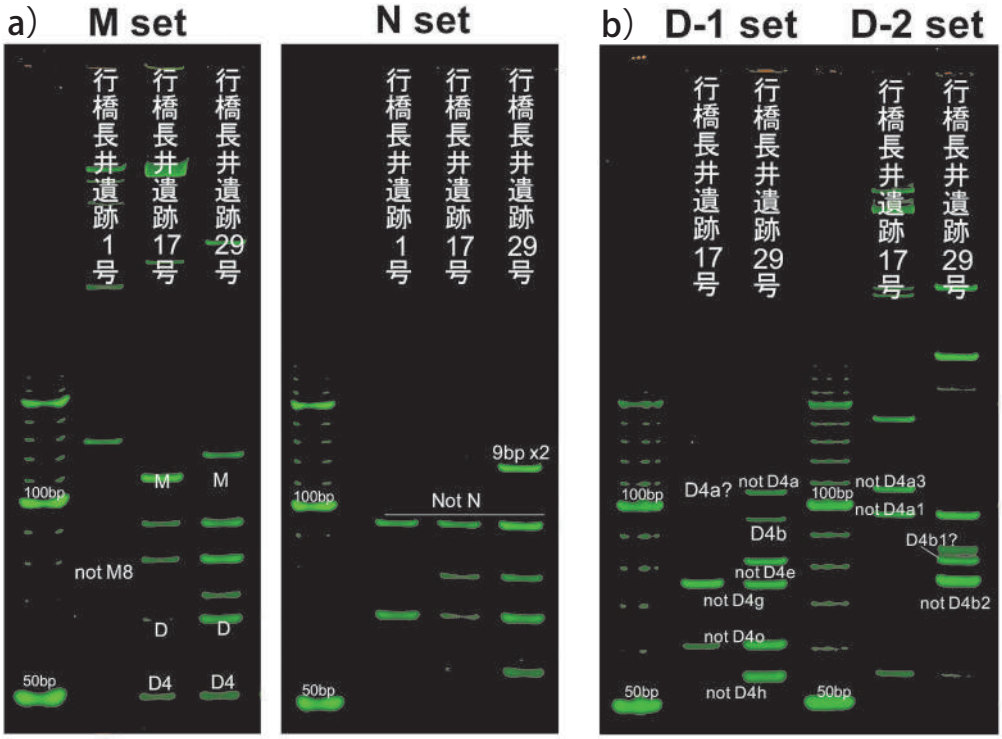
(v) 較正年代

暦年較正用解析ソフト（OxCal 4.4.2［Bronk Ramsey, 2009］）を用いて，IntCal20 と Marine20 の較正曲線［Reimer et al. 2020, Heaton et al. 2020］を混合したモデルで計算を行った。混合率として上述した海産物寄与率を組み込んだ。地域特異的な Marine20 からの年代の偏差（Δ R 値）は -296 ± 35（^{14}C years）と仮定した（http://calib.org/marine/.［Kong and Lee 2005］）。



第 103 図　長井遺跡出土人骨の年代較正

解析の結果、FOYNG-29 は 370-210 cal BC (1 σ) の年代を示した（表 13、第 103 図）。この時期は較正曲線がバウンドする時期にあたるため較正年代の幅



a) プライマーセット M および N の結果　　b) プライマー セット D の結果

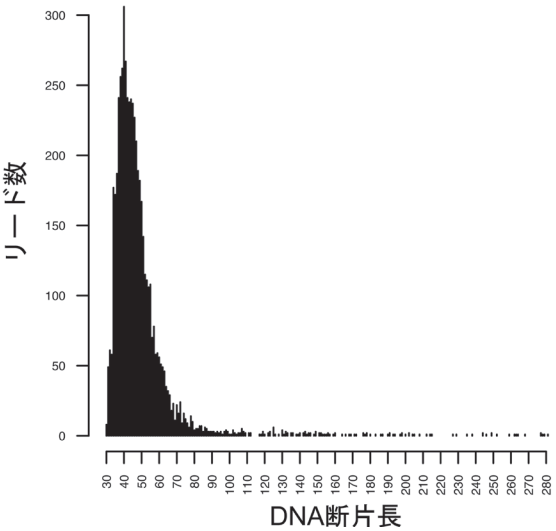
104 図　APLP 分析の結果

が広くなりがちであるが、幅をもって考えても人骨の年代は弥生中期前半に相当すると判断される。

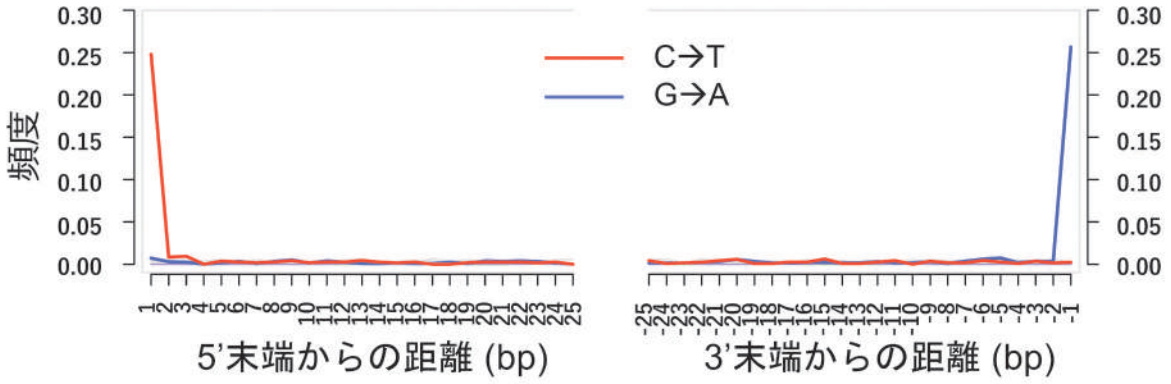
(2) ミトコンドリア DNA 分析の結果

(i) APLP 分析および NGS による分析で得られたリードの信頼性

はじめに、抽出 DNA の APLP 分析を行った。マクロハプログループの M と N を判定するプライマーセットでの分析では、１７号および２９号では PCR 増幅によるバンドが見られた（第 104 図 a)。バンドパターンはハプログループ D4 と見られたことから、D 系統について細分 APLP 分析を実施した。１７号はハプログループ D4a、２９号はハプログループ D4b1 と思われるバンドに増幅が見られた（第 104 図 b)。ただし、明瞭なバンドではないことから、APLP 法による判定は暫定的な結果と言わざるをえない。ミトコンドリアゲノムの全配列に基づいてハプログループを判定するために、NGS を用いたミトコンドリアゲノム分析を実施した。フィルタリング後に得られたミトコンドリアゲノム由来の DNA 断片数は 38 ～ 5,528 リードと個体ごとに幅があり、データの信頼性が検証できるだけのリード数が得られた個体は２９号のみであった（表 14)。そこで２９号について、得られたリードが古代人に由来するかを調べるために，リード長および C/T，G/A の置換率を調べた。その結果，リード長のピークは 40 bp と非常に短く（第 105 図)，また古代 DNA の特徴である C/T，G/A の置換も明瞭にみられた（第 106 図)。以上の結果から，得られた DNA 配列には，この個体が本来持っていたものであるものを含むと判断された。続いて、現代人 DNA の混入による汚染率を推定したところ、schmutzi ソフトウェアでの汚染率は 2% 以下と低



第 105 図　29 号の DNA 断片長の分布



第 106 図　29 号の DNA 断片の末端のダメージ

い値が示されたが（0.000 [0.000-0.020]）、ミトコンドリア DNA のコンセンサス配列をもとに推定したところ、高い汚染率が示された（0.157 [0.111-0.204]）。

(ii) NGS によるミトコンドリア DNA ハプログループ推定

ミトコンドリアゲノム全領域に渡ってデータが得られたことから（平均深度 =16.44）、２９号のハプログループを推定した。その結果、決定されたハプログループは縄文人的遺伝子型［Adachi et al. 2011］である M7a のサブハプログループである M7a1a2 と判定された。また、個体特異的な変異として、T152C, T9478C, T11233C, G13928A, C16147T を検出した。

4. 考察

今回、これまで欠落していた北部九州の瀬戸内側から出土した人骨の遺伝学的・年代学的分析をおこない、１体ではあるが貴重な結果が得られた。年代に関しては、1959 年の土取調査の際には、弥生前期の石棺墓と、伴った遠賀川系の壺や夜臼式土器が関心を集めたが、今回の年代測定結果は弥生中期前半であった。人骨に伴って出土した土器は前期末から後期までのものが含まれていることから、土器との整合性はついている。

弥生時代中期の人骨の遺伝学的研究について、我々はこれまでにも、島根県猪目洞窟遺跡と鳥取県青谷上寺地遺跡の漂着人骨という日本海側の弥生中期人骨のミトコンドリアゲノムおよび核ゲノム分析を進めてきた［神澤他，2021a, 2021b］。猪目洞窟遺跡は縄文的遺伝子型のミトコンドリア DNA ハプログループ M7a が比較的高頻度で検出されたことに加えて、核ゲノムでも現代の本土日本人と比べて縄文的であることが明らかとなっている。一方で、同じく山陰の青谷上寺地遺跡の漂着人骨は、ハプログループも D4b2b1d と大陸的であり、核ゲノムについても現代の本土日本人より縄文要素が弱く、猪目人骨と対照的である。今回の長井２９号人骨のミトコンドリア DNA ハプログループは M7a1a2 と縄文的遺伝子型であったことから、北部九州の瀬戸内側の地域では、弥生時代中期でも縄文的遺伝要素を強く持つ人を含む集団が居住した可能性がある。しかしながら、２９号が縄文系弥生人なのか、それとも渡来系弥生人であるかを定量的に評価するには、今後、２９号の核ゲノムを分析する必要があるだろう。今後の研究によって、北部九州の瀬戸内側地域の遺伝的背景について、核ゲノム分析をすることで、新たな情報を提供していきたい。

謝 辞

本研究を行うにあたり、資料の調査・提供にご尽力いただいた行橋市教育委員会の笠置拓也氏、土井ヶ

浜遺跡人類学ミュージアムの高椋浩史氏に感謝いたします。本調査は科学研究費補助金・新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」(代表 国立遺伝学研究所 斎藤成也)，計画研究 A02 班「古代人ゲノム配列解析にもとづくヤポネシア人進化の解明」(代表 国立科学博物館 篠田謙一)計画研究 B02 班「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」(代表 国立歴史民俗博物館 藤尾慎一郎)の成果の一部である。

東京大学総合研究博物館における年代測定は同博物館との共同研究の一環として行われた。

《 参考文献 》

・Adachi N., Shinoda K., Umetsu K., Kitano T., Matsumura H., et al. 2011: Mitochondrial DNA analysis of Hokkaido Jomon skeletons: remnants of archaic maternal lineages at the south western edge of former Beringia. American Journal of Physical Anthropology, 146, pp. 346-360.

・Adachi N., Sawada J., Yoneda M., et al. 2013: Mitochondrial DNA Analysis of the Human Skeleton of the Initial Jomon Phase Excavated at the Yugura Cave Site, Nagano, Japan. Anthro pological Science 121 (2), pp.137-143.

・Bronk Ramsey, C., 2009: Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), pp. 337-360.

・DeNiro, M. J., 1985: Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. Nature 317, pp. 806-809.

・藤尾慎一郎・坂本稔・瀧上舞　2022:「福岡県行橋市長井遺跡出土弥生人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』(査読中)

・Gamba C, Jones E.R., Teasdale M.D., McLaughlin R.L., Gonzalez-Fortes G., Mattiangeli V. et al. 2014: Genome Flux and Stasis in a Five Millennium Transect of European Prehistory. Nature Communications 5, pp. 5257.

・Hanihara K. 1991: Dual structure model for the population history of the Japanese. Japan Review, 2, pp. 1-33.

・Heaton, T., et al., 2020: Marine20 - the marine radiocarbon age calibration curve (0–55,000 cal BP). Radiocarbon 62(4), pp. 779-820.

・Kakuda T., Shojo H., Tanaka M., et al. 2016: Multiplex APLP System for High-Resolution Haplogrouping of Extremely Degraded East-Asian Mitochondrial DNAs. PLoS ONE 11(6):e0158463. doi:10.1371/journal. pone.0158463.

・Kanzawa-Kiriyama H, Kryukov K, Jinam TA, Hosomichi K, Saso A, et al. 2017: A partial nuclear genome of the Jomons who lived 3000 years ago in Fukushima, Japan. Journal of Hu man Genetics 62, pp. 213-221. https://doi.org/10.1038/jhg.2016.110

・神澤秀明，角田恒雄，安達 登，篠田謙一，斎藤成也．2021a.：「島根県出雲市猪目洞窟遺跡出土人骨の核 DNA 分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 228 集 , pp. 329-340.

・神澤秀明，角田恒雄，安達 登，篠田謙一．2021b.：「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の核 DNA 分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 228 集 , pp. 295-308.

・Kong, G. S., and Lee, C. W., 2005: Marine reservoir corrections (Δ R) for southern coastal waters of Korea. The Sea, Journal of the Korean Society of Oceanography 10(2), pp. 124-128.

・内藤芳篤 1981「弥生時代人骨」人類学講座編纂委員会編，『人類学講座 5，日本人 I』雄山閣，pp. 57-99.

・内藤芳篤 1984「九州における縄文人骨から弥生人骨への移行」日本人類学会編，『人類学―その多様な発展―』日経サイエンス社，pp. 52-59.

・Phillips, D. L. and Koch, P. L., 2002: Incorporating concentration dependence in stable isotope mixing models. Oecologia 130(1), pp. 114-125.

・Pinhasi R, Fernandes D., Sirak K., Novak M., Connell S. et al. 2015: Optimal Ancient DNA Yields from the Inner Ear Part of the Human Petrous Bone." PloS One 10 (6): e0129102.

・Reimer, P., et al., 2020: The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon 62(4), pp. 725-757.

・Renaud G., Slon V., Duggan A.T. and Kelso J. 2015: Schmutzi: estimation of contamination and endogenous mitochondrial consensus calling for ancient DNA. Genome Biology 16:224. https://doi.org/10.1186/s13059-015-0776-0

・Robbeets, M., Bouckaert, R., Conte, M. et al. 2021: Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages. Nature 599, pp. 616–621.

・Rohland N., Harney E., Mallick S., et al. 2015: Partial uracil–DNA–glycosylase treatment for screening of ancient DNA. Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biologicalci Scienc es, 370(1660): 20130624.

・篠田 謙一，神澤 秀明，角田 恒雄，安達 登，2017：「佐世保市岩下洞穴および下本山岩陰遺跡出土人骨のミトコンドリア DNA 分析」『Anthropological Science (Japanese Series)』Vol.125, pp. 49-63.

・篠田 謙一，神澤 秀明，角田 恒雄，安達 登，2019：「西北九州弥生人の遺伝的な特徴」『Anthropological Science (Japanese Series)』127(1), pp. 25-43.

・篠田 謙一，神澤 秀明，角田 恒雄，安達 登，2020:「福岡県那珂川市安徳台遺跡出土弥生中期人骨の DNA 分析」国立歴史民俗博物館研究報告第 219 集，国立歴史民俗博物館，pp. 199-210.

・Umetsu K., Tanaka M., Yuasa I., et al. 2005: Multiplex amplified product-length polymorphism analysis of 36 mitochondrial single-nucleotide polymorphisms for haplogrouping of East Asian populations. Electrophoresis, 26, pp. 91-98.

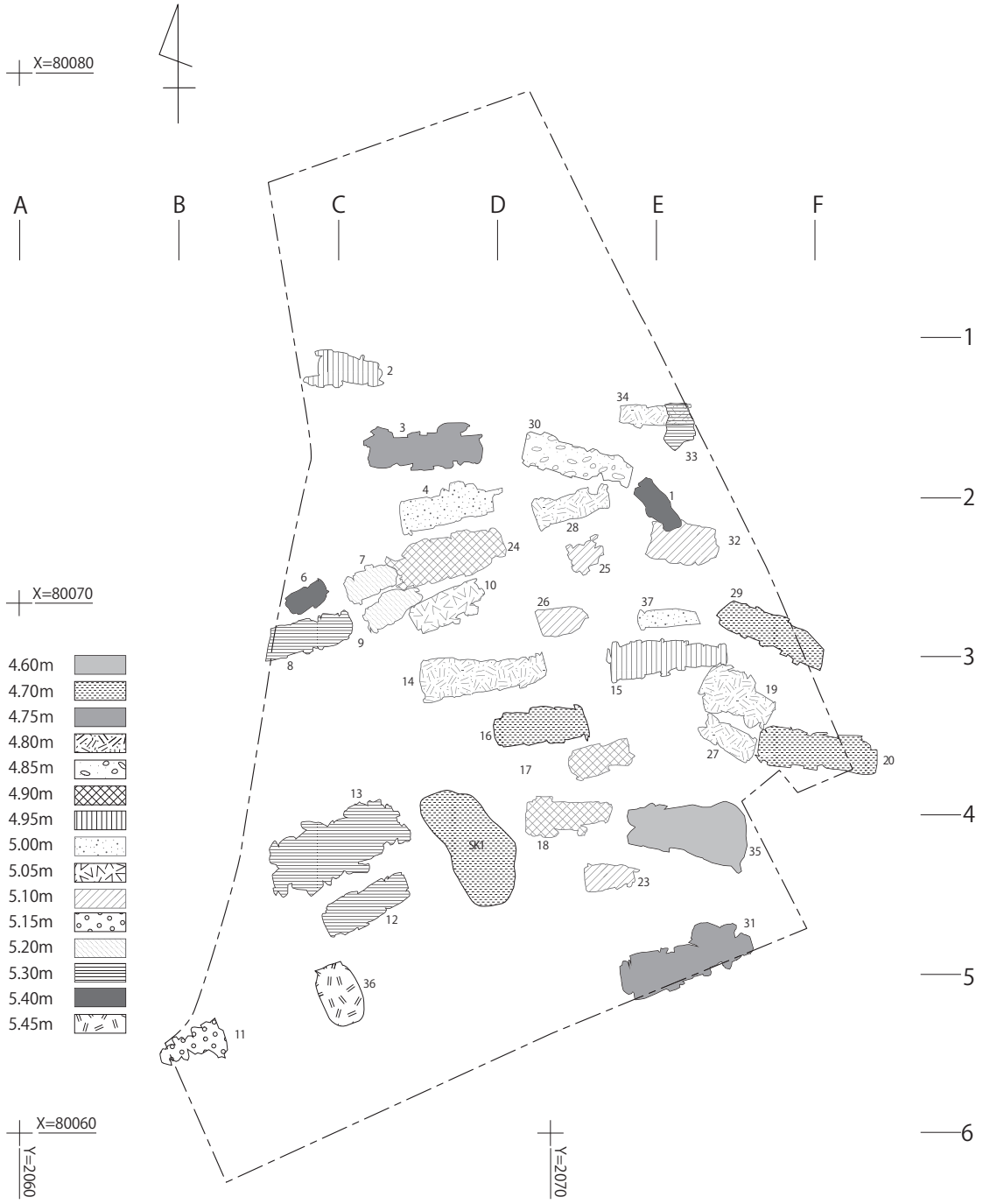
・van Oven M. and Kayser M. 2009: Updated comprehensive phylogenetic tree of global human mitochondrial DNA variation. Hum Mutat 30:E386-394. https://doi.org/10.1002/humu.20921

・Weissensteiner H, Pacher D, Kloss-Brandstatter A, Forer L, Specht G, et al. 2016: HaploGrep 2: mitochondrial haplogroup classification in the era of high-throughput sequencing. Nucleic Acids Res 44:W58-63. https://doi.org/10.1093/nar/gkw233

第５章　結　語

長井遺跡は昭和 34 年の発見以来、弥生時代の集団墓として全国的に著名であった。先の調査で小田富士雄氏は、900㎡で 500 基の箱式石棺と 6 基の甕棺があったであろうと述べている。すなわち 1 坪 3.3 ㎡でおおよそ 2 基の箱式石棺があったということである。今回も 185㎡で 37 基の箱式石棺や石蓋土坑墓が検出され、5㎡で 1 基の墳墓が見つかっていることになり、かなりの密集度であったということが分かる。

本報告書では、今回の発掘調査の成果およびこれまでに長井浜で表採されてきた遺物も含めて報告し、まとめにかえたい。



第 107 図　長井遺跡床面標高別色分け分類図

1. 石棺の密集度について

先の報告で「石棺と石棺との組石や蓋石が接触したり、一個の石棺の下に更に石棺があって、浅い石棺と深い箱式棺の時期的な差異も認められず（手がかりとなる遺物がない）、密集墳墓の様相を示していた。」と述べている（小田 1965）。今回の調査でも同様のことが言える。

まず、石棺と石棺が接触している例は、本調査区の南東側、E-3 グリッド上で先に 15 号石棺とその南東側 1.4m の石棺に 20 号石棺が構築され、その間の 1.4m に 19 号石棺を構築する。一般的には長さ 1.4m では成人埋葬は無理であるが、今回の調査では大腿骨が北東側小口隅角部に立て懸けているような状態で検出され長さ 1.4 mに膝を曲げて成人が埋葬されていたことが明らかとなった。これまで一般的に石棺の長さで、成人埋葬と小児埋葬を判断していたが、今回の調査で密集している墳墓群、少なくとも長井遺跡では、石棺の長さでの成人・小児の判断は出来ないということが明らかとなった。

また、C-2 グリッド上の 7 号石棺と 24 号石棺が同一長軸方向で縦列に接触して構築されていた。床面標高では 24 号石棺の方が低く、7 号石棺の床面が高いため後出すると思われるが、ほぼ同一の長軸で従列に並んでいるものの、小口石の供用はしていない。それぞれ個別に四周の側板や小口石を組んでいる。

しかし、21 号地点や 22 号地点の石材の集積状況から勘案すると、以前の古い石棺を解体している可能性が高い。本調査区の地山は海浜の砂丘上で、板石が自然に堆積することはなく、またどこからか運んで来て山積みしている状況でもない。21・22 号地点ではむしろ箱形に組んでいたような状況が想定され、上部または一部の石棺材を壊して積み上げている状況ではなかったかと考えている。

そうした事例以外は、数基並列しているような状況や、20㎝ほど離して並列する状況が窺われることから、接触しているところは、何らかの理由によってその場所に石棺を構築せざるを得ない事情があったものと推察される。

次に、先の報告でも浅い石棺と深い石棺が見られたとのことで、今回も 1 号石棺の真下に長軸方向は異なるが上下に石棺が構築されている。32 号石棺はすでに蓋石が無くなっていた。これはおそらく上に構築した 1 号石棺の構築時に取っ払われたものと想定出来る。32 号石棺の側板の天端の標高は 5.45m、1 号石棺の床面の標高は 5.65m で、その差は 20㎝しかなく、おそらく 1 号石棺構築時に 32 号石棺の蓋石が当たって取っ払ってしまったと考えられる。

上下に石棺があったとは断定できないが、本調査区の南西側 C-4 グリッド上の 12・13 号石棺が南北に並列して検出しているが、その周囲の 2 ～ 3m には石棺がほとんどなく、他の石棺が密集しているところと様相がまるで異なる。12・13 号石棺を構築する際に、以前の石棺を取っ払った可能性も考えられる。

今回の発掘調査で、密集しているところ、上下に石棺を構築しているところ、あるいは隙間に無理やり石棺を構築したり、以前の石棺を取っ払っていたりしているなど、様々な状況が明らかとなった。

2. 頭位について

先の報告では、（1）南東から北西（2）東から西（3）東から南西の３つの方向で、南北方向は 500 基以上の石棺中で２基のみしかなく全く例外であったとしている。

今回の調査でも箱式石棺の幅の広狭と、側板の大小、それに一部頭骨が残っていたことなどでほとんど頭位を確認できた。それによると表 15 に見るように、25 基が西方向から南西方向に向けていた。残る 3 基が東方向、1 基が南東方向、2 基が北西方向で、前回とはやや異なる。今回の調査区は、汀線に並行する砂丘上の最も高所から少し汀線側に下ったところで、西側および南西側へ高くなり、東側から南東側

に向けて低くなる斜面中腹上に立地することからも、頭位が西ないし西南方向に向ける事は当然と言えよう。

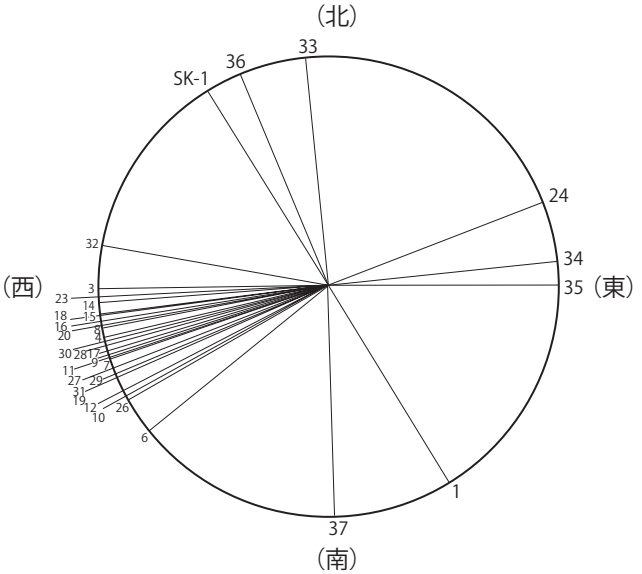
3. 石棺構築の順序について

前回の調査および今回の調査においても土器の副葬はほとんどなく、時期も明らかではないが、1 号石棺墓の真下に 32 号石棺が構築されていたことを勘案すると、古い石棺は下に、新しい石棺は上に構築されている。すなわち、時代を経るとともに砂丘上には砂がわずかずつ堆積しており、そのため新しい時期の石棺も上層に構築していると言える。

今回調査した石棺の一部は、後世のカクラン等により蓋石が無いものもあるため、石棺の床面の標高を基準に低い方から高い方へ並べてみると表 16 のようになる。最も低いのが 35 号石棺で標高 4.60m である。最も高いのは 36 号石蓋土坑墓で 5.45m である。そして同じ床面高さの石棺が 2 ～ 4 基ずつ存在することがわかる。

この同じ床面の高さということは、個々の石棺の深さがまちまちということではなく、海浜砂丘上に同じように風によって砂が少しずつ堆積していく。その高さで同じように石棺を構築していくことから、同一時期には、同一の標高の石棺が造られると推定出来る。したがって、同一の床面の高さの石棺は、砂丘面が同じ高さの時に、構築されたと考えられる。このように考えられるなら、同一の床面の高さの石棺の時期は、同一の時期あるいは近い時期に構築されたと言えるのではないか。したがって、表 16 に見るように石棺の床面が同一の 2 ～ 4 基はほぼ同一の時期あるいは極めて近い時期に構築されたと考えられる。

表 15　長井遺跡墳墓頭位方向（番号は各墳墓番号）



4. 石棺構築時期について

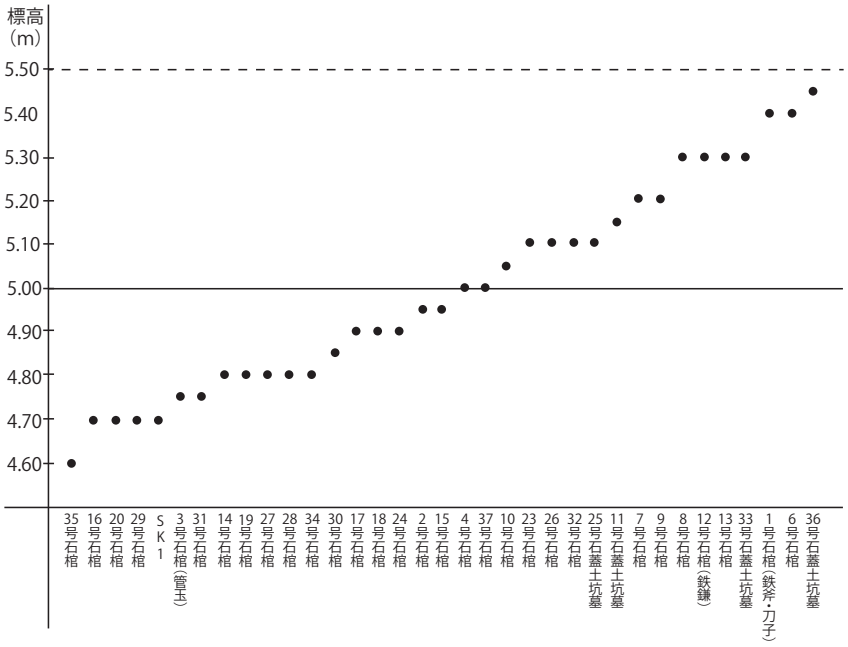
表 16 を見ると、左側が石棺床面の標高が低く、右にいくほど床面標高が高くなっており。おおよそ左から右へと古→新への移り変わりと考えられる。左から 6 基目の 3 号石棺から碧玉製管玉が出土しているが、この管玉は弥生時代中期後半～後期にかけてに製作されたもので、床面標高 4.75m がこの時期相当と推定される。次に、表 16 の左から 30 基目の 12 号石棺に鉄製鎌が副葬されていた。鉄製鎌について高倉洋彰氏は、日本列島における鉄器の使用開始について検討し、農具における鉄器使用は中期中頃～中期後半に兆候がみられるものの定着は後期後半～終末期で、鉄製鎌の普及は後期後半～終末期であることを指摘している（高倉 1985）。さらに前節で述べたように 12・13 号石棺の周辺には、他の墳墓が少なく、方形周溝墓の可能性があること、また周辺から庄内式期の土器が出土していることからこの石棺床面標高 5.30m は弥生時代終末期～古墳時代初頭頃に比定できる。

もう一つ石棺床面標高が 5.40m の 1 号石棺（方形周溝墓）からも鉄斧と鉄製刀子が出土している。この 1 号石棺の時期も弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定されることから、石棺床面標高は相対的に低い方から高い方へと時期が新しくなっていくと言える。

長井遺跡の箱式石棺墓は、3号石棺より古い時期、弥生時代中期中頃以前に出現し、弥生時代終末期～古墳時代初頭まで築かれていたことになる。

また、表16では左側から26基目の11号石蓋土坑墓は、床面標高5.15mであり、右端の36号石蓋土坑墓の床面標高は5.45mであることから、長井遺跡における石蓋土坑墓は、弥生時代後期～古墳時代初頭に築かれていることが分かる。土坑（墓）のSK-1は、床面標高が4.7 mであることから弥生時代中期中頃以前に築かれていた可能性がある。

表16　長井遺跡墳墓床面標高表



今回の長井遺跡での箱式石棺墓、石蓋土坑墓、土坑（墓）は、上述したように弥生時代中期中頃以前から存在していたことが想定される。しかし、定村責二氏寄贈資料を見ると箱式石棺墓周辺からは弥生時代前期前半頃～前期末頃までの深鉢や肩部に三角文や羽状文などを施文する弥生土器壺などの小片が多数出土しており、今回の調査でも甕棺片や肩部に施文した壺片が多数出土している。ただ、完形品はなく、ほとんどが数センチの小片であったことや、土坑墓が数少ないことから弥生時代前期の甕棺や土坑墓が中期前後の箱式石棺墓構築の際に壊された可能性が高い。先述したように、弥生時代中期中頃以前に構築された箱式石棺は少なく、石棺が多く検出されている割に弥生時代前期の土器小片の出土量が多いことから、箱式石棺構築時に弥生時代前期に築かれていた土坑墓が壊された可能性が高いのではあるまいか。そのため弥生時代前期の壺小片の出土量が多かったのではないだろうか。

こうした石棺構築順序および床面標高から得られた結果は、29号石棺出土人骨の年代測定の結果が弥生時代中期前半であることとほぼ符号することになり、長井遺跡の石棺構築時期については、弥生時代中期初頭前後に比定できるであろう。

5. 墳墓の配置について

次に墳墓がどのような配置で築かれていったのか、あるいは無造作に築かれていったのか検討していきたい。石棺を組み立てる際に、板石をどのように組んでいくのか。それは時期によって変化していったのか、あるいは組む人によって個人差があったのかを検討する。表17は、長井遺跡石棺の板石の組み方を分類したものである。小口石の置き方で大別した。まず頭部小口石が側板より外側に立てるものをA類として、中の内側に立てるものをB類、頭部左側は内側、右側を外に立てるC類、反対に左側を外へ、右側を内側に立てるものをD類に大別した。次に、足元側の小口石の立て方で細分した。頭部と同様に外側、内側、片側を外、もう片側を内側というようにそれぞれ細分し、算用数字を1、2・・と付けている。

表 17 のように A 類と D 類はそれぞれ 3 つに、B 類と C 類はそれぞれ 3 つに細分した。これを元に石棺床面の標高ごとにグラフに入れたものが表 18 である。これを見ると A1 類、A2 類、A3 類それぞれ床面標高が低い方から高い方へ分布することが明らかとなった。A類だけではなく、B類、C 類、D 類ともに床面標高が低い方から高い方にそれぞれ分布している。

表 17　長井遺跡箱式石棺分類表

A	1		頭小口外 足小口外	9・14・15・18・20・28・30号石棺
	2		頭小口外 足右外・足左内	4・7・19・31号石棺
	3		頭小口外 足小口内	12・13・17号石棺
B	1		頭小口内 足右外・足左内	3号石棺
	2		頭小口内 足小口内	2号石棺
C	1		頭右外・頭左内 足小口内	27号石棺
	2		頭右外・頭左内 足小口外	6号石棺
D	1		頭右外・頭左内 足小口外	24号石棺
	2		頭右内・頭左外 足小口内	10・16号石棺
	3		頭右内・頭左外 足右外・足左内	23号石棺

このことは、石棺のそれぞれの組み方が、古い時期から新しい時期、すなわち弥生時代中期初頭前後～終末期もしくは古墳時代初頭まで、それぞれの石棺板石の組み方が踏襲されているということになる。では、それぞれの石棺板石の組み方は、その場その場で基準なく組み立てられたのか、あるいは何らかの規則性が決められていたのかを検討することにする。

A1 類、A2 類、A3 類と細分し、B・C・D 類については数が少ないので細分せずに見ていくことにする。まず A1 類は、18・14・9 号の南北中央の列に、もう一つ 20・15・28・30 号石棺の東側南北列に並ぶ。28 号と 30 号はやや接近しているが、他の石棺は 1 ～ 2m ずつ離れて構築されている。次に A2 類は、調査区南北中央列の 31・7・4 号、東側列は 19 号石棺が南北に並ぶ。A3 類は調査区西側列の 12・13 号石棺、中央列に 17 号石棺が並ぶ。B 類は中央列の 2・3 号石棺が南北に並ぶ。C 類は西側列の 6 号石棺、東側列の 27 号石棺が並ぶ。D 類は中央列の 23・16・10・24 号石棺が南北に並ぶ。

このように箱式石棺の板石の組み方はそれぞれの組み方で、調査区の西側、中央、東側の 3 つの南北列に沿って構築されていることが明らかとなった。長井遺跡での箱式石棺は、海浜砂丘上で等高線にそって上の西側列、少し標高が下がった中央列、一番下の東側列の少なくとも 3 つの列にそれぞれの組み方が分散しながら南北に箱式石棺を構築していると言えよう。それでは次に上（西）、中央、下（東）の 3 列にそれぞれ古い時代から新しい時代へと構築しているのかということを検討していきたい。

A1 類と A2 類は中・下、A3 類は上・中、B 類は中、C 類は上・下、D 類は中というようにそれぞれの組み方をする単位集団で、（この単位は家族なのか、他の紐帯の集団なのかあるいは階層差なのか明らかではないので、本稿では単位集団としておきたい）上列、中列、下列と古い段階においては、ある程度決められていた可能性がある。しかし、新しい時期になるとその体制が変化していったと考えられる。

したがって、下列の 15 号石棺と 20 号石棺に挟まれていた 19 号石棺は成人埋葬であるけれど、その間が 1．4m と短いながらも、下列に埋葬せざるを得ない状況（規則性）があったのではあるまいか。しかし、弥生時代終末期ないし古墳時代初頭になると、方形周溝墓のように特定有力者の墳墓が造営されるようになり、1 号石棺のように下列に構築するようになり、それまでの上・中・下列という規則性がなく

第 108 図　長井遺跡箱式石棺分類図

なっていったと考えられる。

すなわち長井遺跡を構成する集団はいくつかの単位集団が、ある一定の規則の元に存在し、墳墓構築においてもその一定の規則のもとに造営されていた可能性があることを指摘しておきたい。

6. 長井遺跡箱式石棺の特色（地域性）について

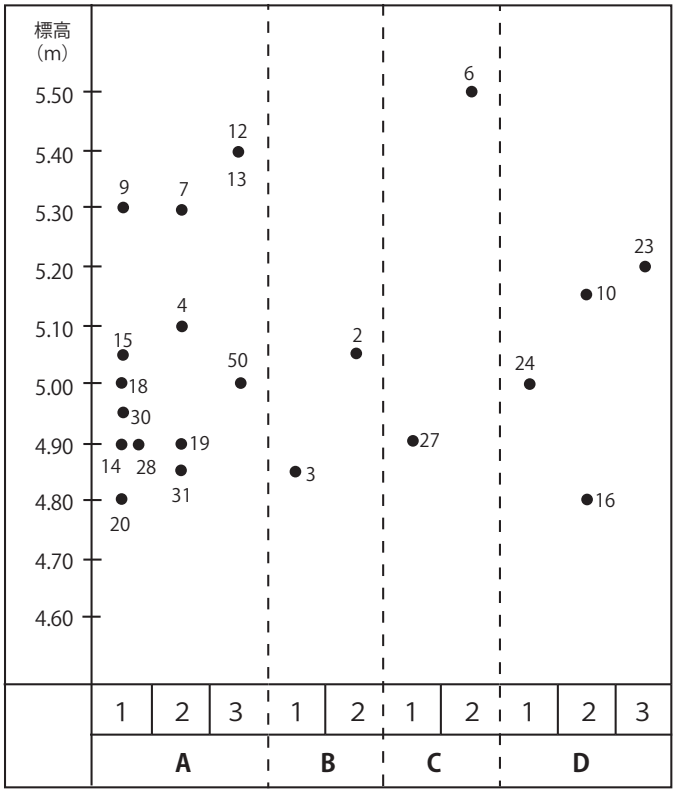
長井遺跡の墳墓群は、これまでその密集度について注目されてきたが、それ以外にもこの長井遺跡しか見られない特徴がある。一つは、石棺蓋石の継ぎ目に白色粘土の目貼りが見られなったこと。二つ目に、

箱式石棺の頭部蓋石の上に、長井遺跡では使用していない花崗岩片が 3 基の石棺の上に意図的に置かれていたこと。三つ目に赤色顔料の使用頻度が極端に少なく、頭部のみにその痕跡が見つかっているのが 5 基のみであったこと。これらの特色は、内陸部の前田山遺跡、下稗田遺跡、竹並遺跡などでは見られない現象で、長井遺跡特有の状況の可能性が高い。

もう一つ、14 号石棺や 15 号石棺の石棺内に仕切り石が立てられていた。この仕切り石によって成人埋葬が出来ない。しかも板石の構築時に仕切り石を立てており、後から立てたものではない。当初から成人埋葬を想定していなかったことを示す。仕切り内には何も検出できなかったが、副葬品が入っていないことから再葬の可能性が高い。今後の課題としておきたい。

また、人骨の鑑定結果などをみると、海に面しているから船をこぐなど上腕骨が発達した人達が多く見られると予想していたが、意外にもそれほど上腕骨の発達は見られず、ではどういった生業の人たちなのか、新たな課題がみつかった。

表 18　長井遺跡箱式石棺別床面標高比較表（番号は石棺番号）



課題を多く積み残した報告書となってしまったが、今後それらの課題について検討することにして筆を置くことにする。

《引用文献》

小田富士雄　1965「福岡県長井遺跡の弥生式土器」『九州考古学』25・26 合併号　九州考古学会

高倉洋彰　1985「初期鉄器の普及と画期」『九州歴史資料館研究論集』10 九州歴史資料館

図　版

（1947年3月11日撮影　国土地理院発行を転載）

長井遺跡の位置

図版２　　土層

1．１号箱式石棺と南北ベルト
東壁土層観察状況
（南東から）

２．南北ベルト東壁土層
観察状況（北東から）

3.　東西ベルト南壁土層
観察状況（南から）

１．　長井遺跡全景遺構検出状況１（西から）

２．　長井遺跡全景遺構検出状況２（西から）

図版４　遺構

1. １号箱式石棺検出状況
（北から）

２．１号箱式石棺完掘状況
（北から）

3. １号箱式石棺と溝状遺構
（北から）

1．１号箱式石棺遺物出土状況
（北から）

２．１号箱式石棺周溝遺物
出土状況１（西から）

3．１号箱式石棺周溝
遺物出土状況２（南から）

図版６　遺構

1．２号箱式石棺検出状況
（東から）

２．２号箱式石棺完掘状況
（東から）

3．３号（右）、４号（左）
箱式石棺検出状況
（東から）

1．３号箱式石棺完掘状況
（東から）

２．３号箱式石棺管玉
出土状況（東から）

3．４号（中央）箱式石棺
完掘状況（東から）

図版８　遺構

1．５号箱式石棺検出状況
（東から）

2．６号（右上）、７号（右下）、
８号（左上）、９号（左下）
箱式石棺検出状況（東から）

3．６号（右上）、７号（右下）、
８号（左上）、９号（左下）
箱式石棺完掘状況（東から）

1．８号箱式石棺内仕切
（南東から）

２．10 号箱式石棺検出状況
（東から）

3．10 号箱式石棺完掘状況
（東から）

図版 10　遺構

1. 11 号石蓋土坑墓検出状況
（東から）

2. 11 号石蓋土坑墓完掘状況
（東から）

3. 12号（右）、13号（左）
箱式石棺検出状況（東から）

1. 12 号箱式石棺鉄鎌
出土状況（東から）

2. 12号（右）、13号（左）
箱式石棺完掘状況（東から）

3. 12 号箱式石棺側石
観察状況（北から）

図版 12　遺構

1. 14 号箱式石棺検出状況
（東から）

2. 14 号箱式石棺完掘状況
（東から）

3. 15 号箱式石棺検出状況
（東から）

1. 15 号箱式石棺完掘状況
（東から）

2．16 号箱式石棺検出状況
（東から）

3. 16 号箱式石棺人骨
出土状況（東から）

図版 14　遺構

1. 16 号箱式石棺床面
赤色顔料検出状況（東から）

2. 17 号箱式石棺検出状況
（東から）

3. 17 号箱式石棺人骨
出土状況 1（東から）

1. 17 号箱式石棺人骨
出土状況 2（北東から）

2．18 号箱式石棺検出状況
（東から）

3. 18 号箱式石棺完掘状況
（東から）

図版 16　遺構

1. 19 号箱式石棺検出状況
（東から）

2. 19 号箱式石棺人骨
出土状況 1（東から）

3. 19 号箱式石棺人骨
出土状況 2（南から）

1. 20 号箱式石棺検出状況
（東から）

2．20 号箱式石棺人骨
出土状況（東から）

3. 21 号地点検出状況
（南から）

図版 18　遺構

1. 22 号地点検出状況
（南から）

2. 23 号箱式石棺検出状況
（東から）

3. 23 号箱式石棺完掘状況
（東から）

1. 24 号箱式石棺人骨
出土状況 1（東から）

2. 24 号箱式石棺人骨
出土状況 2（東から）

3. 24 号箱式石棺床面
赤色顔料検出状況
（東から）

図版 20　遺構

1. 25 号石蓋土坑墓検出状況
（西から）

2. 25 号石蓋土坑墓完掘状況
（西から）

3. 28 号（左）、30 号（右）
箱式石棺検出状況
（東から）

1. 28 号（左）、30 号（右）
箱式石棺完掘状況
（東から）

2．29 号箱式石棺検出状況
（西から）

3. 29 号箱式石棺人骨
出土状況（西から）

図版 22　遺構

1. 31 号箱式石棺検出状況
（東から）

2. 31 号箱式石棺人骨
出土状況（東から）

3. 32 号箱式石棺完掘状況
（東から）

1. 33 号（上層）石蓋土坑墓、34 号（下層）箱式石棺検出状況（東から）

2. 34 号箱式石棺人骨出土状況（西から）

3. 35 号箱式石棺検出状況（東から）

図版 24　遺構

1. 35 号箱式石棺完掘状況
（東から）

2. 36 号石蓋土坑墓完掘状況
（南から）

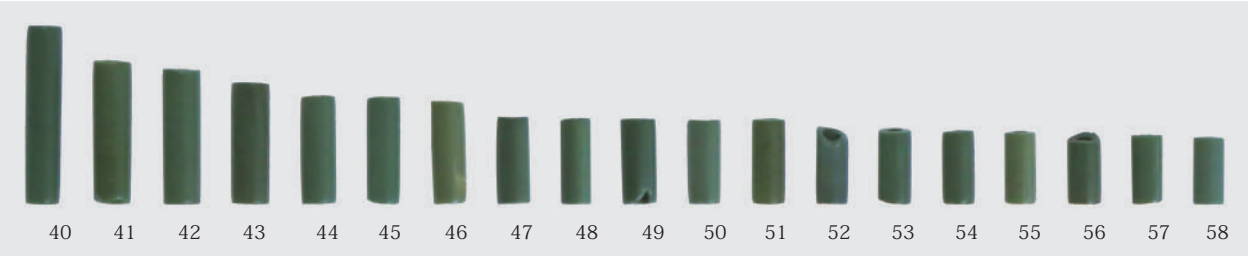
3. 37 号箱式石棺
検出状況（東から）

1. 1 号箱式石棺下層出土人骨
（北から）

2. SK-1 土層観察状況
（西から）

3. SK-1 完掘状況
（南から）

図版 26　出土遺物



出土遺物 1

59

65

62

63

68

64

70

78

79

72

73

82

83

86

90

93

97

98

100

出土遺物２

図版 28　出土遺物

出土遺物 3

163

167

168

169

181

175

177

182

183

184

186

194

195

196

197

199

200

201

出土遺物 4

図版 30　出土遺物

202

203

204

205

206

207

208

210

209

211

212

213

214

215

216

217

218

出土遺物 5

219

220

221

222

223

224

225

226

228

229

230

231

232

233

234

236

237

238

239

240

図版 32　出土遺物

242

243

244

246

249

251

250

252

265

266

269

270

273

274

277

276

286

287

278

284

285

出土遺物 7

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながいいせき
書名	長井遺跡
副書名	市道長井浜公園１号線関係埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 68 集
編著者名	笠置拓也、宇野慎敏、谷澤亜里、高椋浩史、神澤秀明、角田恒雄、瀧上舞、坂本稔、藤尾慎一郎、安達登、篠田謙一
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒 824-8601　福岡県行橋市中央一丁目１番１号　TEL 0930-25-1111　FAX 0930-25-1582
発行年月日	2022 年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながいいせき 長井遺跡	福岡県行橋市大字長井 146 番地２・４	402133	14051001	33° 43′ 19″	130° 1′ 21″	20191015 ～ 20191212	185㎡	市道長井浜公園１号線建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ながいいせき 長井遺跡	墓地	弥生時代前期～ 古墳時代初頭	箱式石棺墓 石蓋土坑墓 土坑墓	弥生土器、古式土師器、土師器、石鏃、管玉、鉄製刀子、鍛造鉄斧、鉄製直刃鎌	内部に仕切りが設けられた箱式石棺墓を３基確認した

要約	周防灘に面した標高約 5m の砂丘上に位置する大規模な墳墓群である。 主な遺構は箱式石棺であり、石蓋土坑墓や土坑墓も少数ながら確認した。これらの大部分は東西方向を主軸に構築されていたが、南北方向のものも少数あった。白色粘土による目張りをしたものは皆無で、代わりに石蓋や側石の隙間を板石等で塞ぐ。また、石棺内部に赤色顔料を塗布したものはなく、わずかに床面に赤色顔料の痕跡が確認できたものが２基あるのみであった。さらに、石棺内部に仕切りを設けたものが３基あり、これらの特徴から長井遺跡の被葬者達が極めて独自性の高い集団を形成していたものと考えられる。 長井遺跡は昭和 34 年に初めて確認された際、出土土器から弥生時代前期～中期の遺跡と考えられたが、令和元年度の調査では方形周溝墓と考えられるものが確認できたほか、弥生時代前期末～古墳時代初頭の土器が出土していることから、従来考えられていたよりも長期にわたり営まれていたことが分かった。

2022年（令和４年）３月31日　発行

長井遺跡

行橋市文化財調査報告書 第68集

著作権所有　福岡県行橋市中央一丁目１番１号
発　行　　行橋市教育委員会

印　刷　　福岡県行橋市中央三丁目３番10号
有限会社京都印刷